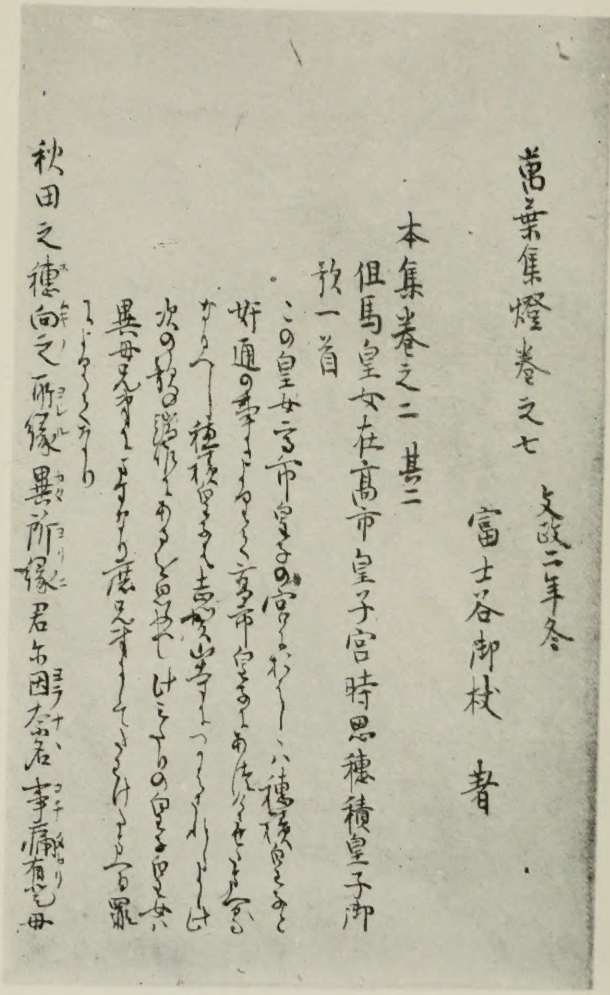
國民精神文化文獻七

富士谷御杖集

第四巻

國民精神文化研究所


萬葉集燈巻之七　文政二年冬

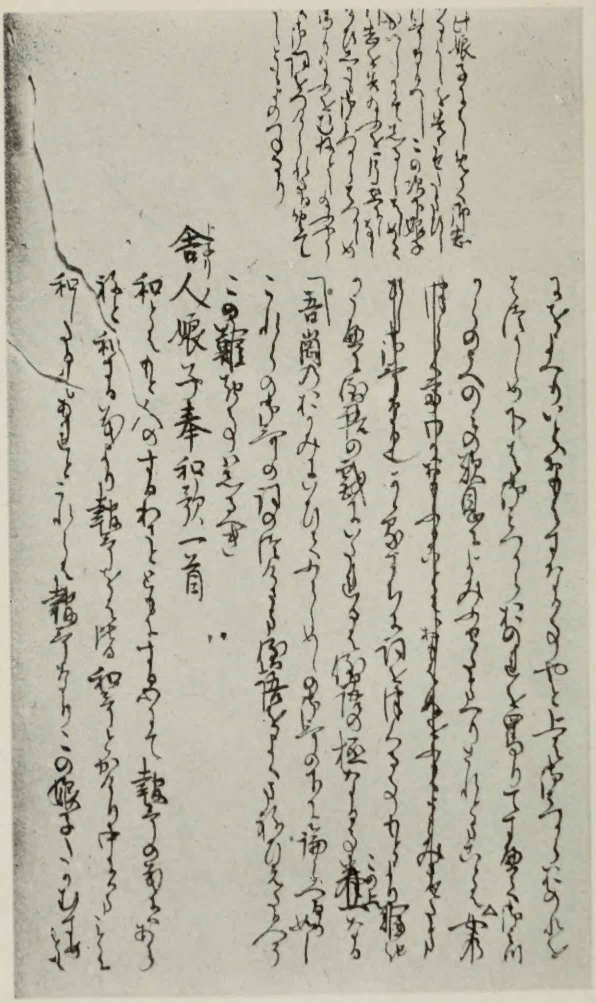
富士谷御杖　著

本集巻之二　其二

但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御歌一首

秋田之穂向之所縁異所縁君尓因奈名事痛有登母

稿本萬葉集燈（南大曹氏藏）其一



稿本萬葉集燈（南大曹氏藏）其二



稿本萬葉集燈（南大曹氏藏）其三

例　言

一、此の卷は「萬葉集燈」を以て編む。

一、「萬葉集燈」の內、萬葉集卷一の注五册は文政五年の序を附して上梓せられ、又、大正年中にも「萬葉集叢書」のうちに第一輯として刊行せられた。本集には此の刊本「萬葉集燈」五册と、南大曹氏の所藏せられる富士谷御杖自筆稿本「萬葉集燈」一册とを收めた。

一、「萬葉集叢書」所收の「萬葉集燈」は流布の刊本を底本にし、句讀點を施す外はなるべく底本の樣式を存せしめるやうに努めたと言ふが、比較的底本のままであるが、同叢書本一三二頁の初六行は原本では細注であり、又一三四頁の第六行には脱文が存し、不備の點がある。

一、本集には能ふ限り原本の樣式を尊重し、その樣子を示すやうに努めたが、萬葉集の原本文と注釋の文とを區別させる爲に、原本文を十二ポイント活字とし、注釋を五號活字細注は六號活字を以て示す。

一、刊本「萬葉集燈」の原本には注釋の文中所々に附訓の不備の所があるが、今はこれらの不備をも補はなかつた。

一、南氏所藏の稿本「萬葉集燈」には所々に文字を抹消せる所や、又消して書き添へた所などがあるが、抹消せる所には・印を左側に附し、(以上、消)のやうに注記を施す。(　)の括弧を以て圍んだのは編者の注記である。

一、本集編纂の爲に貴重な資料を提供せられた南大曹氏にあつく謝意を捧げる。

富士谷御杖集第四巻目次

萬葉集燈解說

三宅清

「萬葉集燈」は富士谷御杖の萬葉集研究の要を纏めたものであつて、世に流布のものは萬葉集卷一の注釋五册である。此の萬葉集卷一の注は「文政五年壬午正月」の「序」及び「おほむね」を附して上梓せられたのであるが、その「萬葉集燈おほむね」に

かねて此書を注しおける事百卷あまり（十四丁オ）

と述べ、又五十嵐篤好のものせる御杖の略傳（「富士谷御杖大人歌文」所收）にも

一萬葉集燈　寫本　一百余卷　内五卷文政六年板行 原本一ノ卷ノ解ナリ
是は萬葉集の哥は一哥もおちず皆言靈ありて詠月詠花なとあるも月花の哥にはあらず皆言外の情ありとてこと〳〵に論ひたまへり

と言ふのであつて、卷一から更に注釋が進められた事を知るのであるが、その稿の世に傳へられるものは殆どない。僅かに、その萬葉集卷の二の注の一部が南大曹氏の所藏せられる所であり、本集には流布の刊本「萬葉集燈」と此の稿本「萬葉集燈」即ち萬葉集卷の二の注とを收載し、御杖の「萬葉集燈」の性質を紹介しようと思ふ。

一、刊本萬葉集燈解說

編成

「萬葉集燈」は御杖の著述の內「燈」と名づけられた他の著述と同じく「萬葉集ともしび」と訓むのであり、序にも「麻太多凡萬多太君毛。和賀加可氣當類。尋裳思備叙。許禮」と述べてゐる。

流布の刊本は五册から成る。第一册は表紙內面右寄に「御杖乃宇斯著」と記し、中央に、「萬葉集燈自一至五」とあり、次に「門人　井上安加麿　校」のやうに校者の氏名を掲げてゐるが、この校者の氏名は、福田美楯・荒堀千秋・野口比禮雄などになつたものもある。

注釋の前に、序・おほむね・目錄があるが、目錄を「おほむね」の前に綴ぢたものもあるが、猶、序・おほむね・目錄の順に序づべきであらう。

第一册「萬葉集燈卷之一」は萬葉集卷一の卷初から「中皇女命往于紀伊温泉之時御歌」の第三首「吾欲之」（一二）の歌までの注である。

第二册「萬葉集燈卷之二」は右に繼いで「中大兄命三山歌一首」（一三）から、「過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌」の反歌「左散難弥乃」（三一）の歌までの注である。

第三册「萬葉集燈卷之三」は「高市古人（タケチノフルビト）感傷近江舊堵作歌」（三二）から「輕皇子（カルノミコ）宿（リタマフ）于安騎野（アキヌ）時柿本朝

臣人｣麻呂作｣歌」の短歌の第四首「日雙斯」(四九)までの注である。

第四册「萬葉集燈卷之四」は「藤原宮之役｣民作｣歌」(五〇)から「志貴皇子御｣作｣歌」(六四)までの注である。

第五册「萬葉集燈卷之五」は「長皇子御｣歌」(六五)から萬葉集卷一の卷末「秋去者」(八四)の歌までの注である。

成　立

「萬葉集燈」五册の成立は序及び「萬葉集燈おほむね」の識語に「文政五年壬午正月」とあるから、その頃に脱稿せるものであらう。しかし「かねて此書を注しおける事百卷あまり」と言ふから既に夙くより萬葉集の注釋に努めたものと思はれるのである。尤も「おほむね」には

ことしわが門生世のために梓にものするついで年比おもへる事のこさずしるしぬ(大旨十四丁オ)

とあるから、「萬葉集燈おほむね」は此書の刊行に際して、文政五年に書き記されたやうにも聞えるのであるが、「萬葉集燈大旨」の事は「古事記神典燈」帝國圖書館藏本及び東儀正氏藏本や、加賀豐三郎氏藏の「古事記燈七神三段神世七代」にも言及され、「文化十三年丙子三月廿一日」の識語を持つ「土佐日記燈」の大旨にも

必長裏をたてゝ辨すへきことゝくはしくは萬葉集燈大旨にいへり

と記されてゐるから、文化の末年には既に稿の幾分かが成つたものであらう。

而して、それらの稿が整理せられたのが文政五年の正月であり、脱稿に及ぶや早速、梓に彫められたのである。

文政五年三月廿日附の五十嵐餘右衛門(篤好)への消息に、

近來注解いたし置候萬葉集几百巻餘氏節五巻分上木近ゝ出來仕候出來候はゝ差下申候少ゝ訳も有之氏度は廣く仕度候十部斗差下可申候何とそ御知己中へも御世話被下候様偏奉賴候

とあり、彫刻が進められた事を知るのであるが、同年の「九月重陽後日」の日附を持つ篤好への消息には「万葉灯」に就いて、

此節漸閉(ママ)も及出來候へとも當所近邊社中追ゝ取候而殘無之候近ゝニハ差下可申候御覽可被下候

とあり、文政五年九月頃には刻が成つたやうに考へられる。しかし、文政五年十一月十一日附の消息には猶、萬葉集燈は「門外不出ト社中一統申候」とあり、彫刻が完成しなかつたやうであり、未だ刻本が弘められなかつたらしい。されば前掲の消息に「閉も及出來候」と言ふのはいかがはしく、又、門人の需要の爲に「殘無之」と言ふのも挨拶の爲の言葉とすべきであらう。「殘無之」ではなく「未無之」なるべく、文政五年十一月の頃にも猶「萬葉集燈」の彫刻は完成せられなかつたのである。

さうして文政六年二月廿四日附の餘右衛門(篤好)への消息には、

然者灯三卩料七拾錢餘御書付之通御惠被下千万忝慥入手仕候落丁早速申付置候出來次第差下可申候

とあり、「萬葉集燈」は文政六年春に及んで漸く刻本が五十嵐篤好の許に配られたのであるが、猶、脱丁のある不完全なものだつたのである。此脱丁は文政六年五月十日附の消息によれば、その頃以前に補ひが遣はされた事が知られるのであり、「萬葉集燈」五冊の上梓は文政六年に於いて始めて完成せられたと言ふべきであらう。

序・おほむね

「萬葉集燈」の流布刊本には最初に文政五年壬午正月の御杖の自序があり、次いで「萬葉集燈おほむね」がある。序には橿原の宮の御時から始められた倒語の道、言靈の幸ふ大御國ぶりの絶ゆる事なく傳はり來れるを卯名手之神の御言よさしにより、說き明さむと目たゝく〳〵も掲げる燈が即ち此注であるとの意を述べてゐる。「萬葉集燈おほむね」は此の御杖の考へる所の倒語の道を主として解說せるものである。

御杖の考によれば古來「萬葉集」の注は多いが詞の表面を解くばかりのもので、眞にその意を解し得たものはない。わが御國の言語の精粹と言ふべきは「眞言」である。凡そ世にあらゆるものは天地にあやかり、天地の二性を備へないものはない。「眞」と言ふのは此の二性を備へる事であり、此の二性は、歌に就いて言へば「よきとあしきとの情」である。御杖によれば、此のよきにかたよれる言も、あしきにかたよれる言も、いづれも眞言ではない。世の人がよきと思ふことを更に一層高揚せしめる純善の世界を高天原と呼び、世にあしきとせられることを更に一層きたなくせしめた世界を根之國と呼ぶ。此のよきにもあしきにもかたよらない、よきあしきの中を言行とせよと言ふのがわが國の御教であり、これを葦原中國と名づける。此のよきあしきにかたよらない言が眞言である。而してよきあしきにかたよらない眞言は、よきにもあれ、あしきにもあれ、おのれより表さず、その情を人より察し來るべく詞をつける事が必要なのである。

思ふ情をやがて言にいづるを「言擧」と言ふ。言擧は卽ち直言であるが、直言せずして思ふ情が達せられるのは、

神の御力によるのであつて、此の力を「言靈」と言ふ。此の「言靈」と指す所の神は卯名手の杜に座す言代主神である。すべて所思を此の神の力に委せ、詞は人から察し來るやうにつくる時は、此神がその言外をさきはひ、所思を達せしめられるのである。神のさきはひは言のつくりやうによるのであり、述べたい事を深く愼しむ詞づくりが必要なのである。此の詞づくりを「倒語」と言ふ。

此の倒語の道は、神武天皇紀に「能以㆓諷歌倒語㆒掃㆓蕩妖氣㆒倒語之用始起㆓乎茲㆒」とあるやうに神武天皇の御時から起つたのである。諷歌も倒語の內であるが、分けて言へば、此の諷と言ふに二種の區別が立てられる。一は比喩で、これはその假れる事物が死物である。一はその假りたる物が活物である。この活物の方を主意とすべきである。次に倒語と言ふ倒にも二種の區別が立てられる。卽ち、嬉しきを悲しと言ふやうなのと、かたはらを言ふのとであり、概して思ふ筋は言はずして、思はぬ筋を詞につくるのを倒と言ふのである。つまりは所思を人より察し來るやうにつくる詞づくりを倒語と言ふのである。

而して、この人から所思を察すべき詞づくりの爲に假る所の事物が卽ち題である。萬葉集に詠花・詠鳥などやうに題を記せるは此の意である。尤も、後の世の題詠は歌道の本意ではない。題詠のはかなき事、凡そ歌となるべき情ではない。はかもなき事がらを歌によむべきものではない。直言すれば妖氣をも招くやうな時、その妖氣を掃蕩すべき道が歌であり、倒語の道である。

御杖が此の「おほむね」に說く所の倒語の論の主旨は右の如くである。御杖は、かやうた倒語の道をわが御國風

と考へ、此の道によつて萬葉集の歌を解き又此の道を世に再興させ、世の歌よみや御杖の門生に此の道を獎勵しようと言ふ願望を持つたのである。

「萬葉集燈おほむね」は、かやうに萬葉集燈の總論であり、注釋の態度を示せると同時に、御杖の倒語の道に就いての最も老熟せる言説の要領を解説せるものと言ふべきである。

目録

「萬葉集燈一」には注釋の前に萬葉集卷之一の目録が掲載せられてゐる。

此の目録は、流布本の目録と殆ど同じであるが、「淸江娘子進長皇子歌」の次に「太上天皇幸于吉野宮時高市連黑人作歌」を脱せるは書漏しであらう。

又流布本に「長皇子御歌從駕作歌」とあるのを此の目録には「長皇子御歌」とし、「從駕作歌」の四字を除去せる如き、又流布本には「作主未詳歌　式部卿藤原宇合」とあるのを此の目録には「式部卿藤原宇合」とし「作主未詳歌」の五字を除去せる如きは「萬葉集略解」の目録に倣つたものであらう。

此の目録は流布本の萬葉集に目録が附けられてゐるから、その注釋書である此の「燈」にもまづ卷初に具へたと言ふに留り、「燈」の注釋の爲めの目次と言ふ意味を持たない事は丁數の記入がない事によつて明らかである。又此の目録の標記せる題詞には、「燈」の注釋の原典とせる題詞とは一致しないものが間ゝ存し、注釋の原典には

中皇女命往二于紀一伊温泉一之時御歌

とあるのを此の目録には、

　中皇命往于紀伊温泉之時御歌三首

とし、又注釋の原典に

　井戸王下近江國時作歌額田王即和歌

とあるのを、此の目録には流布本と同樣に、

　額田王下近江國時作歌井戸王和歌

とせる如き、此の目録が「燈」の注釋の爲めの目次としての意味を持たない事、尚言へば此の目録が「燈」の注釋說に少くとも異質的なものとして融和せざる存在なる事が明らかであらう。

此の目録が傳本により「おほむね」の前に綴ぢられたものや、後に綴ぢられたものなど、まち／＼なのは、主として右の如き事情、言はば此の目録の「燈」に於ける役目の不分明な事、即ちその存在理由の稀薄なるによるのである。

注釋の源委

「萬葉集燈」の注釋の性質を究める爲めに、まづ此の「燈」が先行の諸〻の萬葉集注釋と如何なる交渉を持つて生れたかと言ふ事に就いて一應の記述を施すべきである。

「燈」には、先行の研究を紹介せる場合に書名・人名を掲げてその說を記す場合と、「或說」、「或注」、「古說」、「古注」、「ある注書」、「古注書」、「先注書」、「古釋」、又は「諸注」など漠然と指す場合があり、據の明らかでないもの

もあるが、「燈」の內に書名を擧げてその說の記された萬葉集の注釋は、仙覺の萬葉集抄、契沖の代匠記、荷田春滿の萬葉集僻案抄、賀茂眞淵の萬葉考及び同別記、橘千蔭の萬葉集略解の五部である。

此の內「僻案抄」の說は直接「僻案抄」を參照せるものではなく、「略解」の記せる所によつたものであらう。又仙覺の抄の說も「燈」に揭げたものは、殆どすべて「略解」にも揭げた說であつて、是亦「略解」によつたものかも知れないが、「幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麻呂作歌」の「潮尼爲二」（四二）の注に「潮尼爲は潮さきの義か」と言ふ說を揭げ、「まへにいふ潮さきは仙覺が說也」と言ふのは「略解」「考」「代匠記」などに存しない仙覺の抄の說である。

次に、人名を記して、その說を揭げるものには、仙覺、長流、契沖、東麻呂、眞淵、久老、千蔭、宣長、春海、御風、隆蓮、景樹などの說があるが、景樹の說と言ふのは萬葉集の注釋說ではなく菫はゲンゲ花と言ふ說景樹の「菫考」の說であらう。「富士谷御杖家集」にも「蓮華はなとよにいふ花のかた」と言ふ詞に注して「此花をはすみれなりと景樹かいふに心ひかれて」と述べてゐる。であるから略すべく、隆蓮の說と言ふのは「藤原宮之役民作歌」の注に「伊蘊波久」を解いて日本紀、文德實錄、續日本紀、日本紀通證、筑前風土記、萬葉集に於ける用例を揭げたもので「隆蓮が抄錄」によつて補つたと記してゐる。隆蓮は複並隆蓮であり、その著の內「萬葉鈔」、「國史類函」、「雅言通載」などの書を調べるに「萬葉鈔」には右の用例は存しない。「國史類函」と「雅言通載」には「恪勤」「伊曾」などの項に國史の例語を揭げるが、「燈」に揭げる例語に必ずしも一致しない。編者の閱せる「雅言通載」には「燈」に揭げる例語の內「孝德天皇の御紀」（「孝德」は「孝謙」の誤である。）「日本紀通證」、「萬葉集」の例語はない。「國史類函」の例語は「雅言通載」に揭げる例語よりも少く、傳本によつて收める所の例語が異り、「燈」

の例語に同じものは全く存しないものもある。「燈」の所謂「隆璉が抄錄」とは右に記せる「國史類函」や「雅言通載」の如き纂書によつたものであらう。

御風の說、及び春海の說と言ふのは「略解」に掲げたものによつたらしい。

宣長の說は屢〻掲げ、中には「古事記傳」の說を指すものもあるが、他はすべて「略解」に記せる宣長の說である。宣長の萬葉集の研究としては「玉の小琴」が比較的流布されたが、「燈」は「玉の小琴」は直接參照しなかつたやうである。卽ち、「味酒三輪乃山」(一七)の歌の「情無雲乃隱障倍之也」の訓に就いて「情無」を「こゝろな」と訓む宣長の說を掲げてゐるが、「玉の小琴」には

こゝろなく句也、雲の又句也、

と述べ「こゝろな雲の」と一句に訓む說を斥けるのであるが、「略解」に記す宣長の說は

宣長はこゝろな雲のと訓みて心なは心なやの意とせり

とあり、「燈」の所謂宣長說は「略解」によつた事が知られる。又、「燈」の注には、

この御歌の事千蔭があめる畧解に宣長が說をしるせり

など言ふ所もあり、「燈」に掲げる宣長說は主として「略解」によつた事が明らかである。

久老の說と言ふのは與謝女王作歌の「流經妻吹風之」(五九)の「妻は雪の誤ならむ」と言ふ說は「略解」に

久老は妻は雪の誤ならむといへり、

とある說によつたものであらうが、「味酒三輪乃山」(一七)の歌の注に「青丹吉」を說いて、

久老は乎はいにしへ歎ずる詞に多く用ふれば阿乎は阿那といふに同じく迹は古事記の阿那迹夜志の迹に同じく与之は夜志と同じといひき

と言ふ說は「略解」などに記さない所で、久老の「萬葉考槻の落葉」の「別記」の說によつたものであらう。

次に東麻呂の說と言ふのはいづれも「萬葉考」及び「略解」に記せる所の說であり、殊に「莫囂圓隣之」(九)を

東麻呂はきのくにの山こえてゆけわがせこがいたゝせりけむいつがしがもとゝよみき

と言ふ訓は、東麻呂の「僻案抄」には記されてゐなかつた訓であり、「萬葉考」から東麻呂の訓として紹介せられたものである。されば、「燈」に言ふ東麻呂の說は、「僻案抄」によつたものではなく、「萬葉考」「略解」などによつた事が明らかである。

又、長流の說と言ふのには「在根良對馬乃渡」(六二)の注に、「在根良」とは舟人の目標としてこの對馬の嶺のあるがよしと言ふ意と言ふ說を揭げるが、これは契沖が「代匠記」にも揭げた「枕詞燭明抄」の說である。しかし、「藤原宮之役民作歌」の「身毛多奈不知」の注に、「たな」とは、

東麻呂は直の義といへり長流も同說なり

とあるのは、「代匠記」に記さない說であるが、「代匠記」の書入說に、

三之云タナハタヨリ之云ヽ長流云只しらすゝ

などの説があるから、多分此の「代匠記」書入によつたものであらう。

次に「或説」「或注」「古説」「古注」「ある注書」「古注書」「先注書」「古釋」など漠然と指す説は主として「代匠記」「萬葉考」「同別記」「略解」などの説又は此等の注書に掲げる説である。たとへば「暮相而」（六〇）の歌の注に、

氣長妹とは逢がたさに長息せらるゝ妹といふ心なりこれはさきにも人のいへりし事なり

とあるのは、「代匠記」の

けなかきは、息なかきなり。賈誼か、長大息といひしかことく、物おもふ時は、なかき息のつかるゝを、此集に、八尺(サカ)のなけきともよみ、けなかきとは、めつらしからすよめり。此けなかきは、こなたにこひしくおもひて、いきのなかきなり。

と言ふやうな説を指すものであらうし、又「天皇登香具山望國之時御製歌」（二）の注に、

○海原波こゝより海みえずなど古説あれど云々

とあるのは、「萬葉考」の首書に、

或説、大和より海は見えねど、眺望のさまなればのたまへりと云はひが事ぞ、

と言ふ説であらう。又「倭介者鳴而歟來良武」（七〇）の歌の注に、

ある注に來良武(クラム)はゆくらむに同じとあれどゆくらむにひとしくするはくはしからず

と言ふのは「略解」の、

鳴てか來らんは行らんといふに同じ

とある說を指すのであらう。

而して、「燈」の書例から言へば、「或說」、「或注」、「古說」、「古注」など記せる說には「略解」の說が最も多い。此の如く「燈」の注釋說には「代匠記」、「萬葉考、同別記」、「略解」などの說が主として參照せられた事を知るのであるが、此等の注書の說は他書に記された所によつたのではなく直接此等の注書に就いての言說である。即ち「代匠記」の說は御杖の他の著述古事記燈、土佐日記燈、北邊隨筆などにも記されて居り、「古事記燈大旨」に

代匠記今井似閑が聞書に云云

とあるによれば、御杖の參照せる「代匠記」は今井似閑の書入の所謂似閑本代匠記だつたかと考へられる。

「萬葉考、同別記」の說は「略解」にも揭げるものが多いので、或は「略解」によつたものかとも考へられるが、「或本從藤原京遷于寧樂宮時歌」(七九)の注に、

息言無久云々いこふことなくと眞淵はよめり

と言ふ條の說は「略解」には「萬葉考」の說と記さないものであり、「燈」は猶、直接「萬葉考」を參照せるものであらう。

「略解」は「燈」の注說の最も主要な源據であり、殆ど歌每にその說を記さぬはなく、「燈」は言はば「略解」を底本として記された注釋とも言ふべきである。

以上、御杖の「萬葉集燈」が參照せる「燈」以前の萬葉集の注釋を掲げたのであるが、「燈」が主として據つた注書は「代匠記」、「萬葉考」「同別記」、「略解」であり、此等の注書は他書に記せるものによつたのではなく、直接此等に就いて掲げる說なる事を知るのであり、御杖の萬葉學は「代匠記」「萬葉考」「略解」によつて育てられたと言ふべきである。

本文批評說

「萬葉集燈」の注釋は、萬葉集の歌の順序を追つて、題詞・歌詞・左注に注を施せるものである。

注釋の原典としての萬葉集の本文は、ほぼ流布本の本文により、所々改訂を施せるもので、近世の萬葉集の注釋の常なる如く、多少流布本の本文に注者の所存により變改を加へたものを原典に立てたものである。たとへば「藤原宮御井歌」の短歌、流布本には

藤原之大宮都加倍安禮衝哉處女之友者之吉召賀聞

とあるのを、「燈」の本文には

藤原之。大宮都加倍。安禮衝武。處女之友者。乏吉呂賀聞

とせる如き、又「麻績王聞之感傷和歌」の流布本の

空蟬之命乎情萎

を「空蟬之。命乎惜美。」とし、又「幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌」の流布本の

釼著手節乃崎二

を「釧着。手節乃崎二。」とし、流布本の

浦佐大流情佐麻彌之

を「浦佐大流。情佐麻彌之。」とせる如きであるが、此等の本文改訂は、もとより「燈」の創始ではなく概して、「燈」以前からの通說とも言ふべきものが多いのである。即ち「之吉名賀聞」を「乏吉呂賀聞」とせるは、「略解」に揭げた宣長の說によつたものであり、「命乎情莫」を「命乎惜美」とせるは「萬葉考」及び「略解」によつたものであり、「釼著」を「釧着」とせるは春滿に始り、「萬葉考」「略解」に用ゐられた說であり、「佐麻彌之」を「佐麻禰之」とせるは、契沖（精撰本代匠記）、春滿なども是を說き、「萬葉考」「略解」にも用ゐられた說である。「燈」の注釋の原典としての本文は、かやうな「燈」以前の本文批評說の主要なもの通說とも言ふべきものにより立てられたものであり、御杖の所存によつて改訂せられた本文を原典に立てた場合

額田王下近江國時作歌井戸王即和歌（流布本）

井戸王下近江國時作歌額田王即和歌（燈）

の如きは、比較的少く、「燈」に於いて初めて說かれた本文批評說の主なるものは、右の外次の如き數所にすぎない。

○天皇登香具山望國之時御製歌（二）の第十一句、流布本に「怜何國曾」とあるのを神代紀の可怜小汀によつて「可怜國曾」と改訂

○額田王歌(八)の第五句、流布本に「今者許藝乞菜」とあるのを、中皇女命往于紀伊温泉之時御歌に「去來結手名」とあるによつて、乞は手の誤かとす。又は乞は以傳と言ふかざしに用ゐられる字であるから出の假名かとす

○中皇女命往于紀伊温泉之時御歌の第三の歌(一二)の第二句「野島波見世追」とある「世」は「思」「志」などの誤にて「追」は「遠」の誤かと言ふ

○井戸王下近江國時作歌額田王即和歌の反歌(一八)の第二句「然毛隱賀」の「賀」は濁音の字なれば「加」の誤かと言ふ

○幸于紀伊國時川島皇子御作歌(三四)の第一句「白浪乃」を眞淵の一案に「シラカミノ」とせるに就き、此の說によれば「浪」は「紙」の誤かと言ふ

○輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌(四五)の第二十二句「四能乎押靡」の「四能」は「能」は「ぬ」の誤かと言ふ

○志貴皇子御作歌(六四)の第四・第五句を流布本に「寒暮夕和之所念」とあるのを、暮夕の「夕」は「者」の誤か、又「夕和」二字は「倭」の誤かと言ふ

○太上天皇幸于難波宮時歌(六六)の第五句「家之所偲由」の「由」は衍字であらうかと言ふ

○同じ時の歌(六七)の第三句「鳴事毛」の「事」は「声」の誤かと言ふ

〇或本從藤原京遷于寧樂宮時歌(七九)の第二十六句流布本には「川之氷凝」とあるのを「川之水凝」とす

〇同歌(七九)の第三十二句、流布本には「來座多公與」とあるのを「多」は「牟」の誤とす

以上の如き說である。

右の內、「怜何」を「可怜」と改めた說は「燈」よりも前に荷田春滿の「萬葉集僻案抄」にも說かれてゐるが、「燈」の說は「僻案抄」とは關係なく說かれたもので、「萬葉考」の注說及び「略解」の追加の說に影響せられたものであらう。

「燈」の本文批評說の特質は、一言にして言へば諸異本の校合によつて成される形式的本文批評說と言ふよりは、合理主義による內面的本文批評說である。今、此の「燈」に參照せられた諸異本の名稱を調べるに、「今の本(又、今本)」「印本」、「普通の本」、「一本」、「古本」、「舊本」、「元暦本」などがあるが、元暦本と言ふのは「略解」に掲げたものによつたのであり、古本と言ふのも、「萬葉考」や「略解」に掲げたものであつて、「燈」が直接に參照せるものではない。「今の本(今本)」、「印本」、「普通の本」と言ふのは流布の寛永本を指すと思はれる。

尤も、「今の本」と言ふ內には

　今の本には額田王下近江國時井戸王即和歌とあり

とあるのは流布本の「額田王下近江國時作歌井戸王即和歌」とあるのと少異があり、又、藤原宮御井歌の短歌に、

安礼衝武今の本衝哉とあり

とあるのは、流布本には「衝哉」とあり、訓が一致しない。「あれつげや」との訓は略解の訓である。

次に舊本と言ふのは、御杖の本文批評說以前の萬葉集の本文を指すので、流布の寛永本又は「略解」の本文を指すやうである。

又「一本」と言ふのは萬葉集の本文の內の「一云」を指す場合　幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首并短歌二首と、「萬葉考」又は「略解」の注說に揭げた一本を指す場合、更に「萬葉考」又は「略解」の本文を一本と言ふ場合などに分類せられるやうで、「燈」が新たなる資料として紹介せる本文はないやうである。

此の如く、「燈」の本文批評說は、廣く諸種の異本による本文批評ではなく、歌の全體的理解を基にしての合理的な本文制定であつて、此の性質は、「燈」の注釋の他の部面にも通じる特質と言ふべきである。

訓說

次に「燈」の訓說に就いて述べる。

「燈」には「燈」以前の訓說を「古訓」又は「古点」と呼んで是を批評してゐるが、その「古訓」又「古点」と言ふ所の訓は大部分、流布本の訓である。

「古訓」と言ふ內では、○「味酒」(一七)の歌の「味酒」を「古訓あぢさけとあれど」と言ふ「古訓」は仙覺以前の訓である。

○「引馬野尒」(五七)の歌の「入乱」を「古訓はいりみだれとあれど」と言ふ「古訓」は「代匠記」(拾穗抄)などの訓であ

り、流布本の訓ではない。

「古点」と言ふ内では○「綜麻形乃」（一九）の歌の「衣尓著成」を「古点は都計奈之とあれど」と言ふ「古点」は何によつたか明らかではない。

○「三芳野之」（二六）の歌の「不時如」を「古点ときじくがごとゝよめれど」と言ふ「古点」は「略解」の訓を指すものであらう。

○「藤原宮御井歌」（五二）の「常尓有米」を「古点とこよにあらめとあり」と言ふ「古点」は何によつたものか明らかでない。

○「藤原宮御井歌」の「短歌」（五三）の「之吉召賀聞」を「古点しきめさむかもとあり」と言ふ「古点」は「代匠記」の訓であらう。

○「暮相而」（六〇）を「古点は暮をくれにとよみたれど」と言ふ「古点」は何によつたか明かでない。

○「丈夫之」（六一）の「之」を「之は古点がとよめれど乃とよむべし」と言ふ「古点」は「略解」（拾穗抄）の訓である。

○「去来子等」（六三）の訓を「古点いざや子らとあれど」と言ふ「古点」は「代匠記」の訓であらう。同じ歌の「早日本邊」を「古点はやもと訓じたるは」と言ふ「古点」は「略解」（萬葉和歌集校異）などの訓である。

○「秋去者」（八四）の歌の「鹿將鳴山曾」を「鹿を古点志加とよめれど」と言ふ「古点」は「萬葉考」又は「略解」の訓を指すものであらう。「拾穗抄」も同訓であるが、御杖は「拾穗抄」によつたのではない。流布本には此歌には訓がない。

「古訓」「古点」と言ふ内で右の如きは流布の寛永本の訓ではないが、これらの他は「古訓」又は「古点」と言ふ訓は、寛永本の訓であつて、「燈」の訓は、全體として流布本の訓に「萬葉考」及び「略解」の改訓説を加味せるものが主な基調になつてゐる。

「燈」の訓説には、富士谷學派の言語説によつて特異な新説を述べたものもあるが、「莫囂圓隣之」(九)の訓の如きは全然自説を述べない。訓説は注釋としては重要なものであるが御杖の「燈」の主意は萬葉集の靈を説くに存し、この立場から特に難訓のものには強ひて訓を施さずと言ふ態度を示してゐる。

「燈」の訓説の、先行の訓説に對して新説としてあぐべきは、あまり多くはない。今、その主要なるものを擧げると、

○[1]「八隅知之」(三)の第六句「伊緣立之」を「イヨセタテシ」と訓む。
○[2]軍王の歌(五)の第十四句「山越風乃」を「ヤマコスカゼノ」と訓む。
○[3]「三芳野之」(二六)の第八句「不時如」を「トキジキガゴト」と訓む。
○[4]同歌(二六)の第十二句「思乍叙來」の「來」を「クル」と訓むを非とし「ク」と訓む。
○[5]藤原宮之役民作歌(五〇)の結句「神隨尒有之」を「カムガラナラシ」と訓む。
○[6]藤原宮御井歌(五二)の第四十二句「常尒有米」を「ツネニアラメ」と訓む。
○[7]「葦邊行」(六四)の第四句「寒暮夕」の「暮夕」を「ヨヒヨヒ」とも訓む。

○[8]「大伴乃」（六六）の第四句「枕宿杼」を「マキテサヌレト」「マキテイヌレト」「マクラニヌレト」など訓む。
○[9]「旅尓之而」（六七）の第二句「物戀之伎乃」を「物コホシギノ」と訓む。
○[10]「見吉野乃」（七四）の第二句「山下風之」を「ヤマオロスカゼノ」とも訓む。
○[11]或本從藤原京遷于寧樂宮時歌（七九）の第二十六句「川之氷凝」を「川之水凝」の誤とし「カハノミヅコリ」と訓む。
○[12]同歌（七九）の第二十八句「息言無久」を「ヤムコトナク」とも訓む。
○[13]同歌（七九）の第三十二句「來座多公與」の「多」を「牟」の誤とし「キマサム」と訓む。
○[14]「秋去者」（八四）の第四句「鹿將鳴山曾」の「鹿」を「カ」と訓む。「萬葉和歌集校異」にも「カ」と訓む。しかし御杖は「萬葉和歌集校異」は參照しなかつたやうである。
○[15]同歌（八四）の第五句「高野原之宇倍」の「高野原」を「タカヤハラ」と訓む。

「燈」の訓の新說とも言ふべきものは以上列擧せるが如きである。此の內、「秋去者」（八四）の第五句「高野原」を「タカヤハラ」と訓む說は「代匠記」の注に既に言及せる所で、御杖の新說とは言へないかも知れない。

同じやうに「代匠記」の注の影響と考ふべき改訓說に次の如きがある。

○「天皇登香具山望國之時御製歌」（二）の第二句「村山有等」を「ムラヤマアリト」と訓む。「アリト」は「代匠記」の一訓である。

○「玉刻春」(四)の第五句「其草深野」を「ソノクサフカヌ」と訓む說は「代匠記」にも

草ふか野ともよむへし

とある。

○「熟田津尓」(八)の第五句「今者許藝乞菜」の「乞」字を「イデ」の假字とし「イマハコギイデナ」と訓む說は「代匠記」に、

又乞の字、(中略)いてとよみ、こそとよめり。ともに物をねかふ詞なり。いてをは、出にかりて、いまこき出なとゝよむへきか。

と言ふ注說から影響せられたものであらう。

以上の如きが「燈」の訓說の內、新說とも言ふべきものである。尙、御杖は「內乃大野(ウチノオホヌ)」「狹野榛(サヌハリ)」「標野(シメヌ)」のやうに「野」はすべて「ヌ」と訓み、又「綱能浦(ツヌノウラ)」「小竹櫃(シヌビツ)」など、後には「ツノノウラ」「シノビツ」など「ノ」と訓む所をすべて「ヌ」と訓ませるのであり、「萬葉考」や「略解」が、所により「ヌ」とも「ノ」とも訓ませるやうな混亂がない。(「秋去者」(八四)の歌の「高野原」をタカヤハラと訓むが「藤原宮之役民作歌」の注釋の文の中で此の歌句にはタカノハラと訓を附してゐる。これは不注意にすぎないであらう。)「燈」の訓說は右に述べたやうに、特に奇異な訓と言ふべきはなく、概して穩やかな訓說である。しかし、穩やかなるが故に、又特に新說として注目すべきは少いが、前記(3)の「不時如(トキジキガゴト)」の訓などは然るべき訓であらうし、(11)の「カハノミヅコリ」、(13)の「キマサム」、(14)の「鹿(カ)将鳴」の改訓說などは面白い訓と言ふべく、(1)の「伊縁立之(イヨセタテシ)」と

訓む說などは脚結を輕んじない富士谷學派の態度を示すものとして注目すべきであらう。

萬葉集燈の特質

次に「燈」の注釋說の性質を明らかならしめる爲に、「燈」の注說に揭げる所の文獻に就いて述べる。

「燈」の注說の內に揭げる文獻は、「萬葉集」の他の卷の用例を示すものを措いて、「古事記」「日本紀」「續日本紀」「祝詞」「和名抄」「延喜式」「古語拾遺」「續日本後紀」「文德實錄」「日本後紀」「三代實錄」「令義解」「三代格」「日本紀竟宴和歌」などの史書の類を始め、「古今集」「後撰集」「拾遺集」「古今六帖」「兼輔集」「覺性法親王御集」「袋草子」などの歌集歌書の類、尙、「春過而」(一八)の注釋の中に基俊の歌の句をあげる。千載集・續詞花集などの集に入つてゐる歌であるが、基俊集の流布のものにはない。「土佐日記」「源氏物語」「伊勢物語」「宇津保物語」「古今著聞集」「宇治拾遺」などの物語の類、「字彙」のやうな支那のものが數へられるが、契沖の注釋に於けるが如き該博さはなく、又右に揭げたものに就いても、多くは「燈」以前からの注釋に揭げ來つたものであり、「燈」に始めて提示せられたものは比較的少いのである。

たとへば「和名抄」は「燈」の注說に十二所揭げるが、その內、

舵は今のかぢなり和名抄に柁尾也とあり(「藤原宮之役民作歌」の注)

とあるのみが「燈」に始めて提示せられたものであり、他はすべて「代匠記」「萬葉考」「略解」などに旣に揭げた所のものである。

「續日本紀」は十九ヶ所程揭げてゐるが、その內、一ヶ所は「おほむね」に其名を揭げたのみで、文例を示さず、

又、「藤原宮之役民作歌」の「伊蘊波久見者」の注に掲げる「聖武天皇の御紀」の詔詞は門人の榎並隆璉の抄錄によつたものであり、其他に就いて調べるに

續日本紀宣命に道鏡伊とあり(「八隅知之」(三)の注)

と言ふのが「燈」の始めて提示せるもので、其他はすべて「代匠記」「萬葉考」「略解」の既に掲げた所である。「文德實錄」は二ケ所、「燈」に掲げるが、一は「略解」によつたものであり、他の一は門人榎並隆璉の抄錄によつたものである。

「延喜式」「古語拾遺」「日本後紀」「三代實錄」「令義解」「日本紀竟宴歌」などは、すべて「代匠記」「萬葉考」「略解」などに既に掲げた所である。

「日本紀」と「古事記」は最も屢〻言及せられるが、「日本紀」は大部分、例の如く先行三注書に掲げるものと同じであり「燈」に始めて掲げたもので、稍、注意すべきものは、「籠毛與」(一)の注に

神代卷に大日麁籠あり

と言ふ用例と、「藤原宮之役民作歌」に「泉乃河」を注して、

崇神天皇の御紀にもとの名挑河なるよしみゆ

と言へる位のものであらう。

「古事記」では、先行の注書によるものが比較的少い。多くは「燈」に始めて提示せるものであるが、しかし「幸

「于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌」(三八) に「青垣山」を注して

古事記上卷に吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上此者坐御諸山上神也とみゆ

とある如きは「萬葉考」「略解」に既に掲げた所である。

「祝詞」も先行の注書によつたものは少く、「燈」に始めて掲げたものが多い。

次に歌書・物語書の類には、先行の注書によつたものは少く、殆ど全部が「燈」に始めて提示せる所である。

「麻續王流於伊勢國伊良虞島之時人哀傷作歌」の「いらご」の注に

又古今著聞集に伊豫國にいらごといふ所あり

と言ふのは、「萬葉考」「略解」に既に掲げた所であり、又「高市古人感傷近江舊堵作歌」の初句を注して、

古今六帖に上をいにしへのとよめるが正しかるべし

と言ふのも既に「萬葉考」「略解」に提示せる所である。其他は先行の注書の説として記すものの外は、「燈」に始めて提示せるものである。

支那の「字彙」はすべて「燈」に始めて掲げる所である。

而して、此等の注釋説に掲げる所の文獻の使用の態度に「燈」の注説の特質が注意せられるのである。即ち、前記の如き文獻の使用の内、「燈」に始めて提示せる文獻の使用の性質を調べると、「古今集」の使用に就いて例せば次の如くである。

○「額田王歌」(七)の「借五百磯所念」の「磯」を注して。

古今集春下春雨のふるは涙かさくら花ちるをゝしまぬ人しなければといふ歌世中に花のちるをゝしまぬ人とてはなき事を一首のむねとするよしをば志もじに思はせたる也

○「釧着」(四一)の「今毛可母」を注して

古今集に今もかもさきにほふらむたちばなの小嶋のさきの山ぶきの花とよめるに同じ

○「藤原宮之役民作歌」(五〇)の「荒妙乃」を注して「の」と「が」との區別を説き、

梅が香とつねによむを古今集に梅の香のふりおける雪にまがひせばといふ歌あり源氏物語をとめの巻に梅の香とかけりその餘にはみずこれらは香の方を主にいはむがため也

○「朝毛吉」(五五)の「行來跡見良武」の「跡」を注して、

古今集におくとはなけきぬとはしのばむとよめる跡に同じ

○「秋去者」(八四)の「今毛見如」の「毛」を注して、

この毛もじを思ふに古今集にあなこひし今もみてしか山がつのかきねにさけるやまとなでしことよめる詞と同じく

此等の「古今集」の使用は所謂「あゆひ」の用例として提示せるものである。

○「冬木盛」(一六)の「曾許之恨之」を注して

古今集にみちのくはいづくはあれど塩がまの浦こぐ舟のつなでかなしもとよめるは（中略）塩がまの浦のけしきいづこも／＼おかしきにその一二をいへばかへりてその餘はおかしからざるが如く聞ゆべきが故に中におかしくもあらぬ舟の綱手をしもかなしといへるにて（中略）それたにかなしくは其餘の物いかにかなしき所なるらむと思はれむがための詞づくりにて卽こゝの同法也

○「或本從藤原京遷于寧樂宮時歌」（七九）の「萬段」の注に

一萬度とかぎれるにあらずこれも大かたにいふなり（中略）古今集になく涙雨とふらなむわたり川水まさりなばかへりくるがにとよめるも涙に水のまさらむやは

此等の「古今集」の使用は、詞のつけやうの意味を詳細に說明せるものである。（軍王の歌（五）の注、「吾欲之」（一二）の注、柿本人麿の近江荒都の歌（二九）の注、「霰打」（六五）の注、「旅尒之而」（六七）の注などに古今集の用例をあげるが、是らは詞の用ゐやうを說くものが主である。又「左散難弥乃」（三一）の注にも古今集と明記せずに、古今集の陸奥歌の句をあげるが、同樣に詞の用ゐやうを說明せるものである。）

さうして、此等の文獻使用の性質は「古今集」の場合に限らず「古事記」に就いても「中大兄三山歌」（一三）の「雲根火雄男志等」を注して

志とのみ志侘といふ心によむ例上古には多し古事記上卷の歌に登富登富斯。故志能久迩迩云々また佐加志賣久波志賣この集中にも多し

と言ふのは語尾の用例に就いての說であり、「秋去者」（八四）の「鹿將鳴山曾」を注して、

曾は里言にジャゾといふ心にて(中略)古事記の長歌に上略阿治志貴多迦比古泥能迦微曾也とあるに同じ
の如きは「あゆひ」の用例を示せるものである。

又「幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌」(三六)の「國者思毛」を注して、

しもといふ脚結の事脚結抄にくはし多かる物の中にひとすぢに心のそふさまをさとす詞也拾遺集にあまたみしとよのあかりの諸人の君しも物を思はするかなとよめるに思ふへし土左日記に春の海に秋のこの葉しもちゐらむやうに云々とかける舟の多くこぎいづるさまたとへむ物も多かれど秋の木の葉しも似たりとの心也春なるに秋の物もてたとへたるこの思毛の脚結の義をつくされたりといふべし

と言ふ如きも「あゆひ」の用例を示せるものである。

「燈」の文獻使用の特質とも言ふべきは、まさにこのあゆひの用法を詳細に說く爲と、前述の如き「詞のつけやう」の深い內容的理解を强調せる點とに注意せらるべきで、即ち玆に「燈」の注釋說の特質とも言ふべきものがある。「燈」の注は「おほむね」にも說けるが如く古注どもが、詞の表をのみ注し、詞の靈を說く所がないので、主として此の靈を說くに主力を注げるものであり、「古注ども倒語を殺せる事多きを思ふべし」と言ふ立場から特に注釋には[言]に對して[靈]の項を立てて、歌毎にその深い內容的意味を說いてゐるのである。「燈」の注の重點がこの[靈]の說明に存し、[言]の注說には先行の注書の說の該博な考證より以上に詳細を極めようと努めなかつたのである。

和の字をやまとに用ひられしは奈良の朝よりの事にて藤原の朝までは倭の字をのみ用ひられしかばこれ誤なり

と眞淵が萬葉考にありかうやうの事管見の及ぶ所にあらず

と言ふやうに、先行の注書の說に强ひて競爭しようとせず、文獻の使用の如きも全體として比較的少いのである。文獻の使用の性質を調べる事によつて「燈」の注釋說の特質は、脚結の說明の詳細な事、詞のつけやうの深い內容的理解と言ふ點に注意せらるべき事を述べたのであるが、此の脚結を重んじ、詞のつけやうを深く考へる所から歌の「靈」が說かれるのである。「燈」の注說の骨髓とも言ふべきは此の歌の「靈」を說く所にあるのである。

「靈」と言ふのは、詞の表面に對して言外に活かせておく所の意味を廣く言ふのであつて、歌の作られた原因となる事情とか、歌の作者の歌によんだ目的とか言ふものが、こゝに詳細に說明せられてゐるのである。

たとへば「中大兄三山歌」(一三)は香具山を畝火山と耳梨山とが妻爭ひをせる古傳說を思召して、天智天皇が、今世の人も妻を爭ふのは古へよりの習ひであると仰せられたのが表面の意味であるが、天皇が此御製を遊ばされたのは、單に妻爭ひの濫觴を說かせられた意味ではなく別の意味と考へられる、即ち、天皇は天武天皇と等しく額田女王を御思ひ人とせさせられ、妻爭ひを遊ばされたのであり、その御物思ひを、大方の世の人々の妻爭ひのやうに御製あらせられたものであらうと御杖は說くのである。

又、吹黃刀自の歌、

河の上の湯津磐村に草むさず常にもがもな常處女にて(二二)

と言ふ歌は十市皇女が伊勢神宮へ赴かせ給ふ時に、御つきの刀自が、波多橫山の巖を眺めてよんだ歌であり、その

巖むらの草も生えないで常なるを眺め、身の年老い容貌も衰へ行くを歎息せる歌である。しかし、此の歌をよんだ意味は、此の刀自には男があつて、その男が刀自に對して、つれないのをかこつて、男の許へ遣せるものであらうと御杖は說くのである。

かやうに歌の靈は單なる詞の表面からは說かれない作者の意を全面的に把握して、以て其歌の眞髓を說からうと言ふのであるが、靈は詞の表にはないのであるから、其說明は實際には甚だ容易でない事が多いのである。

あごの浦に船乘すらむをとめらが珠裳のすそに潮みつらむか(四〇)

此歌は伊勢國へ行幸あらせられた時、柿本人麻呂が京に於いて行幸の樣を思ひ作つた歌であるが、阿胡の浦で舟に乘る女房達の裳のすそに潮が滿ちて來て濡らす事であらうが、女房達は馴れない事であるから珍しく思ふであらうか、又は困惑してゐるであらうかと遙かな伊勢路を偲んだ意味である。しかし、殊更、かやうな歌を作つたのは御供の女房達をいとしく思ひ、行幸をすべなく、よろしからぬ事に歎息せる意から起つたのであるが、其情をあらはに詠む時は天皇の御意にそむく事になるであらうから憚つて、事もなく「潮みつらむか」とばかり歌ふのである、誠に上手な詞づくりであると御杖は考へるのであるが、此の場合、歌の表には行幸をよろしからぬ事に歎く意は少しもないのであつて、御杖の說明は、よほど穿ちすぎの嫌がないではなからうか。

又、大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國時歌

巨勢山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝ思ふなこせの春野を(五四)

此歌は行幸に供奉の者のよんだ歌であるが、御杖の説によれば、此歌の表の意は巨勢野の秋色を賞して「此の野の春の景色は一層美しい事であらう」と言ふ者があり、是に對して此の美しい秋景色を眺めながら慾深い事を言ふなと戒めた歌であらう、しかし歌の意味は、春は尚一層景色が美しからうなどと言へば、天皇が聞召して又來む春にも行幸遊ばされるやうな事があらうかと思ひ、是を制止せるものであり、全く天皇の行幸の屢〻なる事を歎息せる歌であらうと考へるのである。けれども、かやうな說明はあまりにもいりほかな說ではないであらうか。

御杖は「おほむね」にその言靈說の牽强でない事を述べて、

されば歌の表をときて歌ときえたりとおもふはいとをさなきわざなるべし作者のその時代またその身のありしかたち又端書など思ひはかりて言外の情を察す

と述べ、

しかれども端書作者のありなしにかゝはらず詞のつけざま脚結の用ひざまにその言靈は察せらるゝもの也

と言ふのであり、作者の生きた時代や、作者の身の環境や、歌の端作などによつて歌の全面的な理解に努める立場は、理論としては誠に道理にかなつた言說であるが、又

大かた歌の端作または詞づくりのさま脚結のひゞきなどにてその心しるきもあれど又察し定めがたきもあるは常なり

と言ふ如く所謂「靈」をしかと把握し難いものもあるのである。所詮、時と所とを異にして生れた後の世の人が古

への歌を解くのであるから「靈」は結局、古へ人の眞意ではないかも知れないのである。
御杖が、世の注釋が詞の表のみの注に限られ、歌の深意を說くに及ばない事を歎き、歌の作られた時代や作者の周圍や、歌の詠まれた事情などに注意して、歌の全面的理解に努め、歌の眞髓に觸れようと言ふ態度を提唱せるは誠に注目すべき主張であり、「燈」の注說に詞の表を說く部分に對して、「靈」を說く項を設けた事は「燈」の大なる特質であるが、此の「靈」の說明は「燈」の長所であると共に又一面に於いては「燈」が附會と難ぜられる短所ともなるのである。
「燈」の注釋說は右に述べ來つた如く、世の萬葉集の注釋が主として詞の表面を解くのみであり、歌の作者の深い心用ゐに就いて考慮しない事をその缺點とし、專らこの歌の靈を解明せむ事を目的とせるものである。御杖の注釋の態度は、まづ詞の表に就いてその意味を一應說明し、而して次に「思ふ」と言ふ思索の段階に入り歌の「靈」を把握しようと努める。御杖は「おほむね」に述べたやうに、歌と言ふものは言語と異る用途を持つもので、言語の言擧に對して、歌は倒語の道と考へる。倒語とは所詮、所思を愼しむ所の詞づくりであり、因つて歌の作者の所思は詞の表にはないと考へるのである。作者の所思は、こゝに「思ふ」事によつて把握せられようと努められるのである。
御杖の「靈」を說く段階をその注の文章によつて示すに、まづその歌の一應の意味を說いて次に、
しかれどもさるはかなき事を上古人は歌とよむならひにあらねば今思ふに云々
されどさるはかなき事をば古人歌によむならひにあらねばこれひとへに云々

されどさばかりの事こと〴〵しく歌とよむべきにあらねば必情は云々
されど時の來むかふをおどろくばかりの事を古人は歌によむものにあらずされぱおもふに云々
しかるに春野を思ふなといさむるばかりの事は古人歌とよむばかりの事がらにあらねば(中略)されば思ふに云々
されどかばかりの事を古人歌とよむものにあらねば思ふに云々
大かた古人は(中略)もとよりよしもなく故もなき事のいはでもありぬべき事をいふ事たえてなかりし也(中略)されば思ふに云々
されどかばかりの事はたゞ思ひてもやみぬべき事なるに古人ことさらに歌とよむ物にあらずされば云々
されどさばかりの事はかりそめの別にもなべての人もいふ事なるをこと〴〵しく古人歌とよむべきにあらずさればおもふに云々
かゝるはかなき事を古人こと〴〵しく歌とよむものにあらずされば思ふに云々
されどさばかりの歎息はたゞなげきてもやみぬべきをこと〴〵しく古人歌とよむものにあらずされば思ふに云々
さばかりはかなき事を古人こと〴〵しく歌とよむ物にあらず(中略)されば思ふに云々
かくたゞ〴〵しき事をしらずして古人すゞろに歌とよむものにあらねば(中略)さればつら〳〵思ふに云々

御杖の靈の注は、かやうに歌の表を說いて、而して歌の表に說かれたやうな事は作者の主意ではない、さやうな

はかない事を古への人は歌とよむものではないから、歌の主意は必ず別の意であらうと考へる。かくて「されば思ふに」と思索を經てその歌の靈を把握しようと努める。御杖は歌毎に歌の表を說いて次に「されば思」ふのである。

御杖の此の考へ方は、旣に述べたやうに、歌の作者の時代や作者の周圍や、歌の作られた事情などを察して、歌の全面的理解を目的とせるもので、此の立場には注意すべきものがあるが、しかし、御杖が「歌」と言ふものを倒語の道と考へる所の思索の假定の故に、右の目的は必ずしもよく達成せられたとは言へないのである。

御杖は古への人は「はかなき」事や、歌によまずとも慰められる所思を歌によむやうな事はなかつたと言ふのであり、

「もとさるはかなき事は詠歌の專門にあらざる事」

を說くのであり、

歌は詞のうへに作者の意はありと心えおのがよむにも意を詞につくし實情を述ぶなどいふめるはなにのより所ぞや

と世の常の歌注を難じるのであるが、御杖の言說の如き倒語の道が、わが御國風の詞の用ゐざまであるとの考へ方は所詮御杖の哲學と言ふべきもので、言語の自然的情態にそぐはないものと言ふべきであらう。古への歌はすべて倒語の道と考へる事が一種の御杖の哲學的言說であり、この立場から說かれた靈の說は結局、萬葉集の文獻學的研究乂は狹義の注釋ではなく、言はば廣義の哲學に入れられるべきものである。

御杖の「燈」に於ける萬葉集の研究はその學術的意義から言へば、御杖の歌論を萬葉集に演繹せるものであり、御杖の意圖から言へば古への歌の道を萬葉集の歌に就いて具體的にその詞のつくりやうを說明し、門人の爲に倒語の道を說述せるものである。倒語の道を說明し御國風を宣傳せむが爲に萬葉集の注釋と言ふ方法を以てその說を演述せるもので、萬葉集の注釋そのものが目的ではなかつた。

もと万葉集をみむは上古の人の詞のつけ所ならびに詞の用ひざまをしるを要とすべければたゞ四五卷を會得すとも伶俐の人は歌道の本意はさとらるべし

と言ふ如く、萬葉集を學ぶのは古への人の詞のつけ所、詞の用ゐざまを學ぶのであり、倒語の道を萬葉集によつて理解させむが爲である。此の意味に於いて「萬葉集燈」は御杖の哲學的解釋による所の歌論を萬葉集の歌によつて述べたものであり、「燈」は御杖の歌論の系列の內にその存在の意義を持つとも言へるのである。

「燈」が世に批評せられる所は既に「燈」の內にも「大かた言靈をいふ事附會牽强なるべしといふ」と言ふ評語を記し、是が辯を記してゐるが、倒語と言ふ御國風を基にせる立論なる爲、世に廣く用ゐらるべき注釋說ではなく、その萬葉集の研究史に與へた影響はさほど著しいものではない。しかし「燈」の注釋說の特質を理解し、これを利用せる學者はないではなかつた。その最も著しいのは木村正辭であらう。木村正辭が小中村淸矩・横山由淸・間宮永好・久米幹文などの學者と萬葉集の會讀を行ひ、卷一から卷十に及んだ（萬延元年―元治元年）その會讀記には「燈」の說を參照せる事が多いのであり、正辭の「美夫君志」にも「燈」の說は參照せられ、中皇命往于紀伊温泉

之時御歌(一一)の「野島波見世追」の「世追」を「追」は「遠」の誤とし「世」を「シ」と訓んで「ミシチ」と訓む說の如きは「燈」の說に影響せられたものかとも思はれるのである。

木村正辭の他に「燈」を利用せる學者は井上通泰氏であらう。その著「萬葉集新考」にはその著述に際して著者の參照せる注釋書を列擧せる內に「燈」も揭げてあり、注釋中に「すべて御杖の燈の說はいりほがにて從はれざる事おほし」との評言があるが所々に「燈」の說を揭げ、時に其說を推賞して居られるのである。

御杖の「燈」は既に屢〻述べ來つた如く注釋說としては考證にさほどの該博さもなく、詞の表の注釋には敢へて精細を極めようと努めなかつたのであるが、しかし卷一の注としては比較的詳しいものであり、殊に脚結の說明や詞のつけやうの說には注意すべきものがあり、尊重せらるべき意義を持つが、「燈」の意圖の主なるものは歌の靈を說くに存し、而して此の靈は御杖の御國風の歌論に立脚せるものであるから、「燈」の御杖の學に於いて持つべき意味は、彼の歌論の實際的な演繹として歌論の側に於いてその意義を理解すべきものと思ふ。

二、稿本萬葉集燈解說

南大曹氏の所藏せられる「萬葉集燈」稿本一册は、御杖の自筆の稿本であり、萬葉集の卷第二の歌の注である。「秋田之」(一一四)から「柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌」(一三一)までの歌を、流布の刊本「萬葉集燈」と同じ樣な體裁で注を施せるものである。

表紙に外題を

萬葉集燈　巻之七

と記し、右に寄せて「本集巻之二共二」と記されてゐる。

刊本「萬葉集燈」は萬葉集巻第一のみの注で、「萬葉集燈巻之一」から「萬葉集燈巻之五」までの五冊であるから、是に次いで「萬葉集燈巻之六」から萬葉集巻第二の注になるわけであるが、南氏の藏本はその次の「萬葉集燈巻之七」である。されば、刊本と此の稿本との間の「萬葉集燈巻之六（本集巻之二共一）」と言ふべきものが闕けてゐるわけで、刊本から此の稿本へは續かないわけである。しかし注釋の樣式は刊本「萬葉集燈」と同じであり、稿本とは言へ整然たる淨書本である。

注釋の性質も刊本「萬葉集燈」と略ゝ同樣であり、此書に參照せられた先行の注釋の主なものは、「代匠記」「萬葉考」「略解」であり特に「略解」によつたものが多い。

注釋の原典としての萬葉集の本文は流布本の誤字を訂せる「略解」の本文によつたものと考へられる。卽ち、此注に參照せる諸本の名稱を調べるに「一本」「諸本」「普通の本」などの名稱が區別せられるが、「一本」と言ふのは「丹生乃河」（一三〇）の第三句

由久遊久登この遊もし諸本遊に作れるは誤なり一本遊とあるを正しとすへし

と言ふのと、「石見乃海」（一三一）の第五句「滷無等」の「滷」を「一本礒といふ」のとであるが、是は萬葉集の白

注の「一云」であり、前者は「略解」に、元暦本によつて訂せるによつたものであらう。而して「普通の本」と言ふのは「數管」(一一八)の第二・三句「丈夫之戀乱許曾」を普通の本にはマスラヲノコヒミタレコソと訓むのを古点によつてマスラヲノコノコフレコソと訓ませると言ふのであり、此の場合、「普通の本」と言ふのは流布本の訓ではなく「略解」の訓である。これらの點から言つても注釋の原典としての萬葉集の本文は主として「略解」によつたと言ふ事が言へるであらう。

次に訓の說は此注には歌全體に文字の傍に假字で訓を施す事少く、全然訓を施さないものもある。此注に收められた部分には難訓の歌が少いのにもよらうが、又稿本の故でもあらう。注釋の文中には此注以前の訓を「古点」又「古訓」と呼んでゐるが、此の「古点」「古訓」と言ふのは寛永本の訓である。此注の訓は概して「略解」の訓により、所々に寛永本の訓により訂補を施せるもので、此注に於いて始めて提示せられた新訓とも言ふべきものは、「秋田之」(一一四)の第四句「君尓因奈名」の「因奈名」を「ヨラナヽ」と訓む說のみである。

注釋說に就いては先行の說として「古注」と言ふものの說を掲げるが(「人皆者」(一二四)の歌注、「遊士跡」(一二六)の歌注、)是は「略解」などを指すやうであり、刊本「萬葉集燈」の注とその性質に於いて異る所はない。しかし、刊本「萬葉集燈」の卷第一の注に比べて、此の卷第二の注の方が脚結の說明が一層詳細を究めて居り、「燈」の特質が最もよく發揮せられたものと言ふべきである。而して、詞の注の次に歌の全體的な意味、性質、目的などに就いて說明を施すが、是は刊本「萬葉集燈」の所謂[靈]の部分と同じである。刊本「萬葉集燈」に對して、此注の此部分は稿なるが故に、刊本の[靈]

ほど練られた言說でなく、說述の樣式も區々であるが、所說は、刊本の[illegible]に於けるよりも概して穏やかなものが多いやうである。

此注の成立は、その內題の所に「文政二年冬」と記されてゐる。稍、筆致が異るから、同時の筆ではなく、書き添へたものであらう。

此注は、刊本「萬葉集燈」以前の稿本萬葉集燈の系列の內の一部であるが、その編成は刊本に比べて大差なく、脫稿本と呼んで差支へない程に整然たる用意のもとに記されたものである。

御杖の「萬葉集燈」は萬葉集の注釋と言ふ事を主なる目的として著述せられたものではなく萬葉集によつて古への人の歌の詞のつけ所、詞の用ゐざまを知る事を要とせるもので「四五卷を會得すとも倚俐の人は歌道の本意はさとらるべし」と言ふのであり、萬葉集全篇に亙つての注釋よりは、歌道を國風を會得させる事を目的とせるもの故、此立場からいへば此注の如きはさほど必要のないものとも言へるであらう。けれども、萬葉集の解としては此注は刊本「萬葉集燈」にない部分の注であり、御杖の萬葉集研究を考ふべき資料として、何かの意義を持つものと言ふべきであらう。

萬葉集燈の地位

前節に於いて萬葉集燈の性質を概說し、その御杖の學に於ける意義として御杖の歌論の展開としてその中心的意味を考ふべき事を述べたのであるが、然らば御杖の歌論に於いて萬葉集燈が、如何なる意味を持つかと言ふ事に就いて、茲に略說しようと思ふ。

御杖の學はその著述に就いて言へば、かなりの量に上るのであるが、これをその性質によつて分類すれば、まづ言語說、歌道說、神道說に要約せられるであらう。さうして是を發展的に言へば、まづ言語說の硏究から歌道說の展開となり次いで神道說の形成に及んでゐる。御杖の歌論は、この言語說、歌道說、神道說の全面に亙つて立つところのものである。

御杖の歌論の詳細に就いては別の機會に說くであらうが、今その展開のあらましを記述すれば「古事記燈大旨」に

> 成元十二歲なりし時父をうしなひつれば、たゞ父がつくりのこせりし脚結抄をば師として、歌をのみよみわたりしに、

と言ふのが御杖の歌論の搖籃を語る最初の言葉である。「脚結抄」や「かざし抄」のやうな成章の言語硏究、及び「五級三差」(「詠歌法」「五級鑑定式」)のやうな歌道說が御杖の和歌稽古の道しるべになつたものであり、をぢなり

し洪園・成均の指導のもとに御杖の人生論・歌論が發展させられて行くのである。さうして御杖がこれらの指導と、中世歌學の涉獵を合成し、まづその歌論として著述せるものが「新髓腦」「刊本歌道非唯抄」「歌袋」などであり、御杖の若い歌論の概要は、これらの著に示されてゐる。「新髓腦」と言ふのは未詳であるが、歌の次第を說明せるもののやうで、「五級三差」の補成のやうなものかと考へられる。「刊本歌道非唯抄」や「歌袋」の頃の歌論は古今集序の思想や、貫之髓腦の歌論を基にせるもので、

非下唯春霞秋月潤二艶流於言泉一花色鳥聲鮮中浮藻於詞露上皆是以動二天地一感二神祇一厚二人倫一成二孝敬一上以風二化下一下以風二刺上一

と言ふのが主意であり、歌道はかくの如き非唯の理と考へられたのである。歌は「たゝ天地鬼神人に身をあはせてなこまむをほいとす」べきものであり、因つて「誠」と言ふ事が歌道に大切の事とせられる。この「誠」と言ふのは「中庸」の誠などの意に似て、天の道にも通ずべき至誠であつて、やがて人を和め、廣くは天地鬼神の心をあはせ、近くは身を修め遠くは天下に及ぶべき道である。歌は「まことをたてゝ人をなこめむ」道であり、「歌はたゝことはに誠をたてて身ををさめ。閑たみにも及ほす道」である。御杖は歌論の根柢的な問題を此の如く說いてゐるが、「歌袋」には歌の形成の部面から次の如く種々の名稱に概括して說く。卽ち、歌に重んじる所は內に於いては「心ざし」であり、發しては「こゑ」である。「こゑ」のあやを「詞」と言ふ。皆「心」のはたらきである。「詞」のさまを「すがた」と言ふ。「ことはり」を「むね」と言ふ。「むね」のさまを「おもむき」と言ふ。而して此等のはたらきの主

は皆「心」であり、「心」のさまも又「趣」と言ふ。「おもむき」を起させるはたらきの主は外界の見聞く所の耳目に觸れるもの、內にありては「心たましゐ」である。心・詞・姿・趣の各〻は、すべて「心たましゐ」のはたらきであるが、このはたらきを形象化してそれ〴〵の名稱により區別して呼ぶのは歌として形成せられた詞に就いて言ふのである。かくて「歌袋」の「二則」「三則」「四則」「五則」は夫〻、心・趣・詞・姿を說明せるものである。

御杖の若い頃の右の如き歌論は、その「誠」を歌の主意に重んじる思想は主として支那の經典殊に「中庸」の思想などの影響が考へられ、洪園に學んだ此の方面の知識が有力な礎地になつてゐるであらう。さうして、歌の形成を心・詞・趣・姿などに概括せる歌論の樣式には、成章の遺傳なる「五級三差」の影響を考ふべきで、是に中世歌論を集めて成立せるものが、此の頃の御杖の歌論だつたのである。（「歌袋」の五則に於いても、後鳥羽院御口傳、八雲御抄、袋草子、俊頼口傳、長明無名抄、詠歌大概、愚問賢注、近來風躰抄、井蛙抄などからの集成が指摘せられるのである。）

再び御杖の言に聞く。

ふと思へらく、此詠哥、たゞもてあそびぐさならば、なにわざにもあれ我も人も益あらむわざをせん、もし益あるべきわざならば、いよ〳〵志を固くせんとおもひて、さま〴〵に心を用ひ來つるに（古事記燈言靈辨）

又、思へらく上世には歌に師と言ふ事もなかりし事なれば、後の世に言ふ如きくだ〳〵しい事はなかつたのであらうと思ひ、ひたすら國史・萬葉集などの古き歌文を學んだところ、萬葉集の歌に、葦原水穗國者神在隨事擧不爲國、又志貴島倭國者事靈之所佐國叙、又蜻島倭之國者神柄跡言擧不爲國、又言靈能佐吉播布國、又事靈八十

衢夕占問、又續日本紀の歌に事玉之當國度曾などの歌句に深く目が留り、かくて御國の言靈に通じるやうになつたと御杖は言ふのである。

御杖の若き頃の歌論、誠を中心とし、天地神人を感動せしめる道としての歌道は、一方に於いて中世歌論の傳統から結晶せる「修行」の道として、又一方には家傳の祖述に由來せる「稽古」の道として展開せられて行く。「稿本歌道非唯抄」「和歌いれひも」などが此の歌論の展開を示す時期の著作で、その道々を最も典型的に示すものである。

「稿本歌道非唯抄」によれば、歌は「誠をめど」として修行すべきものであり、誠が立つて自ら機を得て詠まれる大歌こそ歌道の本意である。卽ち、志を固くすゑて修行を積む事が歌道に於いて何よりも大切な事とせられる。修行と言ふ事が力說せられる所以は、つまりは歌は天地神人を感動せしめる爲のものなるが故であり、此の修行に次いで稽古と言ふ事が重んぜられる。富士谷學派では歌の五級と言ふ事を說くが、その一の歌と言ふのは「稽古の力の至極」せる所であり、大歌と言ふのは「修行の力の至極」の境地である。稽古と修行は共に具備すべきであるが修行が及ばずして稽古あるよりは、稽古はうすくとも修行のある方が歌の時に近く、歌道の主意を得たものとせられる。此の如く誠をめどとし、修行によつておのづから詠まれる大歌を歌道の主意と考へる立場は御杖の止み難き情を洩らす道としての眞言の歌論の礎地を成すものと言ふべきである。

次に詞の道の稽古と言ふ事が重んぜられるが、「稽古とは詞の表をたゝし裏境をおす事」であり、裏境をおすのは

理と言ふものを表面に立てないやうに努める爲である。理と言ふものを詞の表に立てれば、理屈と言ふものになるのであり、よく人を感動せしむる事はできない。理を表に立てず詞の內に蘊在せしむる時は無量の道理になり、人を感動せしめるのである。此の詞づくりの修學が稽古である。

御杖は詞に表裏境神と言ふやうな名稱によつて區別せられるはたらきを考へてゐる。裏境と言ふのは表に述べない言外の詞の道理である。是に對して神とは理智的な內容を離れて餘情とか有心とか言ふ人を感動せしめるはたらきを言ふのである。而して、裏・境は此の神への階梯であり、此の神の把握が卽ち歌の主意を知る事である。

成章は詞に脚結・挿頭・裝の三具を重んじ、各〻その道を究めたが、特にその精緻な脚結の研究によつて表・裏・境の說が生れ、御杖によつてそれが發展させられたのである。「刊本歌道非唯抄」に「おほよそ詞はにほひをしるへし。（中略）共にほひとは詞の裏なり。」と述べて詞の道を說明せるはその祖述であり、「五級三差辨」に表・裏・境を辨じてゐるのもその敷衍である。脚結の研究としてはほゞ御杖の歌論の展開期、成壽の名を成元と改名せる頃に「脚結抄翼」が成り、その一部の稿本は本所の所藏である。さうして御杖の歌論の展開期に於いて此の裏・境が主として脚結のはたらきによつて立てられるものであると言ふ點から稽古の方法として、脚結の用法を學ぶ「和歌いれひも」の著が成されたのである。所詮、稽古とは詞の道に通じる事であり、詞の道とは「あゆひ」「かざし」「よそひ」わけても「あゆひ」に熟す事によつて詞の裏・境を知り、裏・境を階梯として神を把握せむと努める道である。而して、神とは詞の奧深い內に存在し、樣々の妙を備へた「魂」を言ふのであり、修行を經て時を得て結晶せるうたびとの誠の心の留れるものである。

此の如き境地に展開せる御杖の歌論が國史・萬葉の古歌に接し「志貴島倭國者事靈之所佐國」とか「言靈能佐吉播布國」とかの歌句に接し、右の如き歌の内に蘊在せる神、誠のつもれるうたびとの心にやがて「言靈」の名を與へる過程を考へる事ができるのである。卽ち言靈の歌論は誠を歌の主意とし、修行を重んじる人生的立場と詞の道の稽古に於ける言語哲學的考索とを結合して、そこに抑へ難き欝情を逸す道としての歌を考へ、欝情所思の靈として留れる言靈と言ふ思想が形成せられたものである。

さうして御杖の著述に於いて、此の結合は「歌道解醒」(文化二年成)に於いて成されたと言ふべきである。「歌道解醒」は御杖がその詠歌修行の經歴に就いて述べ、國史・萬葉の歌をもととして歌道の主意を說明せるものであるが、此の内に萬葉集卷第十三の柿本人麻呂の歌に「志貴島倭國者事靈之所佐國叙云〻」と言ふを揭げ、うたびとの「心厚き所おのつから哥の中にこもりて無量無邊不可思議の妙用をなす」ものを言靈とよんだものと說いてゐる。而して天地神人を感動させるのは人力にあらずして此の言靈のはたらきであると述べてゐる。御杖の言靈歌論は此の「歌道解醒」に於いて成形せるものと言ふべきである。

而して、その言靈歌論が更に詳細な記述を以て成されたものが「北邊髄腦」及び「眞言辨」だつた。これらの所說によれば、

言靈とは言のうちにこもりて活用の妙をもちたる物をいふなり(中略)

さてその靈となるはいかなるものぞといふに所欲はのとめかたく時宜はやふりかたくてせめて哥によみてひた

ふる心をなくさめたる心これなり

と說かれる。かくて時宜のやむなさと、ひたぶる心のやむことを得ざるとのうちあふ内に言に靈が生じるのである。燧と言ふものは石とかねとを打合せる所から火が生じる、又、水と米とのうちあふ所から人を醉せ氣血を廻らす妙用を持つ酒が造られるやうに、歌も所欲の爲に時をやぶらじとの心より成るもので、ひたぶる心と時宜を思ふ立場とのうちあふ所から靈が生じて、言語の道絶えたる時をも感通せしむる妙用を持つのである。

御杖は歌の源としての人の心を偏心・一向心・眞心と言ふやうな段階に分つた。偏心とは邪正となく一かたにうちたのめる心であり、一向心とはその偏心が理を盾に猛り立つて、ひたむきにすさぶ心である。偏心は神道により和められ、一向心は歌道によつて慰められて眞心の境が得られる。

而して爲（言と行）には空爲・私爲・公爲・眞爲と言ふやうな區別が立てられる。空爲とは偏心にも關はらずなすわざで、さるがうの類を言ふ。私爲とは所欲のまゝに、ひたぶる心のまゝになすわざであり、公爲とは理によりてなすわざであり、眞爲とはひたぶる心を慰めむとて得ず、やむことなくなす爲である。空爲は可もなく不可もない。私爲は誠にさがないわざであり、公爲は理あれど强ひて繕つた所がある爲に人を感動せしめる所がない。眞爲は神道歌道に心をねりて時宜を全うせるが故に神人これをあはれまずと言ふ事はない。

御杖は此の眞爲を理想的な爲と考へたのであり、神道歌道はすべて爲を促す心を制すべき道だつたのである。心を慰め、爲を制すべき「眞」を理想とせる御杖の立場は、結局時宜の思想が生成せるものである。時宜の爲に

身は公なるべく、しかも一向心の勢ひ抑へ難き時によまれる歌（眞言）であるから餘情が言外に活きて靈となり、自ら神人を感動せしめるのである。

御杖の言靈歌論が古典の背景のもとに國風として唱へられ術語的に整然たる構造を備へるやうになつたのは文化四年に成つた「古事記燈」の「言靈辨」である。此の「言靈辨」に於いて言靈の思想は神武紀の「以二諷歌倒語一掃蕩妖氣一倒語之用始起二乎茲一」の諷歌倒語と、古事記垂仁天皇の卷に「八拳鬚至二于心前一眞事登波受」又「物言如レ思爾而勿二言事一」と言ふ古語を典據として掲げるやうになつた。この「言靈辨」に於いて、御杖は所思を直言すれば人の中心には徹し得ない、神氣の妙用を主とせる御國に於いては直言せずして倒語によつて表現せられると說くのである。倒語には諷と歌とあり、歌は諷の一段遠いものである。而して、古歌に言靈の「さきはふ國」、「たすくる國」、「まさき國」又「言擧せぬ國」など國にかけて詠まれたのは卽ち大御國の國風なる事を示すものと說いてゐる。

この倒語の道は更に文化十四年の「詞道擧要」に及んで倒語には比喩と外へそらすとの二様があり、比喩は易く、そらすは難い。而して、此のそらす表現が倒語の極致とせられる。

さうして此の倒語の道は「萬葉集燈」の「おほむね」に於いて尙詳細に說かれた事は既に述べた如くである。

又、言靈歌論の誕生の頃の「歌道解醒」には歌道の主意を須佐之男命の御教と考へ、御國は何事も神のまに〳〵言擧せぬ風である事を述べて、

されはいはてもありぬへき事はさてもありぬへけれといはてはえあるましくしかりとていひては時宜にたかふへき時の爲に哥といふ物はかの命のをしへおかせ給ひしなり

と說いてゐるが、歌論の發展につれて、言靈のはたらきを司られる神として言代主神をあげるやうになつた。門人の有川市郎兵衛に與へた額の文章にも御杖がその言靈說を發明せる事を此の舛奈手の神の神託と述べてゐるのであり、特に文政期に入つては御杖の言靈說は彼の神道說の展開と相俟つて一種狂熱的な傾向に向つたと言ふべきである。

御杖の言靈歌論は以上のやうな展開を示すのであるが、その中軸的な論點は「眞言辨」などに盡されたと言ふべきである。是を要約すれば、およそ所思のまゝに言行にふるまふ時は必ず時宜を破るものであるから、所思を爲に行はないには、まづその源である偏心を神道によつて制すべきである。而も偏心が抑へるに激して一向心となる時、「時宜やふるへからすひたふる心おさふへからぬ時」、ひたぶる心と時宜と、いづれをも全うせしめる道が歌道である。ひたぶる心と時宜と、いづれをも全うせむが爲には、ひたぶる心のまゝの言行は避くべきである。而も、やむことを得ずして是を倒語し欝情を言外に活かす言靈の妙用によつて所思をなぐさめるのである。御杖は、こゝに御國言の用ゐざまの特質を說くのである。

萬葉集燈は右の如く說き來つた御杖學の展開の內、その最も後期に位せしめらるべきものである。即ち御杖學は、

まづ脚結抄などの言語的研究より發し、歌の道の研鑽に專ら努め、儒學・佛學・及び神學などの渉獵となり、等々洪闡などの思想の影響のもとに彼の人生論、世界論が芽生え、此の背景の内に稽古と修行の功をへて、言靈說が成生せられたのである。言靈說は文化初年の「歌道解醒」から「北邊隨腦」「眞言辨」「古事記燈大旨」(言靈辨)に於いてその構造を備へ、文化末年の「歌道學要」「北邊隨筆」などをへて「萬葉集燈」に及ぶのである。而して、此の言靈說の成る頃から、一面に於いては神道と言ふ事が說かれるのであり、文化四年の「古事記燈大旨」から「神典言靈」、次いで「古事記燈」の數種の述作に展開し、「神典學要」「神道大意」などの文化の末年より文政に及ぶ神道說の推敲をあげる事ができるのである。かくて、御杖學の展開は是を概說すればまづ言語說より歌道說、歌道說より神道說への漸層的進展を指摘すべきであつて、萬葉集燈はこれらの展開の最も後期に於ける力作である。尤も、萬葉集燈には神道說はあまり說く所がない。詳細は古事記燈に記して萬葉集燈には歌道を主として說くと言ふ態度である。又言語說としても、後期の御杖には「經緯略辨」のやうな經緯の說、「裝抄」のやうな口授の著述などにその說を伺ふ事が必要であり、萬葉集燈は言語說の純粹に纏められた著述ではない。しかし萬葉集燈には、御杖の言語說・神道說を細說しないが、その言語說・神道說を礎地として進展せる御杖學の性格が、歌道說を中心として說かれたと言ふべきであり、そこに御杖學の最も老熟せる境地が示されるのである。

御杖は此の「萬葉集燈」の上梓せられる頃、文政五年の末に「神明憑談」を作り、その神道說歌道說の要領を說いて御國風を唱へてゐるが、その所說は稍々偏奇な傾向のものであり、初めにも「今よの人の心になき事ともをい

へは人皆神かゝりとやきくらんとてなむ」と述べてゐる。萬葉集燈も同様の思索の態度から成された著述であり、その基調が御杖の特殊な御國風の論である。

即ち、御杖は御國風を倒語の道とし、萬葉集の歌を此の立場より說明し、尙言へば萬葉集を解く事によつて倒語の御國風を闡揚せんと意圖せるものである。しかし、倒語を御國風と考へる事は結局御杖の人生論に立脚せる哲學的幻影にすぎない。即ち、御杖は倒語を御國風の要訣と考へる典據として、神武紀の「能以二諷歌倒語一掃二蕩妖氣一倒語之用始起二乎茲一」と言ふ文をあげてゐるが、此の「諷歌倒語」の內容は文獻的には如何なるものとも知り難いのである。「諷歌倒語」を御杖の論のやうに說く事がその義ではないかも知れないのであり、かつ、「倒語之用始起二乎茲一」と言ふによれば、少くとも倒語は言語の自然的狀態ではなかつた事が明瞭である。御杖のやうに、御國言の要訣を倒語とし、萬葉集の歌をすべて倒語と考へるのは彼の人生論として發展せる考へ方に基く倒語說を强ひて古典の言句に結び合せた附會と言ふべきである。而して此の附會に成れる倒語說の應用としての彼の注釋說には自然奇怪な論說が成されるのであつて、「藤原宮之役民作歌」の如き、藤原宮の隆盛な宮造を稱へ奉れる歌をさへ、役民の身の勞を思ひ諷諭せる歌と說く。御杖は歌文を憤りを憚る所より成ると考へるのであるが、かやうに賞め稱へてゐるものを勞を厭ふと說く如き的はづれの解釋をなし、又は意味なき事に心をあらせる類の附會が少くない。つまる所、御杖の御國風と言ふ考への基が附會なので、その基に就いての不用意な考へ方や曲解より成される論說なれば、いかほど精細な構造を備へるとも意味がない。御杖の注釋にはかやうな的はづれの詳論がまじるのである。

御杖の「萬葉集燈」は此のやうにその著述の基調が御杖の特異な御國風の論なる爲、御杖の學に於いては最も成熟せる所說ではあるが、是を研究として批評すれば結局、御杖の人生論世界論の展開と言ふ部面に於いて意義を持つのであり、萬葉集と言ふ古典文學の研究としては甚だ偏つた性質を持つ。注釋的研究が單なる文獻的考證のみに終始すべきでは勿論なく、高度の味讀の境地に及ぶ事は天才的な思索の常である。けれども萬葉集燈の場合はその味讀が恣意を離れての卽ち和歌そのものに就いての味讀の以前に、萬葉集の一部の歌や、國史の歌の曲解を基に立論せる「御國風」の假設說が存し、その故に彼の「御國風」に贊成し得ざるものは、自然その基に築かれる論說に全面的に贊し得ない。御杖の萬葉集燈が萬葉集の研究史に於いて、あまりに重要なる意味を持ち得ないのは、その御國風の論が偏奇なる形而上學的所產にすぎない事に基く。編者は此の御國風の論を學とか研究とかの名に於いて扱ふべきものとは思はないし、もとより、御國の文化的特質の精緻な論說とも思はない。

御杖はその御國風の開眼の媒介として國史・萬葉集の歌をあげ、此の歌に沈思して御國風の發明に及んだ事を述べて居り、萬葉集は此の意味で御杖學には緊要な意義を持つのであつて、御杖の最も老熟せる年輩に於いて「萬葉集燈」が成つた事は御杖の學の概括としても興深い。しかし、御國風が結局、萬葉集の廣い考察に基かず、狹い部分的な曲解に立つと言ふ點が、御杖學の爲には惜しまれるのであつて、少くとも「萬葉集燈」が此の點よりの萬葉集の研究としても完成せられたものでない事は言ふまでもない。

萬葉集燈　一

御杖乃宇斯著

萬葉集燈

自一

至五

門人 井上安如麿 校

珠手次。懸卷裳多布等伎。畝火橿原能宮從。久方廼。天乃遠斯氐登。始賜曰。定給比志。倒語挪毛。顯見青人草乃。安禮都具麻耳萬尒。語津藝乍。言靈之所祐。意富御國夫利波霜。大良可耳。廣羅蟹。打太良日面。底都石根尒凝附。於高天原。加乎理徹里奴。阿羅玉乃年。安多良阿太良迹來經氐。青丹吉。寧樂之宮子。遠嬬孤不流世由。夜也屋耶耳。言智布言能伎八羨。以夜乞敝藝沙倍藝天。安豆奈比裳氐遊九苗。以波久叙乃、可斯吉人等。之保舟能。以挪良毘伊傳天。以蕪備太祁毗喚鷄。莫蒿圓隣乃、加曾計九、切木四哭能。多騰富紀。火之中水乃底止以敝杼。澳津玉藻廼。名張奈伎乎。百傳。辨余池能。三許毛里耳裳古母利安弊奴八。朝日刺。天良沙不毛吉路。麻蘂羅波斯家杼。眞登里須牟。卯名手之神乃。御言與佐斯。阿也耳宇多陀奴志賀年。麻太多九萬多太君毛。和賀加可氣當類。等裳思備叙。許禮

文政五年壬午正月

富士谷御杖識

萬葉集燈おほむね

この集古來注書多けれどもたゞ詞のうへをのみとけりこれもと歌は詞のうへに作者の意はありと心えおのがよむにも意を詞につくし實情を述ぶなどいふめるはなにのより所ぞや古書に詞のもちひざまをしへられたる事多きが中に古事記中卷垂仁天皇の條に本牟智和氣命の御うへを記せられたる所に（智また都につくれり）是御子八拳鬚至于心前真事登波受故今聞高往鵠之音始為阿藝登比（中畧阿藝登比これを日本紀には得言とかゝせ給へり）亦見其鳥者物言如思尓而勿言事云々とあり真事の事は假名にて言也この真言といふものわが御國言のいたりをいふ名なり（真人真心などみなこれに同じ先學者これらをいふはたゞおしはかりにて信ずべからず人をも心をも言をも真とたゝふる事我御國ぶりの他域にことなる所以なるをや）真とはこの集に麻傳といふ脚結を（予が家にててにをはをよぶ名なり）左右手また左右ともかけりこれをおもふに真はふたつをそなふるたゝへ言なりとはあきらかなり神典に天地初發之時とあるこれわが御國ぶりの眼目にてよにあらゆる事物天地をあやかりてふたつあらざるはなしされば すべてふたつをそなふるは即天地をそなふるにてもしこれに私すれば生〻の道をたつわざとなりよろづの事とほしろきいさをうる事なかるべしこれこのふたつの間は神の御ちからを施し給ふ所なれば也神力人力はそのいさを同日の論にあらず此事深き致ありくはしくは古事記燈にいふをみるべしこのふたつ歌のう

へにていはゞよきとあしきの情これ也よきにかたよる言もあしきにかたよる言もともに罪あるがゆゑに善祓惡祓はをしへ給へるにて或はよく或はあしきこれをたゞよふと云神典これをつくりかたむべき事をむねとしたまへりもと祓といふは善祓惡祓をこめていふなり大祓祝詞に天津罪國津罪をいふは即このよしあしの罪をいふなりあしきに罪ある事は人みなしれりよきに罪ある事は神ならでわきまへがたき事なれば神ぶみかへすがへすこのよき方の罪をあげつらひ給へりされはよしといふもくはしからぬ所あるをおもふべし善祓惡祓は神代卷に以二足爪一爲二凶爪棄物一以二手爪一爲二吉爪棄物一とあるを本として　履中天皇の御紀に車持君をかしありて善解除惡解除をおほせたまひし事みえ延曆太政官符に善惡二祓ともみえたり此二祓心えずは大かたわが御國ぶりすべて心うべからず善惡は人のむねとすべき事なるをかねてよにこゝろえたるにはたがへり先學者の說くはしからねば多年これにくるしみきくはしくは古事記燈にみるべしさるは人をしてよきわざすなといふが如くなれどしからずよに人よしとおもへる言わざを今一きはみがきあげたるこれを高天原と名づくこれ天津神のおましし所にて人としてはいひおこなふ事かたき所なればこの高天原おのづから善祓なりよにあしと思へる心を今一きはきたなくなすこれを根之國といふこれまた言わざにいづべからざる所なればこれおのづから惡祓なりよきもあしきもかたよるをたゞよふと名づけられしはよきあしきの中を言行とせ

よどの御をしへなりこれを葦原中國となづく（この中を言行とし給ふ　帝の王とおはします御國なればやがてこの御國の名とはせられたる也たゞうちまかせたる國号とおもふは後世のひがめなり）神典に中をたふとばれし所々多し神典のはじめに天地初發之時於高天原成神名天之御中主神云々　禊祓之件に中瀬ありすべて神典に中をしめされたる事あげてかぞへがたし又　舒明天皇の御紀に大臣所遣群卿者如嚴矛取中事奏請人等也また延喜式に齋内親王を入れたてまつらるゝ時の詞に御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持氐云々　また台記大嘗會中臣壽詞に本末不傾茂桙乃中執持氐奉仕留中臣云々　よく中を執る人を中臣とはたゝへ給ひしなりもとこれ姓にはあらざりしなりこゝを言行とたにすれば萬妖にあたる事なしこれ大祓祝詞に安國とたゝへられたる所以ぞかしこの中儒のいはゆる中庸の中にもあらず佛のいはゆる三諦の中にもあらず天地のふたつを具足せむがための中なりおもひまどふべからずされども言といふ言いへばかならずよきにかあしきにかかたよりてふたつを具する事あたはざる物也さらばいかにせば一言にふたつを具すべきといふにたとはゞ人のもたる物ほしと思ふにひそかに取らば偸盗のにくみまぬがれざるべくしひて乞はゞ多欲のそしりまぬがれざるべきにもしその人われにその物を與へば偸盗多欲の罪を犯さずしてしかもわが所欲を達するが如くすべてふたつを具せむ事わが言もてはあたはずたゞわが思ふすぢを人よりおこし來るにそなはるべき也いにしへの　みかど〳〵天のしたをしろしめしゝ大要すなはち神典の

御をしへの眼にて我大御國に中といふはこれなりこの故によきにもあれあしきにもあれ思ふがごとくやがて言にいづるは物いふ道にあらざるよしをさとして前に引おける垂仁天皇の條に物言如思介而勿言事とはかゝせ給へるにてこれ真事登波受とある所以ぞかしされぱたゞ至誠の實情を述ぶともなほ罪まぬかれざるべければかろ〴〵しく言を用ふべからず此ゆゑに歌よむべき心得はその情よきにもあれあしきにもあれおのれよりいひ出ずしてその情をば人より察し來るべく詞をつくるを肝要なりと心うべし

よくもあれあしくもあれわが思ふ情をやがて言にいづるを言擧といふこの集巻十三（柿本人麻呂長歌下略）蜻嶋倭之國者神柄跡言擧不爲國雖然吾者事上爲云々また同巻に葦原水穂國者神在隨事擧不爲國雖然辭擧叙吾爲云々などなほあり直言せずしておもふ事成るはこれ神の御ちからによれり神柄神在隨などよめるこれ也これをば言靈といふ此集巻五（山上憶良長歌上下略）皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布國等云々また巻十三（柿本人麻呂が長歌の反歌）志貴島倭國者事靈之所佐國叙真福在乞曾（事は言の假名なり）また續日本後紀巻十九（興福寺の僧がよめる長歌上下略）日本乃倭之國波言玉乃當國度曾云々この言靈とさし奉る神は言代主神にます也（神典青柴垣之作にこの神の言外の情をつかさどりたまふよしくはしくみえたり）出雲國造神賀詞（上下略）事代主命能御魂乎宇奈提乃神奈備介坐云々とあるによりてこの集巻十二に不想乎想常云者真鳥住卯名手乃杜之神思將知とよめりこの歌にても此神の御魂はし

るべしすべて所思のすぢを此神にまかせ奉りて詞は人より端をおこすべからむやうにつくる時は此神その言外をさきはひたすけたまひてかならず人の心をして察し知らしめ給ふこれをさきはふ國たすくる國なさき國とはよめる也（言擧不爲も言靈のさきはひたすくるもいづれも國にかけてよめる事この大御國の御てぶりなる事あきらか也）もとわが御國行よりも言を先とする事行は言にしたがへばなり神典青柴垣之件力競の先後にみるべしされば神のたすけさきはひ給ふもたゞ言のつけざまによる事也もし詞のつけざまあしくは神もたすけさきはひ給はじとしるべしいはまほしき事を深く言につゝしめる心のうちのくるしさを神もあはれとおぼすぞかしいかでかいはまほしきまゝをいひたらむをあはれとはおぼさむ倒語するは所詮はいはまほしき事をつゝしむなり（神典をはじめいみきよまはるなどいふはいはまほしき言をつゝしむをいふぞかし此事ふかき旨あり古事記灯にみるべし顯詠は論の外也）さきはふともいへるはこの所以ぞかしたすくさきはふといふ詞の義もと罪あるべき言をさきはひ給はむやうなきをさとるべき也（神典はもと人の教なれども直にはをしへずして學者に端をおこさしむべきかきざまなる也　神武天皇よりの御卷〻は　帝の御名后の御名御子たちの數また御名　みかどの御よはひ大宮處御陵などよくもあしくもなき事がらどもは直言なりよしあしにあづかる事がらはみなこの書法也日本紀をおきて續日本紀より末はたゞいづれも直言なり此けぢめみわかむ心得はその文常の理にあたらざる事どもはみな直言にあらずと思ふべしたとへば八頭の烏尾ある人などあるべくもあらぬたくひの如し）この詞づくりをば倒語といふ倒語とは言のつけざまをいふ名也言靈とは詞の外に所思のいはずしてこもれる所をしろしめす神の靈を申す也としるべし　神武天皇の御紀に能以テ諷歌倒語ヲ掃蕩ス妖氣ヲ倒語之用始テ起レリ乎茲ニとあるこれなりこの詞の道　神武天皇の御世よりおこれりし事みつべし諷の字倒の字切な

りともおぼえぬはよくあたるべきもじのなさにかの御子のはかりてあてさせ給ひしなるべしかくいふ故はもと諷は諷喩諷諫などいひてあらぬ事もてわが情を人にさとすその義いとよく似たることのやうなれどから國に氏字をもちふるは直言せぬをいふばかりにて猶わがわざ也前にいふがごとくわが御國ぶりは人をはじめとすべき詞づかひなればこのけぢめくはしくわかちしるべし神典に道速振荒振といへるもはらそのこゝろこれをしへ給へる也我より端をなすを速とはいふ也　これに二種ありひとつは比喩也これはその假れる事物死物なり今一くさはその假りたる物活物なりこの假る事物の死活にてわが所思をさとさまほしき心みえなるとうつたへにさとさむの心なきやうなるとの別はある也直言すればその功は速なれど必妖あるべき事なればたゞ神にまかせ奉りてさとさむの心をおもひ絶たるをいたりと心うべしされば事物の活たるをば倒語の本意とはすべき也たとはゞ旅人卿憤ふかゝりけれど言擧しがたさにその憤を酒にて散じたまへりけるが故に酒を讃る歌あるが如きかく假りたる事物實物なるを活たりとはいふなりその假る物實物ならざるを死せりとはいふ也としるべし伊勢物語にひじき藻を贈りたるはひじきものには袖をしつゝもとよめる歌の假り物を死物にせじが爲也これらをおもひてこの理をさとるべし初學のほどはその物の死活にかゝはらずよみならふべしこのふたくさ死活のけぢめよむにやすきとかたきこれ尊きいやしきしるしぞかし　倒の字の義はうれしきをかなしといひみじかきを長しといふこれなりこれにも又二くさありしか倒にいひてよろしき時もありまたしか倒ならずしてかたは

らをいひてよろしき時もあり概するに思ふすぢをいはずしておもはぬすぢを詞とするを倒とはいふ也と心うべし妹がかほのみまほしきを妹が家も繼てみましをとよませ給ひ人のうへをいはむとてわがうへをいひなど古人倒語千變萬化なりといへどもおのづから法則あり今注せるをみて思ひしるべしひとへにわが所思ながらその端を人におこさしむべき詞づくりをいふ名也と心うべし諷歌倒語とわかちてかゝせたまへれど諷歌もなほ倒語なりこの故に下文にはひとつに倒語之用始起乎玆とはかゝせ給ひし也けりおほかた人の心の常としてわれよりいふ事は必こゝろよくはきかざるもの也これさらに人心のさがあしき故にあらず　表には諾したるが如きも心内には信服せざる事人心のつね也　神武天皇の御紀に蜻蛉の臀呫をいへるこれなり理の正しき事は人かならず感服すとおもふは僻なりそれは所詮屈服なるぞかしなほみづから心よりおこしたるにくらぶればそのけぢめありよく思ひわくべし神典毛ゝ那賀之作人の服するに三くさある事をしめしたまへり　我をはじめとすべからざる事もと神道にそむくがゆゑ也千里鏡といふものかなたの玉にうつるは倒影なりその倒影またこなたの玉に倒影となりてうつるこれ即直影なるをおもふべし物のかげのものを隔つれば倒影なる事常也その外めのまへ自然の事に倒なる事多しこれ神道の現しき所以なりそのしるしかぞへがたし心をとゞめてしるべし

人より端をおこさしめむがために假る事物すなはち後世の題なり此集に詠花詠鳥など題をおけるみな後よりかけるにてよみ人のそれを題としてよめるにはあらず　題は後よりつけたるものなる事は上古倒語の道によらでよまざりし歌どもなれば明らかなる也

（この事予が隨筆にもくはしくいへり）後世の題詠は情といふばかりのものにあらずたゞ花鳥風月を思ふ心なりよきあしきのもどきもなきはめでたきやうなれどけづり花のごときものをやそのはじめを思ふに古今集の時大かた花鳥の使となりぬといきどほりて四季の部をたてられたりこれ後世題詠のおこれる源なり歌と言語はその別ありといへども大かた詞はわが情を人に傳ふべき具なれば人に傳へでかなはぬばかりの情にあらでは歌によむべき事にあらず題詠のはかなき歌となるべき情にはあらざる事也（さしむかへる人には言語をもちふ遠きあはひの人には歌を用ふされどさしむかひても歌によむへき事がらもあるべしそのけぢめみな情の輕重によるべき也）當藝志美〻命（タギシミミノ）あしき御心ありてその御はらからを殺さむとし給ふにその御母后そのよしをみそかに告しらせむとおぼしてよませたまひし御歌古事記 神武天皇の條にありあらはには告べからず告ざれば殺されたまふべしかゝる時こそ歌の必用なれ又その御卷に軍令をも大御歌もてせさせ給へりはかもなき事がらもと歌によむべき事にあらず古今集の序にはいたくいやしまれたれども相聞は人と人の情のうちあひしかもあらはなるまじき事がらなればなか〳〵歌の必用にこそすでに古今集春部よみ人不知うめの花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみけるといふ歌兼輔集にいとしのびたるうつり香の人しるばかりありければと端作あり四季の部の中にかゝるたぐひ多きをやさればまことに四季の景物をよめる歌は論なし戀賀哀傷別旅などの類その詞づくりの直倒みつべし予千とせあまりかくれたる倒語の道をいふが故

にょにこれを信ぜぬ人多しこれ年比のなげき也まへに紀の文の心得をいへるが如くいへば妖氣にあたるばかりの事がらならでは倒語も無用なりとしるべし大かた倒語の道妖氣を掃蕩すべき御教なればかろ〲しき事にあらず詞をもて妖をまねきくるしきせにおつる人よにすくなからずこの道をおこしていかでふたゝびよの人のまねく妖をまぬかれしめむとおもふもなほわがさかしらなるべしかし

大かた詞の表には作者の情はなき事上古の人の常也神典淤能碁呂島之件は詞はことの外なれど交接の事也先言之件交接の事をいへるは交接の事にあらずこれ古文古歌をみるべき心得なりされば歌の表をときて歌ときえたりとおもふはいとをさなきわざなるべし作者のその時代またその身のありしかたち又端書など思ひはかりて言外の情を察すこれ予が年比ならひたる所也しかるにある人とへらくもし端書もなく作者もしられざる歌はいかにしてかその情は察する大かた言靈をいふ事附會牽强なるべしといふげに千とせあまりかくれたりしことなればしか思ふもことわりなる事なりもと所思を神にまかせ奉るはいはでかなはぬ事のしかもいへば妖あるべき事言靈とはなるなればさだかにはかり知がたき倒語の倒語たる所以なりされどその歌えつべき當人は必その言靈はさだかにおもひいたるべきなりしかれども端書作者のありなしにかゝはらず詞のつけざま脚結の用ひざまにその言靈は察せらるゝもの也しかのみならず大抵古人

倒語をもちふるにすぢ〱あるものにて附會にあらざる事この集の注をみしり又よくわが門に學ひて後附會ならざるしるしをうべしすべて詞もその用ひざま後世直言にひがめる人のもちふるにはいたくたがへりくはしく學びしるべし

古言はすべて倒語に用ひ（脚結もおなじ）後世は直言に用ふたとはゞ歯の落たるを舌いづといひものいふをことゝふといふ類のごとし脚結も人に決せさせむと思ふ事は疑ひ多きを思はせむとてはひとつをいふすべて歎息も願もまことに歎きねがふに用ふる事なしされば詞の表に目を奪はれてかなしとあるをかなしとみば古文古歌の本意は終にみる事あたはざるべき也されど後世とても伊勢物語土左日記のたくひのごとくいはでかなはずしかもいふべからざる事にあへる時の所作はなほ倒語の法にかなへりされば倒語の法にたに熟せば後世の詞たりとも法にそむくべきにはあらねど上古は詞といふ詞倒語のそなへなり後世は直言のための詞どもなれば倒語の法には古言のかた切なる也さればおのれともすれば古言を用ふるが故によには古体とも又古言を好むともいはるさらに〱古言をこのむにはあらず倒語の道のたふとさにひかるゝ也ゆめ〱此集になづみて倒語の道のかしこさをもしらずたゞうはべに古言を用ひよに萬葉体古体などとなへらるなとわが門生にはつねにさとす也この集をみむ心得ひとへに古人倒語にくはしかりし法則をみしりすべての詞倒語のうへにのみもちひたるやう

を心えむ事をむねとすべし先學者いづれも博識なれどその目かぎれりといふべしある人とへらく古言今の人に耳遠ければ譯（ワサ）なくては通ぜずしかるに古言をしひて用ひむは人の耳をおどろかさむとにや時よにあはぬ詞を用ふるは時をしらずとやいぶ（ママ）へきいかにおもひて古言は用ふるぞといふ答て曰おのれ古言を用ふるはその耳遠からむ人にしひてきかせむとの心にあらずみづからもちひしらざれば古人の言を用ひたる味はひしらるべからず此故に常に古言を用ふこれひとへに倒語の道のたふとさなれば人の耳とほからむはさもあらばあれ神の御心にはいかでかあはれとおぼさゞらむとてこそおのれ歌はよめそこの歌よまるゝは人にほめられむの心なるべし人にほめられむ爲に歌はよめと誰かはをしへしいとも〳〵いやしき歌のよみごゝちやとこたへき後世にひがめる人は古言とたにいへばあだし國の言にしもあるが如くいみきらふはいかなる心ぞや　天皇の大御傳へます三くさの大御寶も今の時代にはたふとくやはなき時代につれて詞などもうつりたるはやう〳〵いやしくなれるにこそあれそれをたゝふべき事かはもちひざる人の耳とほくなせるにこそあれさらに古言のとがにはあらざるをやそれも今の世の人のひがみにもあらずこの京のはじめの人たちの用ひざりしゆゑに今の人耳とほくなれる也けりその證は上古の詞なれどこの京にもちひならへるは耳どほしとも神さびたりともしらず〳〵人つねに用ふたとはどうつたへにうたてあぢきななどの類これ也脚結も十にひ

とつも後世のはなし又もとなといふ詞は耳遠きにこゝろもとなはたゞ心といふ事を上にくはへたる同詞なるに今の世の人耳どほからずこゝをもて推せば詞の耳遠くなれるにはあらずもちひずして久しく置ふるしたるがゆゑならずやよく〳〵思ひかへすべししかのみならず古言はすなほにして不自由也と心えたりこれしらぬ也よくみしりその法則をふみて變化する時は自在後世の詞に百倍なりわが門にいれる人ならでその味はひをしらぬぞもどかしきさすがに世人古言をいやしむかと思ふにさにもあらずいやしみはせねどもこれを用ひぬはから人のいはゆる敬而遠なるべしかしされどかく古言の味はひもしらずしてたふとぶはこれ又たふとばざるに同日の論なるべし今のよの人倒語ともしらず〳〵用ひをる事あり人の賀に千とせ萬よをよむはその人まことに千年萬世を經むと思ふかおそらくはしか思ひてよむ人はあらじこれ千とせよろづよとよむは百歳にたにあらせまほしき情を思はするわざならずやよく〳〵かへりみてそのひがみをとくべきなり

中昔にたくひなしといはるゝ躬恒貫之なにをたふとびたるぞみな上つ世人麻呂赤人をこそひじりとはあふぎけめさてよみ得たる所躬恒貫之が歌これなりされば志はいかにも〳〵高からむこそめでたかるべけれ躬恒貫之を上なしと思はゞ躬恒貫之には必劣るべきぞかしおのれ歌よまむ人はかくのごとし歌よまぬ人とても此集は必つら〳〵みつべきは古人倒語を用ひたるあと古歌古文ならでは何に

かはみむまへにもいふがごとく倒語の妙用は妖氣を掃蕩する御敎なれば歌よむ人よまぬ人によらずこの集上古の人の倒語のもちひざまをよく／＼みしるべき也歌よまむ人はくはしくこの詞づくりをまねびておのがよまむ歌はひとへに倒語の誠とすべしこれ予が門生にをしふる常なり

歌のよみざま詞のつけざまをしらむには神典の敎旨をわきまへざればいかに思ふともたゞ枝葉たるべしされぱおのが門生まづ神典をまねばしむるなりされど中には志なき人またきゝてもくはしからぬ人は必そのわざ高からずやごとなき事しるべし今の世の心がまへにて人麻呂赤人によみ及ばむ事はかたし予はそのかみつよの御てぶりに人の心をなしさて歌よまむに人麻呂赤人によみ劣らむやはとはおぼゆる也これ神典の御をしへをもとゝする所以なり今は千とせあまり神道は巫祝の間におち（神祇官は太政官の上におかれたるにさるはかなき事にはあらぬ事思ふべし）國學はふることをさくるをわざとせり神道の敎旨よにかくれたるはもはら倒語の道のうしなはれたるがゆゑなり（くはしくは古事記燈にいへり神典すべて倒語なるがゆゑなり）よにいまだ倒語の道のこれりし證はこの集巻五（山上憶良長歌下畧）神代欲理云傳介良久虚見倭國者皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布國等加多利繼伊比都賀比計理今世能人母許等期等目前尒見在知在云々　これなりこの道よにかくれたるは續日本後紀巻十九に興福寺の僧　天皇の壽算を賀したてまつれる長歌をのせられてその後文に者夫倭歌之體比興爲先感動人情最在茲矣季世陵遲斯道已墜今至僧中頗存古語可謂禮

失則求ム之ヲ於野ニ故ニ採テ而載レ之ヲとみえたるこれなりかくよにありしもかくれたりしも古書に明らかなるをおのれ此道をいふ事數十年人これを信ぜぬは國史萬葉をも信ぜずとにや大かたおのれが私のごとく聞なす事わが年比の歎なりかねて此書を注しおける事百卷あまりことしわが門生世のために梓にものするついで年比おもへる事のこさずしるしぬわが御國ぶりかしこまむ人は古事記の燈この集の燈にことわれるふし〳〵くはしくあぢはひて千とせあまりかくれたる御國ぶりにしたがはねとぞ

文政五年壬午正月　　御杖識

萬葉集卷之一

雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

高市崗本宮御宇天皇代

天皇登香具山望國之時御製歌○天皇遊獵內野之時中皇命使間人連老獻歌并短歌○幸讚岐國安益郡之時軍王見山作歌并短歌

明日香川原宮御宇天皇代

額田王歌　未詳

後崗本宮御宇天皇代

額田王歌○幸紀伊温泉之時額田王作歌○中皇命往于紀伊温泉之時御歌三首○中大兄三山御歌一首并短歌二首

近江國大津宮御宇天皇代

天皇詔內大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌○額田王下近江國時作歌井戸王和歌○天皇遊獵蒲生野時額田王作歌　皇太子答御歌

明日香清御原宮御宇天皇代

十市皇女參赴於伊勢太神宮時見波多横山巖吹黄刀自作歌○麻續王流於伊勢國伊良虞島之時人哀痛作歌　麻續王聞之感傷和歌○天皇御製歌　或本歌　天皇幸吉野宮時御製歌

藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌○過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌○高市連古人感傷近江舊堵作歌或書高市黑人○幸紀伊國時川島皇子御作歌　阿閉皇女越勢能山時御作歌○幸吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首并短歌二首○幸伊勢國之時留京柿本朝臣人麻呂作歌三首　當麻眞人麻呂妻作歌　石上大臣從駕作歌○輕皇子宿安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌四首○藤原宮之役民作歌○從明日香宮遷居藤原宮之後志貴皇子

御歌○藤原宮御井歌一首并短歌○大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸紀伊國時歌二首
或本歌○二年壬寅太上天皇幸參河國時歌長忌寸奧麻呂一首　高市連黑人一首　譽謝
女王作歌　長皇子御歌　舍人娘子從駕作歌○三野連闕名入唐時春日藏首老作歌○山上
臣憶良在大唐憶本鄉作歌○慶雲三年丙午幸難波宮時歌二首　志貴皇子御歌　長皇子
御歌○大行天皇幸難波宮時歌四首　置始東人作歌　高安大島身人部王作歌　淸江娘
子進長皇子歌○太上天皇幸難波宮時歌三首○忍坂部乙麻呂作歌　式部卿藤原宇合
長皇子御歌○大行天皇幸吉野宮時歌　或云天皇御製歌　長屋王歌
和銅元年戊申天皇御製歌　御名部皇女奉和御歌○三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂
宮時御輿停長屋原逈望古鄉御作歌　一書歌○五年壬子夏四月遣長田王伊勢齋宮時山
邊御井作歌三首
寧樂宮
長皇子與志貴皇子宴於佐紀宮歌　長皇子御歌

萬葉集燈卷之一

平安　富士谷御杖　著

本集一其一

雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代　大泊瀨稚武天皇

天皇御製歌　雄畧天皇也先學者この集の端作をしひて御國よみによめどもとからぶみざまにかゝれたるなればそれもなか〳〵なるべしすべて古注にてあるべき事どもはゆづりていはず

籠毛與。美籠母乳。布久思毛與。美夫君志持。此岳爾。菜採須兒。家告閑。名告沙根。虛見津。山跡乃國者。押奈戶手。吾許曾居。師吉名倍手。吾己曾座。我許曾者。脊齒告目。家乎毛名雄毛

告籠は菜を摘入れむ為にもてる也古点許とよめるは非也加多麻とよむべし古事記上卷旡間勝間

又古く加多麻ともみゆ後世加多美といへり許は大きなるをいふ名なるべし神代巻に大目麁籠あり布久思は菜をほりとる具なるべし和名抄云鏒唐韻云鏒音謲一音鏨漢語抄云加奈布久之犂鐵又土具也とあるはかねにてつくれる也されどこと更にこの名あるは竹木などにてつくれるもある故なるべし越の海人のかづきにもつを今も布具世といふとぞこのもてるは竹木などしてつくれるにもやありけむ○毛與古事記上巻長歌上下略 阿波母與賣迩斯阿禮婆顯宗紀の御歌に上略 奴底喩羅倶慕與於岐毎倶羅之慕又於岐毎慕與阿甫弥能於岐毎下略 などあるに同じ毛はふたつともに此女の容儀を主としておかせ給へるにてこの二物もて容儀のすぐれたるを思はしめ給へる也かくはかなき物をあげ給ひしはそれたにめでたくは容儀はいかばかりならむと思はせむ御詞づくりよく味はふべし毛もじふたつあるは此二物にかぎらぬを思はせ給ふなり二物ばかりなるを後世毛ふたつおくは彌也與は也經の也の反なれは（經とは經緯の經なり五十韻をば亡父つねに經緯といはせたり） この集巻二に我者毛也安見兒得有とよめるは詠のやなり此反にて心つかざりし事をなげく詞也かゝる物さへめでたからむとはおぼさゞりし御心をしめしたまへる也ひとへに容儀をほめ給ふなれどあらはにほめ給へば却て反を來たすが故ぞかし○美はたゝへ言也真のかよへる也わが御國大かたふたつを具する事を貴ぶが故也この集中麻傳といふ脚結を（脚結とはよにいふてにをはなり亡父がいはせたる名也） 左右手左右などかけるに思ふべし

ふたつとは天地の二性を云くはしくは古事記燈神典にいへれば畧す以上四句毛與といふ脚結にもはらこの女の容儀のたくひなき事をしめしたまへる也直言せばたとひいかばかりいふとも限あるべし倒語の妙思ふべきなり（古点この與を下につけて与表とよめるは非也よきを与表といふ例なし）○此岳介家と名のしられぬ事をしめしたまへるなり○菜採須兒この須を下につけて古点須兒とよみ須は志津の約にて賤女なりといふは誤也氏集卷十七（長歌上下略）乎登賣良我春菜都麻須等云々かく假名書もしたればつますことよむべしこの外此集卷七に小田苅爲子卷十に伊渡爲兒また同卷に山田守酢兒などの例なりこの須をば佐とも志とも勢ともかよはせていへり古事記上卷に佐加志賣遠阿理登岐加志氐久波志賣遠阿理登伎許志氐佐用婆比介阿理多多斯用婆比迩阿理加用婆勢云々（長歌上下畧）又同卷に阿夜介那古斐岐許志云々（同上）また同卷に毛々那賀迩伊遠斯那世登與美岐多氐麻都良世（同上上畧）また即この長歌のうちに名告沙根又この卷のうちに小松下乃草乎苅核などの類いと多しこれは里言にサセラルといふ詞の本にて菜をつませらるゝ兒といふ心也人のするわざをあがめていふ詞也後世里言にサセラルといふは髙貴の人ならねばいはねどさばかりあがむるにこそあらね天子より賤女をさしておほせらるべき詞かはと思ふ人もあるべけれど上古の人は貴賤にかゝはらず人をあがむる事わが御國ぶりにてふかき理ある事くはしくは古事記燈神典にいふをみるべし兒とは多くは女をさす

稱なり男をもさしていふ事集中に少からず去來子等の類これ也大かた子は愛せらるゝ物の極なれば子を思ふ情のごとくおもふ心をさとしてさす稱なる也をぢをばなど稱するも父母のはらからの如く思ふ心よりいふなりこれに準じてしるべしされば男とても愛してはいふべけれど女はことに愛せらるゝ情ふかき物なれば女をさしたるがいと多き也綏兒櫻兒などやうにやがて女の名ともせり後世伊勢のこ中將のこなどいふもこれ也今もこの遺風ありこれを御の義といふは非なり○家告閇印本吉閑とある吉は告閑は閇の誤にて乃良敝なるべし能良敝は能禮を延たる也といふ說廉なりのぶるもつゞむるもよしもなくてすべきにあらずかし良布といふ詞をつけたる詞多しいはゆる加敝良布安氣津良布などいふ類これなりその事のひとたびならぬさまを形容する也さればこれはくはしくいひきかせよとの心なり此下名にはのらさねとよみたまひ家にはかくのらへとあそばしゝは家は處も家もまぎらはしければなるべしのるとは告る事を古くいふ詞也○名告沙根の沙は上にいへるが如し根は亾父が脚結抄にいはゆる去倫のねにていねといふ詞のいをはぶける也（これらは裝の脚結となれる也くはしく抄に弁じおけり）これは名ををしむなとの心を根とはあそばしゝ也この家と名を告よとおほせられたる此大御歌の眼目なり家と名をきかせ給ひてなにゝかせさせ給はむ心をとゞむべし後世のいやしき詞づくりにくらべてこの御詞づくりをおもひ奉るべき也○扁見

津　古事記仁徳天皇の御製蘊良美都夜麻登能久迩尒云々　これによりて四言によむべしこの卷に人麻呂天尒滿倭乎置而云々　眞淵は四言にのみ上つ世はよめるを人麻呂にいたりて迩もじを加へたりといへり　神武天皇の御紀に至下饒速日命乘二天磐船一而翔中行大虛上也睨二是鄕一而降之故因目之曰二虛見日本國一とあるより冠辭とせる也紀また此集にもやまとゝいふは今の大和の國也日本とかきたるも猶やまとゝよみて大和の國の事也日本と書そめしはいつの比よりにか此集にも一二首はのもとよみたる歌あり藤原の都のころよりやいひけむと同人の說なりさらばこの　帝の御時いまだ日本をやまとゝいはねばこれも大和の國の事也大和をしろしめすといふにてやがて日本をしろしめす心になる也と古說なりげにしかなれどしか尺するは倒語をころすなりたゞ大和一國をしろしめすやうにあそばしゝ也せばきをひろく廣きをせばくいふは倒語の法ぞかし者もじはすべて目にたつ事あるにつけての歎なりたゞ物の分別をたつる詞と心うるは經緯の阿緯の義かくる也この御歎は我よりわが御名を告させ給はむはいかめしけれどかくさむとおぼせどもかくされねばなり此下すべてこの心をえてみるべしこれを御自負のやうにみるはいとをさなしたとひ賤女たりとも勝佐備はこれは自負の事なり　神典のいさめらるゝ所なるをいかでかをかしたまはむ後世のいやしきならひにみまじき也○押奈戸手おしは多かる物におしわたす揷頭なりこれは上におく詞の名也亡父揷頭裝脚結

と詞をみつにわけて三具といへり　奈戸は並へ也これは大和國のうち郡郷におしわたす心也手(テ)もじはくはしく此下なる藤原宮役民が長歌にいふべし○吾許曾居次句の師を此句につけてをらしとよみ來れゝどらしの義かなはず師もじは次の句の上につけてしきなべてとよみ居はをれとよむべし許曾(コソ)は多かる事物の中にてひとつをとりわけてみする詞にてそのとりわくるはかへりてそのとり殘せる多物を思はせむがための脚結也さればわが御身ひとつをとりわけ給ふは他の人の此國にすまぬを羨みおぼす心也これひとへに御名のかくしあへ給はぬ故をしめしたまふなりすべて多物をしめさむにはその中の一くさをとりわくるにしかず許曾(コソ)の妙用おもふべしおほかた脚結は詞をたすくる用のみならず多言なるべきを少言にすべきを專用とすこれ脚結の本然なる也○師吉名倍手この吉の字告につくれるは誤なるべし師吉(シキ)は太敷坐などいふが如く知といふ心なり高知を高敷といふにてもしるべし名倍手は上に同じこの座をば宣長はませとよみきこれは神典にさる例あればなるべし須佐之男命御みづから吾御心(ワガミコヽロ)須賀須賀斯(スガスガシ)とおほせられまた八千戈神(ノ)の御みづから夜知富許能迦微能美許登波(ヤチホコノカミノミコトハ)云〻とよませ給ひしによればさる事ともおぼゆれどもと神典は神の御心をはかり奉りて後よりかき後よりよみたるものなるを宣長は實錄とみたるよりの說なり御みづからいかでさはのり給はむしかるべからざる事は古事記燈をみてさとるべしこれは　帝の

御うへなるが故に家持卿の心えてしかかゝれたるにてなほをれとよむべき也この下軍王の歌に獨座吾衣手尓とあるにも思ふべし何意卒竟上の二句に同じ古人かくかさねていふ事多しこれたゞ詞のみやびにあらずからぶみの四六体などの如く心えて先學者これらを詞のあやと思へりわが御國倒語をこそたふとべ詞のあやをねがふ事なしあやのごとくみゆるいづれもよしある事ぞかしこゝもいかさまにおぼせど御名をかくし給はむよしなき事をかへす〲ねもごろに思はせむとの御詞づくりなり○吾許曾者今の本曾を脱せり一本曾もじありこれは上のふたつの吾をうけてさる吾こそはとの心也家をも名をもつゝまれぬ吾こそはの心にみるべし許曾を三つおかせ給へる上のふたつは同じ心也これは又そのふたつをうけておかせたまへる也○脊歯告目古点せなにはつげめとあれど後世にこそせなとはいへ古くはなせとのみあり又にはの脚結も上にかなはず歯は齢と同じければとしといふ脚結の假名にてせとしのらめと六言によむべしこれは真淵がよめる也諸説のうちこの説より外にことにおもひよれる事もなければ今これにしたがへり古の女脊とすべき人にあらでは家をも名をもあらはさぬよしは集中多くみゆれば我をこそ夫と思ひてのらめとの心也といふ説ありこれこの家と名は猶女の家名としての尺なりしかも心うべけれどしかか心うれば上の四句は御自負となるべし上に尺しおけるが如く許曾の義御みづからひ

とりをとりわけ給へるは他の人をうらやみ給ふ御心しるきによれば此脊としのらめは脊がましくていとをこがましけれど我よりまづ家をも名をものらめとおほせられたるにて此終の家をも名をもは御みづからのうへなるべくおぼし　帝にして家とおほせられむはあるまじき事の如く心うる人もあるべけれど御みづからたゝへ名はいかゞはおほせられむ家とおほせられむ事何かはふさはしからざらむしかのみならず女の家名をきこしめさぬ程は我も御名は告じとおぼせど此國におはします事人もしりてかくし給はむよしもなきが故に夫めきていとをこがましけれどやむ事をえず吾よりこそは家をも名をもさきに告めと思ふぞとあそばしゝ也はじめに女に家名をのれとよませ給ひさて我より家名をのらめとおほせられしはひとへに女の家名を促し給ふ也さきに御名を告たまはむにいかでか女の名をつゝみあへまし上古の詞づくり思ふべしさればやまとの國はわれこそをれ云々の四句も所詮は女の家名を促かさむがための御詞づくりとしるべし

靈この御製野に出まして菜つむ女をみそなはして御志を告させ給ひし大御歌也しかるをたゞ家と名をのれとのみよみふせ給ひ御みづからの御名のかくしがたき故をもて促がしたまひし御詞のつけざまめでたしといはむもかしこしもしこれを詞のうへばかりとみば女の家名をきかせ給

ひて何にかはせさせ給はむこれ家所をきこしめさばめしにつかはし給はむとの御詞づくりならずやかばかりの賤女めさるべきにたはやすかるべき事なるを猶かく倒語の大御歌をたゞまして此　常いとたけくおはしけむにも事たがひていよ〳〵かしこし大かた人の心を先とする事わが御國ぶりなれは上古にはかゝる事さへ有けり上古の風のかしこさをも後のよのいふかひなさをもこの大御歌にておもひしるべし

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇

天皇登香具山望國之時御製歌

これは舒明天皇なり

山常庭。村山有等。取與呂布。天乃香具山。騰立。國見乎爲者。國原波。煙立籠。海原波。加萬目立多都。可怜國曾。蜻島。八間跡能國者

山常庭とは他の國にむかへたる也山常は假名にて大和一國の事也○村山有等これをあれどとよみ來れゝど等もじ清音なればありとどよむへしありとはありとての心なり濁音に清音を用ひ

たる例もあれど清(スミ)ては心えがたき歌こそあれとてかくはいふなり村は群なり群山あれば望をさふる物なれば也○取与呂布とりは手に取持ちもしたらむやうなる形容の挿頭也與呂布は具足の義にて何も具足したる香具山なればとの心なり山の中にもいと高き香來山をといふべきを高きばかりにいはずして取与呂布とはおほせられたる也この取よろふといふ中に高き事を思はせたる也高き事こゝの專用なるにかくいふ上古の詞づかひおもふべし○國見乎爲者　神武天皇の御紀に嗛(ホヽマノ)間丘にて國見したまひしを濫觴とすこれは高き處より見て國のさまを察し給ひしなりたゞ眺望のためにあらざる事かの御紀の文にしるし○國原波はらとは字彙に遇(ノ)玄切音(ノ)元本也說(ニ)文高(ヨ)平曰ㇾ原人所ㇾ登也李(ノ)巡曰(カ)土地寬博而平(ニ)正(ナルヲ)名(ケテ)之曰ㇾ原(ト)即今所(イハユル)謂曠野也とみゆたひらかにひろき所をいふ名也波(ハ)もじはまへにもいひしごとくおのづからさる分別あるを歎ずる義也後世脚結のもちひざま條になれるはこれにかきらぬ事ながらつね多く用ふる脚結はことに思はず條になれる事甚しければおどろかしおく也○煙立籠これは人家のかまどにたつる煙なりかの後世　仁德天皇の御製とあやまれるたかどのにのぼりてみれば云〻　の歌（日本紀竟宴にこの帝を得て時平のおとゞのよませたまへる也）たみのかまど云〻はこれらをまねばれたるなるべし○海原波こゝより海みえずなど古說あれどなにはのかたなどはみゆるなるべし○加萬目立多都和名抄云唐韻云鷗和(ニ)名加(ニ)毛米とあ

り上つ世にはかまめともかもめともいひけらし此集巻三長歌上下畧奥邊波鴨妻喚（オキベハカモメヨバヒ）ともよめり これは鴨君足人が歌也高市皇子薨じたまひて後よめるなるべければ時代思ふべし 土左日記に今しかもめむれゐてあそぶ所あり云〻 契沖海上舟の往來しげくてにぎはふさま也といひし隨ふべし舟のゆきゝしげきに驚て鷗のたつさま也たちたつはたちにたつの心にてたえずたつをいふ里のにぎはひを煙に詞をつけ海のにぎはひを鷗に詞をつけさせ給へるめでたさよく〱思ふべし○可怜國曾今の本怜㤿とあり顚倒にやこの㤿の字は字書にみえず怜は字彙に離-星切音陵了慧也俗作レ憐愛之憐非とあり神代卷に可怜小汀とあるによれば㤿は可の誤にてうましとよむべし古点おもしろきとよみたるさる事なれどおもしろしとは古語拾遺に衆面皆-白と注したるはうけがたし物を賞して目をはなたねばわが面輪のかくれなく人にしるきをいふ義也わが面のしるきにて物にめをはなたぬを形容したる詞也しろきはしるきの心なり紀に灼然をいちじろしとよみ又此集に川とほしろしとよめり遠ながらしるくみゆる心也 紀に大の字をとほしろしと訓じたるも大なるものは遠ながらしるければ也 又うましは神代卷に可美葦牙彦舅神なほ所〻みゆ古事記上卷味御路などもみえてもと食味の旨きより形容する詞也さればそのあはれと思ふ所はひとしけれどその義うましの方切なるをおもふべし曾（ゾ）は里言にジャゾといふ心にて大かた此大和國をば是までかばかりよき國ともおほさゞりしを今この國のうまきに御心を循へ給ふ心なりこの曾もじ

此大御歌の眼なる處にてらして後世ぞもじを用ふるをさなさを思ひしるべし深く此國のよさをよろこび給ひし也○蜻島この名かの　神武天皇の御紀國見したまひし時よりおこれり因登二腋上嗛間丘一而廻二望國狀一曰妍哉乎國之獲矣雖二内木綿之真迮國一猶如二蜻蛉之臀呫一焉由レ是始有二秋津洲之号一也この語後世國の形とみあやまれり雖猶などのもじはいかにみてならんをさなしこれ深き理あり此御歌に用なければはぶきぬ此二句はもと可怜國曾の上にあるべき句なれどかく倒置し給へるは標貫をはかりて也標たるべき事はまづいふならひ也姓をさき諱を後にいふが如し（姓は數世にわたり諱はその世の主一人なりこれ先後の所以すなはち標貫の心也てらして思ふべし）詞の所置此標貫をはかりておかざれば語をなさざる也者もしは此國のうまき事他國の類にあらぬ事を歎し給へるなり

霙この御製はもと國見は　神武天皇の御紀國見し給ひし所に巡幸とあれど國見は御國ぶり也巡狩はからぶり也もはら安民の事に御心を勞し給ふより國見し給ふに里のみならず海上までもにぎはへるを御覽じてふかくよろこばせ給へる大御歌なれどしか直におほせられては御徳をかゝやかし給ふになりぬべきがゆゑに此國もとより人力をからずして安く豊なる國也とはじめてしろしめしてこれまで御うつくしみあまねからざらむかといたづらに御思を費し給ひし事よと悔おぼしめす心にあそばしゝ也御詞のつけざま後世の人の思ひもよるまじき事かしこしともよの

つねなるかなたゞ國の本然にゆづりたまへども實は此　帝の御うつくしみの深さにかくにぎはふをいさゝかも慢じたまふふしなきこの御詞ざまありがたきまでおぼゆる大御歌なりかし

天皇遊₂獵內野₁之時中皇女命使₃間人連老獻₂歌

內野は大和國宇智郡也中皇女命は　舒明天皇の皇女なりのちに　孝徳天皇の后となり給ひし間人皇后と申し奉れりされば今の本皇の下女の字を脫せる事疑なし此老は　孝徳天皇の御紀に中臣間人連老とみゆ此皇女の御乳母方とぞ此御歌は御獵に出たゝせ給ふ時老をして後宮より奉られしなるべし

八隅知之。我大王乃。朝庭。取撫賜。夕庭。伊緣立之。御執乃。梓弓之。奈加弭乃。音爲奈利。朝獵尒。今立須良思。暮獵尒。今他田渚良之。御執。梓能弓之。奈加弭乃。音爲奈里

言八隅知之此冠辭　仁徳天皇の御紀にはじめてみえて紀中にも此集中にも多し眞淵は八隅といふ事からめきたりとて此集卷一よりはじめてかた〲に安見知之とかきたるを正しとして天下を安見し給ふ心かといへり卷二に內大臣藤原卿娶₂采女安見兒₁時我者毛也安見兒得有云々とあ

るに例せられたり氏說いとみやびては聞ゆれど天下とも國ともいはずして安見しゝといはむ事いかならむ猶古說のごとく八隅をしろしめす心にや八卦をはじめから人八を貴ぶが故にからめきたるやうなればすでに八雲八重などはいやの義とすれどいやはいやふたならびいやます〱になど用の詞にこそ冠れ体にかゞふるべき詞にはあらぬをやされば神典に八の字を用ひられたるいづれも猶八の數にて頭胸腹陰左右の手足と一身を八處にかぞへられたるを本とし一天下をも八島とすくはしくは古事記燈にみるべしひたふるにからざまともいひがたしこゝをもて思へば猶八隅をしろしめす心にこそしゝの上のしもじは知の義也下のしもじは去倫のしにあらずによいふ過去のしの事也上にいへる須佐世(スサセ)などのかよひにて知らせらるゝといふ心也以締はすべて用を体にする義也されはこれもしろしめすになりておはしますといふほどの心也　○朝庭ふたつの介波はわざと朝夕のうへばかりにいひて終日終夜のさまを思はせられたる也朝にけになどよむ皆終日を思はする也取撫は御弓をふかく愛し給ふさまを云也伊緣立之これ又大切に直し置給ふさま也古点はいよせたてゝしとよめれどてもじあるにも及ばぬ所なれば六言によむべしよせたつといふ詞大切にする義はなけれど御手をはなたせ給ふまゝに捨おかせ給ふにむかへて此義を思ふべし伊はいきづきならしいはひもとほりいかくるゝまでいたゝせりけむなどつねに多く冠らせたる詞也先學者發語といふは例の僻也隨筆にくはしくいへり又人の名の下に伊をつけてい

ふ事此集中に志斐伊とよみ續日本紀宣命に道鏡伊とありこれは道鏡伊は人の陰へおしやる心也志斐伊は人の陰へみづからかくるゝ心にてとがむる心と謙遜の心とはなる也詞の上につくるも此義にて二事ある物を一事を陰にしてみせむが爲也伊をつけざれは二事ならびてみゆべければ也よせたて給ひし御わざの今御獵にもたせ給ふ陰になりてあるをしめし給へる也〇御執乃御手にもたせらるゝ御弓なるをいふ也御劔を御はかしといひ御衣をみけしといふに同じしはまへにいへるせらるゝの心也延喜式に御弓は梓なるよしみえたり〇奈加弭乃加は利の誤にて鳴弭の心かといふ說あれどなり弭といふべくもおぼえず弦のあたりて鳴るはうら弭にてうら弭は下弭より長ければもし長弭といふにやあらむ音爲奈利とは御かりに出給はむとて御弦打し給ふが後宮へきこゆる也奈利はすべて耳にたち目にたつ事をいふ脚結にてその耳目にたつはそれにつけてふかく心にあたる事あるをしめす也この脚結に言靈はむねとこめたまへりおぼしめす情をばおほせられずしてたゞ弭音のいたく御耳にたつよしを奈利をもて思はせ給ひし也〇朝獵介たゝすらしは立出させ給ふらしきとの心也四句たゞいひかへられたる句のやうなれどしからず朝がりに今たゝすらしは無子細夕がりに今たゝすらしとは夕獵をもしたまはむとて今より出たち給ふらしとの心也なにのゆゑもなきやうにみゆれど朝がりばかりにてかへり給はむたに待どほなる

にもし夕獵をさへおぼしてならばいかに還御のまち遠にわびしからむとおぼす御心也良之は集中に良之伎とよめる此きもじのはぶかりたるにてさだかにしかりとは知られねと十に五六もさならむとおぼゆるをいふ脚結也○御執この三句はかさねさせ給へる也古人かくかさねていふは必そこが一首の主意ある所也一たびいひていひあかねば今一たびいふ也さらに姿にあづかる事にあらずかくかさぬるはその句意に人のめをしてとゞめしめむがための句法也としるべしされば一首の御心もはらこゝにあるなり

靈この御歌表はたゞ御弓の弭音にて御かりに出たゝせ給ふ事をおぼす御心によみふせ給へれとたゞさばかりよしもなき事をわざと老して奉られむやうなしされぱその所以をたづぬるに朝暮寵せられ給ふはわれも御弓もひとしきに御弓はけふも御手をはなれずしてゆくがうらやましき心に御詞をつけられたるにて父　帝にしばしもはなれ居たまはむ事わびしけれど女の御身なれば御かりの御供もせられ給はず朝がりばかりたに還御の待久しからむに夕がりまでをかけておはしまさばいかにけふをくらさむともはら父　帝をしたひたまふ御心よりいかではやくかへらせ給へと申し給ひし也されどはやくかへらせたまへとはおほせらるべき事にあらざるがゆゑにたゞ御弭音の耳だつよしによみなし給へるまことにめでたしともあはれともいはゞなか〳〵な

るべし大かた父母をしたふは子の常なれば直言すともいかゞあらむと思ふは凡情也子としてはあはれなる事なれど直にいへば必御心に入るまじきが故にかく思はぬ方に詞をつけてあはれと察したまはむ事をまつこれわが御國ぶり也この御歌御詞のつけざまごとに及がたき境なり學者よく〳〵氏妙處をしるべし

反歌

かへし歌は長歌にあかねばさらにかへしてよむ也されば長歌の心をふたゝびもよみ又長歌にのこれる事をもよむさま〴〵なり

玉刻春。内乃大野尒。馬數而。朝布麻須等六。其草深野

〔言〕玉刻春は玉は魂なりきはるはきはまるにて人うまるゝよりながらふる涯をかけて内の冠とす後人命の令終る極をいふと心うるは非なり此集卷五に靈剋内限者平氣久云々といふ歌の憶良朝臣が自序に膽浮洲人壽百二十歲謹案此數非必不レ得レ過レ此云々とはるかに百二十歲を生涯とするを思ふべしことといみせぬかみつ世ながらさるいましき事ならば人名のうへにも冠らせたまはじと眞淵はいへり（玉きはるうちのあそこれ也その外いのちいく世世などつゞけたり）○内乃大野尒この尒もじを思ふに岡本宮よりは程ある所なるべし近き所ならばとおぼす御心しるし○馬數而從者と御馬をならべたまひて也

數は心えてかゝれたる也鳥しゝをふみおこすに馬多ければ鳥しゝも多かるべきをおぼす也○朝布麻須等六此集卷六に朝獵尓（アサガリニ）十六（シヽ）履起之（フミオコシ）夕狩尓（ユフガリニ）十里（トリ）蹋立（フミタテ）馬並而（ウマナベテ）御獵曾（ミカリゾ）立爲（タヽス）長歌上下畧鳥しゝなどの草にかくれふせるをふみおこしふみたつるを云夕かりまでもおはすらむ事は今はかりがたければ朝ふますらむとはおほせられし也鳥しゝなど多からば必夕獵までもおはさむかとおぼす御心こもれり長歌にてらしてみるべし須（ス）はせらるゝの心なり等六（ラム）はこれを中のらむと云うちあひなくて詞の中におくなりその事たしかならぬ時にいふ也○共草深野共とは人のしれるものをそのまゝにさす詞也されば上なる内野即その野をさす也とのさとし也草深野は古点くさふけ野とよめれど衣締へかよはす義こゝにかなはねば草ふかぬとよむべし草深く生たる野といふ也集中に草深ゆりありこれも同じ此四の御句にてありぬべきにこの一句を添られたるは草深き野は鳥しゝなどもいと多くかくれたるべければけふの御かり御獲物おほくて御興尽ざるべしとおぼす御心より添たまへる也さらでもけふ御かたはらをはなれゐたまふがわびしきに御興盡ざらばいかに還御も遲からむ夕かりまでも必おはすべしとその待どほさを侘たまへるなり

靈長歌には御供もせられ給はでけふ一日御かたはらにも侍りたまはぬわびしさをよませ給ひ此反歌には還御遲からむ事を申したまへる也されどとくかへらせ給はむ事をそゝのかしたまへる

は同じ心なりしかるに御みづからこそさやうにはおぼせ　帝は御かりの輿もふかくおはしまさむにとくかへらせたまへなどあらはにはいふべからねば草ふかくて鳥しゝなど多く御輿いかにますらむとたゞ御かりばのさまをおぼしやりたるばかりのやうにも又草ふかくて御輿惱ざるべきをうらみたまへるやうにもよみふせ給へる御心のうちおしはかられてあはれ限なしこれひとへに御詞のつけざまの妙なりかしすべて上古の人の詞のことにめでたきはかくいづれともいひかためられずしてさまぐ\にみゆるこれ詞を用ふるいたりなる也

幸ニ讃岐國安益郡ニ之時軍王見レ山作歌

舒明天皇の御紀に十一年十二月伊豫の湯宮に幸して明年四月還ましゝ事ありその春ついでに讃岐におはしゝなるべし軍王とは供奉の軍をつかさどる人なるべし姓名しられず

霞立。長春日乃。晩家流。和豆肝之良受。村肝乃。心乎痛。奴要子鳥。卜歎居者。珠手次。懸乃宜久。遠神。吾大王乃。行幸能。山越風乃。獨座。吾衣手尒。朝夕尒。還比奴禮婆。丈夫登。念有我母。草枕。客之有者。思遣。鶴寸乎白土。網能浦之。海處女等之。燒鹽乃。念曾所燒。吾下情

[言]霞立は春日のさまを云これは冠詞にはあらねどかゝるたくひ多しかはづなく井手千どりなく佐保などこの類也されど心得は冠詞に同じく必いふべき事あるにかへたる物也と心うべき也かふるは人の心にさはれば也こゝは行幸をうらむやうになれば也これ冠詞の心得なりこれはかくかすめる春の長日は心もうきたつならひなるにとの心にかへたるなり○長春日乃日のうちたに長きに夜へさへかけて物思ふを云これ晩家流和豆肝之良受といへる心也和豆支はわきづきなりたづきはつきといふにたをそへたるなり此詞も似たれどこれは分別の事なるべし○村肝乃心のむら肝古説區々なれど心よからず今按群がりのがりをつゞむればぎとなれば群がり物といふにや心とつゞけたるはこゝだといふ心につゞけたるにて群がり物多きとの心なるべし肝むかふ心とつゞけるもあれば猶その類にやともおぼゆれどそれはことにや心うべき乎は義のうちあひにて義は牟のかよひたる也牟はかるといふ心なる事かなしむあはれむなどに思ふべしされば義は以締の音なればがりの心にて心を痛がりの心なりこの故に義は乎をうちあはせたるが多き也亡父成章乎を賀とし義をサニと譯したるはこの義を心えてあてたる也わがせしがごとうるはしみせよと伊勢物語によめる義をも思ふべし痛しとは里言にヒドイキツイなどいふ義にて心の堪がたき也これ即郷思ゆゑの事なれど何の故ともいはぬ古言のさま思ふべし○奴要子鳥和名抄云唐

韻ニ云鶚音奎漢語抄ニ云沼江恠鳥也とみゆ鵺がなくねは恨みなくが如くなればつゞけたりと眞淵はいへりこの集卷十七に宇良奈氣之都追（ウラナゲシツツ）とよめればこゝの卜歎もうらなげをればとよむべししのびになげくをたとへていふ也これ供奉なれば也はゞかりたるさまをいふ也うらはすべてうらがなしうらごひしなどいづれもそのわざを表にいでぬ事をいへり○珠手次懸の冠なり懸のよろしくとは双方をかけていふによろしきなり宜しとは里言にチョウドヨイといふ心にて後世よき事をいふはたがへり源氏物語によろしきことにだにかゝるわかれのかなしからぬはなきをましてあはれにいふかひなしとあるは常人のうへにだにといふを倒語にかける也あまり種姓たかきはなか／＼まじらひもせばき物なれば也宜久の久（ク）は支（キ）とあるべきやうにおぼゆれどよろしくましますわが大君といふ心に久（ク）とはいふ也宇縮の義をあきらめなば久（ク）といふべき理は思ひしらるべしさて村肝乃奴要子鳥珠手次のみつを置たる心は村肝乃奴要子鳥のふたつは供奉といひ軍王なればめゝしからじと鄉思をあらはにも歎かれぬよしを思はせむとてかへたる也珠手次は　天皇の御德をつばらにたゝへまほしけれど諂がましければかへたる也○遠神この遠は人倫に遠きをあがめいふといふ說はうけがたし遠つおやなどいふ心にて　みかとの遠つ御祖神たちをいふ也その神たちの妙用と今の　帝の妙用をかくるによろしくますをいふ也さればこの行幸の供奉も

勞をわすれてつかふまつるよしを思はせむがため也これ此鄕思はいさゝかもおこるまじき所以をしめす也かゝる心なくては無益の語なるを思ふべし○吾大王乃これまた山越風乃云々といひて事たりぬべきをかくこと〴〵しくいへるは私の旅ならば鄕思にたへずはやがても歸るべきにさはせられぬ所以をおもはせたる也山越風は古訓やまごしの風とよめれどももじの數もあまりかつ山こす風ともいふべければしかよむべし山越としもいふはことに身に寒さをさとす也供奉數月に及びて鄕思しきりなるを此山越風のこれまでのつゝしみをやぶらすべきが恨めしきやうによめる也されど鄕思のすぢをもうらめしともいはでたゞ山かぜの衣手にかへらふとばかりよめる妙也古人の詞のつけざまこれにてもおもふべしこれを思へば春もいまだ初春なりけるにや二月も猶寒き年多ければ二月にやこの乃もじ心をつくべし此山風しもわがつゝしみを破らするやうに置たる脚結也しかれども情はこの山風のわざにはあらで月比旅にあるより鄕思しのびがたきを山風のわざのやうになしたるのもじにてこれ氏一首の手段の本也○獨座妹とふたり寐ばかゝる餘寒の風も寒からじと思ふよりいへるなれどたゞひとりをるとのみいひて妹などもいはぬいとめでたし○朝夕尒これをあさよひにとのみ眞淵一派はよめどそれは假名書の例もあるによりたるながらあさよひは日の始夜の始をもて終日終夜の事をいふべき時こそあれ一日の始終を

いはゝあさゆふともいふべき也あさゆふといぶ(ママ)は一日の始終をつくして夜をおもはする也とするべし〇還比奴禮婆らふはるの約といふ説は詞に乖也るはる也らふはらふ也上の乃良倍の良倍に同じ詞なれどこれは花散相(ハナチラフ)天霧相(アマギラフ)などいふにおなじくかへりあふをつゞめたる也頻に吹かへるさま也ひとたび吹かへるたに堪がたきにとの心をもちていふ也今は家にかへらまほしくおもひをるに風の吹かへらへばかけのよろしくとはいへる也といふ説理なしこれを歸るによせたりとみるは後世心なりことにかけのよろしくといふをこゝにかけてみたるはいかなる誤ぞやすべて古歌古文を後世のいやしき詞づくりのならひにみまじき也先學者の注をり〳〵弖弊みゆ奴(ヌ)もじは一たび二たびふく程は堪てもゐし事を思はせむがため也〇丈夫登めゝしき事を思はせたる也われとわがうへを引揚てさてつよくおとす爲也これにかぎらず集中多き詞也古人詞のつけやうの精しき事おもふべしこれを抑揚の法といふこの人軍王なればいよ〳〵めでたしおもへるとは後をかけて丈夫と思ひしを云也今そのたがふが故也おもひしとよむにはいたくたがへりよく思ふべしこれ衣緒へかよはす義也母(モ)は丈夫と思はぬ人に我をもてよせていふ也されば丈夫ともおもはぬ人ならばさもあるべきにといふべきを母(モ)にてはぶけるなり〇草枕たびには枕なければ草をむすびて枕とすれば旅の冠とする也これは旅は物わびしく不自由の事ども多かるよしを弖

冠にかへたるなり之もじはこの一すぢをたてゝおもく思はせむがため也よにこれを助字といふ例の僻なりこの之もじあるすぢは一首のむねとなるすぢなるをや○思遣後世は想像の事にいへど古はたゞ遣悶の心にのみいへり此郷思をはるけやる心也これまた思ひやるとのみいひて郷思をあらはにいはぬ哀なり○鶴寸乎白土たづきのたは添へたるにてつきもしらぬといふ也たはたよりたやすくなどのたなりいづれのすぢにつかば思ひやられむともしられぬを云鶴はたづの假名也寸は一寸二寸をひときふたきといへば也今馬のたけをいふにのみ此名のこれり白土は里言にシラヌノデといふ心也中昔よりはいはぬ詞となれり上古の詞はすなほにて後世は詞もひらけたりと思ふはくはしくしらぬ也かゝる詞の後世絶たるはいと不自由の事也かくいはでかなはぬ所多きものなるをや尓は奴のかよへる也されどやがて奴の義とする説は僻なり伊綿にかよはせたるはヌノデといふ心にせむがため也土はつちの古名也乎もじの義は思ひはるけむたづきはしらるべきにそのたづきたにしられぬをいふすべて乎は必しかあるべき事をしかするをいふ脚結也○綱能浦之古訓あみのうらとよめるは誤なりつのゝ浦なり綱はつななるをのにかよはせたる也神祇式に讃岐國綱丁和名抄云同國鵜足郡津野郷ありこれ也古訓は綱の字にあやまれるなるべしこゝはよせなれど即その國の所の名を用ひたる也燒塩乃の乃もじは丿如クといふ心なりよせ

も猶冠詞の長きにて心得は同じかくよめるは鄕思しきりなれど歸る事もかなはず供奉といひ軍王なればほにいでゝたに歎かれぬくるしさをいふべきにはゞかりてかへたる也○念曾所燒おもひのやくるといふにはあらず思ひやくるといふ間に曾もじのくはゝりたる也下に吾下情とあるに思ふべしわが下情のおもひやくる也思ひやくるとはおもひいられてこがるゝが如きを云古今集にむねはしり火に心やけをりなどよめるに同じ曾もじ此一首の眼なり供奉といひ丈夫といひかく思ひやくる事いとも〳〵すぢなき事よとの心をいふ也そふまじきすぢへそふ歎也よに治定の詞などいふは羸也○吾下情しづえしづ鞍などの例にてしつ心とよむべししたの心ともいへば古点の如くした心ともいふべくはあれど後世もおもひわづらふしづ心かなともよめるをやしづ心を後世鎮心の義としてしづ心なきなどよむは中昔よりの事也こゝはうはべはしひてますらをづくりてをるをおもはするなり

□この歌もはら客中數月に及びて鄕思たへがたきをよめるなりしかるに行幸の供奉をいとふにおちむ事をおそりてたゞ山風のさむさにそゝのかされたるやうに詞をつけもとわが心から思ひやくるをおもひかけぬ鄕思のせらるゝやうによみふせたる哀也家の戀しさをあくまでいはまほしけれど直にいへば供奉の身にそむくが故に山風のさむきよりわがつゝしみをやぶれるを歎き

たる歌としたるその心のうちのくるしさおしはからるかしされぱいふべからずとしりていはでやまるゝばかりの情は歌になるべき物にあらずとしるべき也大かた歌はすべて人にむかはずしてよむものにあらざる事もと言語にひとしければ也（この事大むねにくはしくいへり）この故に此歌もひとり言にはあらで家人に贈れるなるべし

反歌

山越乃。風乎時自見。寐夜不落。家在妹乎。懸而小竹櫃

〔言〕山越の風長歌に同じかく乎見とよめるは長歌にいへるが如く山かぜの所為になさむがため也○寐夜不落とは連夜なり一夜だに間もあるべきにとの心なり○家在妹乎この乎もじの心はたま〳〵はしのぶとも連夜しのぶべき事ならざる妹をとの心なり懸而とはすべてかくまじき理なる物をかくるをいふ也上のかけのよろしくもこの義也供奉を大切に思ふ心一途たるべきわが心に妹をかくるが故にいふ也こゝろにかけ詞にかくるをいふ也こゝは心にかくる也しぬぶとは慕ふ也堪忍をもしぬぶと云しぬぶといふ詞の本は堪忍の事にてこひしきをも堪忍べばなり堪忍ぶをもてしたふをおもはする詞也わが御國言にはかうやうなるが多し津もじはつくまじき所へつく

をいふ脚結なりされば供奉をこそ片時もわするまじけれ家なる妹を連夜しぬぶべき事かはとみづから歎きたる心也乎といひ懸而といふに應ずるをおもふべし

靈この反歌は長歌には朝夕とありて夜の事なければ也されとも歌は猶長歌に同じく月比の鄕思を山風におほせ妹をしぬふをさるまじき事にみづからもどきたるによみふせたる事津もじにしるべし古注みなたゞぬる夜おちず妹をしぬぶといふ心とのみ思ひしは脚結にくらきがゆゑ也長歌この反歌言々句々行幸の供奉を一途に大切におもへる詞づくり也めをとゞめてみるべしされば供奉の心のうすくなるがなげかしき事をひたぶるによみふせたる物也しかはゞかる事つよきが故に心くるしさます〳〵つよき也けりこれ歌の本然言靈のさきはひ給ふ所以ぞかし家人この歌をみはいかばかりうれしともあはれともおもひけむかし

右撿日本書紀無幸於讃岐國亦軍王未詳也但山上憶良大夫類聚歌林曰天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午幸于伊豫温湯宮云々一書云(伊与ノ風土記也)是時宮前在二樹木此之二樹斑鳩此米二鳥大集時勅多掛稻穗而養之乃歌云々若疑此便幸之歟

これ家持卿の考とも思へど仙覺が考なるべし

明日香川原宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇

齊明天皇也この　天皇ふたゝび即位まして飛鳥板蓋宮にましきその年其宮燒しかば飛鳥の川原宮へ俄にうつり給ひ明年冬また岡本に宮造りてうつりましぬされば川原宮にはしばらくまし〳〵ける也

額田王歌　未詳

未詳二字は後人の所爲なるべしこれは傳を詳にせずといふにや　天智天皇も幸し給ひ　天武天皇の夫人と成給ひし人也

金野乃。美草苅葺。屋杼禮里之。兎道乃宮子能。借五百磯所念

〔言〕美草は何とは定がたし秋野におふるめでたき草也貞觀儀式に以二美草一餝レ之とあるによりて一種の草の名ならむとて宣長をばなとよみしは一概なりこれも美草の字の心もてかける事明らかなりされど元暦本にはをばなとよめるよしいへりさもあれこれもたのむべきにあらず苅葺は草をかりて屋にふく也○屋杼礼里之兎道に旅やどりしたまひし事を云礼里之の礼は衣縫の義必用なれば也諸注屋どりしといふ心にみたるは例の僻なりこれはそのやどりての末に心ある事を

しめす爲なりくはしくは靈をとけるにしるべし中昔に心しれらむ人にみせばやとよめるも心しりてのうへの人といふ也しるらむといふ時は今心をしらむ人といふ義となるその別おもふべし古人詞の精微なる事かくのごとし○兎道乃宮子能これは山城國の兎道なり大和國より近江に行幸し給ひし時の路次なればこゝに一夜とまらせ給ひしなるべしたゞ一夜にても　天皇の大まし〳〵し處は都といふべし此時の行宮必しも秋の野の美草をふかれしにもあらざるべけれどその事ぞきたりし風情のわすられぬを表としてよませ給ひしなるべし○借五百磯所念五百は廬の假名也磯(シ)は脚結也この磯(シ)もじの義まへにいへり先注者からやうの脚結をくはしくたゞねざるが故に古人のかく心しておかれたるも徒に見すくす事となりぬるはあさましき事也ことに此歌などは此句九言なればもとより無益のやすめ字ならばいかでかあながちにおかるべきこれは此かり廬をば一首のむねとするすぢなる事をさとさむがため也古今集春下春雨のふるは涙かさくら花ちるをゝしまぬ人しなければといふ歌世中に花のちるをゝしまぬ人とてはなき事を一首のむねとするよしをば志(シ)もじに思はせたる也もと春雨を涙かといふ事理もなき事なれどちるをゝしまぬ人よになきすぢたしかなる時は理なきも理ありてみゆれば也かく此かり廬をしもむねとし給ふは情こゝにあるがゆゑなり（この情は下にみるべし）所念はおもはるといふ也古言には留(ル)を由(ユ)といひ礼(レ)を衣(エ)と

いへりこれ忘れがたき心なり

〔靈〕この御歌うはべはたゞその行宮の美草かりふき事ぞきたりしさまの所がらなか〳〵やうかはりておかしかりしかば忘られがたきよしによみふせ給へる也やごとなき御身にはかく事ぞきたる事は御心につくならひとはいへども大旨にいへるが如くたゞ此行宮のわすられがたきまでの事ならば御歌によみ出させ給ふべきばかりの御歎ともおぼえぬ事也此女王もと　天智天皇　天武天皇の御思ひ人なればもし此行幸の時この　二帝のうち御從駕せさせ給ひともに御やどりまして此夜あひそめましゝ事をおもひ給へるにやそのをりの忘られぬよしをよみて人はわするゝやを試みたまひしか又はつれなかりしをうらみ給へるなるべし行幸の御供にてさるたわれ事あるまじき事なればはゞかりて倒語したまひしにこそ又は餘人にやさだかにしられぬは倒語の所以ぞかし礼里之の礼もじかり盧しの志もじこの情にてらして思ふべし御詞のつけざまめでたしともよのつねなりや

右撿山上憶良大夫類聚歌林曰一書戊申年幸比良宮大御歌但紀曰五年春正月己卯朔辛巳天皇至紀温湯三月戊寅朔天皇幸吉野宮而肆宴焉庚辰天皇幸近江之平浦

天皇御製とあるはまことにや秋の野の云々とよませ給ふをおもへば紀に三月とあるは誤にてか
の川原宮の二年の秋に幸しつらむとおぼゆ紀は誤すくなからねば此集信ずべきよし万葉考別記
眞淵にみゆ

後岡本宮御宇天皇代

額田王歌

熟田津尒。船乘世武登。月待者。潮毛可奈比沼。今者許藝乞菜

〔言〕熟田津は伊与國なり日本紀に七年正月外蕃の乱をしづめたまはむために筑紫に幸して此湯宮にとまり給ひし事あり筑紫におはします時の事也この左注の類聚歌林にも庚戌御船泊于伊与熟田津行宮云々とあり○船乘世武登御舟にのり給はむとての心也登は亡父脚結抄にいつゝのとといへり（と思ふといふときくとみるとするの心を登とばかりよむ也）このと思ひての義也○月待者海路くらくてはたづきなければ月いでゝとて御舟とゞめさせ給ふ間を云これまことは潮まちし給ひしなるべきを月を主として潮はかへりてかたはらのやうにいふこれ古人倒語のつねなり實は潮待し給ひしならむと思はせむの詞づくりぞかし○潮毛可奈比沼月いづる時は潮みつる物なれば也この毛もじわざと潮をかた

はらとし給へる也上にいへる心思ふべしかなふとは御舟漕むにかなふを云しかもいはでたゞかなふとばかりあるは上の句〻のうちに明らかなれば也古人詞に力ある事をみつべし詞の力のなきといふはいはでもしるき事までをいふを云よく〳〵おもふべし沼(ヌ)もじは潮のいまださしこぬ間よりかけておかせ給へる也里言にトウ〳〵ガウナツタといふ心也此下に情をとけるをてらして思ひあはすべしこれ次の今者といふ詞の出る所以なり○今者この詞まち〳〵てその時をまち得たるにもいひ或はねがはしからぬ時いたりてやむ事をえぬにもいふこゝはふたしへにみゆかくふたしへにみゆるが詞のいたり也こゝの意は下に情をとくを見てしるべし○許藝乞菜古訓これをこぎこなとよめれどこゝろえがたし或説に乞は弖(テ)の誤にて氐奈(テナ)ならむ氐奈(テナ)は氐牟(テム)なりといへりおのれもこの次下の歌に手名とかゝれたれば乞は手の誤かと思へり又思ふに乞は以傳(イデ)といふ挿頭につねに用ひられたる字なれば出(イデ)の假名にやとおぼゆ此菜(ナ)は古言牟(ム)を菜(ナ)といふといふ説例の痛也上古に牟(ム)なくはこそあらめ牟菜(ムナ)ともにあれば必異なる事明らかなるをや牟菜(ムナ)の牟(ム)をはぶきたるにてこゝは漕出牟菜(コギイデムナ)の心なり菜(ナ)は詠のなにてわが所思を人によく聞とゞめさせむとすれど難き歎也そのかたきをなげくは即人によくきゝとゞめさせむがため也後世忘れじな又かはらじなとよむ奈(ナ)に同じされば牟(ム)とよむ心を人によく聞とゞめさせむの心也みづから用ひこゝろめば牟(ム)とばかりよむべき歌奈(ナ)とよむべき歌お

のづからある事しらるべき也後世奈はよめど此用ひかたは絶たり
歡うはべは海路くらければ月まちてとおぼしけるに月のみならず潮もみちて御舟漕出むによろしき時となりぬれば今は漕出むと月いで潮かなへるをよろこび給へる心をよみふせたまへりしかるにさやうのはかなき事を古人は歌によむものにあらずつら〳〵思ふにもと外蕃の乱のために筌紫におはす路なればつねの行幸のやうに一所に時をうつしたまはむ事あるまじき事也されば片時もはやくかの乱をしづめてその國人を安からしめまほしけれど潮干たればやむことをえず時をまち給ひしその程いたく御心いられ給ひし事を思はせてよみ給ひしなるべしふかくかの乱をなげきおぼしめすかたじけなき御心なれどあらはなれば　天皇に對し奉りてもなめげに中ゝさかしらに聞ゆべければかく詞をつけ給へる也外蕃のためにわが御國の兵を役せむ事を國のため歎かしくおぼすかたじけなさを人より思はせむの倒語なり後に夫人とならせ給ひしもうべなるかな（この左注の如く御製ならば子細なしされどたとひ天皇とてもあらはなれば猶さかしら也左注の文によれば御製も信じがたしこの故にかくはいふなり）されどたゞなに事もなき御詞づくりまことに妙處を得たまへり今者といふ詞の義こゝはまちえ給へる也その外尓登者毛沼（ニトハモヌ）若菜のなゝつの脚結うはべはたゞ待よろこびたまへるさま何の故ともみえずして情はもはら亂をなげき給ふ言靈にてりたる妙よく〳〵思ふべし左注によらば又言靈かはるべしその事下にい

ふべし

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午天皇大后幸于伊与湯宮後岡本馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮天皇御覽昔日猶存之物當時忽起感愛之情所以因製歌詠爲之哀傷也即此歌者天皇御製焉但額田王歌者別有四首

此左注の事眞淵が万葉考別記に　舒明天皇の御紀に九年此幸なしとてさま〳〵論らへり岡本天皇とあるも時代たがひかつ天皇御覽以下の文は歌の意を心得ぬものゝかけるにて誤れり別有四首といふも何の書ともいぶかしなどいひて大かた類聚歌林は憶良の名をかりたる僞書とおぼえてうけがたき事多しなどいへり（以上眞淵が説なり）今倒語の法ならびに脚結の古例をもて推すにもと此行幸は　舒明天皇の御紀を考ふるに百濟の福信が援兵を乞ひ奉りければ百濟の爲に新羅を伐むとおぼしめしての幸なり予は此心を得て尺したる也されば天皇御覽以下の文心えがたくはあれどひたふるに誤也とも定めがたきはその時かゝる事ありけむもはかりがたしもし此説によらば言靈

又かはるべしこれに從ひていはゞ昔日猶存之物とは紀にもなければ誤の如くなれど即位以前こゝにおはしましゝ事なしとも定がたければその時御覽じける物の存せるをみそなはして存せざる物をかなしみてよませ給ひし歎しからばこゝを漕出たまはむ事をゝしくおぼしめすに御詞をつけさせ給へる也かくみれば今者の詞はかの援兵のためにおはすなれば潮もかなへるに御舟もとゞめがたければやむ事なき方となる也これは御製とし氏王の歌別有四首といふ事いぶかしくはあれどうつたへにもいひ難くこそ

幸于紀温泉之時額田王作歌

この行幸は　斉明天皇の御紀四年十月なり

莫囂圓隣之。大相七兄爪謁氣。吾瀨子之(ワガセコガ)。射立爲兼(イタヽセリケム)。五可新何本(イツカシガモト)

此上の二句は此集中の難義なり古点ゆふづきのあふぎてとひしとあり氏もじどもをいかでかくよみけむともしられず大かた一首の上もときがたし東麻呂はきのくにの山こえてゆけわがせこがいたゝせりけむいつがしがもとゝよみき三四五の句はしかるべし一二の訓はなほ心よからざるがうへに下にも應ぜず又あづまなる春海は山みつゝゆけとよめりこれも下にうちあはずいづ

れも〳〵心よからねばしばらく後考をまつべし此集もと戯れてかゝれたるもじも多くしかのみならず誤もすくなからねばかうやうの歌これにかぎらず多ししひたる考をして人をあやまらむよりはのぞきおくにしかざるべしたとひかうやうの歌此集中二十首三十首のぞきおきたりとも倒語をまねぶには事たりたる事なるべし世に万葉集をみる事たゞこのうはべをのみ見しるに過ず大旨にいへるが如くもと万葉集をみむは上古の人の詞のつけ所ならびに詞の用ひざまをしるを要とすべければたゞ四五巻を會得すとも伶俐の人は歌道の本意はさとらるべしまして二三十首をのぞくをや猶さるべき考もいでこば今かきくはへてむ

中皇女命往于紀伊温泉之時御歌

君之齒母(キミガヨモ)。吾代毛所知武(ワガヨモシラム)。磐代乃(イハシロノ)。岡之草根乎(ヲカノクサネヲ)。去來結手名(イザムスビテナ)

〔言〕君之齒母齒代ふたつながらよはひ也君とは供奉の人をさし給へる也後世は臣をさして君といふ事いふまじき事のやうにいへど古はかくの如しもと此稱君公などの字をあてたれどわが御國にていふは神典に（古事記上巻）伊邪那岐(イザナギノ)神伊邪那美(イザナミノ)神をはじめ奉り沫那藝(アハナギ)沫那美(アハナミ)頰那藝(ツラナギ)頰那美(ツラナミノ)神あり祝詞に神漏岐(カミロギ)神漏美(カミロミ)とあるなど皆父母の如き徳をたゝへていふ也（から國にて豈弟君子民之父母といふにはことなりくはしくは古事記燈にみる）

しべ母ふたつおくは主たる物を思はする例なる事上にいへるが如しさればこれも磐は無窮をしれるを主とたてゝ此二物をよせたる也○所知武印本この武哉とありてしれやとよめれど下のうちあひしかるべからねば哉は武のあやまりとみてしらむとよめるこれに從ふべしされば君がよもわがよもしらむ磐とつゞけて心うべししらむは此後君が齡をもわが齡をもしりて磐のおのれとゝもにときはにあらせむとの心なり○磐代乃いはしろの岡は紀伊國日髙郡なり之もじは異處にことなる所以をさとす也此磐代といふ名によりていとめでたき處なるをえらび給へる也○草根乎草根とはたゞ草の事也月夜とよめるはたゞ月の事なるに同じ後世心にてはあやしく聞なさるべけれど倒語はわが御國言の大事にしてこゝをいはむにはかしこをいふが常なればぞかし後世にてもたゞ草を草葉ともいふが如し乎(ヲ)は皆人はこゝにむすばむともおもひをらぬ草をとの心なりもと此御歌こゝにやどり給はむ事を皆人にすゝめ給ふ御歌なればかく乎(ヲ)もじをおかせたまへる也くはしくは下に情をとけるにてらしてしるべし○去來はさそふ詞なり結とは草をむすびて枕とするを云むすぶとばかりいひて草枕の事とするこれ古言のみやび也これをいはしろの名によりてその岡の草をむすびて齡を契る也といふ説ありこれは有馬皇子の此磐代にて松をむすばせ給ひしに思ひよせたりとおぼゆ後世人はたゞ詞のうへばかりをたのみて倒語をしらぬ僻案ぞ

かし松を結ぶにことなる事はこの次の御歌これと連續の歌にて借廬作良須云〻とあればこれも旅やどりの事をよませ給へるなる事必せりさればこれ草枕の事に疑なし手名は氐牟奈の義なる事まへにいへるがごとし大かた氐もじに絓たる脚結は氐もじの下におくべき詞をはぶく例也歌によりてそのはぶく詞はさま〴〵なるべしこれはむすびて寐むなのはぶかりたる也いかで皆人を同意させむとて名はおかれたるなりかく必はぶくはもと氐もじの義にそのはぶくべき用はもたる物なれば也氐もじの義ぐはしくは下の藤原宮役民の長歌のうちにいふべし

〔靈〕この御歌表は君がよはひもわが齡もしらむ磐代の岡なれば此岡の草をいざむすびて寐むと御供の人〻とゝもにもはら長壽を欲し給ふ心に御詞をつけられたる也しかれどもかゝるはかなき心歌となるべきにあらねば今思ふにけふの路程に御供の人〻いたく勞れたるらむといとをしみ給ひてこよひはこゝにやどりて人〻の勞をやすめしめむとの御心なるべくおぼゆしかれどもそれをあらはにおほせらるればさかしらなればその天津罪をおそり給ひて長壽を欲するによみふせたまへる也こゝにしもやどらむとおほせられたるにいまだやどり給ふべき時刻にあらざりけるもしるしかく御供の人〻をあはれみたまふ言靈なるべくおぼゆるは此次の御歌かり廬つくらすかやなくはとあるはつかれたるうへにかやをもとむるに勞せむ事をいたはりたまひてよませ

給ひしなるべければそれにてらしてかくはいふ也としるべしまへに　父帝をしたはせ給ひし御歌いめでたきも此御歌どもの人々をあはれみおぼしめすも國母となり給ふべきしるしにこそといとかしこくもかたじけなくもあるかな御供の人々いかばかりなみだもさしぐまれけむとおしはからる

吾勢子波。借廬作良須。草無者。小松下乃。草乎苅核

〔吾勢子波わがせこは男をしたしみてさす稱なる事まへの　雄畧天皇の御製にいへるがごとしこれは御供の男がたをさし給へるなり波はすべてものゝ目だつをなげく脚結也後世ならばこそはよとよむべき所なりかうやうの所に波を用ひられたる歌多し目だつ物にするにて即その物を的とする心となる也この例中昔にもみゆ目だつとは御供の男方のことに其勞目だつなり前にいふがごとく此御歌は上と連續の歌なり〇借廬作良須草無者借廬は旅やどり也まへに兎道乃宮子能借五百とありしに同じ作良須須は前にいふが如く作らせらるゝといふほどの心なり草は可也とよむべし屋にふく名也神典に古事記上巻以鵜羽為葺草造産殿とあるに思ふべし今かやと名したる草あり屋にふくによろしければいひなりつるなるべし上古はいづれともなくふける事集中にみゆ無者とは草もとむとてこゝかしこたづねありきてもしもとめかねたらばとの心也され

どこれは倒語にてたづねぬさきに勞せぬやうにとておほせられしなりしかれども我より始をおこす事は神典ふかくいさめられたる事なればまづたづねてありかねたらばとはおほせられたる也上古人の詞づくりかくのごとしことにこの皇女御詞づくりにいたく長じ給へりとおぼし○小松下乃この下の草をとしもおほせられしは上の磐代の名によせて長壽を欲し給ひしに同じく小松はおひさきこもれる物なれば此下なるかやをふかばあやかりもせむとてこれをしへ給へる也されど上に草無者とあればさる心にはあらぬやうなれど上に尺せるが如く始より此小松が下のかやをかれとをしへまほしきを我より端を起さじとて草無者とはよませ給ひし也かへす〴〵御詞づくりの至妙思ふべし乎(ヲ)はをのこどもの心もつかざるべきにあたりておかせ給へる也苅核はさは上に名告沙根とありし沙(サ)に同じくからせられねの心なり根もそれに同じく事をへよとの心也これもはらこれにてもとめやめよとの御心なるなり

靈氏御歌表は借廬にふくべき草をもしもとめかねなば小松が下にみゆる草をかれしからば小松にあやかりてともにおひさきも久しからむとこれ又長壽をねがふうへにのみして詞をつけさせ給へるなりかく表をばわざとはかなき事のやうにつくらせ給ひしは情はまへの御歌に連續してけふの行程のつかれのうへに又借廬にふくべきかやもとむるに勞をましてとくもえやすむまじ

きをあはれみ給ひてしばしもとくやすませむとの御心をかくはよませたまひし也かばかりのかたじけなさをいさゝかもさかしだち給はぬ御詞づくりのたぐひなき事をよく〳〵みしりて後世のいやしき詞づくりをかへりみるべし

吾欲之。野島波見世追。底深伎。阿胡根能浦乃。珠曽不拾

或頭云吾欲子島羽見遠

詞この御歌は上二首と連續せるにはあらずみゆ此ついでに此わたりにもおはしてよませ給へるなればひとつにつらねられけるにこそ吾欲之とはかねてみまくほりし給ひしといふ也ほるとは里言にホッスルといふ詞なり之もじはその思ふすぢのかねてたちてあるかたちをさとす脚結也○野島波これは淡路なり波はこゝの他處にすぐれたるを云見世追これしひごとはいかにもいはるべけれど此詞こゝろよからず或頭云とある方穩なるべししひていはゞわが見たまふを人のみするに御詞をつけたまひしは例のわが御國ぶりにや人に行あふを中昔にも伊勢物語にすぎやうざあひたり古今集に女のおほくあへりければなどあるをおもふべしされど追もじの義かなへりともおぼえねばもし世は思志などの誤にて追は遠の誤にやしからば猶或頭のごとくなるべしか

ねてほりし給ひし野嶋はみたまひしをといふにてこゝをたに見たまはゞおぼしのこす事はあるまじきにとの心也或頭云〻の子島は備前なり○底深伎深をきよきとよむ說あり淸の字の誤とみてにや又深の字の心をえてよみたるにや心えがたしこれはしかはよむべからず珠のひろひがたきはもと底深きゆゑなるをや○阿胡根能浦いづこともしられねどこの野嶋又は子嶋のわたりにこそ○珠曾不拾珠は眞珠をも又石にまじれる玉をもいへり曾(ゾ)は珠ひろはざる一すぢのみ不足なるよしを思はせむがため也かねてほりし給ひし野島はみたまひしかば滿足なるべき事なるに猶この浦の底深くて珠のひろはれぬが心ゆかぬよとあく事しらぬ御心をみづからなげき給ひし也曾(ゾ)もじの心もはらこゝにありされどさるふくつけさをなげきたまふ事いさゝかもあらはにはよみ給はずしてたゞ曾(ゾ)に思はせられたる御詞づくりよく味はふべし

〔靈〕表はかねてほりし野島をみたれば滿足たるべきに阿胡根の浦の珠のひろはれぬ事更に不足なる御心のつきたるを歎きまし丶心也かく表には貪(フクツケ)きさまを歎く一すぢによみなし給へれどもさる心歌となるべき物にあらねば思ふに此情はわれこそかねての望を達しぬれ都にとまりてこゝをもみぬ人たちに（これは父帝をおぼしけるにやしたしき人たちをおぼしけるにやはかりがたし）この浦の珠をたにとおもふに底深くてひろはれねばなにの褁もなくてあへなかるべき事をおぼすにておのれのみ心をやりて人のうへをおも

はぬになりぬべきを歎き給へる也これ人になさけなからむ事を歎きたまふなればいとめでたき事がらなるを言づゝしみは無益の事のやうなれどあらはにおほせらるればなか〳〵巧言（ママ）どきこゆべきが故にわが貧（フクツケ）さをなげくに詞をつけたまへる也しかれどもそのふくつけさをなげき給ふをもあらはにはあらでたゞ波（ハ）もじと曾（ソ）もじに思はせられたるいとめでたし詞はすべてかく公私にかたよらざるをいたりとする事かへす〳〵まへにあげつらひおけるをこの御詞づくりどもに信すべし

右檢二山上ノ憶良ノ大夫ノ類聚歌林一ヲ曰天皇御製歌云々

この左注にしたがはゞ舒代の歌吾勢子波の兩首ともに御供の人々の勞をあはれみたまひし大御歌なりとみるべし御製とすればいよ〳〵かたじけなき事なり

萬葉集燈卷之一

萬葉集燈　二

[illegible] 二

萬葉集燈卷之二

平安 富士谷御杖 著

本集一其二

中大兄命 近江宮御宇天皇 三山歌一首

今の本近江宮云々を本行とせるは非なり後人の注せる也三山は香山畝火耳梨なり或説云これは此三山をみましての御歌にあらず仙覺注に播磨風土記云出雲國阿菩大神聞大和國畝火香山耳梨三山相闘以此謌諫山上來之時到此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之故號神集之覆形とあるによりてこの故事を聞まして播磨にてよみ給へるならむ今も神詰といふ所ありといへり反歌の終の御歌を思ふにこれしかなるべしされど此説たゞ詞のうはべにめをかぎりたる説也三山は假物也くはしくは下をみるべし

高山波。雲根火雄男志等。耳梨與。相諍伎。神代從。如此尒有良之。古昔母。然尒有許曾。虚蟬毛。嬬乎相格良思吉

〔言〕高山波これをかぐ山とよむ事高は香の誤かとも思へど高も音は加具とよむべければ暫今本によるべしといふ説ありさまでの穿鑿にも及ふべからず上の　舒明天皇の御製に取よろふ天のかぐ山とよませたまへるが如く加具山は大和國にての高山なればその心をえてかけるにこそこれは雌山にて畝火耳梨は雄山なりかぐ山を女男といふは山神の女男をいふなり末につくば山をやがて神とよみたるを思ふべしされど雄山ふたつが雌山ひとつをあらそふ事實事にあるべき事ともおぼえぬ事也必これ倒語にてその山〻のあたりに住ける男女なるべしあらはにいはれぬよしありて山とせるなるべし波もじをばの心にみよと代匠記にいへりしかれどもをばのをを略したるにはあらずをといふべきを波とはよませ給へる也前にもいへるが如くこの波の用ひ方を後世人はしらず成ぬるが故に契冲たにかくいへり此例上世中昔までは多しこれは歎ずる心に用ふるにて者也とよむ心也者也の也もじのなきなりと心えなば明らかなるべし多かる物の中にて曰だつを歎ずる詞なる也さればこゝもかく山はやとまづはじめに歎き出たるにてかの二雄をあらそはしむる香山を歎じたる也歎ずる中におのづから此香山をばの心はこもる也これ上古波もじの用ひざまなり　允恭天皇の御紀に冬十月新羅弔使等喪禮既闋而還之爰新羅人恒愛京城傍耳成山畝傍山則到琴引坂顧之曰宇泥咩巴椰弥弥巴椰是未習風俗之言語故訛畝傍山謂宇泥(ママ)

咩耳成山謂渺渺耳これにてらして思ふべし○雲根火うねびのをゝしき山とゝいふをかくよみ給へる也後世心にてはをゝしうねびとゝいふべき事に思ふべししかるを上古人かくいふは上にもいひし倒句の法によりて也まづ畝火の名をいふべき法なる也志とのみ志侅といふ心によむ例上古には多し古事記上巻の歌に登富登富斯。故志能久迩迩云〻また佐加志賣久波志賣こい集中にも多し雄男志とは男らしき心也されどこゝはすくよかに無骨なるやうの心によみ給へるなるべし此畝火のみをゝしとおほせられし事この反歌につひに耳梨にあひしとあればもと耳梨はいうにやさしかりし事しるし此故に畝火をのみをゝしとよみ給へるなるべし○耳梨與このふたつの與もじ香山にむかふる也もし畝火と耳梨がふたつあらそふにて香山にあづからずは与ふたつは必おくまじき也○相諍侅あらそふは倒語なり香山にあはむあはじとする事を思はするなり侅とはさきにありしことのさまをかたる脚結也されどたゞ語るにはあらずそのありつる事の今とあたることをかたる詞なりそこをたしかにいひて今のあやぶみを定むるなりさればこゝも今のよに人の孀をあらそふ事今の人のあさましきにもあらずと決し知らせむが爲なりこれ言靈をてらす所以なり○神代從神代といふは大かた上古をひろくさし給へる也即かの播磨風土記にある時をさす也もと神代といふ名予あげつらひありまことの神の代といふにはあらず此事古事記燈

にみるべし如此尓有良之古点かゝるにあらしとよめれど又かくなるらしとよめるもしかるべしいづれにてもありぬべしかゝるとさし給へるは今の人の嬬あらそふ事をさし給へる也今を神代へかへしてよませ給へるにて従とあるは今の濫觴たるよしを述たまへる也尓もじよく思ふべしひとへに今人の嬬あらそふ本をたしかにしたまへる也良之は大かたたしかにはしられねど大抵その事の察ししらるゝよしをいふ脚結也○古昔母古昔とはいにし方といふにて今より以往をひろくさすなり母もじは今世によせむがため也然尓有許曾をしかなれこそとよめるは奈礼の奈は尓安をつゞめたるまでにて古点に同じしひてひきあはせて六言によまむも事このめるやう也かし（ひきあひとは反切の事也）然とはそのやうにの心也上の如此はこのやうにあるといふ也上にはかくといひこゝにはしかといふは上は今世の事をさすが故之こゝは古昔の事をさすが故也としるべし安礼許曾は安礼婆許曾の婆をはぶけるにてかくざまにいふ事古言に多し許曾はまへに尺せるが如しいにしへさる例もなくは今人いかに弁なくとも嬬もあらそはしと今人つまあらそふをあさまじき（ママ）事におもふ人もあるべきをさとし給へる也弖許曾この一首の眼なり○虚蟬毛これは現身の義也音便にて志を勢にかよはせていひなりたる名なりされはかく蟬の字をかりてかける也冠詞に用ふるもこれに同じかく虚蟬とかゝれたるより後世はうつせみとたにいへば蟬退の事なりと心え

なれるは誤也これ現存の身といふ心なり毛はいにしへによせむため也上の古昔母の母もじと來往なり〇嬬乎相格良思吉乎もじはあらそふべからぬ嬬をといふ也許會を尺したるにあはせて思ふべし嬬を人とあらそふ事もとをとなしからぬわざなれば也嬬とは夫よりも婦よりもいふ稱也その例代匠記にくはし相挌は古点あひうつとよめれどうつといふべき事にあらずあらそふとよめるに從ふべし此集卷二に相競卷十に相爭なと相の字にかゝはらずあらそふとよめり又格の字をあらそふとよめるは此集卷十六に有二壯士一共挑三此娘一而損レ生格競とあるこれ也良思吉はもと良思はこの良思伎の伎のはぶかりたる也今里言にラシイといふこれ也　推古天皇の御紀い歌に於朋枳弥能。兎伽破須羅志枳此集卷六に語嗣。偲家良思吉　などみゆ義はまへにいふが如しつまあらそふ今人の心のうちを大抵察してよみ給へる也

【靈】倒語の道をうしなひたる後世人のさがにてたゞめにみゆるうへをのみたのむ世となりぬれば此御歌端作にめを奪はれ上古は表をたてむがためにわざと端作はかける也何のよしにてあそばしつる御歌とも思ひ入るゝ人たえてなしすべてかくれたる所をもとむるはから人のするわざ也といふ說よにひろごりたるはなにのふみにさる徵ありてか信ずらむいと心くるしき事なり此御歌表は播磨におはしましてかの阿菩大神のとまり給ひし處にて三山のあらそひの事をおぼし出られ神代以來さる例ある故に

今人も嬬をあらそふならししかれば今人のさがなきにしもあらずいにしへよりのならひにこそと今まで今人つまあらそふをさがなき事におぼしめせるにその濫觴に御心つきてかねての御疑をとかせ給ひし心にあそばしゝ也しかれどもさるはかなき事を上古人は歌とよむならひにあらねば今思ふに此集中に額田王思二近江天皇一（ノ・ヲ）といふ歌あり（中大兄命は即近江天皇なり）また此巻に額田王の茜指（アカネサス）。武良前野逝（ムラサキノユキ）云々　といふ歌皇太子答御歌とて（天武天皇なり）紫草能介保敝類妹乎（ムラサキノニホヘルイモヲ）云々　と贈答ありこれによるに額田王は　天智天皇の御思ひ人にてつひに天武天皇の夫人となり給ひし也　天智天皇　天武天皇は御はらからにてこの額田王をともによばひたまひし也それをばかの三山のあらそひにおぼしよせられしとぞおぼゆるさればかねて　天武天皇と額田王をいどませ給ひて御兄にさへましませばいたく心くるしくおぼしめしていかでおぼしたえむとおぼせどもあやにくに忘れがたくおぼしなやませ給ひける比播广にてかの三山のあらそひをおぼし出られけるよりこれをもて御詞づくりし給ひたゞ大かた世人のつまあらそふうへによみふせたまひし也この御歌もと額田王におくり給へるにて　天武天皇との御あはひをふかくなげきつかはされしなるべしされどさすがに　天武天皇をおもひたえよともおほせられがたくてたゞ大よそにつけられたる御詞いかに心くるしくおぼしけむと御心のうちおしはかられたてまつるかし

反歌

高山與。耳梨山與。相之時。立見尓來之。伊奈美國波良

〔訓〕本句は女山なる香山つひに耳梨山にあひし時といふ也をゝしき畝火山の言はきかざりし也言靈にひゞく所思ふべし与もじふたつこゝは畝火山をかたはらにもちていふが故に与ふたつおかせ給へる也○立見尓來之阿菩大神の出雲國をたちてといふ也見尓來之とはこの印南より三山のあらそひのみゆるにはあらず大和國にいたりてみむとて來たまひし也それも猶觀むといふ心にはあらず風土記の語のごとく諫むとての心なるなり諫めに來しといふべきをかくみにこしとよむ事わが御國ぶり也この印南までおはしましゝにかの山の諍やみぬときこしめしてこゝにとまりたまひしといふべきをばかくたゞ見尓來之とばかりよみ給へるこれ風土記にそのとまりたまひし事明らかなればことにことわり給はずして人の心にゆづり給ひし御詞づくり也古言の簡古思ふべし立といふ事もと無用の詞のごとくなれどこゝにとまり給ひし事のひゞき也わざ／＼出雲國をたち給ひしもたゞ諍をやめむ爲なるが故にこゝにて安心したまひし心此詞にしるし○伊奈美國波良播磨の印南は郡の名也いにしへ郡をも鄉をも國といへる事つねなり此集に吉野國泊

瀬小國などよめり國ばらはまへの　舒明天皇の御製にあるに同じくひろく平らなるを云大かた國はひろくたひらなるがよき國なればほめて國原とはいふ也この伊奈美の國いかにありともことわり給はずかくよみすてたまひしにて御心のほど森々とその深きかぎりなき也情の公私ふたつ存し言靈のさきはひもはらこゝにある事也是を歌の最上詞づくりのいたりと心うべし上古にはかゝる歌いと多しその所々にいふべし中昔よりはたえてかくよむ事なくなりにきいと後の世となりては情をあらはすまじきが爲にかくよむ事とは弁へずたゞうはべばかりにてやすらに物事のうへをよむをよしとするは此上古のかゝる歌のうはべをみての誤之似たるが如くにして非也たとはゞいける人と木偶のごとし神典古事記上卷　大量之件に死活の論つまびらか也まねびしるべし

靈此御歌表は阿菩大神の三山を諫めむとてわざ〳〵出雲國を立ておはしゝか爰にてその諍やみて香山つひに耳梨山にあひし事をきこしめしてとまらせ給ひし印南國はこゝぞとたゞそのむかしをおぼし出たるばかりのやうに御詞をつけられたる之しかれどももと此事は風土記に審らかなればこと更にかくよみ給ふべしやかゝる事歌によむならひにあらねば今思ふにかの三山の諍もつひに耳梨山にあひしかば阿菩大神もこゝにとまり給ひし今其國におはしましゝにつけてつ

ひに香山を得たりし耳梨山のその時の心いかにうれしく快かりけむとうらやましくおぼす御心なるべしその耳梨山をうらやましくおぼす御心を額田王にはかり給へとの御詞づくり也かし長歌にはおぼし捨られぬ事を歎き此反歌には終に一方にあひぬるをうらやみ給ひしにてともに額田王にひとしへならむ事を思はせむの御心之と心うべし

渡津海乃(ワタツミノ)。豊旗雲尒(トヨハタグモニ)。伊理比沙之(イリヒサシ)。今夜乃月夜(コヨヒノツクヨ)。清明己曾(アキラケクコソ)

開前にいへるが如く此一首は印南にて同時の御歌なるべけれど反歌とはみえずされどくはしく情をたづぬれば猶額田王を忍びたまふにて上とこと筋の御歌にあらず下に尺せるをみてしるべし○渡津海は古事記上卷に綿津見神とかゝれたる海神の御名なり此神海をしらせ給へばやがて海の名としていふ也こゝに海とかゝれたるは見(ミ)の假名也されば後世わたつうみとかくは非なり○豊旗雲尒文德實錄に天安二年六月有二白雲一竟(ワタリテ)レ天自(ヨリ)レ艮至レ坤時人謂二之(ヲ)旗雲(ト)一とあれどこれにかぎらず旗に似てなびく雲をつねにいふ也豊はゆたかなるかたちをいふ也豊秋津洲豊御酒などの類也ゆたかなりとはその物の尽ぬべきうれひなき内のさまの外貌にあらはれたるさまを云なり○伊理比沙之これ今入日のさすをみておほせられたるにはあらず豊旗雲に入日さしてこよひ

の月あきらけくあらむことを未然よりおほせられたる也沙之の之もじの義を思ひて今いふ心をしるべし入日よければ明日必天氣よしと今もいふ也その夜の事いふも更也○今夜乃月夜たゞ月といふを月夜とよめるが集中多しすべてその物にさしつけぬ事わが御國言の常なり一人のをとめをいふにをとめらとよめるを思ふべし○清明已曾古点すみあかくこそとあれどすみあかくといふ詞をさなくて古人のいふべき詞ともおぼえずあきらけくこそとよめるあり紀に清白心をあきらけきこゝろとよめるによれる也これに從ふべし己曾は願の詞なり上古にのみ用ひて中昔よりはたえたる脚結也社の字を已曾に假るも神社には思ふ事をいのりねがふ物なるが故にかりたるにも思ふべしことよひの月明らかにあれとねがひ給ふ也入日の空のさまにその夜の月の明らかならむ事を知る也といふ說あり諸說もしかり前にいひし如くもし入日のさす事現在の事ならば沙之とはおほせらるまじき也しからば必伊理比沙須とぞあらましかの說は已曾はあきらけくこそあらめといはむをはぶける也とみたるなるべしこれはさもみるべけれど上の沙之といふ詞とのうちあひさる例にみるべからざる事よく〳〵思ふべしさればはじめより終まですべて未然をおほせられたるにていり日さしてことよひの月あきらけき事あらかじめしらまほしとの御心なる事明らか也上下の詞一氣律にみるべし詞は大かたいさゝかも係なるべからざる事かくのごとし

詞に疎にして私意をもてとく時は懸隔必あるべしことに古言は詞の條理にくらくしてはとくべからざるもの也思ふにその日はくもりて入日などもみえざりしかばかくはよませ給へるなる事明らか也

〔雅〕この御歌表は空くもりてこよひ月もくらげなればいかてこよひの月あきらけくあれとの御心にて何故にこよひの月あかゝらむをねがひ給ふともしられぬは今夜月あかくは海上のけしきもみむとの御心にや又こよひこゝより御舟にのらせ給ふべければこよひ月あかゝらむをねがひ給へるにや此二說さだめがたきは上古の詞づくりのかたよらざる妙ぞかしされどこれ歌によみたまふべきばかりの情にもあらねば思ふに此御心は初の說の如くならば額田王の戀しさ客中ことになくさめがたきにかく曇りて雨などふらばいとゞしのびかたからむの御歎にや後の說の如くならば京にかへらせ給はむ事遲くなりていよ〳〵戀しさ堪がたからむの御心にやいづれにもあれ旅中のくるしさを額田王に歎きつかはされしなるべししかるをたゞ今夜の月のあかゝらむ事をのみ御詞とし給ひしいかに御心たべ(マヽ)かたくおはしけむとかしこしともかしこしかし

右一首歌今案不レ似二反歌一也但舊本以二此歌一載二於反歌一故今猶載レ此歟亦紀曰天豐財

重日足姫天皇先四年乙巳立爲皇太子

この不似反歌といふは此御詞の表にめをうばゝれし也くはしくまへに論らひおけり元暦本には立の字下爲の字なしとぞ今の本立爲天皇爲皇太子とあるは爲の字のみならず爲天皇の三字衍なるべしこれは天智天皇の御事をいふ也

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

この藤原朝臣は鎌足公なり下の例にては藤原卿とあるべき也又次に近江へうつり給ふ時の歌あればこゝは後岡本宮にての事なれば内臣中臣連鎌足とあるべきをかくかけるは後より崇めてなるべし万葉考別記(眞淵)にくはしく論らはれたり此判の字後世歌合の判のごとく諸人のきそひを判断せしめ給ひしにはあらざるべしたゞ人々をして春秋に心ひくかたをことわらしめ給ひしなるべし是必故ある事なるべし

冬木盛。春去來者。不喧有之。鳥毛來鳴奴。不開有之。花毛佐家禮杼。山乎茂。入而

毛不取。草深。執手母不見。秋山乃。木葉乎見而者。黄葉乎婆。取而曾思奴布。青乎婆。置而曾歎久。曾許之恨之。秋山吾者

[別]冬木盛今木盛を成に誤れり集中冬隠春去來者とかけるに例してこの誤をしるべし冬は萬物蟄して春出れば冠とする也○春去來者古説みな去といふにわびたる説ども也これわが御國言の法にくらければ也春となればその春時々刻々わが眼前を去りゆくが故なり來るを去るといふは事たがひたるやうにおぼゆるは後世心なり人の思慮をまつ事我御國言のかしこき所之神典をまねびてさとるべし○不喧有之冬はなかずさかざりし鳥なき花さくに冬よりまちし心ゆきて春のふかく憐むべきよしを云也佐家礼杼とは例の衣縫にうつせるにて花のさきての末をさす也さけどといふにはたがへり奴もじは冬よりの事をかけていふ也前に尺したる心おもふへし○山乎茂古点しげみとよめれど六言也四言六言にはよめど六言八言によむ事ひきあひには法ある事わが亡父成章はじめていへり委しくは予が随筆にそのさだめを載たるをみるべししげきをしとのみいふ事古くは多しこれは木の繁きを云山に入て花を折とらむとすれど木繁くてとり得がたきを云或説には下の句の例にて取は見の誤にてこれも不見かといへれど入てもとらずとりても見ず

と次序したる詞なるべし○草深この草にむかへて上は木のうへなる事しるべし執手母不見をたをりてもみずとよめる点あり古点とりてもみえずとよめり上の句の取といふより次第したるなればなほ古点しかるべしことにかれは古言ともおぼえぬぞかしみえずはみずと六言によむべしもしみえずならば不所見ともかゝるべきに所の字なきはみずとよめとの事なるべしみえずの心をみずとよむ事古言のみやび也かしからくして折とりたる花も草深くてさだかにみぬといふ也以上まづ春山の秋にもまさりてさま〴〵にあはれなるをいひさて山乎茂以下の四句は春はさばかりあはれなれどその春のあかぬ所をよませたまへる之此以下は秋山の事にうつる也○秋山乃而者といふ脚結心をつくべしこれより外に猶さま〴〵の興ある事を此而者にて思はせたる也脚結の川ひざまの力ある事おもふべし春山の方には氐而者にむかへて毛もじを置て他のくさはひを思はせられたり○黄葉乎婆もみぢをばとある古点用ふべからずもみづとよむべし下の青きといふにむかふれはこゝも用の詞たるべき也もみづはもみいづにて用の詞也もみぢといふは体の詞之紅は袋にいれてもみ出て染ればも也取而曽思奴布とはをりとりても猶あかずして枝なるを忍ふを云そのあかぬがうらめしき也曽もじめをとゞむべし上の春山の四聯は而毛手母とふたつながら毛といひこゝはふたつながら曽とよみ給へる心をこめさせ給へる脚結なる證なり○青乎者

いまだもみだぬを云置而(オキテ)曾(ソ)歎久(ナゲク)とは枝におきてをりもとらぬを云也なげくとはもと長息(ナガイキ)をつゞむればなげき也これを字縮になして現當にいふ詞なり里言にトイキックといふこれ也これはもみだする事の遅きをなげく也以上うらめしきふしをかぞへられたる之()曾許之恨之そことは上の四句をさす也恨之(ウラメシ)とは遺恨遺憾などの心にて滿足になき也宣長は恨は怜の誤にてそこしおもしろしならむといへるに千蔭もしたがひてうら枯るゝ秋は山に入やすければ秋のもみだに心をよするると也と注せし見すくしがたき說なれば今論らふ也此說のおこれる所を思ふに此御歌もと秋山の方をあはれとさだめたまへる事しるきに恨之などはおほせらるまじき事也と心えられけるよりの說なる事疑なしさばかり古を温られける人ゝなれどいまだ古言のもちひざまにおもひいたられざりけるゆゑの說ぞかし大かた古言の用ひざまは後世の詞のつくりざまにはいたくたがへる物之おもしろき事の多かる時その數をつくしてはいはれずいへば中ゝなるべきが故にその多かる中にてうらめしき分を擧ればその餘は悉くおもしろき事明らかなればかくはよませ給へる也すべていふよりはいばぬ(ママ)方おもひやり無量なればおもしろき方のいはれぬのみならずその方を言外とし給へる也おもしろき方を言外とし却てうらめしき方を詞とし給へるは倒語の妙處古人詞のつけざまにすくれたる所以ぞかしかゝる詞のつけざまは詞を用ふる籙にてこそあれ

こゝに心とまらずは古歌古文ともに解すべからずもとよりよろづ御國ぶりにたかふべき事よく〳〵おもふべし古今集にもみちのくはいづくはあれど塩がまの浦こく舟のつなでかなしもとよめるは（これはその世の歌にはあらじふるき歌のすがたなり）塩がまの浦のけしきいづこも〳〵おかしきにその一二をいへばかへりてその餘はおかしからざるが如く聞ゆべきが故に中におかしくもあらぬ舟の綱手をしもかなしといへるにて（かなしは愛のいたりをいふ詞なる事例ひくに及ばず）それたにかなしくは其餘の物いかにかなしき所なるらむと思はれむがための詞づくりにて即こゝの同法也詞を簡にしていふにもいたくまさる法これならず上古は多しかへす〳〵古人詞づくりにおろかならざる事思ふべし後世人は詞の用ひざまをわきまへざれば倒語をみてはめおどろかるゝぞかし〇秋山吾者古点はあきやまぞわれはとよめれど八言なればあき山われはとよむべしこれは倒置の法にて吾者秋山といふ心なるを標実をはかりて倒置したまへる也秋山をば春山よりも吾はあはれと思ふぞとの心なり

靈この御歌表にては春山のかたもおかしくはあれど秋山にはうらめしきふしこそあれよろづのあはれ秋山に深ければ吾は秋山に心ひくぞとよませたまへる也されど春山秋山いづれあはれなりといふばかりの事はこと〳〵しく歌もてことわるべき事がらならねばこれ必故あるべしされば思ふにもと　天皇人々をして春山秋山を競憐ましめ給ひしは實は額田王の　御みづからと

天武天皇いづれにか心ひくぞと試みたまはまほしけれど額田王一人におほせ給はゞ御心みえなるべくもとよりあらはにもこたへ給ふまじき事なるが故に人々に競憐ましめたまひしなるべし額田王もその御心は得たまひながら表をたてゝ歌もてことわり給ひしなるべしされば額田王も御心のひく方あるべけれど　二帝いづれを春いづれを秋と比してかくはよみ給へりけむ　天皇も此御歌をみそなはしゝ御こゝちいかにおはしけむいとみやびやかにめでたき事也かくさだかにしられぬぞ倒語の妙用なる上古人の詞ざま心用ひおもひはかるべし

井戸王下ニ近ノ江國ニ時作ル歌額ノ田王即和スル歌

今の本には額田王下近江國時井戸王即和歌とあり先學者此端作をあやしまざるものなし今思ふに奥の綜麻形乃の歌わがせとあればそれ額田王の和歌にてこの長歌反歌は井戸王の歌にやされば御名を置かへたるにやとてかくかけるなりなほ考ふべし井戸王は額田王のうからなどにや有けむある説に井戸王といふ名も氏もみえねば大海人皇子云々　とあるべしといへれど大海人皇子を井戸王と誤るべくもおぼえず諸王のうちの御子にて物にもれたるもはかりがたし大海人皇子は　天智天皇の皇太子即　天武天皇の御名なり左注の類聚歌林に御覽御歌とあるに　天皇皇太

子の御歌なる事しるしとての說之されど類聚歌林もひたふるにはたのみがたし下近江國とは天智天皇の迁都まし〳〵けるたびの事か又迁都の後にもあるべし和歌と此集にあるはこたへ歌又和せる歌をも云これを大和歌と心えたるはから歌にむかへてこそあれさもなきは此集に和歌とあるを偏にみてあやまり傳へたるなるべし

味酒。三輪乃山。青丹吉。奈良能山乃。山際。伊隱萬代。道隈。伊積流萬代尒。委曲毛。見管行武雄。數〻毛。見放武八萬雄。情無。雲乃隱障倍之也

〔言〕味酒三輪とつゞくるはみわは酒甕の事之此集にも所〻よめり旨き酒をみわにたゝふる心につゞけたる也さればうまさけをともある也古訓あぢさけとあれどうまさけとよむべき事冠辭考眞淵にくはしくみゆうまさけはよき酒を云三輪乃山をといふ心にみるべし○青丹吉眞淵は八百土をならすとかけたるにて与之は脚結之といへり久老は乎はいにしへ歎ずる詞に多く用ふれば阿乎は阿那といふに同じく迩は古事記の阿那迩夜志の迩に同じく与之は夜志と同じといひき飛鳥岡本宮より三輪へ二里ばかり三輪より奈良へ四里餘ありてその間たひらなれば奈良坂こゆる程までは三輪山はみゆるとぞ○山際古点はやまのはにとありしかるを近頃山際とある所みなやまの

まにとよめりされど際は字彙に邊也畔也極也とありて間の義にはあらず此義を思へば猶やまのはにとよむべくや山際の下從の字脱せる欤山のまゆとよむべしといふ說あれど從かなへりともおぼえずかし○伊隱萬代伊は上の中皇女命の御長歌にいへり奈良山にかくれたりしも今は陰となりたるさまをいふ也萬代は何事にもあれ限あるその限よりさきの限にいたれるをいふ脚結也大かたの限にては萬代といふ詮はなき也としるべし三輪山のかくるゝを限とたてゝその限を過て今程とほくなれるにいたれるをいふ也代はダイの音をもて假れる也○道隈隈とはすべて物のかくれになれるを云こゝは道のまがりてこなたよりはみえぬ所をいふ也伊は前に同じ道のまがりいくつもつもりてさきの隈は今の隈の陰になれるを云萬代上におなじ隈ひとつふたつが程を限とたてゝいたくつもれるを萬代とはいふ也或說に積はさかの假名にていさかるまでに也といへる此說みやびてはあれど道の隈のさかるといふ事理なし隈といふ事をばよくも心えずしての說なりかし尒もじ上の伊隱万代をも此尒もじにうけたる也かばかりの處に來たる欤也もはら旧都を心にもちていふ之○委曲毛つばらにはつまびらかにといふほどの心之三輪山をつばらにといふ也毛もじつばらにたにもの心にて言盡にひゞかせたる也くはしくは下に情をとくにてらしてしるべし本意の事はかなはずともせめてといふ心に毛もじはおかれたる之上古にはかくさま

に毛(モ)を用ひたる例多し○數〻毛數〻(シバシバ)はたび〳〵の心也毛(モ)の義上に同じつばらにみる事かなはずともせめての心之これは上の二句を今ひときは切にいふ也上の見管行武雄(ミツヽユカムヲ)はみる〳〵ゆかむと思ふにとの心也見放武八萬雄(ミサケムヤマヲ)は見さくとはさくは放にてみる事の遠ぞくを云みつゝゆくとはまたひときはとほくなれるかたちをいへるにて是又おのづから次序せる詞づくり也雄(ヲ)はふたつながら里言にノニジヤノニなどいふ心之しか思ふにそれに應ぜぬ歎之○情無此句は上の三輪乃山といふにつゞけるにてその間十句は中にはさみたる物之されば十句は未然をいふにて實事にあらずこの雲のかくすが現當也雲ゆゑにみつゝゆかむ事もみさけむ事もかなふまじきをなげく心也情無は雲が心せぬ也これも倒置の法にて雲乃情無云〻といふべきを情無はこゝの標なれば之隱障(カクサフ)は字のごとくさふはさへぎる心之倍之也(シヤ)とはしかかくし遮るべき事かやとの心にて元來かくすべき事ならずといふべきをかくいひてげに雲は情なしかくすべき事ならずと人の思はむをまつ詞之也(ヤ)は也波(ヤハ)の也(ヤ)なり後世半語といふはわが御國言の道をわきまへざるひが心得なりもはら人の心より決定をおこさせむがために人に問ふさまに詞をつけたる物之宣長は情無をこゝろなとよみたれどさるは心なやといふ詞となるが故に下の倍之也(シヤ)にうちあはぬをいかてかさはよまむ此句八言なるが故なるべしこれは五言三言七言とよめるなり

【幽】此歌は明くれみなれつる三輪山を奈良山にかくれ道のくまつもるまでは遠ながらも見つゝなくさめにせむとおもふにいまだ程なきより雲のかくしてみせねば行末いよ〳〵みらるまじきをふかく歎たる歌なりされど三輪山いかばかりの山にてかばかり三輪山のみえぬをしもなげかるべきたとひさばかりの山にもあれさる情歌によむばかりの事がらにあらずされば此三輪山をかくまでをしまれたるは本情にはあらずして本情をば此山にそらしたる詞づくり明らかならずや今思ふに年頃みなれむつびし人をたちわかるゝかなしさにもはら旧都のはなれうき心をなげかれたる也されど此情をあらはにいふ時は　天皇の都をうつし給ふを私の心をもてうらみ奉るにあたるべきがかしこさにたゞ三輪山のみえずなるをなげく歌とよみなされたる也かく公をも憚らず私をもすてぬこそ歌のかしこさなれたゞ花をまち月ををしむなどやうのはかなき事をよむ物とおもひなりぬる事今の世人のひがみにしもあらず千歳以來の人のやう〳〵此道をもてあそびものとせる也これをばなげかで何をか歎くべからむ井戸王はじめにいへるがごとく額田王のちかきやからなどにや下の和歌綜麻形乃の歌にめにつくわがせとよみ給ひしは思ひ人歟いづれにもあれこの井戸王三輪山に比せられしは額田王なるべし詞のつけざまかへす〳〵心をとゞむべし

反歌

三輪山乎。然毛隱賀。雲谷裳。情有南武。可苦佐布倍思哉

【言】三輪山乎此乎もじこの山にかぎりてはかくすまじき山なるをとの心なりふかく氐山のみえぬをうらめる也○然毛隱賀然の義まへにいへり毛といひ加といへる心はかくさむにも輕重あるべきにたくひなくつらきかくしやうかなと思ふ心也かくすともをり／＼は雲間もみゆべきにさもなきが故之賀は加毛の加之奈良以往は加奈とはよまず氐京になりて加奈は詠加毛は疑となりける之加毛は大かたいかさまにおしあてゝも理のあてられぬ事ある時の歎也されば上古は疑の加毛とひとつなりし也上古の歌はすべて倒語なれば倒語のうへの歎に加毛を用ひて本情の歎に用ふる事なしこれ加毛にかぎらず大かたの脚結みなかくの如し後世の心ならひにて古言の推しがたきはかゝる用ひざまなれば也こゝも雲のかくしざまいかさまに思へどもその心なさのおもひえられぬを加とはよみたる也賀は濁音の字なればもしこれ加の誤にや○雲谷裳此陀尒里言にナリトモといふ心也陀又尒は里言にデサへといふ心にももちふる也これは願ふ事ある時に用ふる法なり奈良山のさはり道のくまつもりなばさやかにもみゆまじきを雲なりともせめて心あれと

の心也此陀尓（ダニ）一首の眼なり久しくにぎびし家をはなれて近江にうつる旧都いをしさのかぎりをつくされたりといふべしもし雲心ありて三輪山をかくさずとて満足にはあらざるべきをかくねがはれたる少言のほどをおもひて此陀尓（ダニ）の用ひざまの妙をしるべし裳はもはら此ねがひ本意に（ママ）ばあらねどもとの心を思はせられたる也長歌には雲の心なきをうらみたるはかりなればその雲だに心あらむ事をねがふ心を此反歌にはよまれたる之雲のうへをかくかへすく\一切によまれたる事ひとへに倒語の方をおもくする也倒語の方をおもくする事神のさきはひもはらこゝにある事ぞかし○情有南武南武（ナム）は誂の詞也（よに誂をも願とす亡父これをわかてり願は他にあづからず誂は他にむかひての別あればこ）今の本武を献とせり一本武とあるに從ふべしされどもし献にしたがはゞ宇年（ウネ）の宇（ウ）を牟（ム）にかりたるなるべしんはもと五十韻の外なれば字なし五十の音は宇（ウ）よりおこりその宇（ウ）はんよりおこる事予が考隨筆にいへり此故に牟尓義（ムニミ）などをつねにんにかれりしかるに又宇（ウ）を假りたるあり宇治拾遺に定賴中納言の声を聞しりて小式部宇（ウ）といひてふしかへりたる事あり（これ又隨筆に引おけり）此宇（ウ）は即んにかりたる也音といふ音みな口をひらきての音也んはいまだ口をひらかぬほとにある音なれば五十の音の本源にてんの音口をひらけばはしめて宇（ウ）の音生ずこゝをもて宇（ウ）をかれる也牟（ム）は宇韻なれど尓義（ニミ）は伊韻なればつねに此みつをかれゝどいはゞんには宇をかるが中にも近きにかへりて稀なるはいかなる故に

かされば、こゝも猷ならむもはかりがたし有南武(アラナム)はわが心のほどを雲のおしはかりあはれまざるを人にあはれまれむがため也○可苦佐布倍思哉は長歌のと同じ

〔靈〕此歌表は雲のたくひなきつらさを長歌にうらみたるをその雲たにも心ありてかばかりをしむ三輪山をみせよとの心なりかく詞づくりはかはりたれども長歌にいへるが如くもと三輪山をしもかばかりをしまるゝは本意にはあらざる事しるしされば此言外の情も長歌にくはしく尺せるに同じとしるべしされどこれは今ひとときは切にしてたへがたかりし心のうちあはれかぎりなし

右二首歌山上憶良大夫類聚歌林曰遷都近江國時御覽三輪山御歌焉日本書紀曰六年丙寅春三年辛酉朔己卯遷都于近江

山上の上に撿の字脱たるなるべしみなその例なり此歌林によらば天皇皇太子のうちの御歌なるべし

綜麻形乃(ミワヤマノ)。林始乃(シゲキガモトノ)。狹野榛能(サヌバリノ)。衣尓着成(キヌニツクナス)。目尓都久和我勢(メニツクワカセ)

〔言〕この歌は前にいへるが如く額田王の和歌なるべし綜麻形乃は古点は上の二句そまがたのはやしはじめのとあり心えがたき訓也古事記に三輪の大神活依比賣(イクヨリヒメ)にかよひ給ひし時巻子(ヘツ)の紡紵(ウミヲ)を

男の裔につけたるを引かへり給ひしあとに紵の三勾殘りたりし事によりて東麻呂みわやまのとよまれたるしかるべしその三勾のこれりし形を思ひて綜麻形とかゝれたるにこそ形の字はいさゝか心ゆかぬやうなれど此ぬしの考いとめでたし仙覺抄に土佐國風土記に神河訓二三輪川一中略皇一女思レ奇以二綜麻一貫レ針及二壯士之曉一去一也以レ針貫レ襴及レ旦也云々とあり○林始乃しげきがもとのとよめり繁樹がもとの心也げに古点はやしはじめのとよめる心ゆかずおのれ思ひよれる事もなければこれにしたがへり爰に榛多かりければなるべしおもふに此句は誤脱などもあるべくおぼし○狹野榛能狹はつねに添へていふ詞にてそふ所あるやごとなさをしめすなりこれは勢にそふをしめす也野榛は野なる榛なり榛は里言にハンノ木といふ木也眞淵榛は假字にて野萩也といひしは衣につくといふよりの說なるべしされど榛もその皮もて衣にすれゝば猶波里なるべし此末の引馬野尒。仁保布榛原などおもふべし野にもかく榛はよめり○衣尒着成榛の色の衣につくを云そのつく如くといふを成とはいふ之古事記上卷久羅下那洲をはじめとして此集中にも鏡成鶉成など多くよめり神代卷に如五月蠅とかゝせ給へりげに如の義に同じ詞なれど別あり如はやがてその物ともいふべきばかりのさまなるをいふ詞也成はさもあらぬ物を同等の物にいひなす心なり古事記上卷に於二湯津爪櫛一取二成其童女一云々また同卷に故令レ取二其御手一者即取二成立一

氷一亦取二成劔刃一云々また欲レ取二建御名方神之手一乞歸而取者如二若葦一搤批而投離云々などその義その別をしるべし神代卷はたゞその心をえてかゝせ給へるなるべし古点は都計奈之とあれど下の詞に應ぜず非なり〇目尒都久和我勢榛の色のきぬにつくとひとしくめにつくといふ也わがせとは井戸王をさし給ふか歌林によらば皇太子などにや大かたわがせとさすはわが兄の如く思ふ情をもていふなればすべて男をさす稱なり此句たゞ目につくとばかりいひてその目につくをいかにともいはぬこれ上古人の詞づくりの常なり

【燈】此御歌上四句は畢竟終の一句のためのよせ之表は三輪山のしげ木がもとに多かる野榛の色のきぬにつくにひとしくめにつくわがせやとたゞ勢のめにつくを榛の色の衣につくにひとしかりけりとその等類なるにはじめて心のつきたるさまによみふせ給へりされどしかばかりの心ならばいかでか歌によむばかりの事がらならむされば思ふに額田王は旧都にとまりゐたまひて今よりは井戸王にあひみ給はむ事も御心にまがせ(ママ)かたかるべければ別のかなしさをふかく歎き給ひし也めにつくは別のかなしさのあまりなる事しるしこれ上の歌どもをうけて我も今の別たへがたしとの心をしめし給へる也されどこれ又あらはにおほせられぬは遷都をうらむになりぬべきをはゞかり給ひし也その御心づかひ御詞づくりのあはれ〳〵しきやうなるに中々限なきあはれな

りかし

右一首歌。今案不レ似二和歌一。但舊本載二于此次一。故以猶載焉

此左注倒語の道のうしなはれたる世の論也上古の贈答にはかやうなるが多し言のうへは皆本意ならぬが常ぞかし

天皇遊二獵蒲生野一時額田王作歌

天皇は　天智天皇也蒲生野は近江國蒲生郡なり日本紀に五月五日とあり夏の獵は獸を獵るなり卷十六に藥獵とよめるこれ也額田王は御思ひ人なりければ新都にめして此日も具したまひしなるべし上の御歌を思へばめしゝは遷都の後にこそ

茜草指。武良前野逝。標野行。野守者不見哉。君之袖布流

言茜草指はあかきものゝ冠なりされば日にも冠らする也紫は今の紫にあらずいはゆる朱を奪ふ紫の事之此集中に紅顏の事を紫によせたる歌多きに思ふべし菫は今里言にいふゲンゲ花の事なるべしと景樹がいふさなるべし今すまひ草をすみれといへども紫色いにしへつねいふ紫にあらずなほすまひ草は野にも多からぬ物なればかた〴〵此說心ひかるゝ也紫色を心えむがために因

にいふ也○武良前野は紫草生たる野なり標野は遊獵のためにしめおかれたる野也ともに地名にあらずと古説なりげに蒲生野に獵し給ふなればしかなるべし御答歌に紫草能。尒保敝流妹とあそばしゝに照らしても地名ならざる事はしるしこのふたつの逝行といふ字は野守はみずやにつゞきたるにはあらず君が袖ふるにつゞける也下の二句は倒置したまへる也○野守者不見哉これは皇太子天武天皇の御思ひ尺に比したる也かくいふは君之袖布流とあれば也たしかに別に御思ひ尺ありとにはあるべからねど額田王に比比御心淺き事ありけるが故に別に必御思ひ尺あるが故なるべきになしていふ也御答歌に人嬬とあるもこれに同じ心得なり古人の詞づくりかくのごとし猶下に靈をとくをてらして思ふべし者は額田王その餘の人はみれども詮なき心を思はせたる也不見哉の哉は疑にてかゆきかくゆき袖ふり給ふを御思ひ尺のみたらむには必なくさめまゐらすべきにさもなきはみぬゆゑにや又はみながらなくさめまゐらせぬにやと思ふ心をいふ也見といふもたゞ見るばかりの事をいふにあらず見たらむには必みすくすまじければそこをばいはて見るとのみおほせられし也古言のみやびおもふべし○君之袖布流君とは皇太子をさす也之はその物のはたらきのことなるをいふ脚結也乃はその靈をさすにて乃の下の詞おもくなる也さればこれをもし乃といはゞ袖ふる事のみおもくなるべしこゝはもはら皇太子をいとをしく思ふ心なれ

ば乃とはいふまじき事思ふべし乃之の別くはしくはこゝにいひつくしがたし袖ふるは古説なにの弁もなくたゞ袖をふる事とおもへりされど何のよしもなくて袖ふるべきやうなしされば思ふにこれは身を悶ゆるかたちを形容する也領巾ふるといふも同じ悶ゆるを袖ふる領巾ふるといふこれ古言のみやびぞかしこれは皇太子御思ひ犬ありてそれが御心にまかせねば欝悶したまひて野をさまよひ給ふその御心のうちをいとをしみたる心也此二句上にいへるが如く倒置之君が袖ふるは實なれば必かく倒置すべき事之かし

【釋】此御歌表は御思ひありて御袖ふりありかせ給ふさまなるを野守はみずやみたらばなくさめ奉らむものをとその御心のうちのくるしさをいとをしみたてまつれるによみふせ給へる也しかれども御答歌の心を照らすにこれ本情にあらざる事明らか也おもふに此比皇太子つらくまし〱ければ必別に御思ひ犬あるが故なるべしとふかくうらみたまへる也大かた人をうらむは直言すまじき事なるが故にいとをしみたるに詞をつけさせ給へるめでたしともよのつね也しかもあらはにいとをしなどもいはずたゞ野守はみずやとばかりよませ給へるかへす〲いへるが如く上古人の詞はかたよらずかたよらぬは詞のいたり也かし

皇太子答御歌

これは　天武天皇也額田王はのち氏　帝の夫人たりし事紀にみゆ

紫草能。尓保敝類妹乎。尓苦久有者。人嬬故尓吾戀目八方

言紫草能は紅顔のにほへるにたとへておかせ給へる也能はよせの能にてノゴトクニといふ心也○尓保敝類とは紅顔の光澤あるをいふいと後世には香の事とするは非なり思ふに香ににほふといふ詞あるより誤れるなるべしそれは香にてにほふといふ詞なるをや此集には多く艶の字をあてられたりいづれも色のにほふ事之後世ながら月露などにほふとよめるに思ふべし妹とは即額田王をそれとなくさし給へる也乎は次の尓苦久有者につゞくにはあらず下の吾戀目八方につゞけてみるべしされば三四の句は中にはさみたる物也とするべし人嬬なれば戀ふまじき妹なるをの心也○尓苦久有者とは後世里言ににくしといふにはすこしたがへり里言に小ヅラニクイなどいふほどの心也源氏物語に帚木巻中將にくむ又にくゝなりて云々これらの類多し○人嬬故尓もと人嬬とは人のつまを云されどまことの人のつまをいふにはあらず女のわれにつらきをうらみむ爲に必外に男あるべしとしていふ名なり古注みなこれをまことの人のつまと思へりしからばある

まじき鄙淫なるをや此額田王は前にいへるが如く　天智天皇の御思ひ人なればさる御心にておほせられたるにもあるべけれどしかみる時は　天皇にやがてさしあたりて上古の詞つきにあらねば猶大かたにつらきをうらみたる詞とみるべしまことにさにもあらぬを人づまといひて女のつらきをうらむ詞とする上古の詞のみやび思ふべし故尓とは亡父脚結抄にノクセニと譯せりもと故といふ詞は事の故をとく詞なるを古人かくさまに用ひたるは人づまなるが故に戀ふべき理はなき事なるを猶こふる心に用ふるにて故尓の下に詞をはぶきたる物也かばかりの多言を故といふ詞にて思はせむがための脚結也これを心えてノクセニとは訳したる也かうやうの詞づかひ古は多し祢婆といふ脚結を奴尓といふ心に用ひたるも祢婆は奴尓の心にあらずこれと同じ法なり（此事予が隨筆にくはしくいへり）　○吾戀目八方吾はわれとよむべし古点みなわがとよめれどもとわれわがの別はたれたこれこそれそかれかひるひよるよなどの別と同じくたれこれそれなどいふ時はむかふる物にわくる也たこそなどいふ時はその物ひとつの上にいふなりさればこれは衆人にむかへて吾とおほせられたるなればわれとよむべしわが宿わが身などいふ時われ宿われ身などはいはぬに弁ふべし戀目八方はこひむ事かやといふ心にてその落着をば額田王の御心にゆづり給へる也也毛加毛（後世は也波加波とのみよむなり）ともに此例也前にいへるがごとく後世半語といふはわが御國言のやうを弁

へぬ説也落着を人の心にゆづりて我よりことわらぬはわが御國言の道ぞかしされば額田王の御心にげに人づまとしりながらこひ給ふべき事にあらずよとおぼししらむやうに御詞をつけさせ給へる也目(メ)は牟(ム)のかよへるにて江綿にかよはす義上にいへるにおなじ

靈此御歌表は皇太子他に思ひ人あるが故に御心うすきやうに額田王のうらみ給ふをうけ給ひてさらに／＼さる薄き心はもたずもとそこは人づまなるを知ながらかくわりなくこふるをわが心の薄からぬ證とし給へとわが御心の淺からぬをことわり給へる御心なれどわれは薄き心なしと直におほせらるれば人うくまじき常なるが故に表にはさることわりもし給はずたゞその證となるべき種ばかりをよみふせ給ひし上古の詞のつけざまよく／＼味はひしるべし

紀ニ曰天皇七年丁卯夏五月五日縱ニ獵於蒲生(ガマフ)野ニ于レ時大皇弟諸王內臣及群臣皆悉(ク)從(ノ)焉

明日香清御原宮(アスカキヨミハラノミヤニ)御宇天皇代(ノ)　天渟中原瀛真人天皇(アメヌナハラオキマヒトノ)

これは　天武天皇なり

十市皇女(トヲチノ)參ニ赴(ダマフ)於伊勢(ノ)神宮ニ時見ニ波多横山巖(テハタノヨコヤマノイハホヲ)ニ吹黃刀自(フキノトジガ)作歌

此皇女は　天武天皇の皇女にて額田王のうませ給ひし也此左注に紀をひかれしか如く十市皇女と阿閇皇女伊勢に詣たまひし時の事之吹黄刀自此集巻四にもみゆ續日本紀天平七年に富紀朝臣といふ姓みゆその族にこそ此時御供にまゐれる人なるべし波多横山は神名帳に伊勢國壹志郡波多神社あり和名抄に同郡八太郷ありこゝ也刀自は源氏物語に人の室を家刀自といへりさるたくひの女をいふ称か

河上乃。湯津盤村二。草武左受。常丹毛冀名。常處女煮手

〔書〕河上古点はかはかみとよめれどかみといふ詮なしかはのへとよむべしうへとよめる此集に多しいづれもそのあたりといふ也〇湯津盤村は神代巻に五百箇磐村とみえ祝詞には湯津盤村とかゝれたればそれによりて伊保をつゞめかよはして由とはいふ也と眞淵宣長などもいひその一派の學者ことごとくこれに從へり伊保をつゞむれば与なるを由にかよはしたりとの心なるべし音便にはさまざまかよふ事も少からねどあまりに自在なるは牽强におつべしされば予おもふに神典に湯津爪櫛湯津香木などあるをも皆櫛の歯の多く枝多かる故也と尺せられたれど同典に五百津之眞須麻流五百津眞賢木などもあり湯津五百津もし同詞ならば所々かく書かへらるべくもお

ほえず必異なる詞なるべし由は伊牟をつゞめたるにて由麻波流齋する事也といふ是之物の上に伊美何と名づけたるはいはゆる忌服屋齋鉏齋斧などいと多かりこれがたくひに物の上に由といふ事をそへていへるなるべし此伊牟も由もともに齋きよまはるにていみ清まはるは何事もつゝしみて言に出ぬをいふ也委しくは古事記燈神典にいふをみるべし神典もと皆表物にて実物にあらねどそのことわりをもいはぬ磐村爪櫛香木なりとのさとし也無形をさとして天沼矛天浮橋天香具山天安河などいふをてらして思ふべしこゝはたゞいひならへるをもてよめるなるべし津は時津風澳津白浪などの津の例にてその方につきたる事をさとす也年ふれば物みなおとろへ古ぶるならひなるに此石むらの草むさぬをみどかめ(ママ)られしなるべし磐村は磐のむらがれるを云()草武左受草生せずといふ也後世は苔のみむすとよめりすべて物の自生するをいふ也むすこむすめなどいふこれに同じ神典古事記上卷に高御産巣日神神産巣日神あり此産巣即自生の義也もとは蒸すより出たる詞なるべし地氣蒸す時は草苔など自生するぞかし自生する物の外はいはぬに思ふべし此石村のふるびざるさまをいふ也以上今此波多の横山にてまのあたりみたるさまをいふ也()常丹毛冀名かのいはほの如くつねにあれかしといふ之毛冀は後世は毛賀奈なり冀といふ字は此脚結こひねがふ義なればかられたる也下に奈もじを添たるはすべて奈はわが情をは犬(ママ)に諾なはせむ

とする義也物語ぶみにそこをしも重く人におもはせむとする所には奈牟といふ詞を必おけるをもて思ふべし里言に人に物がたりする中に何ナといふも是なりこれは此常ならむ事をねがふに靈はこもれば也そのよしは下にいふべし賀毛と裳賀毛別ある事をしるべし賀毛はねがふ心いづれも同じ裳もじそひたるがたがふ也何事にもあれむねとねがふ事ありてそれはねがふとも及ばじせめて此事なりともとねがふこれ裳賀毛の心得也さればこゝもむねと願ふ所は言外にありてそこをおもはせむがために裳賀毛とはよむ也實はそのむねと思ふ事をねがふをかくいふこれ古言のみやびなり此故にかく常ならむ事をねがふは本情にはあらざる事をおもふべし○常處女煮手をとめは此集に未通女ともかき紀には少女とかけり年若き女を云上の常丹毛冀名の上に此句あるべき心ながら例の標実をはかりてかくは倒置せられたる也常はとこ宮處などいふが如く少女ながらにとこしなへなるを云もと常なるといふにも老ながらも死なすは常なりともいふべし此故に常處女煮手としもよまれたる也かくよめるによりて思ふに刀自といふはやゝ年たける女をいふなるべし

○此歌表はこの川のべなる波多横山のいはむらの草もむさで常なるをみていかで我もとこ處女にて此いは村の如く常にあらまほしとわが身の年たけかたちおとろへゆくがなげかしさに此石

村をうらやみたる也されどうらやましとも直にいはぬは例の古人のみやび也しかるに此事たゞうらやみ思へるにてもやみぬべきをかく歌とよまれしを思ふにこの刀自男ありてその男刀自をふるしてつらきをうらみつかはせる歌なるべし上に裳賀毛(モガモ)は常ならむをねがへるは本情にあらずといへるは此故也かく表をおもくつゝしまれしは皇女たちの供奉のたびなれば也そのこゝちのくるしさ此詞づくりいかなる神かあはれみたまはざらむ此歌ぬしを端作に吹黄刀自としも擧られたるは此歌の情にてらせよとてのわざなるべし或說にこれは十市皇女の御上をとこをとめにてとねがひたる心也といへりこれ端作と処女とに目をうばゝれたる也十市皇女云々をかけるは私の旅ならぬをさとしたる也又此皇女今をとめにますをばをとめといはぬは古人のならひ之とこをとめといふには理なきにしもあらねどさる事を古人歌によむ物にあらず後世倒語の道をうしなひてのちの人の古言をみる常なり此說うけがたし此歌必旅中よりその男に贈れるなるべし

吹黄刀自未ㇾ詳也但紀ニ曰天皇四年乙亥春二月乙亥朔丁亥十市皇女阿閇皇女參ニ赴於伊勢神宮ニ

麻續王流於伊勢國伊良虞島之時人哀傷作歌

左注の如く此王は因幡に配せられたり伊勢とせるはいかなる事にかうつたへに誤ともいひがたきは歌に射等籠をよめり三河國より志摩の答志の崎へむかひてさし出たるをいらごが崎といふよし土人いへり又古今著聞集に伊豫國にいらごといふ所ありいづれも紀にたがへるは心えがたしもし後に因幡よりうつされけるにや

打麻乎。麻續王。白水郎有哉。射等籠荷四間乃。珠藻苅麻須

同打麻乎は麻うむといふ事の冠之古点うつあさをとあれどうつといふつもじ字餘なる事快からずうちそをとよめるに從ふべし冠詞にかうやうの乎もじ多きもの也これはを以てといふ心之人名の上に冠をおく事鳥かよふ羽田のなにも天ざかる向津媛など古くありその人の事をたゝふるにかへたる物之○麻續王左注にあるがごとく罪ありて流され給ひし人なり○白水郎奈礼也は尓安礼也をつゞめたるにて礼也は礼婆也の婆をはぶける也也は疑之下の苅麻須の下に良牟をはぶけるなりもとよりあまなるべきやうはなき事なるをかくいふは倒語なり下に情をとくをみるべしあまにはあらずとかねて思ひしかまことはあまにやとの心之○伊良虞荷四間乃この乃は都に

むかへていふ也乃もじたゞそこのとさす心なれど係辭におくべき脚結にあらずむかふる所必ありておくべき之この乃もじいとあはれ也○玉藻苅麻須玉藻はその実しろくまろくて玉の如くなればなりとぞ苅麻須はかりいますの心之和歌の結句にてみればこゝも麻は乎の假名にて乎須とよむべくや

【靈】此歌表は麻續王はかねてはさるやごとなき人とこそ思ひつれ今このいらごが島の玉藻をかりますをみればやごとなき人にてはなくて海人にやと今までの聞えといたくたがへるをおぼつかなくおもふ心によみふせたる也されどさるはかなき事をば古人歌によむならひにあらねばこれひとへに麻續王をあはれひたる歌也都にてはいとみやびてのみおはしけむをいかにくるしくおぼすらむと深くいとをしめる心言外にあまりてみゆ端作に哀傷作歌とありて歌にはいさゝかさる詞づくりもなきを後世いかで直言をたのむらむもし直にいたくいたはらば罪ある人をいたはらむ事公への憚あるが故にかく詞をつけたる也直言を主とする心よりいはゞ此白水郎有哉はなめしき詞也答の命乎惜美はめゝしき詞ならずや互に詞のうちに情あれば倒語の上はつねにかくの如し直言をたふとぶ後世の眠をさますべきなり

麻續王聞レ之感-傷シテ和スル歌

空蟬之。命乎惜羨。浪尒所濕。伊良虞能島之。玉藻苅食

〔言〕空蟬之は命の冠なり義は上にいへり情ははゞかりて此冠にかへたる也下を照らして心うべし○命乎惜羨は命のをしさにの心也惜の字今情に誤れり羨も亦今の本誤れり一本によりて改むこれは此島にて心にもあらず玉藻をかり食もならはぬを食をる所謂をいふなりされど命をしといふは倒語なりこの情は下にとくをみるべし○浪尒所濕は玉藻かるに袖すそなどのぬるゝを云袖などのぬるゝはいとわびしけれどひたすら命のをしさにかゝるわびしきめをもしのびをるぞとの心也一本には所濕をひちとよめりされど所の字ぬれのれもじにあてゝかゝれたるなればぬれとよまむ方まさるべしもとぬれとひちは義たがひたる詞なれど此歌にはたゞ佗しきわざするよしのさとしなればいづれにもあるべしその別は奥にくはしくいふべし○伊良虞能島之藻はもと食料とすべき物にあらざるべけれど配所のわびしきさまを苅食とはおほせられしなるべしをすは食することの古言なり命乎惜羨これに應ず

〔由〕此一首表は上のあはれめる人の心をうけてかく浪にぬれつゝ玉藻をかりてならはぬ食をする

事いとわびしくかなしければかゝるくるしきめみむより死たらむこそ中々まさらめとは思へどさすがに命の捨がたさに也とその海人にやとおぼめけるをことわりたるによみふせられし之されば古注皆この表に縛せられてしかのみ尺したれどいふべき事こそあらめ命をゝしみなどあまりにいやしくかつかのあはれみたる人に答へられたる心ともおぼえず後世は詞の表より外を思ふ事なき事となれるより和歌なりとも思はずひたすら表をのみたのめるはいかなるをさなさぞやこれは人のあはれむをうけて命をゝしみとはもはら歸洛の期もあらむかとそれをのみまつ也との心にてそのあはれみをたよりに此のちは日をおくらむと深くよろこびを述られし也されどもと罪ありて流されし身なれば歸洛をまつなどいはむは公におそりあるが故に命のをしさにそらしていとめゝしく詞をつけられし心のうちいかにくるしかりけむといとも／＼あはれ也かく歸洛をまつ情をさとしてあはれみをあつく謝せられたるを思ふに上の歌ぬしは都人にて都よりみそかに贈りたるに答へたるなるべし

右案二日本紀一曰天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯三品麻續王有レ罪流二于因幡一一子流二伊豆島一一子流二血鹿島一也是云レ配二伊勢國伊良虞嶋一者若疑後人縁二歌

辭二而謨一記乎

この日本紀差異あり四月甲戌朔辛卯三位云々とあり

天皇御製歌

三芳野之。耳我嶺尓。時無曾。雪者落家留。間無曾。雨者零計類。其雪乃。時無如。其雨乃。間無如。隈毛不落。思乍叙來。其山道乎

或本歌

三芳野之。耳我山尓。時自久曾。雪者落等言。無間曾。雨者落等言。其雪。不時如。其雨。無間如。隈毛不墮。思乍叙來。其山道乎

右句々相換因此重載焉

〔冠〕三芳野の三の義まへに尺せり○耳我嶺眞淵云卷十三に此歌と同じ詞なる歌あるに御金高とあれど金は缶の誤ここに耳我とかけるにあはせてしらる後世金のみ嶽といふは吉野山中にも勝れたる嶺にて即此御歌の詞どもによくかなへりしかればいにしへもうるはしく御美我祢といひ常には美我嶺といみいひけむそのみがねをみ金と心えたる後世心より金嶽とはよこなまれる也

と萬葉考にみゆ○時無嘗或本の時自久嘗同じ間無嘗もいひかへたまへるまでにてともに同じ時自久は紀に非時とかけり雪雨の時なくふるは高山のつね也嘗もじはふたつながらよそには雨雪もかばかりひまなく時なくふる事はなきをむかへて嘗とはおかせ給へる也さればけるともおかせ給へる之計留は常に異なる事ある時にいふ脚結也これらの義くはしくは奥にいふべし或本の等言は人のしかいふよし也氏大御歌其山道乎とありて芳野にての御歌とみゆれば等言はかなひがたし以上六句はよせにてかく長〻しきよせを置たまひしは長〻とおほせらるべき事あるにかへ給へる之上古人いと長きよせ多きは皆長〻しくいふべき事のはゞかりあるにかへたる也さればこゝも下に靈をとけるをみて此よせの心を得べし○其雪乃この四句は上のよせを御思にかけ給へる也或本の不時如はときじきがごとゝよむべし古点ときじくがごとゝよめれど上の時自久嘗は久たるべきなりこゝは以緯へかよはせずては語を成さずこれ宇緯以緯の常なり經緯をまねびて此心をうべし紀に非時香菓をときじくのかぐのみとよめる乃もじに經がばこれもときじきのとよむべき理也氏紀に泥みて古來此分別をしらぬ也けり○隈毛不落隈は道の隈なり上にくはしくいへり終の句に其山道乎とあるが故におのづから道の隈とはしるければ也大かた道の隈をいふは道程の長きさとしなりこれはおはします道多く隈ありて長けれどゆく〳〵しばしも忘れ

給はぬさま也○思作叙來古点來をくるとよめれど一言あまりかつ乎もじに照る所るもじなかるべき語勢なれば久とよむべし此御思ひ何事ともおほせられねばはかりしるべからず道の隈もおちず忘れがたくおぼしゝは何ならむなにゝもあれあらはなるまじき事がらなるべし古人はかくそのよしもいはぬ詞のつけざま多しよく／＼思ふべし此おしはかりは此下にいふべし作はすべて思はぬすぢにのみつくかたち也しばしなどは忘れもすべきにとの御心よりおかせ給ひし脚結なり叙はそのしばしも忘れ給はぬを歎かせたまへる之來とは今世人の心にては行といふべき所のごとしかれども此御歌あそばしゝはいづかたかしらねどその所までかく思ひつゝおはしゝよしなれば來とはよませ給ひし也かなたよりいふとこなたよりいふのけぢめにて古人は行とも來ともいへる事その例ひくにいとまあらず來と來留の別はすべて留もじそひたる詞はその事を下におくる義也されば現當の事は來といふべき也此故に久とよむべしとはおぼゆる也○其山道乎其とは前に三芳野之耳我嶺尓とよみませるをさしたまへる也乎もじはもはら山路のさかしければそのくるしさに他念はあるまじき心をさとし給へる也此句もと隈毛不落の上にあるべきを下に置給へる也例の標質の法也しかるに上古に乎もじを用ひたるにをはりに置はなちたる例ありいはゆる神典なる曾能夜幣賀岐袁の類也倒置の法とみてもさてありぬべしこれかみつ世の御

歌なればかの例にもみるべしもとしかはすべからぬものをしかする心なる事乎(フ)もじの本義なれば用ひはなちもする也かし此御歌この乎(ヲ)もじ眼目なりかゝる山路をくるにたにくまも落ず物思ひます御心のわりなさをさとしたまひしなり

靈この御歌表はこのさかしき山路のくまもおちずおぼしつゞけらるゝ事のわりなきを御みづから歎ますによみふせ給ひし也しかれどもさる御歎ばかりならはことさらに御歌とよませ給ふばかりの事ともおぼえねば必定言外に御心あるべし前にいひしが如くたゞ思乍とのみあそばしゝはうちみには戀の御歌なるべくみゆ大友皇子の事によりてわざと芳野に入らせたまひしなればその御歎の中なるにはゞかり給ひてかくよませ給ひしにやさらば清御原にます額田王におくりたまへる御歌にやあらむ又思ふにもとこれ芳野にての御歌なれば即御思は大友皇子の事にて深く世中の事御心にかゝるをよませたまひしにやあらむもと此芳野に入らせたまひしには深き御たばかりありての事なりければはゞかり給ひて戀の御歌かともみゆるやうにかくあそばしゝにやしからば誰にかあらむその御たばかりの御心しりにつかはされし大御歌なるべし此御思ひ何のすぢともおほせられずてたゞ思乍(オモヒツヽ)とのみあそばしゝが故にたしかにははかり奉りがたければかく二案をしるしおく也かへすがへすいへるが如くかくはかりがたきは詞づくりの至妙ぞかし

○此或本の歌もおなじ心なり

天皇幸于吉野宮時御製歌

同じ　天皇の同じ吉野の幸の時の大御歌なるをかく端作をかゝれむやうなしされば前の御歌とは必別ある故なるべし思ふに前のは吉野にのがれ入ましゝ時の御歌なるべし

淑人乃。良跡吉見而。好常言師。芳野吉見與。良人四來三

古淑人とは誰とはなけれどいにしへありしうま人をさし給へる也　應神天皇の御紀に吉野宮をはじめて造らせ給ふ事みゆいと勝地なるが故によゝにこゝをめで給ひし所なれば　先帝たちのうちをさし給へるにもあるべし○良跡吉見而跡はこゝをよき所とての心也（仏父脚結抄にいつゝのとといへるこれ也）吉見而はまのあたり熟みて也○好常言師はよく見て後まことによき所ぞとさだめいひしを云○芳野吉見与この芳野即上の三句を冠りたるにてよき人のよき所ぞとてよくみてげに／＼よき所也と定めいひし吉野をとつゞける也吉見与とは昔のよき人の如くつら／＼みよといふ也○良人四來三古点はよき人よきみとよめりしからば從駕の人のうちにさし給ふ人ありて昔とはおほせられしなるべしされど僻案抄に此結句をよくみとよめるをみを快からずとてか御風といふ人よくみ

つとよめるしからば上の淑人乃良跡吉見而（ヨキヒトノヨシトヨクミテ）を今一たびかへしたる也これいとめでたし良人よ君といふ事上古の人かく人にさしつけていふべしともおぼえぬがうへに上よりの詞にてその人をよき人とおぼすが故に吉見与（ヨクミヨ）とおほせられし事はしるきをやよき人は君なればとの心はおのづからこもるべき也大かたひとたびいひてあかねば二たびかへしていふ事古人の常にてまことはその事を人にむねと思はせむの詞づくり也されば昔もよき人のよくみたりし所ぞとくりかへしおほせられしその人をよき人とおぼしめす御心をむねと思はせむがため也御詞づくりめでたしともめでたし今世かくかへしていふを古体也と思へる人あり更にすがたの事にあらず古人詞づくりの一手段ぞかし

〔靈〕此大御歌表はこの吉野はよき人のよしとてよくみてげによしといひし所なればよくみよかへす〱もよき人のよくみたりし所ぞと從駕の人のうちによき人とおぼす人ありておほせられしにて御みづからはよき人にあらねば此吉野をよくみてげにもよしといはむは人がましければよくみてよしともえいはずと御謙退に人にゆづり給べる（ママ）也謙遜をあらはにいふはめでたきわざとこそ今人は思へ所詮はさかしらにおつればわが御國ぶりかくつゝしむとほしろさを思ふへしされど大かたの人たにあるを　常にもましますを吉野を勝地なりとめでたまはむは何ばかりの事

にもあらぬをよき人めかむをはゞかり給ひし御心ばせまことにかしこしなどもよのつね也此かしこさを思ひて後世の淺ましき心がまへ詞づくりをはづべし

紀ニ曰八年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮ニ

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇

天皇御製歌　持統天皇なり

春過而。夏來良之。白妙能。衣乾有。天之香具山

〔書〕春過而この集に十卷の寒過暖來良思とよめるに同じしかるに此詞後世直言をたのむめにはなでうことゝも思はず見すくす詞なれど春過ば夏は來べき事なれば上世の人のかゝる稚語いふべきにあらずいはではえあるまじき事をすらいはぬが上古のつねなるをやされば思ふに春は過ても夏の來べき物ともおぼさゞりしおろかさをしめし給ひし詞なり古人詞づくりの至妙おもひしるべしされば此詞はいつまでも春なるやうにおぼしめしける心也來のたるは脚結也漢籍をよむに來の字をきたるとよむは誤也たるはてあるとあるをつゞめたる詞也このふたつにかなはざるは非之と心うべしこの來たるはてあるのつゞまれる也良之は上にくはしくいへり夏來てあ

る事の十に七八しるき心之〇白妙能衣の冠なりたへは布の古名なり布の名とするはもと栲(タヘ)をもておれる故之いにしへは布をのみ衣としたれば衣の冠としたる也くはしくは眞淵が冠辞考にみゆ〇衣乾有たりはてありのつゞまれる也夏來れば去年より櫃などにいれ置てかび臭きをほす也くはしく代匠記にみえたり夏來てある事の十に七八しるき證を擧たまへる也上の春來良之(ハルキタルラシ)を春きにけらしとよみ此句を衣ほすてふと京極黄門はなほしたまへり御心もありての事なるべしされど思ふに二の句尓計(ニケ)をつけてよまむはいかゞあらむたるもつけてよむにはあれどもそれにはこと也又四の句ほすてふにしたがはゞ てふはもと後世の誤之そのゆ之は止以(トイ)布(フ)をつゞめたるなれば止以(トイ)の反は知(チ)也されば此集にはみなたゞ知布(チフ)とのみかけり又以(イ)をはぶきて止布(トフ)ともありちをてに誤傳へたるにや 人のしかいふをきこしめしたる心となる也黄門の御心には　帝の御みづからみそなはしたるにてはかろ〲しとおぼしての事にもあるべけれどたとひ人のいふをきこしめしたるにもあれ御みづからみそなはしたるによませ給はでは夏來たるらしの證たしかならずみゆべければてふはしかるべからずかみつ世には後世の如く物深くのみはおはしまさで人近くおはしましかつこの藤原宮より香具山の麓の人家はみゆる所なればなか〲なるべしかし〇天之香具山かく山わたりの人家をおほせられたる也古言の簡約思ふべし是ひとへに言外を貴ぶが故之

[靈]此大御歌表は猶春なりとおぼしめしゝか香具山わたり衣ほしたるを御覧じて夏來てありと時

のうつれるを驚き歎じ給ひしなりされば上二句にのみ御心はあるにて下はたゞ夏來たるしるしとなる物を擧給へる也かゝる類の歌古くは多くあればたゞこれ時のうつる感なりなど後世はいへりされど時のうつる感などは心にこめてもやみぬべき事なれば古人時のうつるをおどろきし歌は必その時のうつるにつけて情あるが故なる事疑なしされば是れ何のゆゑとはさだかならねど春はと人のため奉れる事ありしか又春のうちにと人に御ことよさし給ひし事のありけるがそれが期を過たりければその人をそゝのかしその期おくれたるをうらませ給ふ御心なるべしされど直におほせらるれば私におつべきが故に時のうつれるにのみ御詞をつけさせ給へる也さだかに御心の知がたきは倒語の所以詞の至妙なる事かへす〳〵いへるが如し上古人の詞のつけざまたふとしともたふとし後世ながら基俊ぬしのあはれことしの秋もいぬめりとよまれしかみつよのなごりにこそ

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

古本柿本朝臣人麻呂の七字過の字の上にありとぞいづれにもあるべけれど上にあらむもしかるべし　天智天皇六年飛鳥岡本宮より近江大津宮にうつりまし十年十二月崩御明年五月大海人大

友二皇子の御いどみつひにたひらぎて大海人皇子飛鳥清御原宮に天下しろしめしければ大津宮は荒都と成けるなり人麻呂は岡本宮の比うまれ和銅のはじめ奈良へ迁都のまへにうせたりし人なり

玉手次。畝火之山乃。橿原乃。日知之御世從。或云自宮 阿禮座師。神之盡。樛木乃。彌繼嗣尒。天下。所知食之乎。或云食來 天尒滿。倭乎置而。青丹吉。平山乎越。或云虛見。倭乎置。青丹吉。平山越而 何方。御念食可。或云所念計米可 天離。夷者雖有。石走。淡海國乃。樂浪乃。大津宮尒。天下。所知食兼。天皇。神之御言能。大宮者。此間等雖聞。大殿者。此間等雖云。春草之。茂生有。霞立。春日之霧流。或云霞立。春日香霧流。夏草香。繁成奴留 百磯城之。大宮處。見者悲毛 或云見者左夫思母

【詞】玉手次まへにいへり○畝火之山乃この橿原宮は　神武天皇の大宮也○日知とはからもじの聖といふ字をあてられたれば聖の字の義也とよに心えたれどしからず聖は人の極なりこれは神にます神人の別雲泥なるをや日とは　天照大御神の御事也此神の御心をしろしめしてその御心に隨ひ給ふを日知とはたゝへ奉れる也奥に日之御子と多くよめるをおもふべし此神の御たまくは

しく古事記燈にみるべしこれ　神武天皇をさし奉れるなり從はよりといふに同じ　神武天皇以來といふ心也もと從は余里の余のかよへる也されば余ともよめりされども余里と從は別ありその別とは宇締以締の別なりくはしくは經締をまねびてしるべし御代〳〵の倭の皇居この　帝よりおこれるよしをしめしたる也或云の自宮いづれにもあるべし阿礼座師阿礼は生るゝ心なりされどうまるゝは母に所レ生義也阿礼は現るゝ義にて母を主とし子を主とするの別あり○神之盡今本書とあれど心えがたし一本に盡とあるにしたがひてこと〴〵とよむべしこと〴〵はこと〴〵く也神とは御世〳〵の　帝を申す紀に惟神氏集にも神在隨などいへるが如く神の御心のまに〳〵おはしますが故にやがて神とは申す也御世〳〵悉く倭にのみ天のしたしろしめしゝをの心なりこの之もじにて句とする心にみば下につゞく語意明らかなるべし○樛木乃つぎ〳〵の冠に置たる也樛は止賀といふ木なるを止を津にかよはせていにしへは津賀ともいひしなるべし彌は里言にイヤガウヘニといふ心之經嗣には御世〳〵御位をつがせ給ひしを云こゝに倭尓而といふ事あるべき事なるに上の從下の倭乎置而にしるければはぶかれたる也詞の有力おもふべし天下を後世安米賀之多とよめど賀の義かなはず乃とよむべし乃賀の別上にいへり或云の食來もさる事なれど下の何方云々へうつる語勢之乎の方しかるべし乎は里言にノニといふ心なり○天尒滿

やまとの冠なる事上にくはしくいへり倭乎置而とはおきては此巻の末に飛鳥明日香能里乎置而伊奈婆とあるに同じくとゞめおく心也ともにゆかぬ形容也古言のみやび思ふべし後世古今集に秋を置て時こそ有けれなどよめる類は除てといふほどの心也この用ひざまとはたがへりされどもとはひとつの義也○青丹吉是も前にいへり平はならす義よりかける之近江への路なれば也乎もじ以上みつともにおもひもよらぬわざあそばしゝ心をさとすなり或云には而もじ乎もじの置所上下せりいづれにてもあるべき事のやうなれどくはしく思へば倭乎置の方には而もじあるべく乎もじは此句にもあるべき事乎もじ而もじの義におきて切なりかくいふ故は平山を越たまふまでにはくさ〴〵の御わざあるべき事なれば也而もじの心得後世はしかありてかくあるなどいふ繫辞とおもへれどその間にくさ〴〵のわざ含蓄する事而もじの専用なれば也而もじの事くはしくは此末の藤原宮役民の歌にいふべし○何方凢慮のはかりがたきよし也里言にドノヤウニといふ也御念食可はおぼしめせはかの婆をはぶける之可は疑にて下の所知食兼のうちあひ也○天離遠き所は天もこゝとひとつの天にあらざるやうなれば之から國にも各天といふがごとしひなの冠なりひなとは都にむかへていふにて近江國をさす也離ははなるゝを云されどはなるゝとは別ありそこをはなるゝと双方へ引わかるゝとのたがひ也裂の義をもおもふべし○石走古訓は石

はしるとよめどしかるべからず石橋の假名なるべし里言に飛越とて石を川中に置ならべてその上をわたるを云その石必間(アハヒ)あればあは海とはいひかけたる也淡海の冠なりあふみはあはうみをつゞめたる名也○樂浪乃さゝ浪は志賀わたりの地名なる事くはしく代匠記にみえたり後世漣漪のことゝするは誤也この集にさゝら浪とよめるそれ也樂をさゝとよめるは神樂の採物に篠あるが故也と古説なれど神樂の採物くさ〳〵なるに篠をしもとり出てうちまかせていはむ事おぼつかなし此末に神樂浪(サヽナミ)神樂声浪(サヽナミ)などかゝれたる聲といふ字篠にあらざるしるし也されば思ふに神功皇后の御紀の御歌に摩菟利虛辭弥企層(マツリコシミキゾ)。阿佐孺塢齊佐佐(アサズヲセササ)(長歌上畧)また許能弥企能(コノミキノ)。阿椰珥(アヤニ)。于多娜濃芝作沙(ウタダノシササ)(同上)とあるこの佐佐(ササ)にて里言にサア〳〵といふ是なり促(ウナガ)す詞にてかの御紀の御歌皇太子に御酒(ミキ)をすゝめ給ふ御歌(次のは皇太子の御答歌を武内宿祢が代りてよめるなり)なるをおもふべしもと神樂は神典石屋戸の作濫觴なりその石屋戸の前のわざをきはもはら　天照大御神石屋戸を出まさむ事を促がし奉るわざにて天宇受賣命(アメノウズメノミコト)御手草(ミタクサ)に小竹葉(ササバ)をとり給ひしも(これ採物に篠ある本之)佐々(ササ)の表事なりされば佐々(ササ)といふ詞神樂の本意なるが故にかくかられたるなるべしかの古説採物の篠によりたるうつたへに非也ともいひがたけれど本末のけぢめあれば今弁しおく也大津は今の大津なり尒(ニ)もじよくおもふべし此宮にて天下しろしめすべき事とは思ひもかけぬ事なるをいふ也大かたその場處にはあるべか

らぬ處の場處となる事をさとす用也としるべし〇天下兼は上の可もじのうちあひ也兼はすべてきしかたの事をはかる詞之上の或云に所念計米可とあるも猶その可この兼にうちあふ也此句にて一段落とみるべし兼は上の可にうちあへるなれば下につゞける句にあらぬ事しるく又この句次の句意もつゞかざるを思ふべし下はあまり御心のあやしさにその大宮みむと大津に来し心を思はせたる也これ上下の詞のうちあはぬ間にておのづからしるければそこは詞とせぬ事上古の人の詞づくりのつねなり〇天皇　天智天皇をさし奉れり　天皇をやがて神と申す事　孝徳天皇の御紀に惟神を自注し給ひて謂下隨二神道一亦自有中神道上也とある心なり御言は命と同命は即御言の義なり大かた神は御身おはしまさねばその妙用は人の言をかり給ふ之これ私にいふにあらず神典の心なりくはしくは古事記燈にみるべしされどかゝるべき人の言ならではかり給はず御世〱の　天皇の御言は即神の御言なればかくは申す也これを本義としてあがめていふ称となれり神代巻に至尊曰レ尊自餘曰レ命と注せられしはうけがたし古事記には皆命の字を用ひられたるを正しとすべし〇大宮者此間とは大津をさせる也大殿者の上にも天皇神之御言能といふべきを上にゆづりてはぶける之宮殿は畢竟いひかへたる也かく同じさまなる事を二句いひかへてよめる事古人多し後世人はこれをたゞ詞のあやなりと思ひから人のかく四六文などの如く心えたれどさらに〱しからず事を懇にいは

むとする時のわざ也同じ詞をかへすも同じ心得之こゝも此宮なき事はあらじとねもごろにもとむる心を思はせたるにてこれ皆古人詞づくりの一手段ぞかし雖聞雖云いひかへたるのみにあらず別あり雖聞は大和にてはるかに大津也ときゝたれどもといふ也雖云は大津に來てそこの人のこゝなりといひをしふれどもといふなりこれは聞たがへいひたがへはあるまじきに聞たがへいひたがへかとおぼめける心也○春草之この之もじふたつ下の大宮處をむねとたてゝおかれたる也これ之もじの心得なる事前にいへるが如し春草之茂生有大宮處　春日之霧流大宮處　とつゞく心之（春草ははるくさともわかくさともよむべし）下ひとつに上ふたつをかくよする例多し（上ひとつにて下ふたつなるも亦多し）或説に生有をおひたりとよむべしとあれど之もじにうちあはず又二句とも之もじある句法にあらずうけがたし春草之云々　は大宮の草のたかきにかくれてみえぬさまになしていへる也霞　立云々は春日のかすみて大宮のみえぬさまになしていへる也大宮のみえぬ事はいさゝかもいはずたゞかくのどかにいふ古人の詞づくりの至妙よく〳〵味はふべし之もじふたつわざとかろ〴〵とみゆるやうの手段いふばかりなし大かたまことは大宮のあるがみえぬよしになして詞をつけられたるげに此ぬしのしるしはみゆかし或云に二句ともに香もじあるは理はさるべき事のやうなれど此本行の方まさる事雲泥也香とよまむは心を用ひばまねびもせらるべしこれは誰かはまねばむこの易難をも

て雲泥をしるべし霧流（キレル）とはさへぎる也これ即かすむ事也古くは秋に霞ともよめり霞の義もと物を掠めてみせぬ故にてきるも同じ心也春を霞秋を霧といふは後世也○百磯城之大宮の冠也大宮は百（モヽ）の石木をもてつくれば也と冠辭考にいへり以上おかれたる冠辭あまた也まへに冠辭を用ふる心得くはしくいへるが如くこれもひとつ〳〵いふべき事あるにかへられたる也下に靈をとくを以上の冠辭どもに照らしてみるべし冠辭をかくあまたおかでかなはぬ所以あれば也後世人古くかくあまた冠辭を用ふるをみてよき事と心えてなにのゆゑもなくて歌文どもに冠辭多くおくいとをさなきわざ也かし○見者悲毛後世かなしはたゞ悲の義にのみ心うれど此集にかなし妹源氏物語にかなしくしたまふ御むすめ古今集につなでかなしもなどの類皆ふかくそれを哀憐する心之悲の字の義に用ひざるにもあらず哀憐の極は悲しければ也さればこゝもふかく心にかゝるよしをばかなしとよまれたる也毛（モ）はすべてナレドモケレドモなどいふ心にみれば明らか也亡父はサテモと譯せりよく此義を心うればサテモの心となるが故なりさればこゝもみればかなしけれどもいかにともせむすべなき心也ふかく心こもる脚結なれば上古にはよみつめにいと多かり或云に左夫思母（サブシモ）とある左夫思（サブシ）は後世さびしといふ詞の本にて義は大にことなり此集に不樂とかけり氣の落いり氣のうかぬ心なり

〔壽〕此歌表は　神武天皇以來御世〳〵大和國にのみ天下しろしめしたればたゞその古きあとにしたがはせ給ふべきをいかやうにおぼしめしたればかひなゝる近江國に迁都したまひけむ凡慮のはかり知がたさにその大宮みむとおもへど聞あやまりかいひあやまりか此大宮のみえぬは春草しげく霞きりたる故ならむいとも〳〵くちをしき事やと此大宮のみえぬをかなしみたるによみふせられし也されどさるくちをしさばかりの事歌によむべき理なく大かた　神武天皇以來の事をいひその大宮のみえぬ事をなげかれたるさまを思ふに初國このかた皇居し給ひし地をかへさせ給ひしかもその大宮の今あともなくなれるはひとへに此　帝の御心がろくおはしゝゆゑなるべしもし御世〳〵の御あとに隨ひ給ひて倭におはしまさばかく荒廢する事もあらじかとくちをしく思ふ心あきらか也されど此　帝をあはめたてまつるにおつべきが故にかく迁都し給ひし御心凡慮のはかりがたきにその大宮のみえぬくちをしさを詞とせられたるめでたしともよの常なり終に毛(も)もじをおかれたるはこの情を思ひ入らせむがため也古人の脚結の用ひざまこれにてもよく〳〵味はひしるべし

反歌

樂浪之。思賀乃辛崎。雖幸有。大宮人之。船麻知兼津

〔詞〕樂浪之長歌にくはしくいへり○思賀乃辛崎此から崎はさきくあれどもといふ也さきくとは無レ恙無レ事平安などの事をすべていふなりすべて幸ある事を云せばき事をもひろく詞をつくる事わが國の御てぶり也その御世に宮人の舟遊つねにせし所なればいふなるべし弖覚こゝはから崎はその御代のまゝにてあるをいふ也と心うべし○大宮人之これは大津の宮の宮人を云船は宮人の舟あそびする舟を云麻知兼津とはまてども〳〵待久しきを云里言にマチカチルといふは人をまてどこねば待かねて他出するなどいふ時にいへどもこれは待久しくてまちあへぬにいたるべき勢なるをいふなり津は上の軍王の反歌にくはしくいへり宮人の舟つねによする所なれば今もまつによりこずして心の外にまちかぬる方につくをなげきたる脚結也これまた大宮の今も存してあるかたちになしてよまれたる長歌にいへるに同じさなくてはまちかぬるといふ詞活ざる也なき物をあるにしてよむ事古人詞づくりの一手段なりたとへば死者を活たる人としてよめる類の如しかくいふにてこそあはれは深けれこの妙理をわきまへずして古注ども倒語を殺せる事多きを思ふべししかのみならず此歌大かたこの麻知兼津を人麻呂ぬしのみづから待かねられたる

やうにおもへりしからず思賀乃辛崎（シガノカラサキ）をたてゝよめる歌なれば末まで辛崎を主とたてゝみるべき法なりされば是れは人麻呂ぬしのまちかねられたるにはあらで思賀（シガ）のから崎かくありし世のまゝにさきくはあれとも大宮人の舟をまつらむに心の外にまちかねたるさまいかにから崎の心さぶ／＼しからむとから崎をあはれみたる心をよまれたる也非情を有情になしてよむ事古人倒語の一手段なり奥にその所〻にいふをみるべし雖といふ字から崎はさきくあれども大宮人の舟をわれまちかねつといふ心にみる時は雖の落居語を成さず前にいふがごとく末までから崎がうへになす時は雖のおちゐいとめでたきをもておもふべしかゝるよみざま後世倒語の道かくれてのちは歌のやうにも思はぬ事となりにたりくちをしき事どもなり

靈此歌表はおのれはさきくはあれど大宮人の舟まちかねたるいかにさぶ／＼しからむと辛崎が心をあはれみたるに詞をつけられたる也されどから崎もと有情の物にあらぬがうへにそれが心をあはれむなど歌としもよむべき情にあらず必別に情あるべき事ならずやされば思ふにこれ非情の物をもて有情のうへをおもはする法にてもはら人麻呂ぬしの此大宮の荒廢をかなしまれたる也しかるにあらはにかなしむ時は猶この　天皇をあはめ奉るにもあたり又おのがさかしらにも落てかなしむ情かへりてさかしらぐさのやうになるべきが故にかくから崎のうへに詞をつ

けられたる也此大宮の荒廢をかなしむ情をたにかく詞にあらはさぬ上古の人のつゝしみの深さ詞づくりの至妙おもふべし

左散難弥乃。志我能一云比良乃大和太。與杼六友。昔人二。亦母相目八方一云将會跡母戸八

〔言〕志我能大和太とは神代紀に曲浦をわたのうらとよめるによりて和太は入江の水の淀をいふと古注にみえたり此説非なりもと淀まぬ水にむかひてこそよどむといふ詮もあれもとより淀なるをよどむとはいふべき事にあらぬをやかの曲は七わたにまがれる玉などいふに同じかるべし一云比良乃無子細しかるに今思ふに和太は海を和太といふに同じく渡の義なるべしされば大和太は大渡なるべし大和田といふ所三代格にもみえ又淀に山城大渡などもいふぞかし曲浦ももとおのづからわたるに宜しきよりの名にもやあるらむいづれにもあれこの大和太の水はよどむ世なく勢多のかたへ流るゝが故にたとひ此水のよどむ世はありともともとよりあるまじき事を設ていふなり古人この轍多しすゑのまつ山浪も越なむなどよめる類也〇昔人二まことは大津の宮の時の人をさしたるなれどかく昔の人とせまらずいふ事古人詞のみやび也〇亦母相目八方母は前にいひし如く本意別にあるにそふる義也こゝもあはれぬに決したる事を本とたてゝ亦もし逢は

む事あるまじきにもあらずと思ふ心なり八は亦もしあはれむかとうたがひてさて向後たとひ大和太はよどみてもあふ事はえあるまじき事也と人に決せしめむの心也後世の也波なり心得まへにいへり一云の將會跡母戸八との八も猶也波の也にて母戸は於毛戸の反切のまゝをかけるにてこれは忘れて思へやなどよむたくひにて戸は不を衣縮にかよはせたる也これもまたあはむとは思ふまじき事也と人に決せしめむがため也一首の意に妨なければいづれにもあるべしこの下句すべて上句を蒙らせて觧すべしかくいふ故は昔の人にまたあふべき事もと理なき事なれば上句を蒙らせずしてときては稚語なるをおもふべし上古の人稚語を用ふる事なき事前にかへす〴〵いへり大和太もしよどむ世あらば昔の人にもあはるまじきにもあらじやとさるまじき事をふたつむかへてもしよどまばあはれむかとその反を設出たる也表の手段ながら上手の詞づくり妙處を得たる事よく味はひしるべし

〔副〕此一首表はむかしの人にあはるまじき事いふも更なれども此大和太のよどむ世もあらばあはれむやと人の決定を待たる也されどももとあるまじき事ども設出たる事をことさらに歌とよむべき事ともおぼえずされはおもふに此大和太のよどむ世とてはあるまじければ昔の人にあはむ事もまたあるべくもなき事をばかくことゝ〳〵しくよまれたるはひとへに此大宮の荒廢をかなしめ

る情なる事方もじにもしるしされども直言すまじきは上の歌にいへるに同じきが故につゝしみてかく詞をつけられたる也この荒都をかなしめる心いさゝかも詞にいでずたゞおほらかに昔の人にあはむあはじのあげつらひのうへにのみひとへなる詞づくりまことは上のから崎の歌を今一たびなげかれたる心なる事言外にあふれてみゆすべて詞のつけざま凡を出たる事よく〳〵おもひしるべし

萬葉集燈巻之二

萬葉集燈　三

萬葉集燈卷之三

平安　富士谷御杖　著

本集卷之一其三

高市古人感傷近江舊堵作歌　或書云高市黑人

古人尒和禮有哉。樂浪乃。故京乎。見者悲寸

言古訓はふる人にわれあるらめやとあれとらめをつけてよむも理なく義もかなはず古今六帖に上をいにしへのとよめるが正しかるべしさればいにしへの人にわれあれやとよむべし此よみ人の名古人といふより古訓はしかよめるなるべけれどうけがたし古の人とは大津宮の世の人をいふ也その世の人にてわれあらば此故京をみても悲しかるべき事なれどさにもあらぬにかなしきは心えがたき事やといふ也安礼也は安礼婆也をはぶける也哉は疑なり○樂浪乃まへにいへり○故京乎の乎もじ心をとゞむべしわれ今の世の人なればこの大津宮のあれたるをみたりとてかなしくはあるまじき事なるをとの心もはら此乎もじにあり悲寸とゝぢめたるは上の疑の也のうち

あひの法なり

【靈】此一首表は大津の宮の世の人ならば此都の荒たるが悲しかるべき理なりしかるにその世の人にもあらぬにこの故京のいたくかなしきその理のあたらぬをばあやしみたるによみふせたる也されどこのあやしみを解得たりとて何の益もあるまじき事がらなるはこれ本情にあらざる所以なりされば本情は深く此荒都をかなしめる事を述たるなれどいさゝかも詞にあらはなれば上の人麻呂ぬしの歌に尽せるが如くさばかりの　みかどをあはめ奉るにもおちおのがさかしらにもなりぬべきをおそりてかなしきが不審なる一すぢにのみ詞をつけられたる之此詞のつけざま容易の構思とはおもはれず古人詞に公私をそなふる手段の絶妙よく〳〵味はふべし

樂浪乃(サヽナミノ)。國都美神乃(クニツミカミノ)。浦佐備而(ウラサビテ)。荒有京(アレタルミヤコ)。見者悲毛(ミレバカナシモ)

【言】樂浪まへにくはしくいへりこれはやがてさゝ浪の國とよめるをもおもふべしいはゆる吉野の國泊瀬小國などよめるに同じ都(ツ)は時つ風天津(ツ)風などいふ津もじに同じくそこにのみつくをさとす脚結なりされば此神は此樂浪の國をしもうしはき給ふ神を申す也美(ミ)はたゝへ奉りていふ之○浦佐備而は浦(ウラ)は假名にて前の卜歎(ウラナゲ)の下にいへるが如し表にむかへて人の目にみえざる所を云さ

れぱこゝろに思ふ所をいふ也佐備(サビ)は神典（古事記上卷）に勝佐備(カチサビ)その外をとめさびをとこさび神さび翁さびなどに同じきをこれらには同じからずとて不樂不怜(サブシサブシ)など此集にかける心にてなくさめがたき心ぞといふ說あるはくはしきが如くにして僻なりもと佐夫(サフ)といふば(ママ)銅鉄などのさびといふが如く內なる物のおのづから外にうかびいづるを云されぱこゝは國津御神の御心のうちにおぼす事のおのづから外にうかび出たるよしを云也國津御神の御心のあらびつひに世の亂もおこりて都の荒たるをいふ國津神もと神典に於此國道速振荒振國神等之多在是使何神而將言趣とみゆるをはじめすべてはじめをはりたゞことむけやわしがたきは國津神なるよし神典中にむねとゝき給へりされぱこゝに國津御神とよまれしももとやわしがたき神としていふにてさる故に浦佐備(ウラサビ)而(テ)とはよめる也たゞうらとばかりよめれどさるやわしがたき神の御心のあらびの外にうかびたるをいふ也としるべしこの國津御神あきらかならざるが故に古注ども皆浦佐備(ウラサビ)の義もくはしからぬなり而(テ)もじ上にいへる如く直に下につゞく義ならぬをしるべし荒有京(アレタルミヤコ)といふが中にも神のあらび給ひての事なるをもちてみるべし多流(タル)は氐安流(テアル)をつゞめたる脚結なり○見者悲毛こゝまでも國津御神の御あらびをかけてみるべし毛(モ)は上にいへるがごとくかなしけれどいかにともすべきよしなき歎なり

〔靈〕此歌表はこの大津に都し給ひしが國津神の御心にかなはずしてあらびます御心つひにことむけがたくて此都のあれたるせむすべなさをふかく歎たるによみふせられし也されどしからばたゞ歎きてもやみぬべきを歌としもよまれしは必別に本情あるが故なる事しるしされば思ふにこれまた此宮の荒廢をふかくをしみなげかれたる歌也されどこれも上と同じはゞかりにかく國津神の御心になしはてゝ詞をつけられたるまことに常人の企及ぶべからざる手段なり後學よく〳〵この倒語の至妙をおもふべし

幸二于紀伊國一時川島皇子御作歌　或云山上憶良作

この幸は　持統天皇也川島皇子は　天智天皇の御子也

白浪乃。濱松之枝乃。手向草。幾代左右二賀。年乃經去良武　一云年者經尓計武

〔言〕白浪乃云々　仙覺抄すでに白浪の濱松がえといふつゞきおぼつかなきよしいへり眞淵は浪は良の誤にて紀國なる白良の濱にや催馬樂に紀の國の之良々の濱とあるによりていへりしからば四言によむべししかるに此集卷九にこの歌白那弥之とていでたりされば猶白浪乃なるべくはおぼゆれどおなじ卷九に同國に白神の礒とよめればそれも那は加の誤にて白加弥之にやあらむとい

へりこれによらばもし浪は紙などの誤にもやあるべき千蔭は猶白浪のよする濱といふべきをはぶけるがかへりて古意ならむといへれどなほ眞淵がいへる如く古き詞つきともおぼえぬ事之また宣長は古事記なる幣都那美曾尒奴伎宇弖とあるによりて浪といふにしたがはれたれどそれは衣をぬぎ棄るさまをたとへたるにて據とはしがたくや土左日記の浪の礒にはとあるをもひかれたれどそれは此京になりての詞つきぞかし新古の別よくおもひわくべし眞淵が說なほみどころありといふべし濱松之枝は濱に生たる松の枝なり此集卷九には此歌松之木とあるを古本には松之木とあり松がねとよむべしさればこゝの枝も根の誤にて松が根なるべしといふ說みどころありされどそこにこの濱松のもとにて手向せさせ給ひし事を傳へいふを聞たまひて云々と注したるは非なり乃もじ此松がねにてたむけせしを乃とはいふまじきをや予根をしかるべくおもふ心は下にいふべし○手向草草は仮字にて種なりたむけに用ふる具を云たむけとは旅だつ時山上にてする祭の名なり又首途ならでも大かた旅路の無恙をいのるにもいへり後世神などに物たてまつるをたむくといふは誤之此集卷十三に相坂山丹。手向草。絲取置而云々とよめるをみればぬさも手向ぐさのうちなるへし代匠記にはくさはそへたる詞にて松を云松をむすびてたむくる也此集卷二に有馬皇子磐白乃濱松之枝乎引結とよめりといへり此說うけがたし乃もじ手向草乃松

とあらばこそあらめ又かの有馬皇子の結び給ひけむは又かへりみむのしるしにとこそはむすび給ひけめとぞおぼゆるこれは松がねにおひたる手向に用ふる物をいふなるべしされば松之根のかた心ひかるゝなり○幾代左右二賀云々　この濱松のあたりにてたむけせしは今は幾代までにかなりぬらむと云也此卷の上に　齊明天皇紀温泉の幸あり又中皇女命紀温泉におはしての御歌あり　齊明天皇はこの川島皇子の御祖母にまし〳〵中皇女命は御伯母なりされば　齊明天皇中皇女命などの紀國におはしゝついで此濱松のあたりにてたむけせさせたまひし事をよませ給へるにこそ左右は眞手の心にてかゝれたる字なる事前にくはしくいへり集中左右手ともかけり此脚結は大かた限あることのその限を超てのかなたの限をさす詞也年ふるといへど大抵かぎりあるべき事なるその限を超たる限をさして幾代左右とはおほせられたる也さまではおほせられずともありぬべき所のやうなれどこれはこの御歌の情たゞいく代へぬらむとのみにては切ならぬが故なり猶下に情をとけるにてらして心うべし賀は疑のか也この字濁音なれば加を誤れるなるべしその經たりし年のほどをしらむとおもふには也も同じけれど幾何誰などの類の疑の詞の下には必加をおくべき法なるがうへにいく代といふばかりの年の數は大抵もはかりしらるゝ心にいはでは情に切ならねば也奴(ママ)ば上にくはしくいへるがごとく年の經ぬるまでの間に御心はあるな

りこれもはら情にあづかる所也一云の者もじにては年の方むねとなり乃といへば經ぬる方むねとなるがたがふ也乃とある方あはれなるべし良牟計牟情においていづれにもあるべし

【靈】此御歌表はこの濱松がねなる手向草のたむけに用ひたりしより今はいくよといふばかりまでにか年のへぬらむとその手向草のひさしさをおぼすによみふせ給へる也されどこれ歌とよむばかりの事がらにあらねば必別に情ある事明らかなりされば思ふに上にいへるが如く　齊明天皇中皇女命などのことにて手向せさせ給ひしも今はかくれたまひて年いたくふりにしかばその御うへをしのび給ふ御心を述たまひし御歌なるべしもしこの御うへどもにはあらずとも必ふりにし人をしのび給ふ御心にはうたがひなき也しかるにいがて(ママ)かかゝる御詞はつけたまへるぞといふに今　持統天皇の幸の御供にてかの御うへどもをしのばせ給ふは憚あればこの手向草のいくよといふばかりまで年經たるらむとなかく\はかなき物のひさしきをもて詞とはし給へるなりさればこれ卒覽懷古の御歌なるにうはべはいはひ歌のやうなる詞づくり此集卷二比賣島にて女の屍をみてよめる歌のたくひ也上古はかゝる歌多し古人の倒語をみむはたやすからぬ事なり後世人こそかゝはりもなき物どもを題にひかれてはよしもなき歌をもよめど古人はさるはかなわざかつてせざりしかばもしかゝる御歎をはゞかり給へるにあらずは何の歎ありてか此手向草

の經たる年をばはかり給ふべきこの故に幾代左右二賀とはこと〳〵しくよませ給へる也けりかの御うへどもの御歎なるをばかく手向草の久しきうへにのみ御詞をつけられて今此幸のはゞかりをそこなひ給はず此詞づくりのさまよく〳〵めをも心をもとゞめて思ふべし

日本紀曰朱鳥四年庚寅秋九月天皇幸紀伊國也越勢能山時阿閇皇女御作歌

この皇女は川島皇子と御兄弟也此幸の時ともに御供なりけるなるべし日並知命の御妃　文武天皇の御母なり

此也是能。倭尓四手者。我戀流。木路尓有云。名尓負勢能山

言此也是能とはこれがこの何かと下の詞にかけていふ詞也也は疑なりこれとさすはなにゝもあれ物ひとつをさしていふ也このとさすはそのこれとさしたる物の據をさす也その擬をいふはすべて新意也後撰集に蟬丸これやこのゆくもかへるもわかれつゝとよめるもこれとは遇坂の関をさしこのとはその名のよしをさしたる也この遇坂の名はもと忍熊王の軍とこゝにあひしよりの名なる事　神功皇后の御紀につまびらか也しかるを行人のゆきかひにあふ故の名かといへるこれ新意也といふ所以也こゝも此勢の山を夫君と同等の名かとよませ給へるなりその例正しき事

おもふべし○倭尓四手者とは尓四手者は里言にデハといふ心也御客中にむかへてよませ給へる也御客中にては夫君の御事もおぼしたえておはすさまを此脚結にさとし給へる也これひとへに表をつゝしみ給ふ也されどこれ詞にあらはなればかへりて天津罪をうべし此けだめくはしくおもひしるべし○我戀流この句は下の勢につゞきてわがこふる所のわが夫の君といふ心なり十一字は挾める也としるべし○木路尓云々木は仮名にて紀路也有云はありといふのいをはぶける也ちふともよむべし紀路にさる山ありと人のいふをかねて聞おかせ給ひしをおほせられし也○名尓負勢能山上にいへるがごとく倭にしてはわがこふる夫を名におふ山かとの心之初五の也もじ此山といふ字までにかゝりて名におふ勢の山かとの心也

闡この御歌表は此山の名やまとにてはわが戀ひます夫の名同等の名したる山紀路にありとかねて聞おかせ給ひしが此山即かねて聞及ひたる山かと山の名を問ひあきらむるうへによみふせたまへる也されど山の名をとひあきらめむばかりの事ことしく歌とよむべきにあらねば必別に情ある事しるしされば思ふに御旅寐夜を經て夫君のこひしさ堪がたき御心を述たまひし也されどこれいさゝかも詞にあらはすべからぬは幸の御供にはべり給ひて夫君をこひ給ふは御心供奉に薄くきこゆべければつゝしみてかく山の名の事にのみ御詞をつけられたるまことに古人倒

語の用ひざまいとみやびたり上にいへるがごとく尒四手者といふ脚結やまとにては戀ひたまひ今この御客中にては思ひ絕ておはすさまをおもはせ給ひしひとへに山の名の事に御心ひたふるなるさまにみえむの手段也心ざしあらむ人はよく此御詞づくりをおもひしるべき也この言靈の事後世人はうくまじき事なれど紀路にはこの山ならでも名高き山は多かるを此山をしもとはせたまひしは必ゆゑなくてはあるべからざる事を思ふべしたゞ山のうへの御歌也とみゆるやうにあることそ此御歌のすくれたる所なれしかみゆとてしかなりと誣ふるは後世心なりやまとにしては戀ふとおほせられし夫君は日並知命なるべしされはおもふに此御歌は便につけて夫君におくらせ給ひし御歌なるべし日並知命この御歌をみそなはしたらむにいかばかり此皇女の御つゝしみをば心くるしくおぼしけむ歌はおほかたその情いさゝかも詞にあらはれぬはその心のうちふかく思ひはからるゝぞかし

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首并短歌二首

八隅知之。吾大王之。所聞食。國者思毛。澤二雖有。山川之。清河內跡。御心乎。吉野乃國之。花散相。秋津乃野邊尒。宮柱。太敷座波。百礒城乃。大宮人者。舩並氐。

旦川渡。舟競。夕川渡。此川乃。絶事奈久。此山乃。彌高良之。珠水激。瀧之宮子波。
見禮跡不飽可聞。

[青]八隅知之まへにいへり○所聞食きこしをすとよむべし食國とて領じたまふ國をいふ也古事記上卷に夜之食國あり○國者思毛しもといふ脚結の事脚結抄にくはし多かる物の中にひとすぢに心のそふさまをさとす詞也拾遺集にあまたみしとよのあかりの諸人の君しも物を思はするかなとよめるに思ふべし土左日記に春の海に秋のこの葉しもちるらむやうに云々とかける舟の多くこぎいづるさまたとへむ物も多かれど秋の木葉しも似たりとの心也春なるに秋の物もてたとへたることの思毛の脚結の義をつくされたりといふべしされば此脚結この用ひざまの如くそれにはかざるまじき物なるをとりたつるよしをいふ詞也としるべしこゝに國者思毛とよまれたる思毛の義は　帝と申せども御不足におぼす物もあるべけれどひろき天下の事なれば國にかぎりてはよき國も多くあるにといふにてそのよき國多かる中に吉野國をばすくれてよき國之とおもはせむがため也後世心ならば秋津乃野邊尓思毛とそこにこそおかめこゝに思毛をおかれたる詞の力思ふべし內父これを譯してニカギツテといへり吉野をしも　帝の御心とゞめさせ給ふをむねと

いふ事此歌の主意なりくはしくは下に情をとくにしるべし澤二(サハニ)とは多くといふ心之されど多しといふ詞もいにしへならび用ひたるを思へば必別あるべし多きの古語之と思ふはくはしからず思ふに多しは數の多き事之澤(サハ)は乏しからぬ心にて數にはあづからずとおぼし又ふさといふ詞も此類也それは里にフツサリといふ心にてその物のかさにていふ心とおぼしき也○山川之云々かはのかは濁りてよむべからず山と川ふたつをいふ詞なればなり濁る時は山にある川といふ義となる也（濁音の義すべてかくのごとし山櫻もさもじ濁れば山なる櫻といふ心也さもじ清(ス)みてよめば山とさくらふたつの事となるがごとし）淸河內跡とは山と川の淸くてめくれる地なればよき地なりとおぼしての心也河內とは河の內といふにて即川のめぐれるを云也 神武天皇の御紀に東有二美地一靑山四周とあるも山川のめぐれる地はよき地なる所以也これたゞ地のおかしきを賞するにあらず山川あたりに近ければ山より村を生じ川より魚を生じなどよろづたよりよき地なれば也跡(ト)はいつゝのとのうち也まへにくはしくいへりこれは 帝の氏吉野をしも御心づきにおぼす所以をはかり奉りていふ也この脚結もはら靈にひゞきたり○御心乎云々乎もじかうやうの冠に用ひたるはつねにたがへるやうなるもある也これは御心のよきといふをかく乎(ヲ)もじをおかれたる也しかるを乃(ノ)もじをはたらかせて乎(ヲ)とよまれたる也又御心をよすといふ心につゞけたるにやしからばみしきかしなどのしもじにてよしはよせさせ給ふといふほどの

心也いづれにもあるべしこれは冠詞ながらこの一時の冠なり冠なりと心得てひろく用ふまじき也吉野國吉野は郡の名にて國にはあらねど郡郷などを國といふ事いにしへは常也前にもいへるが如し堺をたてゝ人のすむ所はなべて國といひし也○花散相云々これを花ちるといふをのべていふ也と近世の學者みないひ人も皆それを信じたれど延約の事義なくてはあるまじき事予が隨筆にもいへり大かた留は宇籥なり良は安籥不は宇籥の音なるにこれ同義にあらむやうなしよく〱かへりみるべしこの良は里阿をつゞめたるにて花ちりあふをちらふといへる也きりあふをきらふといふに同じ例也やがてその時のさまを冠らせていふ之霞立春などの類之下に吉野の幸をあまたあげられたるをみるにこれは三年八月の幸の時にやありけむ秋津野は即吉野にあり此野の名のもとは　維畧天皇の御紀にみえたり野邊の邊は方の義也方角をさしさだむる脚結也他の方にわかちたる事もと上の思毛は此秋津の野べにしもといふべき心なる事上にくはしくいへるがごとくなれば氏邊もじ即思毛の照應にて思毛にかへたる心にみるべき也○宮柱云々是は芳野の離宮の事之太敷座波は布斗斯里といふに同じくその宮をやすくしろしめすを云也神典に古事記上卷於底津石根宮柱布斗斯理於高天原氷椽多迦斯理而云々とあるよりいふ詞なりこの詞の事古事記燈にくはしくいへりその大要をいはゞ地氣は天上に達し天氣は地底に達するを形容したる

にてわが御教の要語也されば後にもかく　みかどの御うへにのみ申すもこの故なれどかく後に歌によめるは歌のうへにはしひてこの本義にもよらずしてたゞ　みかどの宮處しろしめす事にいへりある注に高知高敷などに同じ語也とあれどもと高は建(タケ)のうつれるいつ〱しき義也太(フト)は細きの反にて心ぶとき義也(笠紫人は大小をふとしほそしといふこれ大小の義なるべし)この說くはしからずかし波(ハ)もじは下に大宮人のいそしくつかへまつる事をいはむ爲也〇百礒城乃云々　まへにいへり大宮人とはすべて百官を云こゝは從駕の人たちをいふ也　帝のこゝにませばこゝにて宮人のいそしきさまを云もはらみかどの御德をいふ也〇船並氐云々　並競は並は舟の多かるをいひ競はわれさきにつかへむとするさまを云ともにいそしきさまをいふ之旦川夕川わたるは此離宮へ川をわたり來て朝夕いそしくつかへまつるをいふ川のかなたにやどりたる人々なるべし又京よりも代替してつかへにまゐるをいふにや旦夕をいふは今もする如く諸宮人旦あるひは夕など時をさためてかはりて勤仕するをいふか又おほせごとありて事わきまふるとて旦まゐり夕まゐるもあるにもあるべしこれらをひろくふくみてみるべし渡の字上のは和太里(ワタリ)とよみ下のは和多流(ワタル)とよむべし上は伊緒たるべき事語をなす常なれば也さればこゝにて句とすべし〇此川乃云々　乃(ノ)はふたつながらよせの乃(ノ)也ノ如クといふ心なりこの四句は川の如く山のごとくたゆる事なくいや高くあるべきよしをいふ

也これは此離宮の事也これ上の句をうけてそこよりうみ出たる四句なり爰におはせばこゝにかくいそしくつかへまつるばかりの御德にませば此宮なほ此後も絶る事なくいや高くあるらしとの心也弥高とは前にいへるが如くいつ〳〵しき義也良之(ラシ)はらしきの心にて未然をはかりていふ也此良之(ラシ)の義下に情をとくにてらして思ふべし○珠水激云〻　古点たまみづのとよめれどいはばしると眞淵がよめるに從ふべし石はしる水の玉なすさまをもてかける字なるべし瀧之宮子(タギノミヤコ)波今夏箕川の下に宮の瀧村といふ所あるはこの宮の跡ならむといふ說あり猶よくたづぬべし一夜にてもみかどのおはします所は都をなす故にやがて都ととなふる事上にいへるがごとし波(ハ)もじおもくみるべし行宮も所〻にありていづこも〳〵おかしからぬにはなけれどゝの心なり猶下に情をとくに照らしておもふべし○見礼跡不飽可母とはいかばかりおかしき物もいくたびもみればあくならひなるにとの心をもちていふなり可母(カモ)は上にいへるがごとくすべて事の常にたがひ理のあたらざるを歎ずる詞也こゝはいくたびみてもあかざる事大かたの地にたがへるを歎じたるなり

情此歌表は　帝のこゝにしも御心をよせさせ給ふもことわりやとこの吉野の絶勝の地なる事を感歎したるによみふせられたる也されどこの地を賞歎するばかりの事がらを古人ことと〳〵しく

歌によむものにあらねば必別に情ある事しるしされば おもふに大宮人者云〻の句〻は　帝の御徳化をたゝへ奉れるやうなれど諸臣各家をさかりをりその勞いふばかりなきを思はれたる情しるく又此川乃云〻の句〻は此離宮のさかえむ事をほぎ奉れるやうなれど此後もたび〳〵幸まさむ事を心くるしくおもはれたる情みえ又このよし野かばかりの勝地なるが故に數度の幸ことわり也と思へる心のやうなれどかゝる勝地ならずは數度の幸もしたまはじとの情みゆその外脚結どもの義にも情はしるしもと幸はから國にて巡狩などいふが如く國のさまをも御覽ぜむためにはしかるべけれとしからば國〻所をかへつゝおはしますべき（ママ）に此吉野にしも數度幸したまふはたゞ此勝地を賞したまひての事なればひとへに御みづからの御心をやらせ給はむ爲ばかりなる事しるししかるにそのたび〳〵費も多くかつ從駕の人〻おほせ事なればやむごとなしとはいへど各家をさかり勞もすくなからず又幸のたびにはその國の守國民までも加恩はありといへども國守國民にいたるまでそのたび〳〵役せらるゝのみならず心をも勞し費も多きに　帝はまのあたり臣民のいそしきをみそなはしてさる事あらむともおぼしめさずいよ〳〵幸もたびかさなるべきをわびしくおぼゆるより大かた此芳野の勝地なるさへうらめしきまでにおぼゆる心をば述られたる也臣民うらめば　帝の御德もそこなはれたまはむがかしこさに諫をも奉らほしき心な

るべしかくいふ所謂は此下石上麻呂卿の從駕作歌の左注に紀の朱鳥六年伊勢國の幸を三輪朝臣高市麻呂冠位を脱し朝に擎て農作之前車駕未可以動と申しかど帝したがひたまはずつひに幸し給ひし事もみゆればなりその直諫の行はれざりしと此歌の言外なるとをくらべてわが御國ぶりのかしこさよく／＼思ひしるべしこの歌の言靈の妙用ありきなかりきはしられねどしるしはなくとも妖氣にはあたるべからず直と倒の別かくの如しくはしく弁ふべしから國にてはかゝるすぢの事顔ををかし用ひられざる時は死を以ても諫るをば臣の道なりと心えたれどもわが御國ぶり直言は詮なくてしかも弊あることを明らめて倒語の用はじまれる御國ぶりなるが上に人麻呂ぬしもと高官にもあらずいよ／＼諫奏したてまつるべきにあらざるが故にかくのごとく詞をつけられたる也大かた詞のうちあひ脚結の置ざまなどにもとつ心はみゆる事よく／＼古人の詞づくりをみしりてさとるべき也猶この奥にも幸をわびたる歌あまたあるをもて思ひあはすべきなり

反歌

雖見飽奴(ミレドアリヌ)、吉野乃河之(ヨシヌノカハノ)。常滑乃(トコナメノ)。絶事無久(タユルコトナク)。復還見牟(マタカヘリミム)

○雖見飽奴まへに同じことの勝地なるよしを云下に應ぜむがため也○常滑乃とはとこしへになめらかに流るゝを云也此集巻十一に隱口乃豊泊瀬道者常滑乃恐道曾(コモリクノトヨハツセヂハトコナメノカシコキミチゾ)(ママ)とよめるも川の事なりと或說にいへり乃(ノ)もじはよせの乃(ノ)也ノ如クと心うべし○絶事無久この川の如くに絶ずといふ也復(マタ)とはもと再遍の事をいへど上の絶事無久にひかれていくたびもといふ心となる也これならでも

上にひかれ下にひかれて義のうつる事詞の常なり拾遺集に松もひきわかなもつまずとあるは下にひかれて松もひかずといふ義となるがごとし

○此歌表はかくのごとき勝地なれば此のちも　みかど絶ずおはすべければ我もたえずこの勝地をみむ事　帝の御蔭なりとふかくよろこびたる心によめりされど情は長歌の下にいふが如くもと幸のたび〳〵なるをなげかしくおもふ情より出たる歌なるをつゝしみて表はよろこびたるやうによみなされたる也臣民の心なべて皆われにひとしかるべしとあはれみたる心もこもりていとも〳〵めでたし長歌には　帝の御うへをもはらよみ此反歌はみづからのうへをよまれたるなり

安見知之(ヤスミシシ)。吾大王(ワガオホギミ)。神長柄(カムナガラ)。神佐備世須登(カムサビセスト)。芳野川(ヨシヌガハ)。多藝津河內尒(タギツカウチニ)。髙殿乎(タカドノヲ)。髙知座(タカシリマシ)而(テ)。上立(ノボリタチ)。國見乎爲波(クニミヲスレバ)。疊有(タヽナハル)。青垣山(アヲガキヤマノ)。山神乃(ヤマツミノ)。奉御調等(マツルミツギト)。春部者(ハルベハ)。花挿頭持(ハナカザシモチ)。秋立(アキタテ)者(バ)。黄葉頭刺理(モミヂカザセリ)。一云黄葉(モミヂバ)加射之(カザシ)。遊副川之(ユフカハノ)。神母(カミモ)。大御食尒(オホミケニ)。仕奉等(ツカヘマツルト)。上瀬尒(カミツセニ)。鵜川乎立(ウカハヲタテ)。下瀬尒(シモツセニ)。小網刺渡(サデサシワタシ)。山川母(ヤマカハモ)。依氏奉流(ヨリテツカフル)。神乃御代鴨(カミノミヨカモ)

〔言〕安見知之云々　まへに同じ○神長柄云々　孝徳天皇の御紀に惟神我子應治故寄(カムナガラワガミコシラスベシカレヨサシキ)とあるを舎人

皇子自注し給ひて惟神者謂下随二神道一亦自有中神道上也とみゆもと奈賀良といふ詞後世にては心えあやまれり里言にソレナリニソレグチニなどいふほどの心之されば惟の字をあてられたる也神道にしたがひ給へばやがて神にましませば也神佐備世須登は　帝はやがて神にましませば人のはかりがたき御わざせさせ給ふとの心なり登はとての心也神佐備とは上の宇良さびの下にくはしくいへるがごとく神慮のおのづからあらはるゝを云世須は前にいへるがごとくセサセラルゝといふほどの心なりこれ此吉野に幸ましますを云也○芳野川云々　かうち前にいへり○高殿乎云々　たかどのはつねには樓をいへどもたゞ高くつくれる殿をいふ也乎もじもはら神さびをいへりたゞつねます大宮にのみいましてこゝの高殿はしろしめすべくもおぼえぬにといふ也高知座而上にいへるが如く高知は神典の詞を本とすいつ〳〵しくしろしめす心之而もじは例の下の事に直につゞく義にあらずとするべし○上立云々　國見はまへの　舒明天皇の御製にくはしくいへりから犬のすなる巡狩の類とするべし○疊有云々　これより下小網刺渡までは此高殿にましますにつけての妙用を擧たるこたゝなはるは重疊したるかたちを云奈波流はうべなふまかなふなどいふ奈布の布の波にかよひそれに流もじを添たる也すべてからやうの詞をそへたる詞はうつたへにその一事をするとはなくておのづからそのわざなるかたちをいふ也青垣山とは青山の垣

の如くたちたるを云（或説にそばだてるをいふとあれど垣をば聳つ事にもちひたるをみず）古事記上卷に吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上此者坐御諸山上神也とみゆ○山神乃云々　山つみは山神なり宣長尺して山津持の義といへりいかゞあらむ予おもふに津見は神典に（古事記上卷）意富加牟豆美命の御名あるを思ふに大神集の義にて麻里をつゞむれば美なり大祓祝詞に高天原尓神留座をば古訓かみとゞまりましますとよめるがことわりなさに眞淵これをかむづまりましますとよまれたるそのつまりこれなりつめともかよはせたる例ありされば つまりつみともに集る義にて山津見は山によれる神といふ神の集まります大神なれば大山津見神とは申す也大綿津見もこれに同じ○奉は古訓たつるとあれどいかゞあらむまつるとよむべしたてまつる義也御調は貢物を云等といふはこれまことの貢物といふにはあらねど國〻の奉る貢物のごとくといふほどの心也よせのと也此下の大御食尓仕奉等もこれに同じ山神河伯ともに神わざなればあらはにはみえねどそれにひとしき心にていふ也とするべし○春部者部は前にいへるが如く方をたつる詞にて他の季にわかちたる也花挿頭持とは山上に花のさきたるをば山つみの花をかざし持たるに見なしていふ也持は添たるのみ也といふ說あれどしからずこれ山神の貢と奉り給ふさまにいふなれば添たるばかりにあらずさゝげもちて奉るを云挿頭もと頭に枝を折てさすをいへどたゞ枝を頭にさゝげたるをも概してかざすといふ

事つね也かの說は頭に小枝をさすに着したる說也〇秋立者とは上に春の事をいひたる故に立者とはこゝはよまれたるなり黃葉頭刺理これも花に同じく心うべし皆　帝をなくさめ奉らむとての神の御心なるになしていへる也勢理と江緯にうつしたるは例の其未然をおもはせたる也一云の黃葉加射之を思ふにこゝは山神の御わざの終にて下は河伯の御わざにうつる所なればかくいはむもしかるべけれど江緯にうつせる詮ふかくもみえずかつこゝに勢理といはゞ下の刺渡もさしわたすとよむべけれどそれより下の語勢しかよむべしともおぼえねばこゝも此一本の方にしたがふべくや〇遊副川之云々　今宮の瀧の末にゆ川といふ野あり氏集卷八に結八河内とよめるこれならむかといふ人あり上の靑垣山は名所にあらねばこゝもその轍にて上と聯句にみるべしといふ人もあれど夕川の義ともおぼえずされど此下のわざ鵜川も夜するわざ也小網さすわざはひるなれば夕川にはあらざる事しるし母は上の山神によせていふ也〇大御食尒云々　けは食物を云大御とたゝふるは大かた　帝の御うへの事之仕奉等上にいへるが如くこれまた神わざなれば等とよめり〇上瀨尒云々　四句上津瀨下津瀨ことによしあるにはあらざるべけれど神典古事記上卷　禊祓之件の詞を用ひられて川のうち悉く大御食のれうになし給ふさまをいはむ爲也中津瀨はおのづから上下の間にこもるべし鵜川乎立鵜つかひどもをたゝするを云小網は和名抄に䍜佐天網如ニ

箕形ニ狹ㇾ後廣ㇾ前名也とあるこれ也たゞあみともよむべけれど此集巻十九に平瀬尓波左泥刺渡云々ともよめれば左泥とよむべし鵜川も小網もみな人のするわざなるをかく神の御しわざのごとくいひなせるは大かた神は御身おはしまさねば人の言わざをかり給ふ事神典につまびらか也くはしくはこゝにいひつくしがたし古事記燈にみるべしそも／＼人麻呂ぬしをば歌のひじりとたゝへ今の世となりては神といつかせたまふ事倒語の至妙なるはいふも更なり此ぬしの歌どもをみるに神典にくはしかりしとみゆる事多しかみつ世の人たちはこのぬしにあひおとらぬもすくなからぬをひとり此ぬしをしもたふとばるゝは神道のいたり深くてその人ざまたぐひなかりければなるべしとぞおぼゆるこの小網刺渡前に論らへるが如く黄葉頭刺理とよまばこゝも刺わたすとよむべき事なれど此下なほ山神河伯の事をうけてやがて山川母依氐奉流とよめるは刺わたすとはよむべからぬ語勢也これ語勢の常也くはしくはこゝに書とりがたし志あらむ人には口授すべし○山川母云々　山神河伯もといふ也川のかもじ淸てよむべし山川ふたつなれば也此母もじは山神も河伯もといふにはあらず臣民のいそしくつかへまつるに（此事は上の長歌によまれたる事之）　臣民のみならず山神河伯もといふ心也母もじの用ひざまこれにてみしるべし依氐奉流とは臣民とひとつによりてつかふるといふ也○神乃御代鴨　みかどをやがて神として神乃御代とはいふ也上にもす

でに神長柄とよめり鴨はかへす〴〵いへるが如く常にも理にもあたらぬ事を歎ずるにて臣民のみならず山神河伯までもつかへ給ふを歎じたる也

〔靈〕此歌表は　みかど此吉野におはしませば臣民はいふもさら也山神河伯までもよりてつかへまつるさま大かた神にます此　帝の御徳几處のはかり知がたき事かなと歎じたる也上の長歌には臣民の勞をわすれて此離宮につかへまつる事をいひ此長歌には神までもいそしくつかへまつり給ふ事をよまれたる也されど　みかどの御徳をほめまつるを本情ならばかゝる詞はつけらるべきにあらず大かた人をほむる事詞にあらはなるは諂におつるがゆゑに古人かたく直言せぬ事之しかるを後世のやうにさしつけてこそよまれね（神になしてよまれたれば也）かくよまれたるは必本情あるが故ならずやされぱおもふにこれ又上の歌どもに同じくたび〳〵の幸に臣民勞しさま〳〵の弊あるを思ひて諫め奉らまほしさをつゝしみてつけられたる詞ども也かく興足り食あくばかりなる勝地をいとなか〳〵にうるさくおぼえてかくはよまれし事言外にあふれたり

反歌

山川毛（ヤマカハモ）。因而奉流（ヨリテツカフル）。神長柄（カミナガラ）。多藝津河内尓（タギツカウチニ）。船出爲加母（フナデセスカモ）

[高]山川毛長歌なると同じ因而奉流も亦同じ此二句は神長柄の句へつゞけたる也臣民はさら也山神河伯までもよりてつかへたまふばかりの神にませばといふなり○神長柄は猶長歌なるに同じこゝはかの里言のながらにまぎらはしき所也混ずべからず○多藝津河内尓云々　これ又上に同じ離宮ある地を云也○船出爲加母爲をせすとよめる然るべし此御舟出即長歌にいはゆる御神さびにてそこにも世須とあればするとはよむべからずたとひ長歌にさはなくとも　みかどの御うへなれば世須とよむべし船出とは芳野河を御舟にて渡らせたまへば也鴨は神ながら舟出し給ふ御心のはかりがたさをなげきたるなり

[靈]此歌表は臣民のみならず山神河伯までもつかへまつるばかりの神にますを人のするわざのやうに此吉野に舟出したまふ御心凡情にてははかりがたきを歎きたるによみふせられし也しかれどもたゞこの　帝の御心のくすしくあやしくますをたゝへ奉るを本情ならばなほ長歌に論らへるが如き弊あればこれ又心はたび〳〵の幸をなげきたる也以上長短四首今とけるがごとくその靈ひと筋也詞のうへみなおのづから矩あるをよく〳〵みしりてかへす〳〵表に目を奪はれずしてみるべしいと遠く深く倒語をもとめたる歌はいよ〳〵表にめをうばゝれやすし上手の歌はことに心を用ふべき也

右日本紀曰三年己丑正月天皇幸吉野宮八月幸吉野宮四年庚寅二月幸吉野宮五月幸吉野宮五年辛卯正月幸吉野宮四月幸吉野宮者未詳知何月從駕作歌

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麻呂作歌

持統天皇の御紀六年三月伊勢の幸ありて志摩をも過給ひし事みゆこのをり阿胡行宮にもおはしゝなるべし左注あやまれり

嗚呼見乃浦尓。船乘爲良武。𡢳嬬等之。珠裳乃須十二。四寶三都良武香

[書]嗚呼見乃浦といふ所伊勢になし志摩國英虞郡に行宮あればそこなるべし此集卷十五に安胡乃宇良尓布奈能里須良武乎等女良我安可毛能須素尓之保美都良武賀といふ歌あるはこの重復なるべしその左に安美能宇良ともあるによりてこゝをもあみのうらとよむは誤也良武は京よりおもひやられし也此良武は中の良武とて詞の中におく也下のをとめらにつゞけて心うべし○𡢳嬬等之とは從駕の女房をさせる也をとめは少女未通女などもかきてわかき女の称にてをとこに對せる名也くはしくは予が土左日記燈のはじめにいへり大かたをとめ等とよめども一人のをと

めをさす事古人倒語のつね也これ一人にせまらざるやうにわざと等(ラ)とはいふ也これは數人とも聞ゆれど猶心にさすをとめありけるなるべし數人とはみがたき歌もあるはこの故なり○珠裳乃須十二珠のごとくめでたき裳といふ也かの卷十五には安可毛(アカモ)とあるによりてこれをもあかもとよむは非なり裳をしもいふはしほみつらむかといはむがため也珠裳としもいふは潮にぬるらむくちをしさを思はせられたるなり○四寶三都良武香かは疑なり潮にぬるらむかといふべきをかくいふ事古語のみやび也これ潮かみつらむの心なれどそこに香(カ)をおけは潮か又は何かみつらむとの心となり下におけば潮みつらむか又はさもなきかとの心となる也後世は良武香(ラムカ)とはよまず後世人は古風なる脚結也など心えたれど義かくたがふを以て香良牟(カラム)良牟香(ラムカ)歌によりてともによむべき事なるをしるべし

〔靈〕この歌表は從駕し奉りて阿胡の浦に舟乘すらむ女房たちの珠裳のすそに潮みち來てぬらすらむかとその女房たちの宮中にてならはぬ事なればめづらしとやおもふらむ又はわびしとやおもふらむと思ひやりたる也されどおもひやるばかりの情はたゞ心に思ひやるにてやみぬべくこと更に歌によむべき事にあらぬをおもふに從駕のをとめのわびしきめみるをいたはりたる歌にてその本を推せばこれ又幸をすべなく思はるゝ心よりおこれる也この情いさゝかもあらはならば

必みかどの御心にそむくべきをはゞかりてめづらしからむともわびしからむともいはずたゞ潮みつらんかとのみいへるうちみにはその興をわれも羨みたるやうに詞をつけられたる上手の詞づくりよく思ふべしこれは從駕のをとめのうちにさす人ありて贈られたるにこそこの三首がうち第一第三は女房のうへなり第二はをのこたちのうへ也從駕の男女のうち親屬かまたは親友なる三人に贈られたる歌なるべしかくいづかたにも片つかず詞をつくる倒語のいたり也かしこれらを詞づくりのかゝみとはすべきなり

釧着(クシロツク)。手節乃崎二(タフシノサキニ)。今毛可母(イマモカモ)。大宮人之(オホミヤビトノ)。玉藻苅良武(タマモカルラム)

吉釧着は手節の冠なり釧とは神典（古事記上卷）に佐久久斯侶伊須受能(サククシロイスズノ)宮とみえて五十鈴の冠とせられたるをおもふに釧は手につくる物にて鈴にひとしければなるべし玉もてもつくる物なればにや玉釧ともよみたり今本釧を劔に誤れり劍は手節につくるものにはあらざるをや手節乃崎は志摩國答志(タフシ)郡なるべし○今毛可母ある注にふたつの毛(モ)は助字にて今やといふ心也といふは例の僻也古今集に今もかもさきにほふらむたちばなの小嶋のさきの山ぶきの花とよめるに同じ上の毛(モ)は今とさしつけずして今頃などゆるゝかにいはむため也下の可母(カモ)は例の疑なりこれ今やの心には

あらぬがうへにやとかの用ひやうたがひめある事脚結抄にくはし可は今にあらずは少しさきか少し後かをしらむとていふ心也やはいつしかあらむともしられぬにいふ脚結にてこゝにかなはず此手節乃崎は今にあらずはさきか後かには必過給ふべき所なればもとより也とはよむまじき事がらなるを思ふべし下の母もたゞ助字とはいひあはむべからず（助字やすめ字發語などいふは國學者の遯辭なる事予が隨筆にくはしくいへり）常用ふる疑の可母なるをや〇大宮人之云々從駕のをのこたちをさす也これもをとめらに同じくひろくはいへとこのうちに必さす人ありてよめるなるべし之もじ心をとゞむべし玉藻かるべき身がらの者の苅らば之といふ詮はあるべからずかるまじき人々のかるを思はせむがための脚結なる也之もしはつねに人の心もとめず瓦石の如く用ふる脚結なれど古人はかく心をとゞめて用ひたり玉藻かるらむは前の麻續王の贈答によれば玉藻は食料に苅る也されどこゝは從駕なればさるわびしきわざすべきやうはなければこれはたゞ海人どもがするわざを戯にまねびてすらむとおもひやれる心とみるべしをのことてもならはぬわざなればおかしとや思ふらむ又はわびしとやおもふらむとの心也

〔靈〕此歌表は從駕のをのこたちの手節の崎にて玉藻をかかるらむ海人こそつねにからめ大宮人のかるらむは思ひかけぬわざなれば中々おかしくや思ふらむわびしくやあるらむとおもひやりた

るによみふせられし也されどさばかりの事ことぐしく歌とよむべきにあらねば必情は前の歌にひとしき事明らか也詞のつけざまよりはじめて前の歌にてらして同情なる事をしるべしこれ又いづれへもよらぬ詞づくりのみやびよく〳〵めをとゞむべし

潮左爲二。五十良兒乃島邊。榜船荷。妹乘良六鹿。荒島囘乎

言潮左爲は潮さきの義かといふ説あれどきのうつれるならば爲もじ以たるべし此説非なり爲は和獎の合音にて潮さわぎ也潮のみちくる時波のさわぐを云といふ説したがふべくや此集卷三に塩左爲能。浪乎恐美云〻　卷十一に牛窓之。浪乃塩左猪云〻　卷十五に於伎都志保佐爲。多可久多知伎奴などよめるいづれも潮さわぎの義あたれりまへにいふ潮さきは仙覺が説也伎を爲にかよはせりとの心なるべけれどうけがたし契沖は塩のさしあふ所をいふといへり是は大祓詞に塩の八百會といへるなどをばおもはれけるなるべし左阿爲比ともに同韻なるが故なれどしかにもあれ此例どもにかなへりともおぼえず今思ふに此集卷十四に安利伎奴乃。佐惠佐惠之豆美。伊敝能伊母尓。毛乃伊波受伎尓氐。於毛比具流之母　神典古事記上卷に口大之尾翼鱸佐和佐和迩控依騰而云〻　ともあり此集卷二に小竹之葉者。三山毛清尓。乱友。吾者妹思。別來礼婆ともあるこの佐惠佐和佐夜

ともに佐爲に同じくさや〳〵と鳴る音をいふ詞也いづれもさや〳〵と鳴る音をもてさわぐ事を思はする事古言の常なり神典に（古事記上卷）豊葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝氐有祁理とみえ　神武天皇の御紀に夫葦原中國猶聞喧擾之響焉（聞喧擾之響焉此云左揶霓利奈離）など皆あしき神のさわぐを音もてさとされたる證なりされば佐和藝の（ママ）說もさる事なれどもと潮のみちくる時さわ〳〵と鳴る音を潮左爲とはいふなるべし○五十良兒乃島邊これは三河なるいらこのあたりなる島をいふなるべし邊はその嶋の方をといふ也○妹乘良六麻此妹は從駕の女房たちのうちをさす也麻は疑のかなり此麻もじは上の潮左爲尒をもちていふにて潮左爲の時しも妹のるらむかといふ心也良六麻の心得まへに論らへるに同じ○荒島囘乎この島囘即いらこの嶋わをさす也囘はそのめぐりをいふ也浦囘里囘などに同じこの一句は添たるものなり一二三四の句意はもし潮左爲の時にしも乘るらむかとの心にてもはら潮左爲のうへにかゝれりそこもとあらき嶋囘なるをとの心にてもとよりあらき島囘なるを潮左爲の時にしもわたるらむかとの心なり乎は里言にジヤニジヤノニといふほどの心也土左日記にまして女は舟ぞこにひたひをつきあてゝねをのみぞなくとかゝれたるおもひあはさる女の乘らるべき嶋囘ならぬをとの心にて乎とはいふなり

【靈】この歌表は五十良兒の島はかしこき嶋囘なるに潮左爲の時にしもか妹のるらむをのこすらか

しこかるべきをまして女のいかにかしこかるらむとふかく女のかしこかるべきをいたはりたる也されどこれ父情はひとへに幸をなげく心よりよまれたるなる事詞づくり又脚結に明らか也詞の表にはたゞ妹のゐらむかとのみいひてくるしからむともわびしからむともいはれざりしは幸にはゞかりて也詞のつけざま公私をそなへたる妙處よく〳〵味はふべし以上三首同情なる事上にいへるがごとし

當麻眞人麻呂妻作歌

この當麻眞人麻呂は同じ行幸の從駕にて京にとまれる妻のよめる也此隱の山は伊賀にて大和より伊勢にくだるには必伊賀を經ればなり猶この次下の歌も從駕のたびの歌なるをも思ふべし

吾勢枯波。何所行良武。已津物。隱乃山乎。今日香越等六

〔言〕吾勢枯波はおのが夫をさせる也波もじ前にもいへるが如く後世人はかくざまの所にはえおかずなれり夫在京のほどは同居するが常なりしか今旅にありてあふべきよしもなき歎よりいふ也大かたにはたゞこれはかゝりかれはしかりなど物事の分別のためにおけるもつねは大かたにおもへる物のぬけ出たるさまをなげく詞なるが故におのづから他に異なる事をいふ義はある也今

尺するはその義のくはしき也古人かく用ひたる波もじ多し○何所行良武とは夫が旅中をおもひやりていかなる處をかゆくらむと夫がゆくらむ處のしらまほしさにいふなり○巳津物は假字にて澳津藻乃也隱の冠なり澳なる藻はつねに隱れてみえざればいふなり澳は塩干にたに深ければ也賴政卿の女が潮干にみえぬ澳の石のとよめるはこれらより思ひよれるなるべし巳は起の畧字なるべし○隱乃山乎隱はなばりとよむべしいにしへ隱るゝをなばるといふなり伊賀國に名張郡ありそこの山なるべし乎もじは今日隱の山を越たらむにもあれ京まではなほ行程も近からねばかつてねがはしからざる名張の山をといふ心也乎もじの義まへにときおけるが如し○今日香越等六この今日といふ事條にみまじき也かくいふ故は今日たにいまだなばりの山をも越ずは夫が歸期いと待遠ならむとその程をまちくらさむ事いかにくるしからむとの心をもたせてよめるなれば也されば此一首の眼なりとしるべし香は疑なり大かた想像のうへなれど大抵おもひはかりありて香とはよめる也上に何所行良武といひて又下に隱乃山乎今日香越等六とよめる事いづれにもあれひとつにてありぬべき事のやうなれどしからず上はひろくいづこをかゆくらむとよめるにてさて日をかぞへなどしてみれば大抵今日などは名張の山をこえもすらむかとさま〴〵に思ひわづらふ情かくをさなげなる詞づくりにてかへりておもひやりはふかき也其さま〴〵に思

ふ心を巳津物の冠にかへたる也下に靈をとくにてらして此詞づくりの妙をさとるべし此妻いかなりし女ぞや此歌の詞のつけざま至れりといふべしこれは夫の客中へおくれる歌なるべし

靈此歌表はたゞいづこあたりをかゆくらむもし今日などは名張の山をこゆらむかと夫の在處をおもひやりたるばかりによみふせたる也これは行さまの路の事にはあらざるべししかみらるまじきにはあらねどかへさの路の事とみむ方待かねたる情いとゝ切なるべししかるに夫の在處をおもひやるばかりの事を古人はこと〳〵しく歌によむべき事にあらねば思ふに夫の從駕日を經て歸期のまち遠さにいかで一日もはやくかへらむ事を促したる情をよめる也しかれどもたゞあは〳〵しく夫の客中を思ひやりたるばかりのやうに詞をつけたるは私の旅にあらねば　帝の幸に日をかさね給ふをうらみ奉るに落べければ憚りてかくはよめる也前にも論らへるが如く何所行良武今日香越等六と等六をふたつかさねてをさなげなるにも今日といへる餘情にも心のうちにさま〳〵思ふ事どもはあふれてかへす〳〵この詞のつけざま凡ならざるをよく〳〵思ふべし

石上大臣從駕作歌

これは麻呂卿也この時いまだ大臣にはあらねど後よりかくはかける之前の鎌足公の書ざまにも

おもふべしかゝる例集中に多し

吾妹子乎。去來見乃山乎。高三香裳。日本能不所見。國遠見可聞

[言]吾妹子乎云〻いざみむといふ心にいひかけたる也もと此歌妹があたりたにみまほしき心よりいできたるなれば妹をいざみむと思ふ心即本意なれど冠辭になして公をそこなはぬ古人の手段これにかぎらず多し去來見乃山いづかたにかしられず伊勢伊賀志摩などのうちにある山なるべし乎三とうちあはせてよむ事上にくはしくいへり去來見乃山が高さにかもといふ心也くはしくいはゞ倭の國が此山を高がり思ふ故かもといふ心なり香裳は疑なり次の句の日本能不所見にうちあひたる也いざみの山を高み倭のみえぬかもといふ心なるをこゝに香裳をおくべからぬ義なるが故に上に香裳を置たる也私に引あげておけるにはあらず香裳はもししからずはいかなる故ぞと云心なり〇日本能不所見（日本とかけるは倭國の事之此事くはしく前にいへり）みゆべき大和國のみえぬが不審なる心によめる妙なり先注書にこれを大和なる妹があたりをみむとすれどゝいふ心也と注したるもと此歌妹の戀しさよりの詞づくりなれど直に妹ともいはずしてやまとのみえぬとのみ詞をつけられたる此歌の妙處なるをやがてやまとの妹など注するは此詞づくりの活處を殺すわざなりかし古注に

はかゝる尺多きは内外の混ずる也内外幽顯はかたく混ずべからざる事わが神典の要訣わが御國ぶりのかしこさ也たゞ表を尺すとならば表のみたるべし此詞づくりふかく心を用ひられひろくおもひをわたされて意もなく味もなき所に詞をつけられたるをたゞ一言に殺さむはいとも〳〵くちをしく言代主神の御にくみもいとかしこき事にあらずや内外を混ずればすべて歌のよみやうも方たゝず古歌もつひにそのたましひを得る事あるべからず○國遠見可母いざみの山の高さにみえぬかもししからずは國の遠さにみえぬかとその所謂を決せむとする心也此可聞(カモ)の義くはしくいはゞもし國の遠さにてあらずは何故ぞいづれにもあれゆゑなくてはみえざらむやうなしとの心也上に去來見乃山を高みかもといひ又國遠みかもとよませ給へるはひとつにてはあたらざらむ事を思ひて也これさらに曲節にあらず情にひかれてのわざなり山高さにかといへるも國の遠さにかといへるももとよりそこよりみゆべき大和にあらぬを知ながら所以を設出たる事前にいへるが如くもとみゆべき物のみえぬやうなるまことに上手の手段なりよく〳〵古人の倒語の用ひやうめをとゞむべしかくをさなきは倒語の妙所かつ餘情もこゝより尋ねしらるかし

[靈]此歌表はこゝよりみゆべき倭のみえぬは山高さにか國遠さにかこのみえぬ所以のしらまほしきをもはらとよみふせ給へる也されどかばかりの心をば古人歌によむ事なくかつこのみえざる

所以を擧られたる二事ともにいとをさなきは必別に情あるしるし也さればおもふに從駕に日を經て都におきたる妹の戀しさ堪がたきを家の妹に告やられたる歌なる事明らか也されど此情いさゝかもあらはなれば供奉に心專一なるべきにそむき從駕に日をふるをうらむるになりぬべきをはゞかりてこゝよりやまとのみえぬをいぶかりたるに詞をつけられたる也詞のつけざまかへす〲いとあやしきまでめでたくこそ

右日本紀曰朱鳥六年壬辰春三月丙寅朔戊辰以淨廣肆廣瀨王等爲留守官於是中納言三輪朝臣高市麻呂脱其冠位擎上於朝重諫曰農作之前車駕未可以動辛未天皇不從諫遂幸伊勢五月乙丑朔庚午御阿胡行宮

これは　持統天皇六年也朱鳥六年とあるは誤也此五月云〻より以下は紀をみあやまりたるにてこれは以前の事也古注書にくはし

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌

これは　天武天皇の皇太子草壁皇子尊之御子也（日並知命の御事之）この輕皇子は　文武天皇わかくまし〱ける時の御名なり安騎野は式に宇陀郡阿紀神社ありこの野なるべし此野に父尊日並知尊の御獵

したまひし事此前にも又巻二にもみゆその此はいまだ王にてまし〳〵ければこゝに皇子とかけるは後よりたふとみてかけるなるべし

八隅知之。吾大王。高照日之皇子。神長柄。神佐備世須登。太敷爲。京乎置而。隱口乃。泊瀬山者。眞木立。荒山道乎。石根。楚樹押靡。坂鳥乃。朝越座而。玉蜻。夕去來者。三雪落。阿騎乃大野尓。旗須爲寸。四能乎押靡。草枕。多日夜取世須。古昔念而

言八隅知之云〻 まへにいへりこれは此輕皇子をさし奉れるなり皇子をもかく申す事つねなり八隅知之よりはじめてもと神典の御教のうへにいふ詞にて天下をしろしめすうへばかりの事にあらず此故に皇子にも申す也此義くはしくはこゝにいひつくしがたし古事記燈にみるべし○高照云〻 古事記に多加比加流比能美古とあればこゝもたかひかるとよむべしといふ説あれど此集中高光とかゝれたる所はさもあるべしすでに日神の御名を天照大御神とも申せばたかてらすともよむべきなり○神長柄云〻 上にくはしくいへるに同じ此阿騎野にいでますを神さびせすとはいふ也世須登もまへに同じ○太敷爲云〻 ふとしくも前にくはしくいへり爲は例のセラル、の義也

御心ふとくしろしめさるゝ都といふ也置而とは都をたち出させ給ふ事をば御あとにおかせ給ひてとはいふなり都を出させ給ふとはいはで京乎置而といふは古言のみやび之前に近江の遷都の事をば倭乎置而といはれたるは今とは事重けれどいづれも立出たまふをいふは同じきなり〇隱口乃云〻　泊瀬の冠詞也こもり國の心にて冠らせたる也と眞淵のいへる可從隱口の義也といふ説もあれど口も山口などこそいへこもり口といはむ事あるべくもおぼえすこもり國かへす／＼しかるべし冠辞考にくはしく論らへるをみるべし者もじはこと山とひとしからぬよしを歎じたる也荒山道なれば也〇真木立云〻　眞木とはよき木之よき木は深山ならではなきものなれば眞木立荒山とはいふ也荒は荒和といふ和の反にて人にうとき山をばあら山とはいふ也（荒和の事古事記燈神典にみるべし）真木のたつとつゞけずして此集卷九に蘆檜木笑。荒山中尓。送置而。還良布見者。情苦裳とよめるもなほ深山をいふ也乎は里言にジヤニジヤノニなどいふ心にて深山なれば人もつねかよはずして路いとわろく皇子などおはしますべき路にはあらぬをとの心をさとさむがため也されば此乎もじは下の朝越座而にうちあはせたるにて石根楚樹押靡二句ははさめる也としるべし〇石根云〻　今の本に禁とあるは楚の誤なるべし楚は字書に創-祖切粗上-聲叢-木一-名荊又翹-楚翹高-起也言　楚-木中之獨髙起者以況ニ人之出レ類抜レ萃也　とみえて小さく細き木をいふ也　古点禁樹を

ふせきとよめれど心えがたし楚樹しもとゝよむべし冠辭にしもとゆふかづらき山といふしもとこれ也押靡はおしなびかしの心なり石がねにおひたるわかく細き木どもを押なびかせて越給ふさま也ある注に從駕の人のおしなびかせて越るさま也といへるげに皇子の御みづからおしなびかせ給ふにはあるべからず御さきにたてる人どものするさまなるべけれど此歌大かたこの皇子の御神さびに此行がたき山道を越ます皇子の御うへをしも歎じたる歌なればこれ猶皇子の御みづからおしなべさせ給ふになしてみむ事この歌の本意なるべしたとひ從駕の人の押なびかすにもあれ皇子の御爲にするわざにて從駕の人の私にするにあらねばしかは注すまじき事なり大かた歌の本意にそむきそむかぬけぢめはよく心を用ひて注せずはその歌を殺すべき也かしこの二句ひとへに皇子の御神さびをたゝへまつれる也○坂鳥乃云々　朝越の冠辭なりくはしく冠辭考にみゆ谷の木ぐれにやどれる鳥どもの朝には群て坂を飛越るを供奉の人の坂路をむれこゆるにたとへたりといへりしかるに谷などにやどれる鳥の朝に坂こゆるを坂鳥といふべくもおぼえずさればおもふに坂のわたりの樹どもにやどりたる鳥をいふ名なるべし朝には嶺をむれ越てあさりにいづるさまをいふなるべし而（テ）もじの義は朝と夕をつながむため也されど直につなぐは而（テ）の義にあらぬ事まへに論らへるが如し朝といふは終日の艱苦をおもはせむがために一日のはじめを

いひ夕といふは終夜の辛苦をおもはせむが爲に一夜のはじめを云也かく間をへだてゝつなく事而(テ)もじの專用也としるべし○玉蜻云〻　古点玉きはるとよめれど夕とつゞかねば非なり此集卷十五に玉蜻夕去來者(カギロヒノユフサリクレバ)とありされば限は蜻の誤にてかぎろひのなるへしかぎろひはかげのきらめく火をいふ事古事記　履中天皇の御卷に難波の宮のやくるを加藝漏肥能。毛由流伊弊牟良(カキロヒノモユルイヘムラ)云〻此集卷二に香切火之燎流荒野尒(カギロヒノモユルアラヌニ)云〻などよめり春とつゞくるもかぎろひの如く春日の空にきらめくをたとへたる也その餘日ひとめほのかなどつゞくる皆これに同じ石とつゞくるは石火に冠らする也夕とつゞくるは夕日のかげはことにきらめけば也蜻蜓をかげろふといふはかれがとぶさまをかぎろ火にたとへたる名なり玉蜻とかけるはかれが目の玉のごとくなれば也とぞ又博物志に土に埋みおけば珠となるよしありと冠辞考にいへり陽炎をかぎろふといふも皆かぎろ火のたとへよりいふ名也夕去來者は夕かたになればといふ也去といふ事まへに論らへりこれは下の多日夜取世須につゞけるにて三雪落以下四句ははさみたる也三雪落につゞけてみるべからず○三雪落三はほめていふ也これ此野にやどりたまふ寒さ侘しさをおもはせたる也阿騎野まへにいへり大野としもよまれたるもひろき野はことに風などもさむきさまを思はせられたる也上には山路の艱難をいひこゝには此野のわびしき事をいはれたるみな玉しきの都のうちにくらべておも

はせむがためにて荒山道楚樹押靡三雪落四能乎押靡などはよまれたるもの也この尓(ニ)もじ上の京乎置而にむかへて意味をよく味はふべしからしなどはいはでその辛かるべき事どもをいひならべられたる事後世人の詞づくりにたがへる所をよく〳〵みしるべき也○旗須爲寸云々　はたとは秋の野中にてその穗のことにめにたつ物なればいふなり皮(ハダ)とかけるは膚の義にて穗のはだにこもりてやう〳〵出る故にやと眞淵はいへり　神功皇后の御紀に幡荻穗出吾也(ハタスヽキホニイヅルワレナリ)とあるをみれば穗に出ての名なる事しるし皮はたゞ假字なるなりいにしへははたずゝきとのみいへるを此集卷八にたゞ一首波奈須爲寸(ハナスヽキ)とあるは此京になりては花ずゝきとのみいふ事もと奈良人のいひそめたるよりの事かとも思へどたゞ此一首の外にばなけれ(ママ)は奈は必太の誤なるべし（後世は波奈とならではいはぬになづみて後世人さかしらに奈に作れるなるべし）四能乎押靡はすゝきのしなひをおしなびかせの心也と古説なりげに奈比(ナヒ)は能(ノ)とつゞまればそれはさる事ながらしなひをおしなびかするといふ事すゝきのしなひたらむをのみおしなびかせたらむやうにてめざましきがうへに乎もじかやうの所に用ゐる例ならねばこの説うけがたしされば思ふにこの能(ノ)もじ草のてにてぬもじを誤りたるにて小竹(シヌ)なるべししからは旗薄小竹などをおしなびけてと二種なるべしかくみれば乎(ヲ)もじの義相當する也これひとへに一夜だにもやどりたまふべき所にあらぬを思はせむがための乎もじ也京にては金樓玉殿に錦繍を褥

としておほとのごもるべきにむかへておもふべし上の押靡は道なきをしひておはすよしをいひこゝの押靡はおほとのごもるべからざるにしひてみねますよしをさとされたる也○草枕云〻　草枕はたびの冠なり旅には枕もなければ草を枕にむすびてぬるが故之必しかもすまじけれどよろづ客中の不自由なるをいふ也多日夜取は旅宿也世須はこれもセサセラル、といふ也○古昔念而古点はおもひてとありしかにてもありぬべけれどおぼしてと眞淵がよめる上の世須のうちあひにしかるべしこれは父尊の氏野に御獵したまひし事をおぼしてといふ也父尊をしたひ給ふ御心よりかゝる野に旅やどりし給ふよといふ心なり

靈この歌表は輕皇子都にませばめでたき宮中に起臥給ふ御身にましますを道もなき泊瀬山をこえさむき阿騎野にやどりし給ふはひとへに父尊のむかしをしたひ給ふあまりなるべし凡庸ならばさるめでたき身にて心からかゝるわびしきめはすまじきを此皇子もと神にましてせさせ給ふ御神さびはさても〳〵凡慮の外なる事やとあやしめる心によみふせられし也されどさばかりの事はたゞ心中におもひてもやみぬべきをかく歌とよまれしは必別に情あるが故なる事明らか也されば思ふに氏皇子の父尊をしたひ給ふ御心あまりなくさめがたさにむかし父尊の御かりし給ひし此阿騎野に山路の艱難をもこの野のさむきをもいとひ給はずしてかくおはしまし〻御孝心

を感じ奉りたる歌也されどこれいさゝかもあらはなれば諂諛におつべきをはゞかりて神慮ははかりがたきうへになしはてたる詞づくりめでたしなどもよのつね也かし大かた此歌をみむ人たゞ此皇子のたふとさをたゝへ奉れる歌也とみすくしたる事古注どもにことなる沙汰なきにしるし古人もと言擧せぬ國の御てぶりを明らめたりしかばいはでありぬべき事(ママ)ばいふも更也いはでかなはぬ事すら妖氣あるべき事(ママ)ば倒語するをいかでかよしなくてたゞへごとをもいはむもしこれ直言ならばかへりて毛を吹べき也後世人はざる(ママ)けぢめも弁へずそしらむこそあらめほめむは弊なしと心えたるいとも／＼心くるしき事之されば此歌ひとへに表は神の御うへ凡慮はかりがたきによみふせられたるは倒語にて此皇子父尊のいにしへをしのび給ふ餘りに宮中の榮華を忘れたまひこの野に旅やどりし給ふその御心を深く感じたてまつられたる歌なる事すべて詞の用ひざまにしるきをやこのけぢめをしらむとならばかりに此情のまゝをあらはによみて此歌にとりならべて倒語のやむことなき事をばあきらむべし

短歌

とゝも反歌とあるべき例也しかれども目錄には反歌をも短歌とかゝれたるがおほしされどこれは反歌なり

阿騎乃野尓。宿旅人。打靡。寐毛宿良目八方。古部念尓

言この野の字普通の本になし必脱せる也こゝにはたゞ阿騎の野尓とのみあれど長歌によめるに同しく雪ふりてさむき阿騎野にとみるべし宿旅人とは皇子をもこめ奉りて從駕の人々をひろくさしていふ也大かたに旅人といへるこれ古言のみやび也皇子を靈としたる詞づくり也○打靡云々うちなびきは草などのかたへになびきふしたるさまを人のふしたるにたとへていふ也これおのづからうちとけて寐たるさまを形容する詞となれりこゝもうちとけたるいはねられめやとの心なり良目八方の目の字今の本には自とありていもねらじやもとよめれどねらじとはいふべからず一本目とあるに從ふべしいとはねむとてふすをいふ詞にや朝はいさとしいぎたなしなどいひ又いの安き安からぬなどいふも皆寐入たる事とはみえずうまいは熟睡の義なれば寐いりたる事のやうなれどなほいといふは寐心地の事とおぼしき也ぬるとは寐入る事をいふぬるがうちにおくとはなげきぬとはしのはむなどいひ又このぬをかよはしてねての朝けこのねぬるなどもよめりされば寐毛宿良目八方とはふし心地もよくはねるらめやの義也上の毛はぬるを主とたてゝふしごゝちもよくといふ心也良目は良牟のかよへるにて八とうくるには必江締にかよはす事常なり八方は後世の也波に同じ前にいへるが如く後世これを半語といふはわが御國言の眞理を弁へ

ざる說也この八なほ疑の也にて人に决定をゆづる詞也○古部念尒この尒もじは里言にノデとい
ふ心なりいにしへを思ふにてうまくはねられむやとの心也さればこれ五四とつゞくべきを例の
標質をはかりて倒置せるなり
〔靈〕此歌表は氏阿騎野にやどる人のいにしへを思ふに堪ずしていもやすくはねられむやとそのね
られねられじのけぢめをおもひやりがほに詞をつけられたる也されどたゞねられねられじの別
ばかりの事は古人歌によむものにあらねばこれ又情はこの皇子の御心をいとをしみ奉れる歌な
りもと父尊をしのびかねてこゝにおはしけるなれどこゝにてはなか／＼懐古の情も立まさり給
はむと思はれけるなるべしされど此情詞にあらはなれば諸に落むをはゞかりたる事長歌に同じ
この旅人大かたにいへれどまことは輕皇子をさし奉れる也古注みな氏旅人を從駕の人也といへ
れど皇子をおきたてまつりて從駕の人のうへをいとをしまむ事あるべくもなしかへす／＼詞の
うへにめをうばゝるまじき也此皇子さばかりの辛苦をも忘れて父尊のむかしをしのばせ給ふ至
孝のほどを感したてまつれる事を長歌によみ此歌にはこよひこゝにやどらせ給ふ御心のうちい
かにおはしますらむとおもひやれる心をよまれたる也詞のつけざま返ゝ思ふべし

眞草刈。荒野二者雖有黃葉。過去君之。形見跡曾來師

〔言〕眞草まへにいへりなにとはなくよき草をいふ也眞木立荒山とよめるに同じく人ぢかき野は草もつねにかれば荒野ならではよき草もおひねば也かゝる荒野はたゞ草かるをのこなどこそは來れなべてのものゝくべき野にはあらねどゝの心也この荒野とは即阿騎野を云也〇黄葉云〻今の本黄の字なし葉の上に必黄の字脱せりと代匠記にいへる從ふべし黄葉の過にしとよめる歌集中に多ければ也古訓ことわりなし過去君とは日並知ノ皇子尊をさし奉れるなり〇形見跡曾來師跡(ト)はいはゆるいつゝの跡(ト)也跡(ト)思比而(オモヒテ)の心也曾(ゾ)もじの心は此荒野もと故尊の御形見とみつべきものにあらぬをひとすぢに御かたみと思ふはかなさを思はせて曾(ゾ)とはいふ也古人曾(ゾ)もじを用ふるに必かくしだか（ママ）ふまじき筋にしたがはるゝ歟なりさらでは曾(ゾ)といふ詮なきをおもふべし世に曾(ゾ)を治定の詞といふ事の縣なるをさとるべし師(シ)は去倫の師(シ)なりこの師はそのすぢにしたがひたる事すでに今とは筋たがへる歟也たゞ過去の詞とばかり心うるはくはしからぬ也さればこれは此阿騎野かゝるあら野なれども故尊の御かたみとのみ一すぢにおもひて來しか今この野にやどりては御形見とみるべくもあらぬ歟也

〔[illegible]〕此歌表はこの阿騎野故尊の御獵ましゝ所なれば御かたみとて來しに此荒野の御形見ともなきあぢきなさをなげきたるによみふせられし也されど思ひしかひもなしとおもふばかりの事は歌

によまずともありぬべければ必これ別に情ある事明らか也されば思ふになか〳〵こゝに來ていとゞ昔の戀しければ皇子の御心いかにとおもひやり奉れる也されどこれ又上と同じはゞかりにかくは詞をつけられたるなりわが歎をのみいふがほにて皇子の御うへはよそにしたるやうに詞をつけられたるになか〳〵皇子をいとをしみ奉れる情言外にあふれたるをや

東(ヒンガシノ)。野炎(ヌニカギロヒノ)。立所見而(タツミエテ)。反見爲者(カヘリミスレバ)。月西渡(ツキカタブキヌ)

東野云々　今本の訓ことわりなしこれは此阿騎野の東方をいふなりかく東をしもいはれたるは下の月西渡にむかへて思ふに東方の空しらみたるを思はせむがため也〇炎まへにいへりこれは東野の民家などにはやく起てたく火のほのかにみゆるを云ある注に此炎こゝは明そむる光をいふといへるは後世心なり明る光をかぎろひといはむ事古人の詞づくりにあらず予つねにいふが如く後世心をもて古言はとくべからずといふ所以を思ふべし東といふにこそしらめるをおもはせたれこれはたゞたく火なるをや〇所見而後世はたゞみゆるにいへどすべてみゆまじき物のみゆるをいふにあらでは詮なき詞也これそのみゆるにつけて情ある事にいふ也たゞみゆるといふ義のみにあらずいまだ夜はあけじとおもへるに明るに近きさまのみゆるを云也このみゆるにつ

けての情は下にいふべし而もじの義此下に多事を含蓄する事例のごとし○反見爲者夜いまだ明じと思ふに東方しらみて民家火をたくがみゆるより月はいかにと西方をかへりみたる心也なにのよしもなきやうなる詞づくりなれど上古詞をつくるにはふかく力をいれたる事これらの詞にみるべし後人の及ばざる境これらにしるしかし○月西渡この西渡のもじは心えてかゝれたる也東方しらみて民家火をたくのみならず月かたふきたれば疑なく夜ははや明ぬべしとしられたる心なり

靈この歌表はいまだ夜明むには程あるべくおもへりしに東方をみれば空しらみ野ちかき家にとく起てたく火のみゆるに西方をかへりみすれば月さへかたふきたるはうたがひなく夜は明むとするよとおもひの外によのはやくあくるを驚きたる心に詞をつけられたるなり東方ばかりにては信じがたきを西方をかへりみて夜の明むとするを信じたる心なるべしされどおもはずによのはやく明るを驚くばかりの事を古人歌とよむ物にあらねば必別に情ある事明らか也されば思ふにもとなくさめむとて此野に來ましたるなれどかへりて懷古の御心しのびがたさにこよひ寐やし給ふらむねられたまはずして夜をやあかし給ふらむと皇子の御うへをふかくいとをしみたてまつられける歌なりこれ又上と同じはゞかりにかくは詞をつけられたる也この長歌短歌ともに

すべて詞づくり凡ならぬが中に此歌ことに詞のいたりをきはめられたり歌はかうやうによまゝほしき事なりたゞ夜のあくるさまをのみいひて皇子はみねましつらむか又今までもねられ給はぬかとさま〳〵御心のうちをおもひやり奉られたる情句〻言〻の置ざまにてあらはにいひたるよりも深く思はるゝぞかしかく事もなげによみふせられたる詞づくりにかばかりの情こもりて今みるにたに涙もさしぐまるゝはひとへに倒語の妙用なり倒語のくしびなる事おもひしるべし上古の人の詞づくりいづれとはなきが中に此ぬしをばひじりとさへいふたによまれたる歌どもなほ優劣ありそのすぐれたるが中にも此歌などは此集中の王ともいふべしかし

日雙斯皇子命乃(ヒナメシノミコノミコトノ)。馬副而(ウマナベテ)。御獵立師斯(ミカリダヽシヽ)。時者來向(トキハキムカフ)(ムケリ)

〔言〕日双斯は日並知とかけるに同じ輕皇子(カルノ)の父尊なりまへにいへるがごとく此皇子この野に御獵ましゝ事ありけるを云也命(ミコト)とはもと御言(ミコト)の義にて天神御言もちて皇孫の命に葦原中國をよさし給ひしより神の御心のまに〳〵御言用ひさせ給へばその御言やがて神の御言なれば命(ミコト)とは申す也大かた神は御身おはしまさねば御言もなしされば人の口をかり給ひて妙用をふるまひたまふ也しかれどもからるべき人の言ならではかりたまはぬものなる事古事記燈にくはしくいへり紀

に宰の字をみこともちといふにあてられたるも此義によりてなるべし神代卷には尊命とかきわけたまひて舍人皇子至尊曰レ尊自餘曰レ命と自注したまひしは文字にかゝづらひ給へるにて義古登といふ訓にはあづからぬ事也古事記には悉く命の字を用ひられたるに思ふべし伊邪那岐伊邪那美の二ばしら神世七代には神と唱へ淤能碁呂島之件より命と申し三　貴　子黄泉之件より又大神とたゝへたるにてもこの心はうべき也古事記燈にくはしくいへり〇馬副而從者と馬を並べさせたまひてなり副の字は物にものゝそひたるかたちなればこの心をえてかゝれたる也もはら御在世の時のありさまを思はせむがため也〇御獵立師斯云々みかりに立出ましゝ時とは上の東野云々の歌より連續しておもふにこの時とは朝獵にたち出ましゝ時の來むかふといふなるべしほど〳〵夜あけむとする事を前の歌にはよみ此歌はやゝ朝となりてよめるなるべし古注にはみかりましゝ時節の來向ふ也といへりいづれにもあるべけれどなほ思ふに大かた獵は四時ともにするわざ也とはいへども冬を主とすかの故尊はいつ御獵し給ひしをしらねどもし冬ならば此時こと〳〵しく時者來向といはむははえなかるべく又さなくとも京を出ます時より故尊の御かりましゝ時節はあきらかなるべければこゝにて思ひかけぬやうによまれたるも詮なければ朝獵の時とせむ方あはれふかゝるべしとおぼゆる也立師斯はたゝせられし也者もじ此歌の眼なり朝がりに立出ましゝ時

は今來むかへども外に來向はざる物ある歎なりこの言外はすなはち靈なり下にみるべし多かる物の中に目にたつ歎前にいふが如しその言外の情をいはむ爲にかへりてそこをいはで來向ふ時の方を詞とせられたるなり前にもいひしが如くすべて事兩端をいはではその理盡ざる物なれども兩端をいへば詞いと稚し大かた詞はきかむ人の思慮分別をまつをむねとつくるべきにわれより理を詞につくすこれを稚しとも又いやしともいふなりされば片方を言外としその片方を詞として言外なる方をおもはする事脚結の專用なるなりこれにかぎらぬ事ながら此者もじなどことに此理のしるき用ひざまなればくりかへしこれをいふ也よく〳〵心うべし

靈この歌表はさきに日並知命この野に朝がりに出たちましゝその時は今來むかふよとその時の來むかふを驚きたるによみふせられし也されど時の來むかふをおどろくばかりの事を古人は歌によむものにあらずされば思ふに情は時は來むかへども故尊はかへり來たまはぬをなげきたる也これみづからのうへもあれどむねとは皇子のふたゝび父尊にあひ奉り給はむ期もなきをいかにかいかにおぼすらむと深く御心のほどをいとをしみたてまつれる也しかるを皇子の御うへをもいはずたゞ時の來むかふをおどろけるばかりに詞をつけられたるこれ又上と同じはゞかりによりて也たゞ者もじひとつにてうはべは時のうへばかりに詞をつけられたる至妙いはゞなか

〳〵なるべし倒語の御教に志あらむ人はよく〳〵これらの歌に心をとゞめて詞づくりの妙處を
おもひしるべきなり

萬葉集燈巻之三　終

萬葉集燈　四

萬葉集燈巻之四

平安　富士谷御杖　著

本集巻之一其四

藤原宮之役民作歌

持統天皇八年清御原宮より此宮にうつり給ふその宮つくる時の役民がよめる也となりされど古言はたゞ表のみをたのみがたきもの也この歌のよみざまいふかひなき役民のよめりともおぼえぬ詞づくりなれば誰かはしらねど役民が歌になしたるにもあるべしかくいふはゞかる所あればなり下にいふをみて思ふべしされどなほ役民がうちにも心あらむはかゝる歌よむまじきにもあらねばひとへにはいひがたし

八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。荒妙乃。藤原我宇倍尓。食國乎。賣之賜牟登。都宮者。高所知武等。神長柄。所念奈戸二。天地毛。縁而有許曾。磐走。淡海乃國之

衣手能。田上山之。眞木佐苦。檜乃嬬手乎。物乃布能。八十氏河尒。玉藻成。浮倍流禮。其乎取登。散和久御民毛。家忘。身毛多奈不知。鴨自物。水尒浮居而。吾作。日之御門尒。不知國依。巨勢道從。我國者。常世尒成牟。圖負留。神龜毛。新代登。泉乃河尒持越流。眞木乃都麻手乎。百不足。五十日太尒作。泝須良牟。伊蘓波久見者。神隨尒有之

[言]八隅知之より日之皇子まへに注せるに同じこれは　持統天皇をさし奉れり○荒妙乃云々　たへは布の古名也いにしへは栲といふ物もて織れりければ也妙の字はかりたる之やがて巻三に荒栲藤江之浦尒とかゝれたりその布の中にもいと麁なるをあらたへといふ也鎮魂祭祝詞に明妙照妙和妙荒妙云々　祈年祭にもかくの如くみゆるこれなり藤もておれるは即あらたへなれば冠らする也かく冠辞を置たるはこの藤原の地のよきことをほむるにかへたる也あらはにほむるよりも思はせたるはおもひやりいと深きが故也我とは乃といふにはたがひてそれにはたらきをあらせていふ詞なる事くはしく上にいへり君が代とつねによむを君のよとは絶ていはぬに思ふべし梅が香とつねによむを古今集に梅の香のふりおける雪にまがひせばといふ歌あり源氏物語をとめの

巻に梅の香とかけりその餘にはみずこれらは香の方を主にいはむがため也これひとへに藤原の善地なるをさとせる也荒妙乃と冠辭をおけるをもおもひあはすべし宇倍とは此巻の終にも髙野原之宇倍とよめるも同じ宇倍は方といふに同じ方はその方をさしていふ詞なりこの藤原に都し給ふなれば方とはいふまじき事のやうなれどなに事もさしつけていはぬがわが御國ぶりなればうちゆるべて藤原がうへとはよめる也かうやうの詞づかひはみづからさかしらならじとての事なり上古の風俗これひとつにも思ふべし後世人のおもひもかけぬ詞づかひなり○食國乎まへにくはしくいへり　帝のしろしめす國をひろくいふ名なり○賣之賜尓登賣之は見之と同じと眞淵が說也げに賣見通音なれば同詞なりといはむに理なきにはあらねど通音の事通ふとだにいへばさてやみぬる事世のならひとなれゝど通ふは通ふにてそのかよふにつけて義のわかるればこそかよへかよふをもて同じとはいふべからざる事なりもとより見は以緯なり賣は江緯なりされば見之は見たまふ事之賣之はめさるゝにて事はことなりかく異事ながら見之とも賣之ともいふはともに食國をしろしめす也としるべしこれにかぎらず聞之も亦しろしめす事をいふにておもふべしされどくはしくいはゞ見之は御目のうへにて天下の事を見あきらめさせ給ふなり聞之は御耳のうへにて天下の事を聞あきらめさせ給ふなり賣之は天下の事をめしつどへさせ給ふなりと

しるべし登(ト)は次の句の等(ト)とゝもに所念奈戸二(オモホスナベニ)にうちあふ也〇都宮者古点みやこにはとあれどにもじ用なし四言にはいふべし真淵おほみやは又みあらかはともよめりみあらかのかもじは處の義にて御在處(ミアラカ)なりいづれにもあるべきが中におほみやはの方穏しかるべし者(ハ)もじ大かたにいはゞ乎(ヲ)といふべき所也食國は乎(ヲ)といひ都宮は者(ハ)といへるめをとゞむべし食國をめし給はむ爲に都宮をば高しらせたまはむとおもほす心なり此都宮にて食國をめし給はむとおもほす心をおもはせむがために乎(ヲ)とよみ者(ハ)とよめる也としるべし高所知武等高は前にいへるが如くたけき心にて御稜威(ミイツ)を云也されどこの稜威もと大かたの威にはあらずくはしくは古事記燈にいへり〇神長柄まへに同じ此神ながらとおもほすなべにの二句の間に上の荒妙乃以下六句ははさまりたる心にみるべしされば畢竟荒妙乃の上に神長柄の一句はあるべきをこゝにおきたる也かく上にあるべきをこゝに置たる所以は例の標實の法を以てなり此神長柄は　持統天皇の御くしびをたゝへ申せる也奈戸二とは二事のならぶをしめす詞なりされどもとよりならぶべき事を奈戸二とよむは詮なしならぶまじき事の並ぶをさとす事此詞の詮也と心うべしされば こゝも大かたの人事は心におもふばかりにていまだ發言もせぬにその事と他の事ならぶべきにあらずしかるに此　帝遷都の事を御心におぼしめすとならびて良材おのづからあつまり來るを奈戸二とはいふなりおも

ほすといふ詞かろくみまじき也いまだ御心のうちになしていへる妙也まことは　勅命もありつればこそさわく御民ともよめれそれをばかく御心のうちなるほどになして詞をつけたるはひとへにこの　みかどの神にますを思はせむがため也古人の詞のつけざまおもふべし○天地毛云々天地もよりてとは天神地祇も　帝に御心をよせ給ふを云これわが御教の大本にてよろづの所思天神地祇の御力にて成就したまふをいたりとする也この毛もじは天も地もといふ心におけるにはあらずその故は御民はすべて　天皇の御心によりてつかへまつるはいふもさら也その御民のみならずとの心を毛とはよめる也としるべし下に御民毛とあるは又この天地を主としておけるなり詞の條理みなしかり心えがたからむ人はわが門にまねぶべし安礼は安礼婆許曾の婆をはぶけるなり許曾は下の浮倍流礼の句にてうけたる也許曾の義は前にくはしくいへりこゝも天地のよるにあらずはなにの妙用ありてかくおのづから良材こゝにあつまりくべきとの心なり○磐走云々　走は橋の假名なりくはしくは前にいへりこれは藤原まで行程いとはるかなるをおもはせむがための冠なり○衣手能云々　くはしくは眞淵冠辭考に論らへりその説手長能大御世手長乃御壽など祝詞にある心にていにしへは袖せばく長かりければ手長とつゞけしにや又袖は即衣の手なればにや又たゝなはるといふ心につゞけたる歟と三説をあげたりされどたゝなはるは迂遠なる

べし手とかゝれる歟又は手長とつゞけたるかなるべし田上山は淡海國栗本郡なり〇眞木佐苦云〻これもくはしく冠辭考にあげつらへるをみるべしされど眞木は檜なりとさだめてはいふまじき也檜は眞木ともいふべし檜は眞木なるが故にかく冠とはしたるものなり佐苦はかのぬしが説のごとくいにしへはひきわる事はせで斧などにて拆たるが故なり嬬手の嬬は假字にて拆たる木は必柧あればいふなるべし手は麻手などいふが如したゞ添たる辭也と古尺にはみゆれどしかありてはたゞその木の柧をいふ詞となりて柧ある拆木の事にはならざるべしされば思ふに手といふ事いかなる故とは明らめざれども柧ある拆木の宮材の用に便よく木造りなしたる名とおぼしき也麻も物に用ひむに便よくしなしたるをいふなるべくおぼしければ也乎はさばかり藤原よりは遠き田上山なればそこの檜のつまでは宇治川にながすべき事にあらぬをとの心を思はせたる也〇物乃布能云〻物とは兵具の事をいふ歟そのつわものを執る人のともがらを物乃布といふにや冠辭考に眞淵ちはや人うぢとつゞけたる心にてうぢは稜威にかよはせたるなりといへり此集巻六に物部乃八十友能壯者また物負之八十伴緒乃などよめるはそのともがらの多きにかゝれる也又神典に宇受賣命ありこの御名のたぐひに宇知とつゞけたるにやこの御名の義は古事記燈にくはしくいへり尓もじは此宮造るに便よきをおもへる也〇玉藻成云〻かのつまでどものうかび

ながるゝさまを玉藻にたとへたるなり成の事まへにいへり如といふ類也されど如にはたがひて成はまことはさならぬものをしか見なしいひなすを別とす成に如の字をかられたるはたゞ義のかよへるをもて也これによりて混じいふまじき之如しを成といふは古言也などおもふも非なり如成ふたつながらいにしへ用ひたる詞なるをもて同詞ならぬをしるべしかくたとへたるはうかひながるゝ良材どものひまなきさまを思はせむとて也流礼は前にいへるごとく天地神祇の御わざにてながしたまふをいふ也上の天地毛縁而有許曾をはづさずしてみるべしこれをとるより人力とせり礼は上の許曾のうちあひ也〇其乎取登云ゝ其はそれなりされど曾といひ曾礼といふ同じからず許礼を許和礼を和可礼を可多礼を多といふ類皆義あるを世には混じたり許礼を許曾礼を曾といふを古言也などおもふ人あるは痲なり此集に許礼能ともいへるをおもふべしすべて礼もじをそふる時は外に對する物ある義なり礼もじなきは對する物なくやがてその物をさす時の川なりこの法いづれも同じさればこゝも此良材ども外に對する物なければなり取とは取あぐる也登はとての心なり〇散和久御民毛さわくはその人夫のいと多くていそしきさまを云也毛は天地神祇のみならざるをさとしたるなる事上にいへるが如し委しくいはゞ天地神祇の御心をよせ給ふにつれておのづから御民もといふ義也天地神祇を主とたてゝ自然のかたちにみるべし早竟

命じもし給はぬにとの心なり○家忩家には父母妻子もありてしばしも家をはなるれば忘れがたき通情をたてゝいふ也ひとへに　天皇の御徳によれるよしを云也○身毛多奈不知とは身はもと安逸をこひねがふが常なる事をたてゝいふにて毛はさる身なれどもといふ也多奈は契沖はたなてゞくを輕引とかける心にて身を輕むずる事かといへりいかゞあらむ東麻呂は直の義といへり長流も同說なり又勞をいふともいへりしかるに此集卷九に金門尒之。人乃來立者。夜中母。身者田菜不知。出會相來また卷十三に葦垣之。末掻別而。君越跡。人丹勿告。事者棚知などよめりこれらの歌につけて思ふに知る知らずといふ詞のかゝる物なる事明らかなればこれらの諸說かなへりともおぼえずされはおもふに多奈とはから人の恕といふ心にてその物の欲せざる所を思ひていたはる事をいふとおぼしき也いづれも〳〵此義にてかなへり身毛とも身者ともまた事者ともかけるを思ふべしされどいかなる故にてこれをば多奈とはいふらむおもひよれるよしもあれどくはしくも考へぬ事はなか〳〵なればいはずこれ又　天皇の御いつをたゝへたる也○鴨自物云々水に浮居といふ事に冠らせたる也自物といふは常にその物のごとくといふ心に用ひたり犬自物馬自物などの類いと多しこの例にたがへるやうなるは男自物とよめる之これはなほそこにていふべし自はもし時自久の自にやしからば時自久は時頻の義なれば鴨じき物といはむをつゞめて

いふにやあらむしくは重及などの字をあてられて間なきかたちをいふ詞なれば鴨と間の透かぬ物といふ心にもやあるべきこれはかの材をとりあげむために御民どもの舟にのりて川中にうかびをるさまを云而もじ古來論區〻なり上にも而もじの事をいへれど而もじの義を心うべきには此歌最上なり學者よく〳〵めをとゞむべし或說にこの而もじ下の泉乃河尒持越流といふにつゞけてみるべしといへれどしかしては不知國依巨勢道從といふ句〻その終なくて心えがたし又はこの而もじの下に脫語あるべしなどもいへるは而もじの義をよくも探らぬ故にて氏水に浮ゐて吾作ると直につゞけるが理なさにいへる說どもなれどしからず此而もじに水にうきゐてその良材どもをとりて藤原にはこびて切もしこなしもしてなどいふほどの事をもたせたる也さて不知國依以下は又別事としてみざれば事変はりて義をなさゞる也おのれ今かくいふを私なりとみる人もよにはおほかるべけれど大かた而もじの義水にうき居ての下直につゞく詞ならばもとより而もじの詮はなき也數事をひとつの而もじにもたするに而もじの詮はある事なりこれにかぎらずすべての脚結みなその法かくのごとしわが門に學ばぬ人は信じがたかるべし上古の用ひざま此歌のやうにはなくみゆるもこの法を出る事なし後世直言のひがみにこの而もじの心えがたき也かへす〳〵後世の弊をさとるべき也○吾作云〻 吾とはわれ一人の事にいふにあらず役民のとも

がらをひろくさしていふ也我道我國などいふがごとし我國吾我などすべて文字にはかゝはらぬなり　日之御門は日之は日神の御子のおはします宮の御門なれば也大かた宮をいはむとて御門をもて詞とする事わが御國言のてぶりなりされば　こゝも猶宮をさしていふ也と心うべし尓はわれらがつくる宮処にといふ心なり下の泝須良牟にうちあへるにて此宮にとてのぼすらむの心なり○不知國依云々　しらぬ國とはいと遠き國をいふ也大かたゆきて國こそあらめわが御國内にしらぬ國とてはあるへくもあらぬをかく不知國といふはいと〳〵遙なる國々をおもはせむがための詞づくり也依は此下の從もふたつながら泉乃河尓持越流におちゐるなり巨勢道はこの都にたよりよき道なれば也遙なる國々より良材をきり出て巨勢の道より泉川に持こすをいふ也○我國者云々　これより以下五句は泉出とかけたるなりといはむがためのよせにてよせながら此　常をほぎ奉れる也されば此五句はこゝにはさめる也とみるべし常世尓成牟これ　みかどの御德にて神龜さへ出たるを云也常世とはこゝは常しき世といふ也この名もと神典に古事記上卷常夜往とあるこれなり大かた天地二性をそなふるをわが御國ぶりの大本とすしかるを何事をもひとつにたつるを常夜と名づく晝なくて常に夜なる義也これ深き理ある事古事記燈にいへるをみるべし他域の俗はみな何事をもひとつにたつればすべて他域をさして常世といふ也　垂仁天皇の御紀に神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可

怜國也（マシクニナリ）とある即これ外蕃を常世国（トコヨノ）といへる也されば雁燕などの常世より來るといふも他域をさせるなりいつの比よりかそれを蓬萊の事とす先達常夜と常世はことなりど（ママ）いふ說もあれど上古にはことならぬ事神典すでに常夜とも常世ともかきかへられたればこれにしるきをやその說もとは此歌などよりいへるなるべしこれはたゞ世の常（トコ）しへなるを常世といへるにて後世のも上にいへる本義よりうつりたるなるべしこれは常世國の事にはあらずかし○圖負留神龜とは日本紀廿七云天智天皇九年六月邑中獲龜背書申字上黃下玄とあるをおもへるにや禹の時龜負圖出洛水とあるを思へるにや毛は圖おへる神龜はよにありがたき物なるにそれもとの心也この外祥瑞多きを思はせたる也○新代登とはあたらは新の字の義となれるももとは新らしき物はなれ古びむ事のをしき心よりいふ也　此集卷廿年月波安多良（トシツキハアタラ）ゝゝ（アタラ）尓などよめり里言にアッタラといふ是なり後世もあたら夜の月と花とをなどよめりこの新京に宮しろしめす御はじめなれば也登（ト）はとての心なり神龜が心にあたら代と思ひていづるよしをいふ也泉は出といふによませたる也前にいへるがごとくこゝまで五句は挿めることゝみるべし○泉乃河尓持越流ゝゝ　泉河は山城國相樂郡なり　崇神天皇の御紀にもとの名挑河（イドミガハ）なるよしみゆ今この河を木津といふはかくやまとに宮材などをうかべてのぼすにたよりよかりければ名づけたるにや持越流はかの遠國より

巨勢路をもち來て此泉河にうくるを云越としもいふはその國にてきり出けむ山にも又路のほどにも河海など必ありてそこにうけたりし材なるを一旦陸路にあげてさて又泉河にうかぶる故にいふ也○眞木乃都麻手乎上なる眞木佐苦檜乃嬬手にいへるに同じ義なりされど前のは田上山の材(キ)なりこゝはかの不知國よりのぼす材(キ)なりひとつにみまじき也古注にはこれをもやがてまへの嬬手とひとつにみて田上山のなりと心えためれど前にもいへるが如く大かたかみしもの語意もとゝのはずしかのみならずまへに檜乃嬬手とよみ又同じ嬬手をばふたゝびいはむはいと稚く古人の詞づくりにあらねばかへす〴〵これは前のとはことなるぞかし乎(ヲ)は此宮に來べきにあらぬ遠國の材なるにそれをとの心也○百不足云々　百の數にたらぬものゝ冠也百傳ふとよむも同じこれは五十に冠らせたる也されど五十日太は筏の假字なり五十日をいかといふ事例多し土左日記に四十日五十日よそかいかまで我はへにけりともよみ宇都保物語源氏物語等に子うまれての五十日をほぐいかのもちひ多しくはしく土左日記燈に引おけりかの良材をば筏につくりて泉河をのぼすを云良(ラ)牟(ム)はある注に田上の宮材につかへまつるものゝおしはかりていへるなれば良牟(ラム)とはいへりと注したれどこれは中の良牟(ラム)の例にて次のいそはくに上の義をつゞけて心うべき法なりかの注語勢にも詞の法にもそむけり中の良牟(ラム)はたとはゞいかだにつくりのぼすなるいそはくみればといふ

べきをそのわざをまのあたりにみぬが故に良弁とはよむ也としるべし此卷の末に行來跡見良武樹人友師母とよめるなど此例なりこの京になりても多く用ふる例にてけむにも此例ある也大かた事がらにより時所により妖氣にさはるべき事にはさだかなる事をもわざと良弁計弁などゝゆるべてよむも常也これもたゞそのわざをまのあたりみぬゆゑのみにもあらずさだかにいふ時はあまりに　帝の御德をたゝへ奉る事めざましければにもあるべしこの良弁この句ばかりにかけてみるべからず上の不知國依以下この良弁の中なりとみるべし何十句にても下におく詞上を自在する事鳥魚などの尾もて身を自在するがごとし舟の舵をも思ふべし（舵は今のかぢなり和名抄に舟尾也とあり）伊蘊波久見者とは　孝（ママ）德天皇の御紀に天平勝寶二年三月戊戌駿河國守從五位下楢原造東人等於部內廬上郡多胡浦濱獲黃金獻之（練金一分沙金一分）於是東人等賜勤臣姓云々文德實錄云仁壽二年二月乙巳參議正四位下兼行宮內卿相摸守滋野朝臣貞主卒貞主者右京人也曾祖父大學頭兼博士正五位下楢原東人該通九經號爲名儒天平勝寶元年爲駿河守于時出黃金東人採而獻之帝美其功曰勤哉臣也遂取勤臣之義賜姓伊蘇志臣云々又　仲哀天皇の御紀に筑紫伊覩縣主祖五十迹手（中略）天皇卽美五十迹手曰伊蘇志故時人號五十迹手之本土曰伊蘇國今謂伊覩者訛也また　聖武天皇の御紀に加以祖父大臣乃殿門荒穢須

事无久守在之自事伊蘇美之宇牟賀美忘不給奈母止自氏孫等一二治賜天云々又日本紀通證といふものにかの　仲哀天皇の御紀なる伊蘇國を風土記作恪勤國とみゆ（此風土記は筑前歟）又此集巻四に勤和氣登將譽十方不在などさま〳〵みえたり（これはわが友隆璉が抄録をもてわが管見を補へる也みたる書の數も抄録の數も予は隆璉が十が一なり）又　敏達天皇の御紀にも勤乎をいそしきとよめるみなそのなすわざの怠なきを云いそくいそがはしなどいふもこの詞也波九の波は伊蘇布といふ布を波にかよはしてやがて九を添たるなり良九計九麻九左九などいづれもその詞の韻を同韻にかよはしてやがて九をそふる格なりすべてこの類の詞は用の詞にかたちをあらせていふ時の用なり予が隨筆に論らへる老らくの條をてらして心うべしさればこゝもそのいそはしき体をみればといふほどの心之としるべし見者は見さりしほどの心とはたがふをいふ也すべて何婆といふ詞の心えみなかくのごとしこゝは此　帝の御徳今までよりもひときはめざましくおはします心をさとしたる也○神隨尒有之古点かみのまゝならしとよめるはうけがたしある点かむながらならしとよめりまゝとよめるにくらぶれはながらとよめるはめでたけれどながらの義一首に切なりともおぼえぬがうへに此兩訓ともに八言なりさればかむがらならしとよむべし　天皇やがて神にますよりの事ならしといふ心也もし神にまさずは御民はさら也天地神祇御心はよせ給ふまじければ也ならしは尒有之のつゞまれるなり良之はさだかには

定めがたき所あれど十に八九はしかならむとおぼゆる事にいふ脚結也かく神までも御心をよせ給ふばかりの　帝にませば神がらなる事さだかなれどさだかにいはむはさかしらにてさま〳〵弊もあるべければ良之とはよめる也

〔闡〕此歌表はこの　みかど遷都したまふにつきて天地神祇も御心をよせ給ひ諸民も身をいとはずつとむるさまをみれば　帝の御徳今ひときはめざましくますを驚き歎じたるによみふせたる也されどこれもし倒語にあらずは必諂諛におつべし古人さるいたりなき事を直言する物にあらねばこれ疑なく此迁都に役せらるゝ諸民外見こそ家をも身をも忘れてつかふまつるやうにはみゆれ實は家をはなれ身を勞してよろこばしきわざにあらねばその心中には迁都の役をわぶる心必然なる事なりしかれども公をおそりていさゝかもさるけしきもみせぬいかに心くるしかりけむ此歌よめる役民みづから深くわびしく思ふ心をば諸民のうへに恕して詞をつけたる歟又は前にいへるが如く役民の名をかりての歌ならばふかく民をあはれめる心なり大かた迁都に民を困しむる事甚しきを歎きたるげにその歎ことわりなる事之もし此歌實に役民ならば此民いかなりしものぞ此詞のつけざまにその人ざまのめでたさもおしはからるゝ也うはべはひたふるに　帝の御徳をたゝへ奉りてふかく迁都の弊をなげきたる詞のつけざまよく〳〵めをとゞむべし

右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地八年甲午春正月幸藤原宮冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮

從明日香宮遷居藤原宮之後志貴皇子御作歌

婑女乃。袖吹反。明日香風。京都乎遠見。無用尒布久

言古本婇とあれど婇は字彙に婇倉代切音菜女字とみゆしかれば婇女とはいふべからずある說に婇は婑の誤なるべし字書に婑は弱好貌とありといへりこれしかるべしたわやめはたわやぎめといふをはぶきたる也たわはとをともいひてすべて物のちからなくたわ〳〵としたるを云これは宮女をひろくさしたまへるなるべしされどかく廣くいふ中にさす人はある事古言のならひ前にいふが如し○袖吹反風の袖をふきてうらがへすを云下のいたづらにふくに照らして思ふに吹反といふにて風のつねに婑女の袖に馴て袖ふきかへすを心やりにもしたらむやうによませ給へる也○明日香風とは明日香にてふく風を云佐保風いかほ風などよめるに同じこれは藤原宮にうつらせ給ふまでのもとの宮地にて吹ける風をさしたまへる也されば上の二句ももとの明日香の宮にはべりし程宮女の袖に風の馴たりしを云也○京都乎遠見の義まへに尺せるが如し京都

とは今の藤原宮をさし給へる也明日香風の今の都にゆきて宮女の袖をふかむと思へど此新京まで吹來む事の遠くて吹かよひがたさにといふ也これ皆風の心にしてよみ給へる也〇無用尓布久今は明日香の里には宮女の袖もあらねばいたづらにふくとはよませ給へる也いたづらにといふ詞は必なすべき事のあるにその事をもせぬをいふ詞なりされば こゝも婇女の袖をふきかへし馴たる風のかへすべき袖もなきをいふにて風の心もあへなくさぶしからむをおぼして無用尓布久とはよませ給へるなり

[評]此御歌表は明日香にて吹かへし馴し宮女たちの袖もなくて今は新京にふきかよはむ事も遠ければむなしくもとの都にふきをるその風のこゝちいかにあへなく物さぶしくおぼゆらむと風の心をあはれみてよませ給へるなりされどもと非情なる風を心あるやうにいひなしかつ風は明日香より藤原まで吹かよはむにかたきばかりの物にもあらぬを都の遠さに行がたき事をいはば大かた婇女の袖をふくをふく風の詮のやうによみなし給へる御詞づくり直言たるべきやうなし風の心をいたはり給ふもとより古人の歌とよむべき情にあらずされば おもふに此皇子は　天智天皇の御子　光仁天皇の御父にて追号したてまつりて春日宮御宇天皇と申せりこの皇子明日香にとまり居たまひて新京につかふまつる御思ひ人のあひがたさを佗てその人につかはされし御歌

なる事明らか也されどこれをいさゝかもあらはにおほせらるれば迁都をうらみたてまつり給ふになりぬべきをはゞかりたまへる御詞づくり也公私を詞のうちにそなへていづれにもよらぬ御詞づくりめでたしともよの常なり歌はいかでかくよまゝほしくぞおぼゆる此集中の歌いづれともいひがたきが中にこの御歌は妙中の妙ともいふべき御詞づくり也かし上古の人の倒語の道に心をもちひたりし事このひとつにも思ふべし

藤原宮御井歌

これ新京なる御井なりこの歌作者なきはこれも志貴皇子の御歌にや此端作こゝろえある事この下にいふへし

八隅知之。和期大王。高照。日之皇子。麁妙乃。藤井我原尒。大御門。始賜而。埴安乃。堤上尒。在立之。見之賜者。日本乃。青香具山者。日經乃。大御門尒。春山跡。之美佐備立有。畝火乃。此美豆山者。日緯能。大御門尒。彌豆山跡。山佐備伊座。耳爲之。青菅山者。背友乃大御門尒。宜名倍。神佐備立有。名細。吉野乃山者。影友乃。大御門從。雲居尒曾。遠久有家留。高知也。天之御蔭。天知也。日御影乃水許曾波常

尓有米。御井之清水

南八隅知之以下曰之皇子以上まへにいへるに同じこれも　持統天皇をさし奉れるなり和則とかゝれたるは賀於とつゞく音便のまゝにかゝれる也○藤井乃云々　上に藤原とつゝけたるに同じ藤井が原は即藤原なりもとは藤井が原といひけむをつゞめて藤原といひなりしなるべし尓もじはこゝならでも所も多かるにとの心をいふさて下に此御井をほめたるに應ぜり○大御門云々　御門をもて大宮をさとす事前にいへるが如し門は大かたその宮の咽喉なれば也これらにさへわが御國言のならひはそなはれるをや大御門始賜とはこゝに遷都し給ふを云也而もじの義まへにくはしくいへりこゝに新京をはじめ給ふと埴安の堤の上にたゝせ給ふは事次第につゞかぬ御わざなるを思ふべし○埴安乃堤上尓これは埴安池の堤なり此集巻二にしかよめり香具山のすそへつゞきていと高き堤なりけるなるべし○在立之云々　あり何といふ詞古言に多し古事記上巻の歌に佐用婆比尓。阿理多ゝ斯。用婆比迩。阿理加用婆勢長歌上下畧　此集中にもこの例多しかく用ふる心得はこれは上つ世の挿頭なり　ありわたるかたちをいふ詞なり此集中に戀乍不有者などよめる例にていづれも同じ或説にありは昔今と絶せぬ事にいへば　天皇はやくより此堤に立たまひてみやりたまひしをいふ也とあるは近きがごとくにして遠しわが伯父皆川淇園すべて書をみるに實もたれといふ事を

いましめたるうべ也これありといふを有在などの字にもたれたる説なりこれは昔今と絶ぬさまをいふにはあらでありわたるかたちをさとす詞なりこのけぢめ精微にして心くはしからぬ學者はえおもひわくまじき也よく心をとゝむべしこゝの地相をよく察し給ひし事を思はせむがためにおかれたる也立之はたゝせられの心也見之賜者はみさせたまへば也○日本乃云々　日本は假字にて大和國の事也倭といひし處の事眞淵が萬葉考にくはし山邊郡大和鄕のわたりをいにしへはやまとゝいひけむといへりこれその考索のいたれる事かのぬしのいさをなり大和國にしてやまとのといはむはいと稚ければしか穿鑿せられけむもことわりなる事なりしかはあれど古人は心から稚言をいふ事多し前にいへる春過て夏きたるらしの類これなりしりていはむは稚しとはいふまじき也古言はさかしらには見がたきもの也おもふにこれは上の藤井が原にの尓もじにいへるが如くこの大和の國內ならずとも國所は多かるべきをおもはせむがためなりされば猶大和一國の事なるべしこれ古人上手の手段なり靑香具山の靑は樹の繁茂したるさまを云山はしげきを貴べば也者は御井の爲としもたてるを感歎したる也○日經乃云々　成務天皇の御紀云以二東西一爲二日縱一南北爲二日横一とあるが如く日經は東西を云日のわたる道なればなりこれは東面の御門をなるべし南北の御門をふたゝびいひて西面の御門なきは南北は水脈の要たればにや西面は御

門なかりし故にや大御門は大宮をいふ事まへにいへるが如し尓もじは此御門のためにあつらへ置たるが如きをいふなり○春山跡云〻 跡(ト)はといふ如くにの心なりされば此歌よめる時は春にてはあらざりし事明らか也春は木の芽もはりて木葉繁茂する時なればなりされば春ならぬに春のごとくに山のいたく繁茂したるをほめたるなり宣長春は青の誤かといへりこれ穏なるべし之義佐備立有しみは繁きを云佐備はまへに神さびにいへるが如し繁茂すべき事を含めるがおのづから外にみゆるをしみさびとはいふなりされど青香具山といへるにさらにかくしみさびといはむはおさなきやうなれどもとより青みたるがうへに猶しげりゆかむさまのみゆるをいふ也とするべしこの山〻皆何さびとよめるは大かた山つみの御神さびになしていふ也此下畝火山には伊座とあるにもおもふべし立有はたちてありといふなりそのたちてありをつゞむればたゝり也このたを江緯にかよはしたる也大かた江緯にかよはすは未然を思はする義なる事前にいへるが如し

○畝火乃云〻 此としもいへるは藤原は畝火の山下にて他の山〻よりもことに近ければ此とはいへるなり養豆とは 神武天皇の御紀瀰都瀰都志(ミツミツシ)。倶梅能固邏餓(クメノコラカ)云〻(長歌下畧又一首あり) 大祓祝詞に瑞頭乃(ミツノ)御舎(ミアラカ)仕奉(ツカヘマツリテ)云〻(新年祭祝詞にもあり) 此集中にもいと多しいづれも内に潤澤を含みたるさまを云これ又山のよきをいふ事まへの青香具山にいへるに同じわが御國すべて潤沢ある事を貴ぶは神典に(古事記上)

卷其泣状者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以悪神之音如狭蠅皆満萬物之妖悉発と
あるにみるべし潤沢なき事を嫌ふは物と物和せざるが故之これふかき理ありくはしくは古事記
燈にゆづれり者もじ前に同じ○日緒能云々上に引たりし　成務天皇の御紀の日横これ也南北を
いふ也これは南面の御門をいふなるべし大御門尓まへに同じ尓もじも同上○弥豆山跡云々　弥豆
上に同じ跡も前の春山跡の跡に同じよに弥豆山とめづる山あるその山の如くといふ心なり上に
此美豆山者といひさらに弥豆山跡といへるをいぶかる人もあるべけれどもとみづ〳〵しき畝火
の山のなほその上にみづ山さぶるよしをいふなり上にみづ山はといひさらにみづ山とといふに
ておのづからかゝる心となる古人の詞づくりおもふべしされぱみづ山と山さびいますとはみづ
山さびいますといふほどの心之としるべし佐備まへに同じ伊座まへにいへるが如くおほかた此
山〻みな山神の御神さびとしてよめるもの也されど香具山耳梨山のふたつは立有といひこの畝
火山のみ伊座といへるはかの二山は神の御うへにはあらじと思ふ人もあるべけれど佐備といへ
る事神ならではあるべくもあらぬをもていづれも山神の御うへをいへるなる事を弁ふべき也し
かれども此山にしも伊座とよめるはことに此山のみをあがめたるにはあらで前にもいへるが如
く此山は藤原にことに近ければなるべし加具山耳梨山も此都に遠き山にはあらねど程あるが故

に立有とはよめる也○耳爲之云々今の本には高の字なれど或説に爲の誤ならんといへる從ふべし此都は此三山の間の地といひ香具山畝火山耳梨山はまへの三山の御歌にもしるくかつ耳高といふ山もなきをや高爲字形よく似たれば誤れるにや爲は奈之といふ假名なるべし青菅山者青は青香具山の青に同じ菅はすが〳〵しといふ心也山菅の生ずる山といふ説ゆくりなし古事記上卷に我御心須賀〻〻志また須賀宮須賀之地などみゆるを神代卷には清とかゝれたりわが御教心のすが〳〵しきを貴ぶ事ふかき理ありて神典をまねばむ人に口授すべしされば祓に菅を用ふるもこの須賀の義をたふとぶが故也大祓祝詞に天津菅曾乎云々とみえ此集卷三長歌上下畧天有。左佐羅能小野之、七相菅、手取持而。久堅乃。天川原介。出立而、潔身而麻之乎云々同卷六長歌上下畧千鳥鳴。其佐保川丹、石二生、菅根取而、之努布草。解除而益乎云々などなほあり須賀は里言にスンガリといふに同じく物むつかしき事なく心がゝりなき貌也後世の物がたりぶみどもにもすが〳〵しといふ詞多し宣長これをすが〳〵しき義也といへる可也されば青菅山とは樹木繁茂してこゝちよげなる山を云也者もじは前のふたつに同じ○背友乃云々成務天皇の御紀云山陽曰影面山陰曰背面とある是なり影面は日の影のあたる面といふ之止は津於のつゞまれるにて影津面なり背面は日の影の背なる面といふにてこれまた背津面をつゞめたる也されば此背友は北面なるべし後世外

而を曾止毛といふはこれを誤り用ひたる訓なり外は止といふ曾止といふは里言也大御門また尓もじ前におなじ〇宜名倍耳梨山をこの御門に宜しと思ふにあはせて神さびたてりとの心なり宜はよしといふにはあらず或説にそなはり足りたる心なりといへるはゆくりなし古歌古文どもに徵してそのかなはざるを明らめおくべし里言にチヤウドヨイといふほどの心也此集中此詞あまた所みえたり神さびまへに同じ此山の繁くこゝちよきさまの人力にはあらぬさまをいふ也〇名細吉野乃山者くはしはもと古事記上巻に美斗能麻具波比とあるくはひは咋合のつゞまりたるにて此集巻十六に美麗物。何所不飽矣。坂門等之。角乃布久礼尓。四具比相尓計六とよめるこれ也この久比を（上よりのつゞきにて具もじ濁音なり詞の頭を濁る事古なしと宣長がいへるげにしかり）久波にかよはせて志支といふ詞をそへたる詞なり久布といふ詞は古事記上巻に飽咋之宇斯大山咋など咋といふ神名多し皆同じ又此集巻十六に池神乃。力士儛可母。白鷺乃。桙啄持而。飛渡良武などもよめりされば くはしとは咋もしたきといふほどの心也美物をみて里言に咋ツキタイなどいふこれ也されば名ぐはしは芳野といふ名をきくこゝち美物をみるこゝちなるをいふ也としるべし古事記上巻の歌に美女を久波志賣とよみし同じ

神武天皇の御巻の大御歌に伊須久波斯久治良佐夜流この外この集中に花ぐはしなどもよめり後世は委精などの義に用ふ古義にあらず者もじ同上〇影友乃云々　影友まへにいへるが如しこれ

も南面なるべしもし西面をいふ歟従は此御門よりみゆるを云吉野山は遠ければ従といふ也〻雲居尒曾云〻雲居とは雲の居る所をいふにて空の事なりされど雲居とよめるは多くは遙なる事をさとす事に用ひたりこゝもしかり雲のゐる所をあふくばかりの遠さなるをいふ也曾もじは吉野山のみひとり此都にあはひ遠くて前の三山の如く近からぬを歎きたる也けるとは三山と同じからむと思ふにたがへる事を云也けりけるはすべておもへりし事とはことなる事あるを歎ずる脚結なりかく四山の四門にたてる事をいふは此四山の神の此御井をまもります事をいへる也されどこれは詞の表にて情は奥にとけるがごとし此四山の神たちを四門に配したる所以はこの四山の神たちの此御井に水をたやし給はぬ事をよめるなりこれ水は山よりいづる物なれば也大かた都の四面に山あるを貴ふ事水にかぎらずすべて有用の物乏しかるまじきが故也されば　神武天皇の御紀に東有㆓美地㆒青山四周とあり思ひあはすべしつねにいふが如くわが御國言は有用の事をあらはにいへば必弊ある物なるが故にそこを言代主神にまかせ奉りて倒語す一首一句一言にも此ならば弥綸せりよく心をとゞめざれば古人の心はしるべからず此倒語の法にあらずして鮮したりと思ふは必古人の心にはあらざるべき事をさとるべし此故にかく山神の御うへにのみ詞をつけたる也（これ先學者をそしるにあらずそれは詞の表を檢紀したる事わが管見の及びにあらぬ事みづからよくわきまへて先達の説ども可否をえらびてしたがふなりこれは古人の詞づくりに情を鎮めたる法の事）

をいふ也學者おもひあやまるべからず ○高知也天之御蔭云々 高知まへに尺せるに同じ天の冠における也天は地の方よりはよりもつかれぬものなれば高とはいふ也知とは高處を天の知給ふと云也天知也は日の冠なり日神は高天原をしろしめせば也也はともに詠歎の詞なり脚結抄にくはし天の高しり日の天しり給ふ事の凡處にはかりしられぬことを歎じたる也大祓祝詞に新年祭にも 天之御蔭日之御蔭止隱坐氏云々 とあるに同じ天の御蔭とは天の上に覆ふその蔭をいひ日の御蔭とは日の上にてらし給ふその蔭をいふ也天とさしたるは天津神もろ〳〵の御蔭をいひ日とさしたるは天照大御神の御蔭をいふにて前に四方四山の神の此御井をまもりますよしをいひてさてまたこの天日をこゝにいふは中央よりまもります神たちをいふ也御蔭とは天日の御うつくしみの下にをるよしをいふ也としるべし氏藤原御井といふは宮中にありける井にや上の句〻みな此御井を主とたてゝよめる也と心うべき之許曾波といふより以下は此よみ人の心をいふ也許曾波はまへにいへるに同じおほくの物の中をひとつとりわきてその殘りのものゝさまをさとす詞也波もじそひたるはことにそのけぢめをおもはせむがため也このはかなき御井だにも四山の神天日の神たちさきはひ給へば他の物はいかばかりさきはひたまはむとの心をこの許曾波におもはせたるなり大かた許曾にてかくひとくさとりわくるは必そのすぐれたる方の物はとりわけぬならひ也これ上古人の脚結

に精微なる所以也いかでかすぐれたる方をとりわけぬぞといふにその妙理こゝにいひつくしがたし志あらむ人には口授すべしなほ下に靈をとくにてらしておもふべしされど勝れたる方をこそとりわけめと後世にひがめる人は氏妙理とくとも心えがたかるべしかし大かた詞の表はひとへに此御井の水を賞するがほに許曾波(コソハ)とはよめる也○常尓有米古点とこよにあらめとあり又とこしへならめともつねにありなめなど訓じたるありしかるにもとゝこよといはむは齢の事にあづかる詞也とこしへといはむはその方をたつる詮なしなめのなは去倫のぬの（よにいふ旱のぬなり）かよひたるなればこゝの語意に用なしいづれも〳〵うしろめたき所あれば四言につねにあらめとよむべくやされどいづれにもあれこの水のかるゝ事なく不易なるを云也米(メ)はもと牟(ム)のかよひたるにて安良牟(アラム)といふべきを許曾(コソ)にひかれて米(メ)とはいふなり許曾(コソ)には必江緯にうちあはすべき所以は多かる中をひとすぢとりわくるその未然にそののこりをおもはせむがために江緯にかよはす也このことわりくはしくは經緯（五十韻なり）をまねびてしるべし○御井之清水古点はきよみづとありされど清の字詮なし後にましみづとよめりこれは眞もじをつけよみにししみづ猶清水なり清の字詮なしといへどももとこれ此御井をほむる歌なれば清ともいふまじきにもあらず熟字はその詮のありなしにかゝはらずよめる事多したとはゝ白露黒髮雁がねなどの如くなればこれもその類に

や此一句はふたゝびいへる也上の水許曾波すなはち御井の清水こそはといふ心なれば也大かた何事もふたゝびいふは一度いひてあかぬ故にてその物事に心のあつき事をさとす爲也この歌もはら此御井をほめたる歌とよめるなれば重ていへるなるべし

靈この歌表は此藤原の御井四山の神たち中央は天つ神日神のさきはひ給ふ水なれば萬世ふとも常ならむともはら比御井をほめたゝへたる歌也げに四方中央より神たちのさきはひ給はむはかく称嘆せむもことわりなる水にはあれどもたゞ御井をほむるばかりの事を古人こと〱しく歌によむものにあらずおもふにこれは　天皇この藤原の美地なる事を鑑察まし〱てこゝにしも迁都したまへる大御心のかしこさをほぎたゝへ奉れる歌なり埴安乃堤上尒在立之とよみたるおもひあはすべしされど天皇をこの御井の水にたとへ奉れるにはあらず四山中央の諸神たゞはかなきこの御井をだにかくさきはひ給ふばかりの地なればなにも〱不變なるべきをおもへとの心なる事許曾波（コソハ）を尺せる所におどろかし置たるたるが（ママ）如く許曾（コソ）にもはら此心はこめられたる也大かた倒語のうちに比喩はやすし此喩ならずしてやがてその物をよみたるやうなる詞づくりいとかたきわざ也これらのよみざま詞をつくる心得ともすべし　天皇此都をしもさだめ給ひし事をほめ奉らむとてゆくりもなき御井をたゝへたるかいなでの歌よみのおもひもよるまじき事之

されば猶これも志貴皇子の御歌かとはおぼゆるなり先達の注大かた詞の表をとく事いたれりといへども此長歌などは表たにさだかにはときかねられたりげに四山をよめるよりはじめてゆくりなく天日の御かげをさへいへることわり也いにしへ人はほむるもすべてかくのごとし後世心のあさましきこれらの歌にはづべきなり〇端作上古はうはべにてたのむまじき事かくのごとし集中の端作すべてこの心得をもてみるべしわざと詞の表をば端作とする事その情を鎮められたる所を活さむが爲なり後世の題といへどももとは此心なるべけれどいつよりかつひに情より題をおこす事をうしなへりさる心にていにしへの端作をみばかへりてかなたの罟獲におち入るわざにぞあるべきかくいふ故はこの次の短歌に思ふべし短歌の詞のうへ御井の事いさゝかもなければすでに反歌にはあらじ別に端作ありけるが脱たるならむとある注書にもいへりとぞおのが思ひわが御國ぶりにかなはざらむほとはみだりにはいひがたしかし

短歌

藤原之(フヂハラノ)。大宮都加倍(オホミヤツカヘ)。安禮衝武(アレツガム)。處女之友者(ヲトメガトモハ)。乏吉呂賀聞(トモシキロカモ)

[言]藤原之大宮都加倍とは　持統天皇にこの大宮につかへたてまつるを云都加倍はつかはれの心

なり大宮都加倍尓の心にみるべし〇安礼衝武今の本衝哉とありこの哉もじ下の賀聞にうちあはすされば哉は武の誤にて下の七言乞吉呂賀聞の誤なるべしと宣長がいへる考得たりといふべし下の一句古点しきめさむかもとありさては賀聞のあたるべき所ともおぼえねば必このぬしが訓にしたがふべしこの訓したがふべきはたゞ上下のうちあはぬのみならずこの歌を反歌とみむにその意よくかなへば也上の五七五七四句は藤原の大宮づかへにあれつがむをとめがともはと一つゞきに心うべし安礼は生るゝ事之されどうまるゝは被レ産義なり安礼はあらはれの義にて母に屬し子に屬するけぢめある詞なり後世は安礼とはいはずなりぬ後世は詞のすくなくなれる事これにもしるべし衝は假字にて継なりをとめどものうまれ〳〵して絶ざらむをいふ也武はこの行末をあらまして云也〇處女之友者をとめ前にいへりある注にこの　みかど女帝におはしませば女童を多くめしたまひし事有けむとあるは例の実もたれなり女帝ならでも後宮には宮女多くめさるゝ物なれど女帝にましませば男子よりも女は多くめさるべければ也かつ女童といへるもかなはず処女とはすべて年わかき女をいふ称なる事男する女をもをとめといへる事古書に多かるを思ふべしたゞめしつかはるゝわかき女をいふ也友は輩なり　神武天皇の御紀にうかひがともとよみ氏集中にもしつをがともますらをのともなどよめるにおなじ者もじ乞しくもあるまじ

き處女を著といへる構思のほど思ひやられてめでたし〇乏吉呂賀聞今の本之吉召賀聞とあり之は乏の誤召は呂の誤うたがひなし乏はもと物の乏少なる心なれど羨しき心に用ひたるが多しいはゆる此卷に朝毛吉。木人乏母亦打山。行來跡見良武。樹人友師母また卷六に長歌（上下畧）毎見文丹乏などの類これ也うらやましさを乏しといふ詞にて思はするこれわが御國言のならひかへす〳〵いへるが如し宣長すでにうらやましき義也とは尺したれどいかなる故にかゝる詞づかひなりともいかなる義にてともしといふとも弁ぜられずされば後學たゞ上古はあやしき詞づかひしけりとおもひてやみぬこれうらやましきは乏しきが故なるをもてこゝを詞とする事古言これにかぎらずその味はひおもふべし此類みなさかしらならじとての詞づくり也かし呂は等の類に心うべしされど等は安緯也呂は於緒なり緒の義はこと也されば乏しき事の内にこもりたるに心つかざりしを歎く詞なりと心うべし後世は用ひぬ脚結也集中例おほし賀聞は前にいひしが如く計較にも思慮にもかゝらぬほどの事あるを歎ずる詞なりこれはうまれつがむをとめが華をうらやましくおぼゆるわが心をみづから歎じたる也乏しさを賀聞とよめるにはあらず（因に云すべて加毛はかゝる心得なるを後世はおもふをおもふかなとよみみゆるをみゆるかなとよむ事となりぬいたくあやまれりおもふを歎じみゆるを歎ずるにこそ加毛とはよめれよく〳〵かへりみるべし）

【惣】この歌表は此藤原の宮づかへにこの行末生れつがむ處女がともがらはときはにかきはにまし

ますべき此　天皇につかへまつるべきがうらやましき事わが心ながらわりなき事やとよめる也よにうらやましかるべき物こそあれわれ大丈夫にして処女がとものうらやましきはいかなるわが心ぞとみづから歎じたるやうに詞をつけたる之呂賀聞(ロカモ)にもはらこの心をおもはせたるなり　されどかばかりの事は心にこめてもやみぬべき事なるにこと更に歌とよめるは必別に情ある事しるしされば思ふにこの新京遠ながくしろしめず(マヽ)へければいかで我も命ながくあり經てつかへまつらまほしくおもへど我命は限ありて　天皇のしろしめさむ御世のきはみつかへまつる事もかなふまじきなげかしさにこのゆくすゑ生れ經て宮づかへし奉るべき処女がとものうらやましきにいひなし大丈夫にして處女がともをうらやむをわりなきことゝおもひもどくをむねとしたるやうによめる倒語の手段神妙いふばかりなしされば其の情ひとへに　天皇この新京をとほながくしろしめすべきを賀(ホギ)たてまつれる歌なる事あきらか也これいさゝかもあらはにいふまじきは長歌に同じく諂らひにおつべきをはゞかれる也安礼衝武に　天皇の遠長くおはしますべき事を思はせ処女がともを乏しむにわが命の遠長くつかへ奉るに堪まじきを思はせその歎を賀聞(カモ)におもはせたる詞づくりなべてのものゝおもひもよるまじき事なりよく〳〵心をとゞめてこの詞のつけざまを味はひしるべし○此歌反歌のやうにあらねば前にいへりしが如く古來注者これをうたがひて長歌とはことす

おの歌ならむといへるは例の後世ひがみ也予つねに後世ひがみをもて古をみるべからずといふは此所以也もと端作に御井歌とある故にさるまどひも生ずるなれど長歌を尺せるが如く御井をもて此藤原都のとほ長かるべき事をほぎ奉れる歌なれば御井は表にてこの都をほぎ奉れるが本情なりされば此歌もなほ同じことほぎなりさらに別時の歌にはあらず此歌表に御井をよまずとて端作にまどひて眞をそこなふまじき也これらにも古言はすべて表にめを奪はるまじき事をさとるべし

右歌作者未詳

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國時歌

こゝ太上天皇は　持統天皇なり　文武天皇の御紀にこの幸の事あれど　天皇とあり太上を脱せしにや

巨勢山乃。列列椿。都良都良尓。見乍思奈。許湍乃春野乎

言巨勢山は藤原より紀伊にゆく路なればなるべし○列々椿はおひつらなれる椿をいふなるべしこれは此山におひつらなれる椿あれば下の都良都良尓のよせばかりにおける也○都良都良尓は

熟也春野を思ふを主として乍とはいへるにて春野を思ふもひたふるならでつら／＼みるをいふ也見るとは今の巨勢の秋野を也思ふとは巨勢の春野を也此幸は九月なれば巨勢野は木葉そめ庶のころしなどしろきを思はせてつら／＼にみるとはいふ也しかるに猶あかずして春野をおもふをいさめて奈とはいふなり奈は莫といさめたるにて同じ從駕の人のつら／＼みつゝ春野を思ふ人にいひかけたるなるべし或注に奈は言をいひおさふ詞なりと尺したるは詠の奈の事なるべしこの例と思ひての尺なるべけれど上下の語勢その例ともおぼえず又おもはなと訓て常に古歌に用ふる奈の例とみむも上下の語勢その例にあらず莫とみれば語勢もなにも應じて一首の心もめでたき也かの說おもふにこれを禁る詞とみては一首の意おぼつかなきが故なるべけれど大かた歌は詞の表にてとかむとすとも上古の歌は恐らくは心えがたき事多かるべしくはしく大旨に論らへるをみるべし注者よく心うべき事也もと詞の表は言外の情より出たる物なる事草木の根より幹枝花葉の生ずるに同じ一もとの木草その精神はたゞ根にあるをやされば根をしらむ事枝葉にあり枝葉をしらむ事根にあり竹の根に松は生ぜず木の根に草は生ぜずこのうちあひやむ事なき條理そなはれり此真面目をもて歌をとかば說おのづから私をまぬかるべしかし○許滿乃春野乎この乎もじふかくめをとゞむべし今秋色のおかしきに春を思ふをいふ也この秋のけしきに猶

あかぬ心をとがめたる也されば上の奈もじ禁る詞なるべき事此乎のうちあひにて思ふべし

〔評〕この歌表は今この巨勢野秋色えもいはぬをつら〳〵みつゝ猶あかずして春はいとゞいかならむと貪くおもふなといさめたる心なり同じ從駕の人のうちにこの野のけしき春はいとゞいかならむなどいひし人ありしによみかけたる歌なるべし後世ならばしか〳〵人のいひしかばよめるなど端作にかゝでは解がたしと思ふべし古人はこの乎もじ奈もじにておのづからしか〳〵の事ありてよめる歌なりとはしるければ端作をもたのまざりける也されば予がかくとくを附會のやうに思ふ人もよにきこゆることわりなる事なれど詞の條理古人の用ひざまやむ事法則ある事なりくはしくはこゝに弁じがたししかるに春野を思ふなといさむるばかりの事は古人歌とよむばかりの事がらにあらねば必別に情ある事うたがひなしされば思ふに今この秋のけしきいとおかしきに春はいとゞいかならむなど從駕の人のいはゞそれを　帝のきこしめして又こむ春も幸をおぼしたゝむかとて制したるにてひとへに幸のしげからむをなげきたる歌なる事うたがひなしこの　帝幸あまたゝびなりし事幸をいさめ奉りし事など前にひけるをてらしてさとるべし倒語したるはひとへにさかしらをはゞかれる也今更いふも中々なれど此詞のつけざまいとかろ〳〵と事もなげなるめでたしともよの常なり

右一首坂門人足

朝毛吉。木人乏母。亦打山。行來跡見良武。樹人友師母

〔高〕朝毛吉木とは冠辞考に淺葱をわりたる也とあれど物名をわらむ事いかゞなり又一説紀國よりよき麻を出せれば也といふ考をあげて國つ物を冠とせる例なくかつ紀國にもかぎらずとて此集巻二に朝毛吉。木上宮乎巻十三に朝裳吉。城於道從などつゞけたるは大和國城戸なりと破せられたりされど淺葱の説穩しくもおぼえずかの麻の説紀國に縛せられて尺したるが故にさるもどきまぬかれず今おもふに毛吉の三字は眞淵が說のごとく脚結にて麻を着とかけたるなるべし麻を衣に織て着るなり（又この集中眞間の娘子をよめる歌に麻を裳に着る事をよみ巻四には麻裳吉ともかきたれば毛は裳にて麻裳を着とかけたるにやとも思へど事ひろからねば猶毛吉は脚結とみむ方まさるべし）○木人乏母木人は紀國人なり乏は此上の歌にいへりしが如くうらやましき也母は終に多くおける母なり即この歌の終にもふたゝびおけりこの母の事まへにくはしくいへり此まつち山のけしきのおかしさに紀國人うらやましけれどせむかたなき歎也されば心えていはゞ乏しくはあれどもといふほどの義也紀人をうらやむはもと本意にはあらずしてこの亦打山をつねにみざらむ事をなげくが本意なりこれ母もじの本義なれど置ざまに随ひてかゝる義となる事これ母にかぎらず

べての脚結みなかくのごとし○亦打山多宇二音津となるがゆゑに亦打とはかけるなりおのれいとまなくていまだみず風景絶勝の地なるべし○行來跡見良武云〻　紀國人はつねに此まつち山をゆきゝにみるべければ也かく行來跡としもいへるはわざ〳〵とみむともおもはずてみる事をいはむが爲なりこれ例の古言のみやび也この句即うらやましき所以をいへる也跡はゆくとては見來とては見といふ心なり古今集におくとはなけきぬとはしのばむとよめる跡に同じいつゝとなりの良武は中の良武也この二句つゞけてみるべし中の良武の事前にいへるが如しゆきゝにみるべきは必定の事なるをせまらずして良武とはよめるぞ也上の木人乏母も猶このまつち山を往來にみるを乏しとよめるなりかく重ねてよむ事まへに論らへるが如くひとたびいひてあかねば也上にはたゞ木人乏母とのみよみこゝには行來跡見良武とその乏しき所以をよめるは標實の法によりてなり大かたこの乏しきが此歌の眼なるをおもはせてふたゝびいへる也下に情をとけるにてらしておもふべし古人かさねていへるは皆この法なりいづれもそこを眼とみるべき也予常におのづから言靈を察するに法則ありといふはこれらの類なり

言この歌表は此まつち山の風景えもいはぬを紀人はこと更にみむともおもはでみるらむがうらやましけれどせむすべなき歎をむねとよめる也されど紀人の乏しきばかりの事はたゞ乏しみて

やみぬべき事なるをこと〳〵しく歌とよめるは必情別にあるしるし也されば思ふに紀人の常にまつち山をみるらむをうらやむ所以は紀人はこの地につきたる人なればなり此地につきてこの山をみばいかにおもしろからむかく遠く來てはかくおもしろき所なれども心もゆかずといふ心にてその心ひとへに幸をなげきたる歌なる事明らか也されどこれ又上の歌と同じはゞかりに此山のおもしろさにのみむねと詞をつけられたる也上の歌は巨勢野のおかしさを賞し此歌はまつち山のおかしさを賞したる詞づくりなれば後世人の心にてはこの勝地どもを賞したる歌なりとのみ見すくせど上古の人はさるはかなき事を歌とよむものにあらずこれらの詞のつけざま大かた歌の本倒語の至ともいふべき歌なりこの淡海ぬしいかなる人なりければかく倒語は明らめられたりけむ心にくし

右一首調首淡海（ツギノオビトアフミ）

或本歌（ルノ）

河上乃（カハノヘノ）。列列椿（ツラツラツバキ）。都良都良尒（ツラツラニ）。雖見安可受（ミレドモアカス）。巨勢能春野者（コセノハルヌハ）

この歌は或本歌とはあれどもこれは春よめる歌にてこの幸のたびの歌とはおぼえず此幸は九月

也されば思ふに此歌は古歌にて此時春日藏首從駕して所にかなへる歌なれば誦せられたりしをみづからよまれたるやうにきゝ傳へられけるなるべし古歌の時にあひたるを誦したるはあらたによみたるよりもあはれなる物なれば此集中にも古歌を誦したるが多し袋草紙によど河の舟中にてよどのわたりのまだ夜深きにといふ古歌を誦したりしをいたくめでたりし事ありこれ上古の風ののこりたるなるべしもし又上の見乍思奈といさめたる歌はこの老ぬしの此巨勢の春野を賞したる古歌を誦せられしによりて此人によみかけられし歌かともおぼししからば置処錯乱したるが上に或本歌と誤りけるなるべし

右一首春日藏首老

二年壬寅太上天皇幸于參河國時歌

引馬野尓。仁保布榛原。入亂。衣尓保波勢。多鼻能知師尓

〔言〕引馬野は遠江國敷智郡にあり○尓保布榛原榛はまへにくはしくいへり里言にハンノ木といふ木也今梅ヤ澁とて染るものは榛を煎じたる物なるよしきけりいにしへは常にこの木もて衣をすれりしなりあかき色也にほふとは即その木の皮の赤きを云○入乱古訓はいりみだれとあれど體

は未然を思はする義なればこゝにかなはず必いりみだりとよむべき所なり乱はこの榛原に入りて榛どもをみだるなるべしもしこれ從駕の人のうへならば乱入とあるべき條理也この句の意その木にふるればやがて衣のにほふ物のやうにきこゆれどしからずこれは例の詞づくりにてまことは此はり原に入りみだりてその皮をとりて衣をにほはせといふ也しかるにかうやうによめるによりて木にふるればやがて色づく物とよには心得たりげなれど古言の用ひざまにくはしからぬが故也かの芽子(ハギ)なりといふ說もこの故なるべしすべて古言はかくざまに用ふる事大かたわが御國ぶり也かへす〲いひおけるが如く直言のひがみに泥(ナヅ)むまじき也〇衣尒保波勢は衣にすれといふ心なりあかき色のさまをにほふとはいふなりにほはせとは從駕の人にいひかけたる也人のうへにいふは多くはわがうへなる事古言のつね也〇多鼻能知師尒とは旅には摺衣を着る事いにしへのならひなればかくいへりとある注にいへれどもししからば京をいづる時よりこそ着たらめことに私の旅ならぬにさるならひあるにそむかむやうなしこの說ひとへに例の實もたれ也かへす〲古言は實にもたれては觧がたきもの也これは旅に必着るべきが故にかくいへるにはあらず此幸に從駕して三河遠江のあたりまでとほく來たるしるしにといふ也後世心にてはしからば三河に來たるしるしにとこそはいふべけれどかくせまらずしてひろく多鼻といふ事古言の

みやびなり（ひろくいふは何事もそのうちにこもれば也しかのみならずせまりて詞をつかふはさか しらなれば也古人詞を用ひたる法これのみならずいたれりいづれも據る所は神典也）からやうの詞づかひ我御國言の法をよくみしればうたがひなき事之大かたわが御國ぶりの本をきはめずしてはたとひ博覧多識たりとも恐らくはおもはぬあやまりも出くべし學者心を用ふべき事なり○知師尒とは京にかへりて後京の人にみせむに遠く來ける事を證せむ爲にといふ心なり（この二句も倒置也 例の標実の法なり）

圖此歌表はこの引馬野の榛もて衣をにほはせて京にかへりて此三河遠江のあたりまでとほく來たるしるしにせよと從駕の人にいへる也されどかばかりの事を古人歌とよむものにあらねば思ふに從駕程久しくなりて鄕思のたへがたきをよめる歌なりされば是れ從駕の人に心をつけたるやうによめれど猶みづから家人へ贈れる歌なるべしかくいふ故はもと榛もて衣を摺て歸京ののち旅のしるしありとて何ばかりの益かあらむこれ倒語なるしるし也されど從駕なれば家人を忍ふ心をあらはにいはむ事憚あればかく詞をつけられたるなりこの詞づくりの用意ふかき事よく〳〵思ふべし後世心には今の尺すぢなき事におもふべけれど倒語をみつべき法やむごとなきもの也わが御國ぶりにおもひをこらして此歌もはら鄕思よりなり出たる事をしるべし

右一首長忌寸奥麻呂（ナガノイミキオキマロ）

此集卷二に意吉麻呂（オキマロ）とかける同人なり

何所尒可。舩泊爲良武。安禮乃崎。搒多味行之。棚無小舟

[言]何所とは此舟のとまるらむ所をしらむとする心なり可とは必いづくにぞ舟はつべければ也○舩泊爲良武舟はつとは舟のとまるを云布奈の奈は乃のうつれるなり手の末足の末をたならゝあならといひ足の玉をあな玉といふ例なり○安礼乃崎は美濃國不破郡荒崎と和名抄にみゆるそこなるべし○搒多味行之たむとは里言にいふタムルなり撓るは直ならぬかたちを云也うちたをり多武とつゞくるにて思ふべし舌たむといふもこれなりすべてまほにゆかぬかたちを云之は去倫の之なりこの崎をこぎめぐりゆけりしそのすぢにつきていふ脚結也○棚無小舟とは舟棚なき小さき舟也されば棚なしといはゞもとより小舟なるべければことに小舟とはいふまじき事なれど棚なくても小大はあるべければなるべしされど大かたには棚なきは小舟也と心うべし和名抄に枻和名不奈太那大舩旁板也とみゆ

[靈]此歌表は安礼の崎をこぎめぐりゆきし小舟の今はいづくにかはてゝとまるらむと思ひやりたる也かうやうの歌をみてたゞめのまへのさまをありのまゝによむ事を歌の本意なりと後世心うるは詞の表にのみめを奪ばるゝ(ママ)が故なり大かた古人は神ながら言擧せぬわが御國ぶりをしもよくわいだめたりしかばもとよりよしもなく故もなき事のいはでもありぬべき事をいふ事たえて

なかりし也されば是等も詞のうへにてはたゞゆゑもなきいたづらごとをいへるが如くなれど必別に情ある事明らか也されば思ふにこのこぎめぐりゆきし棚なし小舟にはその船中必旅人の乗りゐて見もしらぬ礒山かげなどに舟はてゝ舟中の心ぼそくわびしさにいとゞ故郷をこひてなげきをるらむかといとをしくおもひやりたる也されどその旅人しれる人にもあらねば情におきて何のかゝはりもなき事なるをかばかりあはれまむやうなしこれわが故郷のいたく戀しく堪がたければわが郷思を直に述まほしけれど從駕のはゞかりにかの船中の旅人の郷思をおもひやりたるになしたる詞づくりなる事あきらか也公私をそなへてうはべはたゞ此舟のはてむ處をおもひやりたるより外の事なき詞づくりめでたしとも中々なり胸中あまるばかりの郷思をばかくはゞかりはてたる詞づくりそのくるしさ深く思ひやられてあはれいふばかりなしこれいとへに倒語の妙用ぞかし

右一首高市連黒人（タケチノムラジクロヒト）

與謝女王作歌（サノヒメミコノ）

續日本紀に慶雲三年六月卒とありこれは京に留りたまひて夫君の從駕にて旅ねし給ふをおぼし

やられての御歌か又この女王從駕し給ひて京に留り給ふ夫君をおぼせるにやとも思へど此次の御歌京よりおぼしやられたるなれば定がたし

流經(ナガラフル)。妻吹風之(ツマフクカゼノ)。寒夜尓(サムキヨニ)。吾勢能君者(ワガセノキミハ)。獨香宿良武(ヒトリカヌラム)

〔言〕流經妻とはよるの衣の裾ながくはへたるをいふにて靡たるさま也と古說なり妻とは何にても端の方をいふ名也衾は裾の方ひまありとはなけれど風の吹いりて寒きものなればかくいふなるべしされど衣といはすして妻といふべきにあらず誤字あるべしと千蔭はいへりされば久老は妻は雪の誤ならむといへりげに此說穩なれど雪吹風みやびかにもあらぬやう也又衣といはずして裾といへる事あるまじきことのやうなれど上古の人はながらふる妻とだにいへば衣とはいはでもながらへたるよるの物の妻とはおのづから聞ゆべきが故にかゝるいひざま古言にはこれならず多き物なれど後世人は目をたふとび思ひをたふとびざるが故にかゝる詞づくりは穩しからずみれど古言は一概にはいひがたし後世心をもて古言をみばおそらくは里言にいはゆる持タル棒ニテタヽカル、といふ類となりぬべしされば雪吹風は穩なるやうにてみやびかならず妻吹風は理なきやうにて詞に力あり後世の學者おそらくは十人が十たり久老が說を可なりとすべし寒夜とはこの幸は冬十月なりければなり端作にはこの時を脫せり○吾勢能君者勢(セ)は夫君をさし給へ

る也者もじは衆人の中にことに心にかゝるをなげき給へる也この者もじのひゞきにてわがひとりねのさむさは物の數ならずとおもひ捨たまへる心みえてあはれ也○獨香宿良武香はひとりねずは二人ねたまふべく一人か二人がうちは出まじければ香とはいふ也されば一人かねたまふらむ又はふたりか寐たまふらむもし誰とにもあれ二人ねたまふならば寒くもおはさじとよろこぶやうにもみえ又もし二人ならばねたき事やとうらめしくおぼすやうにもみえていづれともわかぬ御詞づくりいとめでたし

靈この御歌表はたゞ夫君の旅ねのさむからむをいとをしみたまへる御歌なりされどかばかりの事はたゞ思ひてもやみぬべき事なるに古人ことさらに歌とよむ物にあらずされば夫君のひとりねいかにさむくますらむといとをしくおもひやりたまふはひとへにわがさむさに夫君のはやくかへりまさむことを（もし從駕ならばわがはやくかへらまほしき情なりとみるべきなり）まち給ふ情を告やらせ給ひし御歌なりされどこれいさゝかもあらはにいふまじきは從駕をうらむるにおちむをはゞかりたまへる也人のうへをいふは多くはわがうへなる事前にもいへるが如しみなこれ古人倒語の手段なる也大かた倒語もかうやうに詞をつくるをばいたりともいふべしかし

長皇子御歌

天武天皇の御子なり靈亀元年六月薨と續日本紀にみゆこれ京に留りたまひて從駕の宮女のうちをこひ給ひし御歌也上の與謝女王の御歌もこの御歌もたゞひとり言のやうによませ給へれどまことはその人に贈りたまひしなるべし前にもいへるが如くさす人なくて歌はよむものにあらねどせまる事をつゝしみて古人はかく皆ひとりごとのやうによみなすなりこの心法をわきまへずして後世はまことのひとり言をよむをさなしともをさなしや

暮相而(ヨヒニアヒテ)。朝面無美(アシタオモナミ)。隱尓加(ナバリニカ)。氣長妹之(ケナガキイモガ)。廬利爲里計武(イホリセリケム)

[言]暮相而云々　二句は隱のよせにおき給へる也古点は暮をくれにとよみたれどもとくるとは日のくるゝ事をこそいへこれは朝にむかへ給へればよひによむべしもとよひとは夜のはじめをいふ名なれど一夜の事をよひともいふは夜のはじめをもて一夜の事にわたすこれ古言のみやび也朝といひて一日の事とするに同じされば夜のはじめをも一夜をも古はよひといへりこれは女の夜男に逢てくらきほどはかほもあらはならねど朝わかるゝに及びてみくるしからむを恥て几帳の陰などにかくるゝさまを隱(ナバリ)のよせとし給へる也面無美は美は例の賀里(カリ)といふ心也おもながるとは里言に面目(メンボク)ナイといふ心なり或注に面なみは恥て面がくしするをいふといへるはかなはず美(ミ)もじの心もうちあはず又新枕せしあしたなど面隱しするを序としたりと同書にいへれど新枕

にもかぎるべからずそれは隱を面隱しの事と心えられつとみゆるは面といふもじ隱といふもじにかゝづらひての說なるべしされど面無と隱とは二事なればこそ兼もしはおかれたれかへす〳〵實もたれにはかゝる弊あるを思ふべし○隱尓加隱はまへにもありし伊賀國名張郡なり古点かくれとよめるは非なり加はそこならずはいづかたにぞいほりたるべければ也かく名張をしもさしたまへるはやゝ都より程遠からねば也氣長妹とあればこれは還御のほどなるべししくはしくは下に情をとけるをあひてらして此義を心うべし○氣長妹之宣長は氣は伎倍の約にて來經長き心なりといへりされど此說おもふ所あり氣は息にて氣長とは長息なるべし長息はなげき也されば氣長妹とは逢がたさに長息せらるゝ妹といふ心なりこれはさきにも人のいへりし事なり逢がたきをけながきもて思はする事古言の常なり○廬利爲里計武もと廬は旅中にかぎらぬ事ながら此御歌にては旅舍の事なり或注に行宮をいふとありげに從駕の事なれば行宮にこの女房もやどるべければやがて行宮也ともいふべけれど　天皇の御うへにあらざれば行宮とはいふべからずもとより行宮のうちに寐たるはいふも更なるをかくこの女房の私にかり廬つくるらむやうによみ給へるは例の古言のみやび也理なき事をも古人はいふ事皆倒語なれば也これもと私の事なれば幸に詞のさはらぬやうによみ給ひしにてひとへにこれはゞかりより出たる詞づくりなるぞ

かし爲里計武といふ詞志計武といふ心ながら義はたがへり廬をつくりての未然をおもはする詞なる事經緯の江緯の所以なりされば廬してそこに旅寐せむことをおぼしやりたる心を思はせて爲里とはよませ給へる也計武はきしかたをはかる脚結なりこれは上の加もじのうちあひなりこれらの脚結すべて情のためにおかせ給へる之

〔靈〕この御歌表はこよひ妹の旅やとりせむ處をおぼしやらせたまひし也されどさばかりの思ひは古人こと〴〵しく歌とよむものにあらねば情は言外にあるべき事必せりさればおもふに從駕日を經て久しくあひたまはぬ女房をまちかね給ふ御心を告やらせ給へる御歌也加計武などひとへにかへりこむ日を待たまふ御心をさとしたまへる也されどいさゝかも詞にあらはなるまじきは幸の日をふるをうらみ給ふにおつべければ深くはゞかり給へる御詞づくり也かく公をふかく憚りたまひし御詞づくりなれば私はけしきにたにみゆまじき事なるにその待かね給ふ御心言外に森々たりかくこそ詞はあらまほしけれとぞおぼゆるや

舍人娘從駕作歌

此娘の事卷二にいふべし

丈夫之。得物矢手挿。立向。射流圓方波。見介淸潔之

高丈夫は益荒男の義也とある說にいへるいかゞあらむ益の義心ゆかずさるはことにおもひよれる事もなししかれども此集卷十六に荒雄等卷十七に荒し雄などよめるには別あるやうにおぼゆる也之は古点がとよめれど乃とよむべし乃賀の別まへにいへるが如しこゝは丈夫を主とよめるにあらねば必乃たるべき也○得物矢は古点とも矢とあれど仙覺が抄にひける風土記の歌にさつ矢とよめるに從ふべし古事記上卷神典に火遠理命者爲二山佐知毘古一而取二毛麁物毛柔物一云々とあるこの毛麁物毛柔物を得る心にて得物とはかけるにこそこゝは的矢なれど矢をいひなりてかくいふなるべし手挿とは片矢は弦にかけ片矢を小指と食指の間に挿みながら片矢を射る也この手挿むを設矢の方なれど片矢は今射る時のわざなれば手挿をもて射る事をさとせるなるべし○立向は的にたちむかひ也以上射流といふまでは的といはむ爲のよせ也かく上古には上句よりも長きよせは置たりこれさらに詞のあやにはあらずいはまほしき事のいへば弊ある事をしりてそれにかへたる也くはしくは下に情をとけるにてらしておもふべし短きは冠詞なり長きはかゝるも多しいはまほしき情の長短によりてよせの長短とはなる也としるべし○圓方波圓方は浦の名なり仙覺が抄に伊勢國風土記云的形浦者此浦地形似レ的故以爲レ名也今已跡絶成二江湖一也天皇行二幸浦邊一歌云麻須良遠能。佐都夜多波佐美。牟加比多知。伊流夜麻度加多。波麻乃佐夜氣佐

とあるはこの歌をひが聞しけるか又は此集のたがへるかしりがたし波もじ此歌の眼なりこれ大かたは他の浦〻どもにぬけ出たるを歎じて波とはいふ也しかれどもこれもはら情のひゞきをむねとすくはしくは下に靈をとけるにみるべし○見尒清潔之とはこの的形の浦はみるにいとこゝちよしといふ也尒もじ上の波もじに照らしたる脚結にて目のうへにのみさやけしといふほどの心なり目にむかへたるは心なりされば此尒もじの裏には心にさやけしと思ふばかりまではあらずとの義必ありて別に目にも心にもさやけくおぼゆる物ある事を思はせたる也下に情をとくをもてさとるべし清潔之（サヤケシ）とは里言にサッハリなどいふ心にて遺憾なくこゝちよき心なり

[靈]この歌表は此圓方浦他處にすくれて眺望するにいとさやけしとふかく氏浦のけしきをめでたる歌なりしかれどもかく勝地をめづるばかりのはかなき事をこと〳〵しく古人歌とよむものにあらねば必別に情ある事明らかなりされば波もじ尒もじのてりあひをくはしく思ふにこの娘は舍人皇子の御思ひ人なりける事この卷二に贈答あるにしるければこの圓方波とめる（マヽ）は舍人皇子にむかへ奉れるにてその御かたちのめでたきのみならず心にさへ忘られずまことに目にも心にもさやけきはこの浦にいたくまさり給へりとの心にて從駕日をへて戀しさ堪がたき心を皇子に告たてまつれる歌なる事必せり大かた勝れたる物をもてそれよりもいたく勝れたりと思ふ心を

たゞ波もじと尓もじにさとし表はたゞ此浦をめづるになしはてたる詞づくりまことに絶妙とい
ふべしされどこれたゞたくみに詞をつけたるにあらずいさゝかも情を詞にあらはすべからぬは
從駕にはゞかりて也かの皇子の御かたちよりはじめて御心ざまもいたくすぐれておはす事はた
とひいかばかりいふとも盡ぬべきにあらねばかく長〻しきよせに代たる手段かへす〳〵上古の
人の倒語の至妙いはむも中〻なりかし

三野連名闕入唐時春日藏首老作歌

名闕の二字は後人のくはへしなるべし三野連の事古注にくはしくみえたり春日藏首はもと弁記
といへりし僧なりしを大寶元年三月この老に春日藏首と姓を賜へる事續日本紀にみゆ

布根競。對馬乃渡。渡中尓。幣取向而。早還許年

蓋在根良は布根盡の誤か百船能の誤か此集卷十五に毛母布弥乃波都流對馬とよめり又は百都舟
の誤かと冠辭考にいへりげに在根良は舟人の目當となるがゆゑに此嶺の在るがよしといふ心也
と長流のいへるを契冲すでにこれを破してかの嶺には神ませばあらねといふ心ならむといへり
宣長は布根競の誤ならむといへり眞淵が考に同じけれど良競字形ちかければ今この字を用ひた

りいづれも津とかゝれる也印本在根良とあるはかへす〳〵心えず○對馬乃渡云々から國には對馬よりわたれば也渡中尒は海中にといふ也大かた海を和多といふ事海神の御名を綿津見神とまをすにしるべしこれ和多里の里をはぶける也おほかた渡の大なるは海なればやがて名としたる也渡中としもよめるはいまだから國にゆきつかぬ所をいへるなり尒はひとへにわた中を處としていへる也○幣取向而幣を神にたてまつりてといふ也取向とは幣を取りて神に向ふる義也海路の無恙をいのるためなり而もじ上の藤原宮役民が歌にいへるが如く上古に用ひたる而もじは而もじに多事をさめたるもの也さればこゝも幣とりむけて船中の無事をいのりて舟とく搒てなどやうの多事をこの而もじにをさめたるなり後世のごとくたとへば煑てくふ問ひて知るなどやうに事のつゞきたる間におく詞也とのみ心えては古人の用ひたる而もじはいぶかしかるべしされど古の用ひざまの如くならでは而としもいふ詮はなきを思ふべきなりことにこの而もじは上の尒もじに照らしておかれたる此歌の眼なりくはしくはこの下に靈をとくに眼なる事をさとるべし○早還許年年はもと去倫の奴のかよへる脚結なる事前にいへるが如しこの年とよまれたるもふかく情をひゞかせたり相照らしてこゝろうべし

〔靈〕此歌表は對馬のわた中にて神に幣とりむけ海路の無事をいのり恙なく公事をしはてゝはやく

かへりこねと船中無事にはやく歸洛あれとよめる也されどさばかりの事はかりそめの別にもなべての人もいふ事なるをこと〳〵しく古人歌とよむべきにあらずされば おもふに尒もじ而もじの義をふかく考ふるに渡中にて幣たてまつり船中恙なく公の事しはてゝはやかへれといへるやうなれど渡中尒としもいへるはいまだから國にいたらぬ半途をすゑて尒といひ而もじはおほやけの事しはてゝはやかへれといへるやうなれどから國の公事もすておきて半途よりかへれといふ心にて年もじもこの心にうちあはせたればいたく待久しからむをかなしめる情を述たる歌なる事しるし公に對したてまつりてはいとあるまじき情なれど情の切なる所より出たる也されど遣唐使はいと重任なればふかくはゞかりていづれともかたづけず尒もじ而もじ年もじに情をゝさめたる也かへす〳〵いへるが如くいづれともかたづけず公私をそなふる詞づくりぞ大かた詞づくりの至なる學者よく〳〵此妙處を味はふべし

山上臣憶良在大唐時憶本郷歌

大寶元年春正月乙亥朔丁酉以守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人爲唐執節使中略無位山於憶良爲少錄云々と續日本紀にみゆまへの遣唐使と同時なり

去來子等。早日本邊。大伴乃。御津乃濱松。待戀奴良武

〔言〕去來はいざなふ詞なり佐もじすむは不知の義也濁れば誘ふ義となるおのづから清濁の義によれり子等古点いざや子らとあれど也もじ詮なければいざ子ともとよむべし船中の人を云ふと或注にみゆれど端作に在大唐時とあれば船中の諸人といへるは遣唐使をはじめその屬官の唐土にをるわが國人どもをさす也といふ心にや船中といふはまさらはしければことわる也これはひろく在唐のわが國人どもをさせる也ともみるべけれど去來又邊などの詞を思へば檝師舟子どもをさしたりとおぼしき也〇早日本邊古点はやもと訓じたるは誤なり此集卷三なる去來兒等。倭部早。白菅乃。眞野榛原。手折而將歸といふ歌もはやもとはよむまじき也はやくとよむべし（子とさす事歌によりてさま〲なるべしなづみてみまじき也よくわきまふべし）卷十五に和伎毛故波。伴也母許奴可登。麻都良牟乎云〻　また卷十五奴波多麻能。欲和多流月者波夜毛伊氏奴香文などを據としての訓なれどこれは兩首ともに下に可もじありてそのうちあひに母とはおけるにてこれとは例ことなり母もじはうちあひにも脚結の義にもかなはぬ也邊は早くやまとへかへらむと人〻にいへる也邊もじに此心をこめたる也邊もじは前にもいへるが如く方角をさす詞にてそのさす方角のかなたに意ある事をさとす義なる事例の江綺の常なりこゝをもて舟人ならむかとはいふ也卷十五に奴婆多麻能。欲安可之母布祢波。

許藝由可奈。美都能波麻末都。麻知故非奴良武といふ歌下句同じこれらを思ふべし○大伴乃云々冠辭考に大伴氏の遠祖道臣命大久米部をつかさどりたり　神武天皇の御紀に瀰都瀰都志〻倶梅能固邏儺とあそばしゝは久米部のみならず道臣命をもかねたまへればみづ〳〵しといふ心に冠らせたるかといへり又髙師の濱とつゞけたるは建き心にや又は姓氏錄に大伴大田宿祢の次に佐伯日奉造は談士連之後也とあるよりいふにやといへり予もおもふ事もあれど證をえて後いふべしこゝに冠をおかれたるはひとへに情にひゞかせむがため也下にとけるをてらしてしるべし御津は難波の御津なり西の國にはこゝより舟出せし所なれば也この故にそこの濱松をよまれたる也○待戀奴良武とよめるは即この濱松がわれらが歸るを待こひぬらむとよまれたる也家人のまつを松によせたる也と古注みないへりこれ予がかねて歎息する所なり大旨に表と情を混ずといへるはこれらの事なり松がまちこひぬらむとよめるは表なり家人の事は情也ゆめ〳〵これを混ずまじき事也かくいふ故はわが神ぶみの御教內外幽顯を混ずる事をいたくいましめ給ふ事切なり今の世までも神前に淨不淨を正し血穢をいむはもはら內外幽顯を混ずるを神のいみ給ふが故也この所謂くはしくは古事記神典燈にいへりされば表は表にて注し情は情にて注せずしては神の御心にもそむくべき也內外幽顯を混ずる時はすべてなに事も全からぬがゆゑに古人はかたく

內外を混ぜざりし也後世心をもて古をみまじき事この故ぞかしされど後世心には松が待らむ事いとあるまじき事なりと思ふべし非情の物を有情のごとくいふは倒語の常なりまへの思賀乃辛崎(シカノカラサキ)おもひあはすべし猶この例いと多し此ぬし濱松がまちこひぬらむとよまれたるはひとへに內外を混ぜじとのかまへなるをしか注せば氏ぬしが心用ひをやぶり人がらをもおとすわざなるべし注者の心を用ふべきは此事也わが御國言はとくにも用ふるにもこの心得肝要ぞかし奴(ヌ)は倭をいでしより年月あまた經たる事をおもはせむとて也戀しとてもさまで年月へぬほどはしのびてもあるべけれど今は年月あまた經てまちこふるに至れるよしをいふ之良武はもと上にうちあひなくてはおかぬもの也うちあひなきを片響といふされど片響はその法ありこれは中の良武の例なりまちこひぬらむは必定なればといふほとの事をはぶける也上にひける卷十五の歌もこれに同じ

〔靈〕この歌表はいざやまど(ママ)へはやくいなむ今は年月もへたればみつの濱松のわれらをまちこひぬらむがいとをしきにと舟人にかたらひたるによみふせられたる也されどもとより松のまちこふべきよしもなくその松をいとをしまむも理もなき事なりかゝるはかなき事を古人こと〳〵しく歌とよむものにあらずされば思ふにひさしく唐土にありて戀しさ堪がたくなりぬる心を述たる

歌にて松に詞をおほせたる也これいかなれば心もなき松に詞をおほせたるぞといふに遣唐にえらばれたてまつれる身なればたとひ年月へたりとも私情をいはむ事はゞかりあるが故にかくは詞をつけられたる也かく詞に公をおもくせられし心中いかにくるしかりけむとおもひやられて詞づくりの至妙いはむも中〻なりかへす〲論らへるが如くいはまほしさの堪がたきをかくつゝしみて詞をつけたるそのくるしさいふにはいたくまさる事よく〲おもふべし

慶雲三年丙午幸難波宮時

文武天皇の御紀に九月幸して十月に還ましゝよしみゆ

志貴皇子御作歌

葦邊行。鴨之羽我比尓。霜零而。寒暮夕。和之所念

〔葦邊行難波の宮のあたりのさまなるべし邊とは葦の生たる方にそひて鴨のうかびゆくを云鴨の芦邊にそひゆくはおのれも寒き故に陰をたのむなるべしこの上句は御まのあたりのさまをよませ給へるなり羽我比は羽のうちあひたる所を云山のかひ又衣のうちあひたる所を上がひ下がひといふなどこれ也かふはゆきかふちりかふなどいふに同じくもと加比は久波比のつゞまれる

なり久波比は咋あひ也くはしくは前にいへり○霜零而鴨の羽がひをしも霜のふり所とし給へる妙也水の上にすら霜のふりたるをおほせられたるにてその餘の所の霜をおもはせられたる也もと衣をうちあはせたるは風を防ぐ爲なればかれも猶羽がひは霜をふせぐ爲ならむにそこにしもふるは寒さいかにたへがたからむとおぼしめすなり而もじ例の多事をゝさめ給へる也鴨のはがひに霜ふりしのぎて木草屋のうへなどにも深くて閨のうちまでもさえとほりてなどやうの多事こゝれは霜ふりて寒きとやがて下にうちつゞきたるやうにみゆれば予がかくいふをもとめすくしたりと思ふ人もあらめどしからずさむきは御みづからの御うへなれば鴨の羽がひに霜ふりたりとて直に御身に寒からむやうなし後世輕卒なる詞づかひになづみて古人の詞づかひをかろしむまじき也○寒暮夕云〻　この暮夕の二字安からず夕和の二字家といふ字の誤ならむかと或說にいへりおもふにもし暮夕はよひ〳〵とよませむがためにかけるにやまた夕の字は者の誤にもやあるらむ又は波もじはつけよみにして夕和二字倭の誤にやあるらむいづれにもあれ波もじあるべき語勢なり和の字をやまとに用ひられしは奈良の朝よりの事にて藤原の朝までは倭の字をのみ用ひられしかばこれ誤なりと眞淵が萬葉考にありかうやうの事管見の及ぶ所にあらずしかれども此集は家持ぬしのかゝれたるにて志貴皇子の親書にもあらねばこの論無益なるべしやまと

ゝおほせられしは實はさし給ふ人あるなるべしそれをひろく國になしたまへるこれ古人詞をつけし常なり之もじは倭の筋のみひとすぢに思はるゝよし也もとこれ從駕なれば他のすぢはいさゝかも心におこるまじき事なるにとの御心よりおかせ給へる之されば思はずにやまとのみ一筋におもはるゝよとの御歎なりとしるべし四の句に波もじ必あるべき語勢也と前にいへるはかばかりならぬ霜夜には倭の事も思はれざりしにとの心となれば也この之もじにむかへて思ふべし者もじ之もじひとへに從駕の表をたて給へるなり所念とはおもはるといふ心也おもほゆとは何事にもあれ心とおもふにはあらでおのづから思はるゝを云也これにも今尺せる心はこもれるをや

〔裏〕この御歌表は芦邊をうかひゆく鴨の羽がひにふりしのくばかりならぬ霜夜には倭の事いさゝかも心にかゝらざりしにかゝる寒き夜は思はずにやまとのみ一筋におもはるゝよと從駕の身にして他念あるはいとあるまじき事やとみづからわが御心を歎じ給へる也されどさはかりの歎息はたゞなげきてもやみぬべきをこど〳〵(ママ)しく古人歌とよむものにあらずされば思ふにかゝる寒夜のみならで倭なる人のこひしき御心を告やらせ給ひし御歌なる事明らか也されど從駕にはゞかりてかく詞をつけたまへる也御詞こそあれ葦邊行鴨の羽がひをしも霜の置所とし給ひし御詞

づくりいかに上古の人たりとも不容易の境たるべし詞を彇暴につかひ無味の句調をたふとぶ人眼をひらくべきなり

萬葉集燈卷之四終

萬葉集燈　五

萬葉集燈卷之五

平安　富士谷御杖　著

本集卷之一其五

長皇子御歌

霰打。安良禮松原。住吉之。弟日娘與。見禮常不飽香聞

冏霰打はあられ松原とかさねたまはむ爲ながら此時九十月の比なれば御まのあたり霰のふりければにもあるべし○安良礼松原　神功皇后の御紀に長歌下畧烏智箇多能。阿邏ゝ摩菟麼邏。摩菟麼邏珥。和多利喩祇氏云ゝとあるは山城國菟道川のあなたなる松原なりあら〳〵と木たちのたちこみたらぬを云なるべしこの安良礼松原も邏の礼にかよへるにて難波わたりにあら〳〵とたてる松原をいふにて地名にはあらずと古説なり下にみれどあかずとあるは此松原のけしきの事也○住吉之云ゝ　此をとめは住吉の人なるべし住吉は攝津國住吉郡なりすみのえとよむべしすみよしとよむは後世の誤なり日吉をひよしとよむたぐひ也古今集に住よしとあまはつくともながゐすな

といふ歌ありその比よりあやまりそめしにや弟日とは顕宗天皇の御紀に播磨國赤石郡縮見屯倉首が家に御父押磐皇子を　大泊瀬天皇の殺し給ひしを恐りて億計王（仁賢天皇之）弘計王（顕宗天皇なり）しのびてつかへましゝ時屯倉首が新室賀の夜弘計王（御弟なり）殊儛（注に乍起乍居而儛之とあり）したまひて誥てのりたまはく彼々茅原淺茅原弟日僕是也　小楯（これは此新室賀の夜の賓なり）由是深奇異焉更使唱之天皇誥之曰石上振之神榲伐本截末於市邊宮治天下天萬國萬押磐尊御裔僕是也　小楯離席悵然再拜承事供給率属欽伏とみえたる弟日に同じこれおとゝひといふにて御兄弟のよしをおほせられたるなればこゝも姉妹のをとめにて遊行女婦のまゐりたるにやと古注なりされど古書に何備（ママ）といふ詞ばすべて何ぶりといふ布理のつゞまりたるなる事前にもくはしくいへり神典に（古事記上巻）高御産巣日神神産巣日神をはじめ奉りて神名にいと多く祝詞の踈備荒備などの類これ也さればおもふにこれ兄弟の称にはあらで弟ぶりするをいふ詞にて弟ぶりすとは謙遜なるかたちをいふなるべし御兄弟その時ひそみておはします事をおほせられし也弟は兄にむかへていふにて大かた弟びたるはその人ざまもいとめでたくあはれなるものなればこの弟日娘はこの人ざまをめでゝかくおほせられけるなるべし後世にらうたきといふ詞の心なりとしるべしこれは住吉より難波にまゐれる遊行女婦にや又人のむすめをなにはの御旅舍にめしおかれけるに

や又住吉にまをで給ひてかの地にてめしてやがて住吉にてよませ給へるにや又それより難波にかへりまして住吉にてめしゝをおほし出て贈らせたまへる御歌にやいづれともしりがたけれどいづれにあれ御歌の心はたがはざるべし此下に清江娘子進長皇子といふ歌あり照らしておもふべし興はとともにの心なるべし娘とゝもにみたまへばあかぬ事はあるまじきを猶あかざるをかもとはよませ給へるにてさて娘とゝもにみるたにかゝりましてひとりみばいかにあかざらむとの心なりされとかく心うれは松原の方主となり娘の方客となるか故に後世倒語をわきまへざる日にはこの主客にまどふべしこれ内外をたてゝ混ぜざる時はをとめを客とし給ふにてかへりてをとめ主となるなりこの詞の妙理筆端にときつくしがたし志あらむ人には口授すべし或注に此集巻七に佐保河之清河原尓鳴知鳥河津跡二忘金都毛といふ歌あるによりてこの興もじは松原とをとめとふたつならべてみたまへどあかぬといふ心之といへり似て非なりこの興の下見礼常不俺香聞とある事巻七の歌の跡にはうちあひたがへるを思ふべし○見礼常不俺香聞とはこのあられ松原のけしきのみれどあかぬを歎じたまへるながら弟日娘とともにみれどあかぬばかりなるを香聞とよませ給へる也たゞおしなへてみれどあかずとよめるが如くみすくすまじき也

闡この御歌表はこのあられ松原住吉の弟日娘とゝもにみたまへどあかぬばかりのけしき大かた

の松ばらとひとしからぬを歎じたまへる也されどさばかりの事を古人ことごとしく歌とよむものにあらねば別に情ある事しるしされば思ふに程なく還御に従ひたまひてこの娘にわかれ給はむ事の御心くるしくおぼす事をかの娘に告させたまへる也されど此娘の事によりて還御をいとひ給はむ事はゞかりあるが故に二人みたまへどあかれ給はぬあられ松原をみすてたまはむ事のわびしきに御詞をつけられたる也主を客とし客を主とする詞づくり古人倒語に多き法なり前にいへるが如く客はかへりて主となる事倒語の妙用なり上古詞づくりの凡ならぬ事この御歌にもよくよく思ふべし

太上天皇幸二于難波宮一時歌

大伴乃。高師能濱能。松之根乎。枕宿杼。家之所偲由

[言]大伴乃は高師の冠なる事まへの憶良ぬしが歌にいへり高師の濱は和泉國大鳥郡にありされどこれは難波なりと或人いへりと或注にみゆもし難波より和泉へもおはしけるにや○松之根乎といふ乎もじは枕にすべき物ならぬを枕にするを云さればめづらしき心をさとされたる也○枕宿杼古点まくらねぬとかとあるはうけがたしまくらする事を集中まくとのみよめり宣長は此杼も

しを心ゆかずやおもはれけむ杼は夜の誤にてまきてぬる夜はならむといへりこれいと穏しけれど上古の詞つきともおぼえず大かた一首の意にも切ならずなほ杼もじあるべし又まきてしぬれどゝよめるもあれど之もじかさぬべき脚結にあらねばこれもうけがたしさればまきてさぬれど又まきていぬれど又まくらにぬれどなどよむべきにやこれはかゝる勝地なるこの濱松がねを枕にしてねば外に思ふ事もなく心ゆきぬべき事なれどゝいふ也しのばるまじき家のしのばるゝになさむがためにかくはいふ也○家之所偲由家とはやまとなるおのが家をいふされどかくよめるは表にて必さす人ある也之は前の志貴皇子の御歌の和之所念の下にいへるが如く家のひとすぢにしのばるゝをもどかしく思ふ心をしめされたるなり下に情をとくに照らしておもふべししぬぶはしたふ也由もじはこれなくとも所の字ゆとよむならひなれどもししぬばえなどもよまむかとて由もじは添られたるなるべししかれども由もじなき例多ければ衍字にもやあるらむ此ゆも前にいへるが如く心にもあらずしのばるゝを云なり

靈この歌表は此高師の濱にやどりてかゝるおかしき所にめづらしくぬるなれば他念はさらにあるまじきにおもはずに家のひたふるにしのばるゝよと我ながらもどかしき心によめる也かくもどかしむは從駕のゆゑ也されど供奉の心の專一ならぬをみづからもどくが主意ならば恥て言に

はいづまじき事なりしかるをこと更に歌とよめるはこれ本情ならぬが故なる事あきらか也されば
この高師の濱の旅ねものわびしくて京なる妹のこひしさ堪がたきを客中より妹に告たる歌なるべしこれまた從駕の心の專一ならぬをはゞかりて此高師の濱の旅ねをおかしかるべき物にいひなし家のしのばるゝをもどきたる詞づくりめでたしともよの常之大旨に論らへるが如く詞をまねばむと思はずよく〳〵此倒語の用ひざまに心をとゞむべし

右一首置始東人(オキソメノアヅマビト)

日本紀に置染とあるこの姓なるべし

旅尓之而(タビニシテ)。物戀之伎乃(モノコホシギノ)。鳴事毛(ナクコトモ)。不所聞有世者(キコエザリセバ)。孤悲而死萬思(コヒテシナマシ)

【言】旅尓之而は旅にてといふ心なりされど古言にはかく之(シ)もじをくはへてのみいふは旅のすぢをつよくたてむがため也里言にはこれをデといふ尓之而(ニシテ)といはでは旅なるすぢはたゝぬなりこのすぢをつよくたてざれば下のうちあひ切ならざれば也古言と里言の疎密このひとつにもしるべし○物戀之伎乃云〻　物とはすべてみる物きく物ごとに戀しきつまとなる心にて戀しさの數多きをひとつにしていふ詞なりものがなしものうしなどの類多き皆同じ古今集の端作にものへまか

りける云々とあるも一所ならず行けるをつかねていふなり又ものらいひてともみゆ又物語ぶみどもにものしてなどかけるも多事をひとつにしていふ也これらにておもふべし戀之伎に鴫をよせたる也宣長は物こひしきといふよせざま集中に例なければひがことなりとて物こふしぎいとよませたり古人詞の自在はかりがたければ一概にもいひがたしそれも後世の如くたゞうはべばかりをおもへる詞ならばよくえらぶべしこの詞をかの翁のしかとがめたるを思ふに古比の比もじ以締なるがおのつから心におちゐぬなるべし以締の義はこゝにかなはねば也されば此集中戀しともよめれば今物こほしぎのとよめり於締はこゝにかなへれば也宣長が説のごとくならば鴫のものこふる實事となるべし此翁にかぎらず後世人は實もたれの辟あるが故にかくよみたるなれど此歌實に鴫の物こふるをよめるにあらず倒語のためにとり出られたるなればもとしひて物こほしぎといひなされたるこれ古言のみやびぞかしくはしく此けぢめをおもひわかでは古人の魂はつひにしるべからすとしるべし鳴事毛といふ事の字うかひてみゆるはもし事は声の誤にやあらむ毛は里言にナリトモといふ心なりいと後世せめてといふ詞あり上つ世中昔中季までもいはゞ此毛もじせめての心あれば古は毛もじにてせめての用を達したればなりこの例集中これならずいと多き也さればこれをおきてはわが類とすべき物もなき心をおもはせたる也この心言外

なればこの毛もじ解し得がたかるべしよく心をくはしくしてみるべし或注にせめて此鴿の声をきけば旅の心をなぐさむ心なりといへるは非なり声をきゝてなくさむにあらずものこひしさに堪てをるわがたくひと思ふになくさまるゝ也なに事も類あればたへがたき事もなくさまるゝ物なればなりこれ前に論らへるが如く實に鴿の物こふるにてはあらねどこれをわがたくひといひなしたる也かくいはではこひ死ぬべければなりこひ死なざる所以をとり出たるなりとしるべしこれ倒語の手段なりかし○不所聞有世者せばはすべて事を設いづる脚結なりもしこれがかくあらばと虚に設くる也○孤悲而死萬思こひては何をともいはざる古人詞づくりの常なり而もじ例の多事をゝさめたる也萬思上の世者のうちあひにて虚に設出たる事の末をいふ詞なり脚結抄將倫のうちに萬思を屬したる事もと將といふに同じ類の詞なればなりされど將はその事實なる事の末をいふ詞なり萬思は虚設したる事の末なるがたがへりこの事後世わきまへたる人なくてたま〳〵古人の口拍子ならぬには用ひあやまりたるもみゆよく分別すべし今鴿の聲のきこゆるをもしきこえぬならばと設出たる末なれば萬思とはうちあはせたる也

〔靈〕この歌表はこの客中にもし物戀之伎の声のきこえざらばわれは戀死に死なむわが等類もあるものをとおもへばこそおのづからなくさまれてこひもしなずてはあれとこの鴿の声をよろこび

たる歌也されどもと鵠のこゝろは旅情もまさりてよろこぶべき物にあらざるをこひしなぬたねなりと悦びたる事これ本情ならぬしるし也されば思ふに客中郷思たへがたき事を家にいひやられたる歌なる事明らかなりされど従駕をはゞかりて鵠の声をよろこびたるに詞をつけられ猶こふるも何をともよまれざりしひとへにつゝしめる詞づくりなる事をしるべしいとふべき物をかへりてよろこばしき物になしたる手段なま〳〵の歌よみの思ひもよるべき詞づくりにあらずかし

右一首高安大島

大伴乃。湊津能濱尒有。忘貝。家尒有妹乎。忘而念哉

言大伴乃湊津まへにいへり尒有は尒阿をつゞむれば奈なれば也忘貝といふまでは眼前なる物をもてやがてよせとせる也前にかへす〴〵論らへるが如くいはまほしき事あるにかへたる也かへたるは従駕にはゞかりてなりなほ下に情をとくに照らして心うべし○家尒有妹乎云々乎もじはもと忘れがたき妹をとの心なり忘而念哉はたゞ忘れむやの心也と古注なりさては而もじ無用たるべし古人は後世のごとく句の字數たらぬにおもはぬ詞をおく事なしこの而もじ前にもかへす〴〵いへるがごとく忘而念とやがてつゞく心にあらず而に多事をゝさめたる也哉はかゝる例の

哉は必やはのやなり里言に思ハウカヤといふ心なり上必江結の詞なれば婆也の婆をはぶける例にまがひやすしよくわかつべしさて此二句をおもふにこの頃從駕にはべりてたゞ供奉を專一にのみつかへまつるをある人とひて家の事は心にもかゝらずやといひけるにこたへたるなるべし又はひさしく家に音づれもせざりしかば忘れたるかとうらみおこせたるに答へたるにもあるべしいな家を忘れたるが如くみゆべけれどさらにわすれはせずとことわれるなり哉はわするべき事かよく思へとそのわする忘れぬのさだめを人にゆづれるなり

靈この歌表は家をわすれたるかといへる人にさらにわすれてをるにあらずとこたへたる也されどしばしもわすれぬ家をわすれたるかととはむ人にたゞ忘れずとのみいへりとて人信ずべきにあらねば必その故あるべき事也しかれどもその故のいひがたき事あるが故にかくよめるなるべければ其ことわり必言外にあるべき事あきらか也されば思ふに家の妹は一日片時もわするゝまはなけれど從駕のつかへしばしも疎畧すべからねば深くつゝしみてわざとうちみには家をも忘れたるが如くみする心のうちのくるしさ思ひやれとよめる也從駕につゝしみて家もわすれたりとみゆるばかりなることわりいさゝかもいへば弊あるべきが故に上をよせとはしたる物也下とても此情露ばかりも詞にあらはさぬはひとへに從駕のつゝしみによれりそのつゝしみの深さ心

のうちのくるしさ今みるたにおもひやられてあはれなりこれひとへに倒語の妙用なり長をかくよみなしたる歌なれば凡見には凡物に混じてみすくすべき事なげくべき事なりされども今尺する所おそらくは信ずる人よに少かるべしもしこれを了解する人もあらばともにわが御國ぶりをかたるべき友にこそ

右一首身人部王

これは六人部とかけるに同じ牟を務にかよはせたる也天平元年正月正四位下六人部王卒と續日本紀にみえたる此人なるべし

草枕。客去君跡。知麻世婆。岸之埴布尒。仁寶播散麻思乎

〔言〕草枕は客の冠なる事まへにいへり（）客去君跡云々　還御にしたがひて京にかへりのぼり給ふをたびゆくとはよめる也この客去といふ詞もと旅なるにたびゆくといふがまぎらはしさにさま〳〵聞まどひもせらるれどこれはたゞわかれ奉るべき君としらませばとの心を別にせまらざる詞づくりなりとしるべし古言のみやび思ふべし君とは皇子をさせる也麻世婆は麻之世婆をはぶける也世婆の事まへにくはしくいへり麻之世婆はかねてさる御けしきたにあらば程なくかへり

給はむともしらましもしさやうにしらましせばとの心なり上に今ひとつ世婆ある心にみるべし

○岸之埴布尒この岸はなにはの岸か此集巻六に白浪之。千重來緣流。住吉能。岸乃黄土粉。二寶比天由香名ともよめれば此岸は住のえの岸なるべしこれこの娘のすめる所なればよめるなるべし埴とは和名抄云埴土ー黄而細密曰ㇾ埴和名波尒とあるこれ也布は粟田豆田その外蓬生芝生などの生に同じく埴の生ずる所をいふ名なれどやがて埴土の事をはにふとよむは月を月夜とよむにひとしきみやび言にや古言にはかゝるみやび多きもの也尒は里言にデといふ心なりにての義也いにしへは埴をもて衣をすりたるなるべし○仁寶播散麻思乎にほはすとは衣にその色をつくるを云まへの引馬野の歌にくはしくいへり麻思まへにいへるが如しはやかへりのぼり給はむにせまりたれば今はせむすべなきをかりにかねてしりたるになしたるその末をいへる也乎は里言にジヤノニノニジヤニなどいふ詞なりにほはすべき事なるをそれをえにほはさでわかれ奉るくちをしさをいへる也

〔靈〕この歌表は此清江娘子長皇子にめされてわかれたてまつらむとする時のどかにおもひて皇子の御衣もにほはせぬくちをしさをよめる也それをだに御餞にせましものをそれたにえせぬがいたくくちをしき心なりされどさばかりの事は古人こと〳〵しく歌とよむならひにあらねば情は

別にある事あきらか也されば思ふにかねても御わかれの期はしらぬにもあらざるべけれどいつまでも此皇子につかへ奉るべきやうにのどかにおもひしが今別に臨みてわかれ奉るべきこゝちもせずいとわびしくかなしきこゝちを告たてまつれる歌なりされどわたくしの事をもて還御をねたがり奉るやうにあらむをはゞかりてかねて別期をしらざりしにいひなし御衣をにほはさゞりし事ばかりくちをしきやうに詞をつけたるいとも〳〵あはれふかき詞づくり也かしこれらの詞のつけざまをよくみしりて倒語の妙用やごとなき事をさとるべき也

右一首清江娘子進長皇子　姓氏未詳

これはまへの皇子の御歌なる弟日娘なりある注に別人なるべしといへるは何のゆゑぞたゞ住吉清江ともじのかはれるばかりにて同じ皇子に奉れる歌なるをや

太上天皇幸于吉野宮時高市連黒人作歌

この幸は大寶元年八月なるべし日本紀にみゆ

倭尓者。鳴而歟來良武。呼子鳥。象乃中山。呼曾越奈流

〔古〕倭尓者こゝの倭も同國にての歌なれば藤原のあたりを倭といへるなりと或注にいへれど前に論

らへるが如くたとひしかにもあれ古人はさやうにせまりて詞をつくるものにあらずわざと他の國よりいふやうにいへるは古人の手段なりかくいふにて故郷をいとはるかにおもふ心はみゆるぞかしすべて古言はかくいとあやしき事多きは皆古人詞づくりの手段なりこれ不言を貴ふがゆゑなり後世心もて古人の心用ひをそこなふまじき也尒者（ニハ）の尒（ニ）は倭をさし者（ハ）は他方にわかてるなり○鳴而欤來良武ある注に來良武（クラム）はゆくらむに同じとあれどゆくらむにひとしくするはくはしからず後世にてはゆくらむといふべき所なるをくらむとよめるは必その別なくてはかなはぬ事ならずや大かたゆきくといふ事こなたに心をおきてはゆくといひかなたに心をおけばくると云これ古人ゆきくを用ふる法也氏京になりても此法たがはず土左日記などいと正しその燈をみるべしこゝもやまとなる家人のかたに心をおきていふが故に來とはいへる也欤（カ）は今此吉野のきさの中山をこゆる呼子鳥のふるさとになきてかくらむ又さはなきかをしらむとする心なりおもひあたる所をあてこゝろむる脚結なり○呼子鳥さま〳〵にいへど一定しがたし昔ありける鳥の今をらぬ事はあらじその鳥はあれども名をうしなへるなるべし覺性法親王の御集に奈良におはしける道にて呼子鳥をきかせ給ひし端作ありその代もまだ遠からぬ世なるにいかにしてかその名の傳はらざりけむ今人をよぶやうになく鳥をり〳〵山べにはきけりそれにや多くは人をよぶ心

にのみよめり○象乃中山よしのゝ内なりこの吉野の離宮に近きなるべし○呼曾越奈流とは人を呼ぶやうなる聲にてこの象の中山をこゆる也曾は呼子鳥のたゞには越ずて呼つゝこゆるをいふ也越とは象の中山を故郷の方へこゆる也奈流は奈利の曾のうちあひにて宇縮にうつれる也まへの中皇女命の御歌にいへるが如く物事のさまの心とまる所あるを心とまる所ありなどはいはで心とまる所あるよしを思はする脚結なり利は伊縮の義なり流は宇縮にて現當の義なり音義のしからしむる所やごとなくて曾にしたがへば伊縮にはいふべからぬ理なるがゆゑに奈流とはいふなりこれは氏鳥のよぶは我をさそひて倭へいなむとの心かと思ふ心を奈流とはよめるなりこれ心とまる所以なり此故に上にやまとには鳴てかくらむとはよめる也としるべし古人脚結を用ひたる事後世のごとくならぬ事をしるべし後世脚結を用ふるはたゞ古人の口拍子をたのむにて義なしある人脚結は穿鑿に及ばぬものなりといへりなに事もやすきにつく世なればこれを信ずる人よに多しげに口拍子をたにしれば十に八九は理にあたれりされど新意をたつる時は必あやまるべし大かた脚結は多言を少言とし不言に情をおもはする専用とする者なるをいかでか麁暴せらるべき又例はしりて用ひざまをしらぬ一種ありこれ又同日の論たるべし

靈この歌表は倭には鳴てかくらん又は他方にゆきて倭にはゆかぬにかあるらむもし倭へゆくにてあらば呼子鳥の今この象の中山を越てゆくにたゞにも越ずて呼つゝこゆるはやまとへわれをさそふ心にやあるらむと呼子鳥の心をはかりたるによみふせたる歌なりされどこの呼子鳥の心

さなりともさにもあらずともしりたらむになにの詮かあるさばかりはかなき事を古人こと〳〵しく歌とよむ物にあらず必言外に情あるべき事あきらか也されば思ふに從駕日をへてはやく故郷にかへらまほしき心を家人にいひつかはしたるなりしかれども從駕なればふかく憚りて呼子鳥のおもふ心をはかりたるに詞をつけられたるあはれいふばかりなし返〻いへるが如く公私にあつく心を用ひたる古人の詞づくりよく味はひて古人倒語の自在なりし事みつべし

大行天皇幸于難波宮時歌　文武天皇也

大行天皇と申すは崩じましていまだ御謚たてまつり給はぬほどに申すから國のならひによりてかゝれたる也これは御世におはしましゝ時の從駕の歌どもを崩じましていまだ御謚奉りたまはざりし程に聞て記されたるなるべし

倭戀(ヤマトコヒ)。寐之不所宿尒(イノチラエヌニ)。情無(コヽロナク)。此渚崎尒(コノスノサキニ)。多津鳴倍思哉(タヅナクベシヤ)

[言]倭戀云〻　故郷をこひてねられぬ也これを直言のやうにおもふ人あるべけれどしからずたとひ情のすぢにても詞に正側ありて側にいへばなほ倒語なりこれ古人詞づくりの法なりもと此歌たづのなくを詰る事を主によみふせたる歌なれば鶴を詰るは正なり倭戀は側なれば表に害なきな

りあしく心えて表を傷へりとみまじき也寐宿のけぢめ前にいへるが如し尓は里言にノニといふ心なり鶴の心なきを詰らむがためにその理をいふなり○情無とは鶴のおもひやりなきを云此句は終の七言につゞく心なり○此渚崎尓とは難波江の渚のその嵜を云此といひ尓といふはこの難波の宮に近き渚の崎をいふにてせめて此宮よりまどほき所にてたになけかしと思ふ心をさとしたる也○多津鳴倍思哉べしやは上の三輪山の歌にいへるが如し鶴のなくべき事かやよく思惟せよと可否を鶴にゆづりたる也哉は後世のやはの心なり鶴が心にげになくべき事にはあらずとおもはせむがために哉といふ也たづが音はいたく物がなしげにて客愁をいとゞ催されていとはしさにかくはいふなり

[靈]この歌表は此難波にやまとをこひていもえねずあるに所もこそあれ此近き渚の崎にしも斟酌もなく鶴のなくべき事かよく思惟せよと鶴を詰りたる歌なりされど鶴に詰りたりとて禽獸のこの可否を分別すべくもあらずもとより情あるべくもあらぬ事なるを古人こと〳〵しく歌とよむものにあらず必別に情あるべき事うたがひなしされば思ふに從駕日をへて郷思たへがたき事を家人に告つかはしゝ歌なりされども從駕にはゞかりて鶴を詰るに詞をつけたるあはれなり倒語のつけざまよく〳〵思ひしるべし

右一首忍坂部乙麻呂

玉藻苅。奥敝波不搒。敷妙之。枕之邊。忘可禰津藻

〔言〕玉藻苅云〻　玉藻は邊のかたにてもかるべけれど多く澳の方にてかればにやそれにもかざるべからず倒語のためには實事にたがへる事をもいふ事つねなりこれひとへに重くする所は公を傷らぬにある事わが御國ぶりなれば也心得あやまるまじき事也奥敝は澳方なり波は邊の方にむかへわかちたるなりされど此波は玉藻苅までをもちておける也邊の方につきて舟をこがむと也かく澳の方はこがじといふは枕のあたりのわすれかねらるゝが故なりそのよしは下にいふべし標實の法をもて上下における也舟ともいはで不搒といふ事古人のつねなりこれらをみて後世のをさなさをかへりみるべし不とは里言にマイといふ詞なりこれはもとより邊にをりていへるにあらずある日澳をこぎて玉藻をかるをみて懲りたるが故に此のち澳の方はごがし(ママ)とよめる也一旦こぎてこりぬともいはでかくよめるは下のつもじにしるければなり古言の力おもふべしもし澳べもいまだこがであらかじめいへる詞ならば終の七言の津藻の詞かなはざるべしわすれかぬべければなどいはではうちあはぬをおもふべき也〇敷妙之云〻　しきは繁き也たへは布也その布の

密なるをしきたへとはいふなり（あらたへはこれが反なり）令義解に敷和者宇都波多也とみえたりしきたへをもてつくるものには皆冠らする也くはしくは真淵が冠辞考にみゆ枕之邊とは家にて妹と寐たりし枕のあたりの事なりこれはゞかりあるが故に冠にかへたる也つねに玉藻を妹のなびきぬるにたとへたるが如く玉藻のなびけるさまにて妹のねたりしかたちのおもはるれば也それを枕のあたりとよめる例のみやびなり〇忘可祢津藻この津もじはわすれむとすれども忘られぬよしをさとしたるなり藻はまへにくはしくいへるが如く枕のあたりわすれかねつといへども直に京にかへりのぼらむ事も心にまかせぬ歎息なりかゝる歎息のかゝる詞なるがゆゑに亾父これをサテモと訳せりこの津藻の脚結ひとへに妹を思ひては従駕のつかへうすくなりなむ事をはゞかりてなる事をおもふべし或注にたび寐する浦のさまのあかねば澳へこぎいでむ事はおもはずと也といへるはこの枕之邊といふを邊の方にたびねしたる枕のあたりとや心えられけむされどそれを枕のあたりといふべくもあらず冠詞も津藻といふ脚結も無用の長物となれり言靈の道よにかくれて後は古人の歌をもかくみあさむる事となりぬもとさるはかなき事は詠歌の専門にあらざる事をしる事大かた古歌をみるべき大要なりこの大則をふまずしてはかしこくおもひえたりと思ふともなほ私意たるべき也しかのみならず上に玉藻苅としもおかるべしやは玉藻をかる故に澳方は

こがじとよめるにこそあれ此集巻二に玉藻成依宿之妹乎(タマモナスヨリテシイモヲ)とよめるにてもおもふべし大かた古言は詞の力のつよき事かくの如し歌はたゞもてあそびもの也と心えて言擧せぬ御國ぶりを弁へぬ後世心もては古言はときがたき物なりこれらの詞づくりをみしりて學者心を精しくして古言の用ひざまをまねび（古言をまねべとにはあらずもちひざまをまねべといふなり）おのが歌をもよむべきなり

【靈】この歌表は玉藻かる澳の方にはそのなびきに妹が寐たりし姿おもひ出らるればその思ひいづる心やがて從駕のつかへの妨となりぬべしされば此後澳の方はこがじとつゝしみをむねとよめる也されどさるつゝしみは心のうちにこそ思はめかゝる事をこと〳〵しくさかしらに古人歌とよむものにあらず必別に情あるべき事あきらか也されば思ふに郷思たへがたけれどおもはずにふかくしのびたるよしを家に告られたる歌なるべししかるをふかく詞につゝしみて玉藻におほせられたる詞づくりめでたしともよの常なり玉藻におほせたるはひとへに從駕にはゞかれる也しかつゝしみをむねとよみながらいさゝかさかしらにも詞をつけられずたゞ澳べはこか（ママ）じとのみよまれたるみやびかへす〴〵いへるが如くかく公私にかたよらぬ詞づくり大かた詞づくりのいたり也この時の心のうちいかなりけむと今もおもひやらるるかし

右一首式部卿宇合(ウマカヒ)

宇合はうまかひといふ事を音にうつされたる字なり眞淵はこの比はこの卿いまだ童にておはしゝ時なれば從駕し給ふべからず宇合卿の歌にはあらじといへりたとひ童にて從駕したまひしにもあれこの歌妹をおもへる心なれば童にはふさはしからず傳へあやまりたるなるべし

長皇子御歌

吾妹子乎(ワギモコヲ)。早見濱風(ハヤミハマカゼ)。倭有(ヤマトナル)。吾松椿(ワレマツツバキ)。不吹有勿勤(フカザルナユメ)

〔訓〕吾妹子は早く見まほしき心のよせにおかせ給へる也たゞこれよせばかり也これを一首の心にかけて注するは非なりゆめ〳〵一首の意にかけてみまじき也いはまほしき事に弊あればわざと無用のよせ冠などをおく事古人倒語の法則なりしかるを後世はこの法則を弁へずいひたにずれ(マヽ)ばやがて内外をもたゞさずしてそれにかゝづらふ也これら内外を混じやすしよく思ふべしこれを分別せむには一首の意の眼たる所をはかりてその有用無用をしるべし無用なるは必いはまほしき事にかへたるもの也古人この格多し前の石上大臣の吾妹子乎去來見乃山乎(ワギモコヲイザミノヤマヲ)云々とよませ給へるに同じ○早見濱風豊後國に速見(ハヤミ)郡あり攝津國にもさる所あるにやたづぬべし契沖は早見の見(ミ)は見るとはよせたれど見(ミ)は詞にて早き濱風の心なり濱風はさはる物なく吹過ればいふ也とい

へれど義もしを伎のごとく用ひたる例をしらねば此說うけがたしこれはあらく吹きて寒きをいふ也さはことわり給はねどもふかざるなとよみ給へるにしるし後世名のかはりたるにて猶津國にありし濱の名にぞあるべき又は氏御歌豐後國におはしける事ありてその時よませ給ひしを傳へあやまりてこの幸の時の御歌としたるにもあるべし○倭有云〻やまとの皇子の宮にある松椿を云されはわが松椿ともよむべけれと京なる妹のわれを待つといふによせたまへるなればわれともわをともよむべしされどこれもまた上と同じくよせばかり也一首の意にかゝる事にあらずみあやまるまじきなり諸注多くはみあやまれり上の吾妹子乎もこの吾松も一首の意にかくればくさ〳〵の意混雜して大かた御歌くた〳〵しきをおもふべし倭有といふ詞は松椿といふにつゞけたるにて吾は挿みてよませ給へる也又われをわといふは古語也とある注にいへれど非なりわれをわといふはたれをたかれをかそれをそこれをこなどいふにおなじく此義まへにくはしくいへり後世いはねば古言なりと思へるもことわりながら古言といふにはあらずして義によりてわれともわともいひし事なるはいにしへわれともわともいへるにさとるべし後世いはざるは古めきたる故にはあらず義をうしなひたれば也これを古語也と心えられしはその人にかぎらずある人これといふべき所をもおしなへてことのみかきたるを大家のかきたる事なれば故あるべしと

思へばにや世にたれも〱しかいふは非を傳ふるなりよく思ひしるべしこれはわをよむ時のこゝろえ也われ松椿とよみてもわれをの心なればわれともよむべしとはいふなり早見はわがやまとなる御園に松や椿のありけるをよませ給へる之○不吹有勿勤とはふきかよへとの心にてそのふかざらむことをいさめて勤(ユメ)とはよませ給へる也勤(ユメ)は今もゆめ〱といふゆめにていめといふ詞はこれがかよひたるにて何事にもあれ事を禁ずる時にかたくそれをつゝしめといふ詞なり勿(ナ)はたゞしひてその事をやめさせむとする也勤(ユメ)は心からつゝしみてやめよといふ心なれば一段つよしとしるべし不吹有勿(フカザルナ)は所詮はふけといふ心なれどふかざるなをふけ也とは注すまじき事也その故はふけといふはふかぬにむかへて促(ウナガ)す詞なりふかざるなとはふくべきをふかずにをる事なかれといふがたがへりたとはゞあらずといふはなきといふに同じ詞の如くなれどなきはあるにむかへたる詞也あらずはあるべきがなき心なるに同じなきといへばひともじたらねばあらずとよめる類今の世にはともすればみゆかし

愚この御歌表はこの早見の濱風にあつらへて倭なるわが家の園にたてる松や椿をふかずあるなとよませ給へる也されどなにゆゑにふかざるなといさめ給へりともその故をことわり給はぬは必その故いふべからぬ事あるが故也そのいふべからぬは必はゞかりあるが故にてそれ即情なる

事疑なしされば思ふにこの濱風の心して倭なる松椿をふかざらむもはかりがたしもししからばふかざる事なかれこの寒さを家人にしらせて此さむき濱風にいかに郷思たへがたくおはしますらむと家人におしはからせむの御心なりされど從駕をはゞかり給ひてなにの故にともことわり給はずしてたゞ松椿をふかざるなとのみよませたまへる上古の人たりともなみ〳〵の企及ふべき御詞づくりにあらずまして後世の人こゝろをたに得ぬもことわりなる事也なにの故ともいはでその片端をよめりし歌上古には少からず古人倒語のすぢおもひもよりがたき手段多けれどこの詞づくりはかたきが中のかたき也この皇子の御歌いづれも〳〵凡を出たり學者ねもごろに目をも心をもとゞむべしされば松椿は家人に比し給へる事しるしこれは實に御園に松椿のありけるをとり出たまへるなるべし前にかへす〳〵いへるがごとく吾妹子乎吾松などはよせばかりにて一首の意にかけてみまじき事この情と筋たがへるをもて前のあげつらひをよく〳〵わきまへしるべし

大行天皇幸于吉野宮時歌

見吉野乃(ミヨシヌノ)。山下風之(ヤマシタカゼノ)。寒久尓(サムケクニ)。爲當也今夜毛(ハタヤコヨヒモ)。我獨宿牟(ワレヒトリネム)

〔言〕山下風は和名抄に嵐山下出風也とみえこの集中に山下山阿下風などかきてあらしとよめれば

こゝもやまのあらしのとよむべしといふ說あれどなほやましたかぜのとよみてもありぬべく又やまおろすかぜのともよむべし○寒久尓はさむきにといふ心なりと人は心得たれどしからず寒くある事なるにといふほどの心にて寒きことをめにたゝせていふ詞なりかくいはでは下の句の意あはれならざれば也すべて計久末久良久沙久加久之久(ケクマクラクサクカクシク)などいふ類みなこの格にてその事をおもくせざればてりあふ物事はえなければ也上の詞の下を同韻にかよはせて久を添ふるなりこれもさむきのきをけにかよはせて久をそへたるなり後世こそこれを用ひね歌によりては良久計九(ラクケク)などいはでは語をなさぬ事あるもの也すでにこの歌さむきにといひては下のあはれうすきをもてさとるべきなり○爲當也今夜毛はたはまたといふに同じと諸注いへりうはべにみればしかおぼゆれども多く例にわたりて思へばしからず一種の詞なりさらに又の心にあらずまたは一事のうへに更に一事のかさなるをいひはたはせむこゝちもなき事のやごとなくせらるゝ歟なりされば亡父脚結抄にはたは里言にセウコトモナイ丆といふ義ありといへりげにしかりこの故にこゝもこよひ獨寐せむこゝちさらに／＼なけれど從駕なればやごとなくひとり寐すべきをなげきて爲當(ハタ)とはよめるなり爲當の字をかられたるは當は多の假名につね用ふる字なれば爲は波の誤にやともおもへと日本紀(欽明天皇)日本後記宣命なほ令義解などにも爲當をはたに用ひられたるはから

よみにまさにしかすべしとすといふ心にて爲當とはかゝれたるにや前にいへるが如くセウコトモナイヿといふ義にもかなへればしかにやとはおぼゆるなりこの歌にとりていはゞまさに京にかへらむとすといふ心なりこの心をえて此詞の義をしるべし也(ヤ)は疑なりはたやはたなどよむは詠の也(ヤ)なりこれは下の牟(ム)にうちあひたるなれば疑なり混ずべからずこれはいまだ寐ざるほどにおもへる心也未然いかにあるべきと思へる心を也(ヤ)とよめる也毛(モ)もじはこの連夜のひとり寐につけむとていふなりされどこの前の連夜は今夜ばかり山風も寒からざりしに今夜のいたく寒き夜なるをまへの連夜につけて毛(モ)とよめる之これ毛といふ詮なりたゞ一物に又一物をつくる詞なりとのみ心得たるは例の僻なりもし連夜には劣れる夜をもて毛(モ)といはゝ毛(モ)もじの詮はあるまじきを思ふべし上の爲當(ハタ)をまたといふ義とせばこの毛(モ)もじのかひなかるべきをもおもふべし○我獨宿牟この我をわがと訓たるは非なりがといふ時は必上の物主となりのといへば下の物主となる事前にあげつらへるが如しこゝも我といふよりはひとり寐の事この歌の主なれば必これさはよむまじき也われわがといふけぢめ古來審ならず

〔靈〕此歌表はこの芳野の山もとに從駕して連夜ひとり寐せしがこよひことに山下風さむくしてひとりねせらるべき夜ならねどせむすべなければはたこよひもひとりねむかとなげきたるなりさ

れどさばかり客中のひとり寐をくるしとおもはゞやがても京にかへりのぼるべきにかへりものぼらで歌とよめるは必別に情あるしるし也されば思ふに私の旅ならばやがてもかへりのぼらましをやむごとなくひとり寐してあはまほしき妹にもえあはぬくるしさを家に告やられたる歌なりされど此情いさゝかもあらはなれば從駕をうらむになりぬべきをはゞかりてたゞひとりねをなげくに詞をつけられたるあはれ限なし爲當(ハタ)といふ詞この情に照らしてよく味はふべしかへす〴〵古人の詞づくりはいひざまこそかはりたれ公私をそなへたる詞の法則ひとしきに千とせねふれるめをひらくべき也

右一首或云天皇御製歌

この歌御製とする時は幸はもと御心づからあそばしゝなれば幸を悔させたまひし御詞づくりとみるべしさるは后妃をこひしくおぼしめす大御心を后妃に告させ給へる大御歌にてさばかり后妃を戀ひしくおぼさばこの幸はしたまふまじきをと人思ふべければ從駕の人のきゝをはゞからせ給ひし御詞づくり也これ予が牽强にあらず詞は活物なれば同じ詞も人にしたがひて變化すべしうたがふべからず

宇治間山(ウヂマヤマ)。朝風寒之(アサカゼサムシ)。旅尓師手(タビニシテ)。衣應借(コロモカスベキ)。妹毛有勿久爾(イモモアラナクニ)

〔言〕宇治間山は吉野なり○朝風寒之朝ふく風はことにさむきものなれば也○旅尓師手は上にありしにおなじく旅デと里言にいふ心也こゝも朝風に心あらせむとて旅を重くよませ給へる也○衣應借云〻京にて妹に起わかれたまひしあしたなどは寒からむとて妹が衣をかしなどしたる事もありしがけさはさやうの妹もあらぬにとの心なり應(ベキ)とは里言にソウナといふ心也毛(モ)もじはさる妹にてもある事ならばさむさもしのがるべきにとの心なり有勿久尓は朝かぜにむかひての詞なり衣かすべき妹もあらぬにかく寒くふくべき事かはよく〱わがさむさを察してさむくは吹まじき事をと朝風を詰りたる心なり勿久(ナク)はあらぬの奴(ヌ)を奈(ナ)にかよはせて久(ク)をそへたるなる事前にいへるが如し上の尓師手(ニシテ)に照らして衣かすべき妹もあらぬ事をもおもくよみたまへる也これもはら風を詰らむがためなり

〔靈〕この御歌表は氏うぢま山の朝風都にてこそあらめ衣かすべき妹もなき旅中に心してもふくべき事をと朝風を詰りうらみ給へるなりされど非情の風こゝろせむやうもなく詰りうらみたりとてきゝしらむやうもなしこれ表は本情ならぬしるし也されば思ふに郷思たへがたくてはやくかへらまほしき情を家に告たまへる歌なる事明らか也されど從駕をいとふになりぬべきをはゞかりて風をうらむるに詞をつけたまへるめでたしともなか〱なり或注に男女の衣をかりて着る

事いにしへの常也とあるはいかなるひがことぞやさむき時衣をかすは寒からせじとおもふ情のいたす所なる事今世とても同じ常也といはゞさる情なくとも衣をかすが常のやうなりもししか見ばこの御歌もたゞ無味なるべしかへす〴〵後世の目はいたる所かぎりあり志あらむ人は後世の弊をあきらむべし古人の詞のつけざまにめをひらくべき事をくりかへしいへどもかゝるすぢになづめらむ人はこの王の御こゝろもちひをもいたづら物にせむがくちをしさに論らひおく也

右一首長屋王(ナガヤノ)

高市皇子の御子なり大寶元年正月無位より正四位上をさづけたまひし事續日本紀にみゆ

和銅元年戊申天皇御製歌

これは　元明天皇也この年陸奥越後の蝦夷ども叛きて和銅二年討手の使をつかはされし事ありこゝは元年とあればその前年軍の調練ありける時の御製にや契沖は大嘗會の御製也といへり

丈夫之(マスラヲノ)。鞆乃音爲奈利(トモノトスナリ)。物部乃(モノノフノ)。大臣(オホマヘツギミ)。楯立良思母(タテタツラシモ)

「丈夫は契沖が說にしたがはゞその日の陣の武夫どもをさしたまへるなり眞淵は討手の使にしたがふ武夫どもをさし給へる也といへり○鞆乃音爲奈利ある注に神代卷に稜威(イツ)之高鞆(タカトモ)とあるを

もて鞆は弓射る時左臂につけて箭をはなつに弦のふれて鳴るその弦の音を高からしめむがため也音をもて威（オド）す事鳴鏑に同じといへりこれは高の字にめを奪はれたる説なりたとひ（ママ）しかにもあれ弦音を高からしめむがためなるを高鞆といはむやは神典に高の字あるはすべて建（メケ）のかよひにてよりもつきがたきさまを云也（わが御國にて威といふはこれにこと也くはしくは古事記燈にいへり）これは弦の音のおのづからたけきをもて高鞆とはいふ也弦音をもて威す事はさる事なれどもと鞆はさる爲の物かたしかなる事をしらずこゝに音すとよませ給へれば弦のふれて鳴る物なる事は明らか也しかれどもおもふにもと鞆は鳴る爲につくる物とはおぼえす弓（ユ）がへりする時弦の左臂にあたりて臂を傷ふが故にその防につくるが本意なるべしそれに弦のふるゝ音おのづからするをいふにこそ表にめをうばゝるれば自然をうしなふべき事これらにも思ふべし奈利（ナリ）は前の中皇女命の御長歌にくはしくいへるが如く此音のふかく御心にあたる所あるをさとし給へる也〇物部乃大臣この物部は氏にはあらずたゞ武（タケ）きをのこをいふよし古注にいへるげにしかなるべし大臣とはこの討手の使の大將をおほせられたるなるべし契冲が説によらは大嘗會の陣の大將なるべしまへつぎみといふは　天皇の大御前に侍る臣をひろくいふ也後世大臣といふにはたがへり上の丈夫（マスラヲ）はこの大將にしたがふ武夫どもをさし給へる也〇楯立良思母楯はあたより射る箭をふせがむ爲にたつる物なり立とは大

營の方に從はゞ陣の備の成るよしをおほせられたる也討手の方に從はゞ楯をたてならべて調練するさま也良思は前にいへるが如く里言にラシイコソウナなどいふ心なり楯たつらしきさまを　天皇のつねのおましよりおしはかりたまへる也もと此良思は上の奈利より出たるにて鞆の音するより楯たつらしきをはかり給へる也鞆は音する物なるが故におましより遠けれど奈利とよませ給ひ楯たつるは音もせねば良思とはおほせられし也されど鞆の音するより察し給ひしなれば良思とはよませたまひしなる事をしるべし諸注たゞ二事をならべておほせられしやうに見せるは奈利良思の義を審らかにせずかつ鞆と楯の音の有無におもひいたられざりければ也村はまへにいへるが如く鞆の音し楯たつらしといへどもといふ義なりこの村もじ一首の眼なりもはら靈にひゞかせ給ひし也下にいふをてらして思ふべし

[靈]この御製上にいへるが如く契冲は大嘗會の時の御製とすその故は續日本紀に慶-雲四-年秋七-月壬-子即二位大-極-殿一云々六月　文武天皇崩じ給ひ翌年慶雲五年改元和銅元年なりその十一月大嘗會ありければ也眞淵は蝦夷の叛けるに討手の使つかはされしその調練の時の御製とすこの兩說いづれか是なるべき此兩首をつら〳〵みれどたしかにいづれともさためがたし大かた歌の端作または詞づくりのさま脚結のひゞきなどにてその心しるきもあれど又察し定めがたきもあ

るは常なりいはゞ察しさだめがたきは中にも詞づくりのめでたき也もと私情をもて公理を傷らじとての詞づくりなればその心のさだかならぬが本意なりゆめ〳〵あやしむまじき也されどそのかみまのあたりその歌見たらむ人はいかに詞はみやびたりとも其靈にはおもひ入られしなるべき事明らかなり今多くの年を經てみるが故にはかり定めがたきなりこれ此御製にかぎらぬ事ながらついでに辨じおくなりされば此兩說さだめがたければ今兩說にしたがひて表裏をとくなりまづ大嘗に從ひていはゞ表はますらをどもの弦の音の鞆にあたりてひゞくをきかせ給ひてさは物部の大まへつぎみは楯たてなめて庭上のそなへも今はとゝのひたりげにおぼしやらせ給ひていと御心よきさまに御詞をつけさせたまへる也されど物部の楯たてたるかいまだたてざるかばかりの事はたゞ御もとこ人にとはせたまひてもありぬべき事なるをこと〳〵しく大御歌あそばすべきにあらずされば思ふにこれより天のしたをしろしめさむ事女帝にさへましませばこの大嘗にすめ神たちのおぼしめすらむ程もいとかしこくはづかしくおぼしめす大御心をよませたまへるなりしかれどもあらはに謙遜をいふはかへりてさかしらなれば御心よくおぼしめしての御言擧かとみゆらむやうに御詞をつけさせたまへる也から國のをしへいまだこぬほども人は天地を渾沌する質なるが故に謙遜などはあらはにいふをめでたき事にすめるをかくみやびたる御

詞づくりかたじけなしともかしこしともまをすべきやうなくこそ又討手使のかたにしたがはゞ柄の音をきこしめして栖たつるさまを遠くおましよりおしはかりましていさましくおぼしめすに御詞をつけさせ給ひしなりされどいさましく思ふばかりの事を上古の人歌とよむものにあらねば別に御情はあるべき事必せりされば思ふに御位につかせ給ひしはじめより叛くものいでき し事をふかくなげきおぼしめしそれにつけてはこの武夫たち　天皇の御ことよさしのかしこさに命のほどもはかられぬ此役に家をすてて遠くゆくらむ心のうちをもおぼしやられいかでこのあた安く服して討手の軍卒ども皆恙なくかへり天下しづかならむ事をおぼす大御心をよませ給ひし也しかれどもこれをいさゝかもあらはにおほせられむはさかしらなるべきをはゞかりおぼしめしゝ御詞づくりなり女帝にもおはしませば安からずおぼしなやみたまひし大御心のほど今もみるが如くいとかたじけなくかしこき御詞づくり也かし軍卒のこの御製をきゝたらむにいかに身にしみてかたじけなくて命もをしからずおぼえいかで震襟をやすめたてまつらむとこそおもひけめとぞおぼゆるこの兩説いづれとも定がたきが中に此次下の御和歌に須賣神乃嗣而賜流(スメガミノツギテタマフル)とあるをおもふにそれも討手の方にもそむくにはあらねど大嘗の方にはことに切なるべくや

御名部皇女奉和御歌

これは　元明天皇の御姉みこ　文武天皇の皇女なり此御和歌も上の御製にしたがひて兩說を存してみるべし

吾大王。物莫御念。須賣神乃。嗣而賜流。吾莫勿久爾

[言]吾大王は　元明天皇をさし奉り給へる也○物莫御念なにごとも御心にかけさせたまふなと申させたまへるなり古点はものなおぼしそとあれど曾もじなどもなければものなおもほしとよむべし奈曾とよむべくして曾もじなき例この集中かぞへもあへず物おもほすなとよむとは異にして奈曾の曾もじをはぶきたる例なり前にいへるが如く奈は大かたの事をひろく禁じ奈曾といふ時はその一筋を禁じて他の筋にはかゝはらぬ心なりと脚結抄にいへりされぱこれもその心にみるべし他のすぢには大御心をなやませ給ふともこの筋におきては御心やすくませとの心なり物とは多事をひとつにいふ詞なる事前にいへるが如し○須賣神乃須賣は統の義にて統はなに事をもすべさせ給ひてよろづの本なるを云也さればひろく皇御祖神たちをさし奉りたまへるなり○嗣而賜流とは皇神よりつぎ〳〵にあれ經ますを云而もじの事返ゝいへるが如くこの而もじなど

下にやがてつゞくる脚結なりと心えば語をなさゞるべし嗣而なにを賜流ともなきは而もじ多事をゝさめたる所以なり大かた人の生るゝ事神の御たばかりによる事神典古事記上巻淤能碁呂島之件に審らかなり皇統たやさずやごとなき御腹に心身をたまへる事すめ神の御心なればこれらの多事を而もじにをさめ給へるなり○吾莫勿久尓古点はわれならなくにとあれど下に引たる此集巻十五の歌にしたがひてわれなけなくにとよむべし此集巻四に吾背子波。物莫念。事之有者。火尓毛水尓毛。吾莫七國また巻十五に多婢等伊倍婆。許等尓曾夜須伎。須久奈久毛。伊母尓戀都都。須敝奈家奈久尓など同じ例也これらの歌の心はその巻ゝにくはしくいへるをてらして思ふべし吾なけなくにとはわれなからぬにはあらぬにとの心之かく奈家と江縕にかよはする事高けむ深けむなどよむ例にてそれは高からむ深からむの心なりこれも吾なからなくにの心なりされど加良の合音は加なるを又計にかよはせたるにやかゝる事はさかしらにつねいふ人あれど大かた通音の事はおきて音義にかなはぬ事は古人いふべきにあらねば通音にかゝはらず江縕の義こゝにかなふが故に奈伎の伎を江縕にかよはせて計といへるなるべしかく江縕にかよはすにおのづから加良の義こもればなるべし江縕の義こゝにかなふは未然を思はする心なれば也さてこの吾といふもじ宣長は君の字の誤ならむといへるを千蔭これに同意してしかする時は上よりのつゞき穩

なりといへり此說例のわが御國の古言を直言と心得たるひがみ也上よりのつゞき穩なりといへる事こゝろえず上に吾大王とありて又君とさし奉らむに穩なりといはむやはこれは猶吾なるべしすめ神の嗣てうまれしめ給へる吾ながらぬにはあらねばあらむかぎりはたすけたてまつらむしかるをなにをかなげきおぼしめすぞとなぐさめ奉りたまへる也されど御みづからかやうにおほせられむはさかしらなれど此さかしらは倒語なれば害なしかくさかしらに御詞をつけ給ひしは下に情をとくにてらしてさとるべし大かた直言に妖あるべき事も倒語なれば神さきはひたまふなりかへす〳〵直言と倒語の別をくはしく弁へて混ずまじき也さればこれはなほ吾とさだむべき也後世心もてこの御心もちひをむなしくせむ事國學せむ人のかへりみるべき事なりしかれども君ともいふべきをわざと吾とよまむ事のことわり大旨にあげつらへるが如く天平以後の人は心得かぬべき事なりまして今をやよく〳〵倒語の妙用を味はひて氏吾の字君の誤ならぬ事をしるべし

靈此御歌もまたかの兩說にしたがひていふべし大嘗の方にていはゞ表はわが大王大御心をくるしめさせ給ふな凡庸のわれにあらねば天下の事もわがあらむかぎりはたすけたてまつらむを何をかなげきおぼしめさむとなぐさめ奉りたまへるなりされど上古の人さるさかしらにもなめし

くもある事を言擧すべきにあらねば言外に御情ある事あきらかなりされば思ふに女にましませとも天下臣民服したてまつりて大御位につかせ奉れるばかりの御德にませはかならず天下も安寧ならむ事しるきをなほ天下の爲に大御身をかへりみます大御心のかたじけなさをふかく感歎したてまつり給へる御歌なりされど諂におつべきをはゞかりたまひてわざとさかしらになめしく御詞をつけたまへるめでたしとそよのつねなりことにすめ神のつぎてたまへるおしなべたらぬ吾といひなしたまひても はら御心づよくおもはせたてまつり給へる御詞づくりに後世日及ばぬ事くちをしともくちをしかし又討手の使の方にていはゞなに事も大御心にかけさせ給ふな凡庸ならぬ吾御かたはらに侍れば御心づよくおぼしめせとなくさめたてまつりたまひしなりされど女の御身にしてをゝしげにおぼ(ママ)せられむ事あるまじき事なれば必言外に御こゝろあるべき事明らか也さればおもふに　天皇の御德澤により北地の役勝利うたがひなく軍卒どもゝ恙なく凱陣して天下靜謐になり侍るべしとほぎ奉りたまへる也されど諂におつべきをはゞかり給ひて御心の外にをゝしく御詞をつけさせたまへるなりその御心用ひのほど思ひやられ奉られてめでたしなどもなか〳〵也この兩說まへにいへるが如くこれかれを思ふに大嘗の方心ひかるかし

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停長屋原迴望古郷御作歌

一書云太上天皇御製

普通の本には二月とあれど紀に三月とあるにしたがへり一畫脱たるにこそ長屋原は大和國山邊郡なり和名抄に山邊郡長屋とある所なるべしこの御歌の事千蔭があめる畧解に宣長が說をしるせりげにこの　太上天皇は　持統天皇にて飛鳥より藤原にうつりまし〻時の御歌にて和銅三年云〻とかけるはあやまりつたへたるなるべしもし倒語に藤原を明日香の里とよませたまひしにやと思へど上古倒語大抵法則ある物なればさは見がたき所ありなほこれは誤り傳へたるにこそされど又は御歌のかはりたるにもあるべければ端作は舊本にしたがひおきぬ

飛鳥明日香能里乎。置而伊奈婆。君之當者。不所見香聞安良武　一云君之當乎不見而香毛安良牟

言飛鳥のはあすかの冠なり眞淵はいすかといふ鳥の名に冠らせたる也とてくはしく論らへりおのれおもひよれる事もあれど猶よく考へていふべしあすかを飛鳥とかくはかすがを春日とかくに同じ

○明日香能里乎このあすかの事まへに宣長が說をあげしがごとく明日香より藤原にうつりまし

ゝ時の御製とせば論なかるべし乎(ヲ)はおきていぬべきこゝちなき里なるをとの心におかせ給へる
也○置而伊奈婆さとはもとよりゐておはすべきものならねばいとをさなき御詞なれどこれ倒語
の所以なる也古言をまねびてはいはるべし大かた倒語のかたきはかゝるをさな言ぞかし上にい
へるが如くこの五言また下の香聞(カモ)の脚結など倒語たる所以やごとなければ明日香の里ながら倒
語とは見がたき法則なりなほ情は下にいふべし古人はかゝる詞づくり多しこれ表を重くするが
故なり伊奈(イナ)はいぬのかよへるにていきぬといふになりなばといふほどの心なり大かた伊久(イク)と由(ユ)
久(ク)の別弁ふべし伊久(イク)は道のほどをかけずしていたりつくをいふ詞なり由久(ユク)は道のほどをいふ詞
なりからもじの到と至の別のごとしこの奈婆(ナバ)にいたくたちはなれがたくおぼす御心こもれり○
君之當者この君とさし給へるは誰かはしらねどその里なる人をさし給へるなれど君がみえずか
もあらむとはよみ給はずして君之當とよませ給へるこれまた倒語の所以なり者(ハ)は他の方はたと
ひみえずともそのあたりはみずてはえあるまじきをとの御心なり○不所見香聞安良武かもは疑
なり古人脚結を用ひたるいづれとはなけれども此香聞(カモ)はことにめでたくおかせたまへりその故
は明日香のさとを置ておはさばその人のあたりのみえざらむ事はいふもさら也されば香聞(カモ)など
おぼつかなげにはおほせらるまじき事なるを香聞(カモ)とよませたまへるがめでたきなりそのめでた

しといふ所以はこの御製をきかむ人のさらばかならずみえじと思はむをまち給ふためなれば也必おぼめくべき事がらをばわざと決定し必定なる事がらをばわざとうたがふこれ皆倒語の手段なる也すべて我よりさしさだめさしつけたる詞をいさめ給ふわが御國ふりのかしこき事人は必その反を思ふべきものなるがゆゑなり其本源は昇降二氣におこりよろづの物みなこれにあやかりこなたをゆけばかなたを來る事やむごとなき眞理なり此故に　神武天皇倒語をはじめさせ給ひてよの妖氣をはらひたまへり倒語の道のかしこさかへす〴〵思ふべし一云君之當乎不見而香毛安良牟とあるは藤原にうつりまして後君があたりをみずして常にこひしみてかもあらむとの心なり而(テ)もじに例の多事をゝさめたまへりこの香毛(カモ)は君があたりをみずしてをらむに堪むか堪まじきかといふ義となる也

【靈】此御製表はこの明日香のさとを置て藤原にいたりなば君がすむあたりはみえずかあらん又なほみえかすらむとこのさし給ひし人にかたらひ給ひし也これ長屋原よりその人のもとにつかはされし御製なるべしされど藤原にいたり給はゞ古郷のあたりのみえざらむをかたらひ給ふに反ばさる事なるをかくことさらに御歌とよませ給ふべきやうなしこれ言外に御情あるしるしなりされば思ふにこの後は此明日香なる人にあひがたくましまさむ事をふかくなげきつかはされし

御製なる事うたがひなししかれどもこれをあらはになげき給はむは遷都をうらみ給ふになりぬべきをはゞからせたまひて明日香の里を置またみえずかもなど大かたをさなく御詞をつけさせたまへる也かけまくもかしこき御うへなれば御詞のみやびは申すもさらなれど此御詞づくりのめでたさ倒語に志あらむ人はかしこくとも心をとゞめてまねびたてまつるべし

或本從藤原京遷于寧樂宮時歌

この或本の二字いとうたがはし上の御製の或本とならば上は短歌にて或本は長歌なるべきやうなし千蔭が畧解に一本にはなくて或本にあればかくしるせるならむといへれど一本或本いかなるたがひめぞや心えずたとひしかにもあれ端作の上にかく冠らせむ事しかるべからずかつ上の或本の歌とならば從藤原京以下はあるべくもあらず端作上と同じかるべき事なるに上のは明日香よりの遷都の時なりこの長歌はうつなく藤原よりの遷都の時の歌なればこのことわりにもそむければとにもかくにもこの或本の二字はうたがはし此作者はたれなるらむ名を脱せり

天皇乃。命畏美。柔備尓之。家乎放。隱國乃。泊瀨乃川尓。舳浮而。吾行河乃。川隈之。八十阿不落。萬段。顧爲乍。玉桙乃。道行晚。青丹吉。楢乃京師乃。佐保川尓。

伊去至而。我宿有床乃上從。朝月夜。清尒見者。栲乃穗尒。夜之霜落。磐床等。川之水凝。冷夜乎。息言無久。通乍。作家尒。千代二手。來座牟公與。吾毛通武

〔言〕天皇乃云〻迁都の事を命令し給ふを云畏とは　天皇の命はいかなる事ありてもそむくべからぬ心にて命令の重き事をいふ也義は前にいへるが如く牟のかよへるにてガリといふ心なり○柔備尓之云〻　にぎぶとはあらぶの反にて里言にニツトリなどいふ心也賑はふといふも此詞よりいふ也里にはこの詞をニギヤカナといひて人などの多きをいふは末也源氏物語ににぎはゝしきによるなめりとあるは富たる事なりこれ皆ニツトリとしたる所より富もし人多くもある事なれば也すべて詞に本末あるもの也本末をよくたどさでは義をまどふべきなりこゝはひさしくすみつきて居心よき家をいふ也これは藤原の家なり乎もじはさる住心よき家なればはなるべきこゝちもなきをとの心を思はせたる也擇はえらびてともよむべけれど例によれば択に抆をあやまれるにて放なるべし氏もじはつけてよむべし例の多事をゝさむる心こゝにかなへり○隱國乃云〻　くはしく前にいへり泊瀨川より舟にのりて奈良にうつるさまなり千蔭が畧解にこの川の事くはしくいへり○舼浮而云〻　後世の詞にていはゞ舟うかべたるばかりにて棹さしなどもせぬやうなりこれ而もじは多事をゝさむる所以なりおのれ而もじにかぎらず古人脚結を用ひたる心得をいふ事

これらに信ずべしすべて詞の檢糺無益の事にいふ人もあれどこれらいかにか心うべきさる妄說になづむまじき也川隈とは前に道の隈といへるにおなじく川のたをりてこなたよりかなたの川すぢのみえずなる所を云也八十隈とはその川隈のいと多かるを云八十はたゞ大かたに物の多かるをいふ事そのもとは神典より出たる詞なりこれたゞ隈の多かるをいふにはあらで川路のいと遠きことをいはむがため也これすべて古言のいひざま也不落とはその川のくま每にのこらずといふ心なりやう〳〵藤原の思はるゝを云○萬段云々　段は心をえてかけるもじ也一萬度とかぎれるにあらずこれも大かたにいふなり前の八十隈もあまり數多くてかぞへがたきばかりなる事をさとさむとてわざといかめしき數をいへるもの也きく人おもへらく萬たびはあまり也百分が一にして百たびばかりにもやと思ふべきそれ即よみ人の詐獲なる也古人は大かたかくざまに詞はつけたる物なり人の壽をほくとて千とせ萬世などいふこの轍なりこれは今世の人もつねにいひながらまことに千とせよろづ代もとおもふ實情なりなど心えたれどいかにしかおもふとも千年萬世あるべきかは倒語なる事しるきにあらずやしかるをいふかひなき人は歌はすゞろなるそら言するもの也と心うることゝなりぬなげくべき事なり此京になりてたに古今集になく涙雨とふらなむわたり川水まさりなばかへりくるがにとよめるも淚に水のまさらむやはこれ淚のいたく

流るゝさまを思はせむがためなる事上古の詞づくりなるをや乍(ツヽ)は下の道行晩にうちあはせてお
かれたるなりかく道行晩にうちあはせて乍(ツヽ)とよまれたるこゝろは藤原のみゆるとはなけれど萬
たびもかへりみするに日をくらしたるさまにいへる也○玉梓乃云々　道は梓のごとく直なる物な
れば冠とせる也道は川路なり畧解に人は陸にのぼりてもゆけば也といへりこれは道行などいふ
もじにめをうはゝれたるにて例の古言を直言と心えたる説也おほかた詞をかくなづみては古言
の妙處もしる事あたはずみづからの詞づくりもいつまでも同處に依然たるべき也舟行なるをか
くいふ事古人の詞づかひの常なりすべて舟行のうへなるにこの一句のみ陸の事をいはむやうな
しよく思ふべきなり舟行なるを陸のやうにいふは死人(シニビト)を活人(イキビト)のやうにいふ類にてかぞふるにい
とまあらずかしかへりみに道のいとまいりて日をくらしたる形容に陸路のさまをもて詞とせる
也とするべし○青丹吉云々　あをによし前にいへり佐保川尓伊去至而とは泊瀬川の末三輪川にて
三輪川をくだり廣瀬川の落合よりさかのぼりて佐保川までのぼるとぞ伊の義まへにいへり發語
なりとのみ古來注し後學もしかなりとのみおもひてやみぬる事心えがたしもし發語とならば去(ユキ)
至(イタル)といふ詞發語をおかでかなはざるよしをこそとかめさる理もなくてたゞ發語とのみいはむは
所詮遁辞なる事明らかなるをやこれは佐保川にゆきいたるまでにはじめ泊瀬川に舟うけたるよ

り此かたを陰にもちていふ詞なりかく伊としもおける所以はまへの多事にわたる心をこの佐保川ひとつにとゞめさせむが爲也これ今は藤原のかへりみたにせられぬまでに遠くなりはてたる事を思はせむとてなり去至とはゆきはゆく道をいふ詞なりいたるはかしこにいたりつくをいふ詞なり前にいへりしいくゆくの別これなり而もじ例の用ひざま思ふべしゆきいたりて寐るまでには多事なくてはあらざるべきぞかし○我宿有云〻　衣は床の誤にて床のうへよりなるべしと古説なりしかるべし衣と今本にあり心えがたしかり廬なれば夜床にも月はさし入りたるなるべし従は次の見者の首尾なり○朝月夜云〻　これは有明にて朝まである月を云朝月夜に物のさやかにみゆるを云清尓はさやかにとも又六言一句にさやにともよむべしさやにはそのわたりのさまなごりなくみゆるを云下に夜之霜落とあれはこの朝月夜は清尓のよせなり○栲乃穂尓云〻　眞淵云栲は楮の誤なるべしとげに栲の字は字書にもみえぬ字なり古語拾遺に植レ穀造二白和幣一植レ麻造二青和幣一ととあれば白たへといふはこの穀の皮もておれる布なりしかるに白たへに白栲とかける所多くて栲の字諸書に多倍とも多久ともよめるはもとふたやうにいひし木の名なればにや今思ふに古事記上卷の歌に多久夫須麻佐夜具賀斯多尓　仲哀天皇の御紀に栲衾新羅國この集卷十四十五などにも栲衾とあり又古事記上卷の歌に多久豆怒能斯路伎多陀牟伎この集卷三にも

栲角乃新羅國卷二十にも多久頭怒能之良比氣乃宇倍由などよめり又古事記上卷に栲繩之千尋繩この集卷二に栲紲とよみ又卷三卷九卷十一等に栲領巾ともよめりかく多久といふ時は多久何とやがて物につゞけて多久乃何といへる例なし多倍といふ時は多倍乃何とのみあるを思へば同物ながら多倍といひ多久といふには必別ありとおぼしされば是かれを考ふるに多倍は布に織りての名にてこの栲のもとの名は多久なれば衾領巾紲などの類につくれるは多久とのみいふなるべし多倍はもと此木の名にはあらで布の名なるをその布には此木の皮もて織るによりてやがてこの木をも多倍といふなるべしとぞおぼゆる穗とは國秀浪穗などもいひて中にもめにたつ所をいふなりこの栲乃穗は栲の白くにほへるがめにたつをいへり尒はよせの尓にてノ如クニといふ心なりこれは霜のさまを云夜之霜落とは朝霜夕霜にむかへていふなりそのわたりさやにみゆるが中に白くて霜のことにめにたてば也さらぬたに住もつかぬかり廬にひとりぬる夜なればさむさことにたへがたきをさとさむがために夜之霜としもいへるなるべしこれは上の方より寒氣の襲ふをいふ下によめる氷は下の方より寒氣の襲ふをいふ也○磐床等云々　磐床は磐を床にしたるを云古事記上卷に天之石位とあるくらは座なり神代卷祝詞などにはやがて石座ともかけり太古は穴居しければ石を座とも床ともしたるなるべしこゝに床としもいへるは氷のさまをいふ也等

はよせのとなり磐床といふごとくにといふ也梓乃穗磐床ともに霜氷のいたくさむきを思はせむが爲之古人よせを用ひたるは冠詞に同じくいふべき事のいへば中々なるが故のわざなり川之氷凝古点はかはのひこりてとあるをかはのひこゞりともよめるはこゞりは凝々の義にていはがねのこゞしきなといへるこゞしきに同じければさもありぬべけれど氷は水の誤にてかはのみづこりならむとおぼし乎もじはかく上には霜さえ下には氷さえて寒さたへがたければかよふべきこゝちもなき夜比なるをとの心なり○息言無久云々いこふことなくと眞淵はよめり 神武天皇の御紀に息をいこふとよめれどこゝの語意をおもふにたゞたえずといふ心にていこふはこゝにかなへりともおぼえねばなほやむこともなくとよめる古点しかるべしされど毛もじ詮ありともなければやむことなくと六言にもよむべし通作は藤原の旧都より奈良の新京にかよひつゝ也作の義まへにくはしくいへるがごとしこれは新京に家造らむ爲に數箇度かよへる也この歌によめるは一度のやうなれどたゞ此作にて上のしかしかを數々度なりけりとおもはせたる詞づくり有力おもふべし作家尓とはこの次に來座牟公とさしたる人の家にてわが家にはあらじ尓もじにて思ふべしこの公とさしたるは古注は 天皇の御事とおもひたりげなれどさにはあるまじき證あり下にいふべしいかなる人にかありけむ此歌ぬしの主人かまたは父母か伯父などか又は兄かなど

なるべし○千代二手云〻或注にこの歌の大意をとける所に末にいたりて新室をことほぐ言もてむすべる也とかゝれたる古人さる稚き事をよむものにあらずくはしくは此下にいふをみてさとるべし二手は左右の手をいふ即集中に左右手左右などかけるに同じ真はすべてふたつを具したるをいふ事まへにいへるが如し此麻傳（マテ）といふ脚結まへに尺せるがごとく程を超てのかなたの限をさす詞なりこゝも大抵人生かぎりありて程あるを千代とさす故に麻傳（マテ）とはよめる也これひとへに本情より生じたる詞なりくはしくは下にいふをみるべし來座牟公与來（キ）は爾（ニ）の誤ならむと或注にみゆるはいかゞあらむ今思ふに上にいへるがごとく公といへるを　天皇の御事とおもへるより　天皇はこの新京にまし〱て往來し給ふべきにあらざる事なれば來座はあたらずと思ひての説なるべしされど與（ト）とよめるはこの人とゝもにといへるなれば　天皇にあらざる事しるしこの故に公とは主人父母などにやとはいふ也されば是はなほ來座牟（キマサム）とよむべきなり今の本座多とある多はうつなく牟（ム）の誤なるべし○吾毛通武こゝに公とさしたる人を主とたてゝ毛といへるは吾を主とせざるいひざま神妙なり

〔靈〕この歌表は天皇乃命畏美吾毛通武とむすびたるにて中間ははさみたるものなり　天皇の命令のいと重さにひさしく住なれし家をはなれ泊瀬川よりとほく舟路を經て佐保川にいたり霜氷い

たくさゆる夜のさむさ堪がたきもいとはずたゞ〳〵かの舟路をかよひつゝ造れる家に千世までに君は來まさむその君とゝもに吾もかよはむとこの新京は千世までも不變なるべければといとたのしげによめるなりされどたのしともみえ又古郷に心の殘るやうにもみえ又舟路遠く寒夜のさまくるしげにもみえていづれを主意ともわきがたしかくくだ〳〵しき事をしらずして古人すゞろに歌とよむものにあらねば必情言外にあるべき事明らか也されば つら〳〵思ふにしかさま〳〵に心あるやうにはみゆれど　天皇の命のやむごとなさに家をはなれ寒夜のひとりねをしのびてこの新京にかよはむ事いつまでといふ限もなきわびしさ言外に一律なりこゝをもておもふに此たびの迁都によりて家人に疎くなるをなげきふかく家をしのびたる歌なりとはしるしされど家人に疎からむ事をいはゞ迁都を歎く心となりておほやけにおそりあるが故にかよふべき限もしらぬなげきを千代二手といひたのしくよろこばしく思ふらむやうに詞をつけたるなりされば此歌卒竟は家人を戀ひて新京より家に贈れる歌なるべし反歌の終に忘跡念勿とよめるに明らかなるをや古人の詞づくり公私に心を用ふる事のたらひたる事かへす〳〵心をとゞむべきなり

反歌

青丹吉。寧樂乃家介者。萬代介。吾母將通。忘跡念勿

言青丹吉まへにいへりかく冠をおける心ありて也下に情をとくにてらしておもふべし○寧樂乃家介者とは新京の家を云介者の介はこの寧樂の家にふかく執する心にすゑていふ也されど此家に執するは倒語也下にてしるべし者もこの家をめにたつものにしていへるなりこれまた倒語なり○萬代介長歌には千代といひこれには萬代とよめるは長歌に十倍この新京の不變をほぎよろこべる心によめる也心はなほ長歌に千代とよめるに同じけれどひときは久しくいへるこの歌の手段なり○吾母將通これもこの來座牟公とともにかよはむといふなり長歌にゆづりて母もじにておもはせたる也○忘跡念勿萬代にこの新京の家にこの公とわれもかよはゞ家人は忘れたりともおもふべければそこをことわりていふ也かくことわれる心は　天皇の命の重ければなりとの心を思はせむがための詞づくり也直言になづめる後世人はこの句を直言とみてたゞおのがわすれざるをことわりたる也とみるべけれどしからず古人は戯にもさる詞をつかふ事なし今尺せるが如く　天皇の命のおもき事を思はせむが爲より出たる詞なりとしるべしおほかた詞はかくさまにつかふ物ぞかしくはしくこのけぢめをわきまへしるべし此歌は第四句にて上よりの意をむすびて此終の一句はそへたる物なりこれ標質の法によれりされど本情は必をはりの添たる句に

あるもの也と心うべし

〔靈〕この歌表はこの新京の家には　天皇の此新京に天下しろしめさむかぎり萬代にこの公とゝもに吾もかよはむしからば家人をわすれたりと家におもふべけれどさらにわすれたるにあらず天皇の御言のおもさになりと思へと家人にいひやりたるなりされど忘れたりとおもへらむ人にしひて忘跡念勿といふが如き强言(ミシヒゴト)(ママ)を古人すゞろに歌とよむものにあらねば必言外に情あるへき事あきらか也さればおもふに寧樂の家をわざとふかく執したるが如く尒者(ニハ)とよみ冠をおきたるもさらに好まぬ家なるよしをいふに代(カヘ)たるにて萬代は長歌におなじくかよふに期なき事を十倍になげき結句もはらおほやけのそむきがたくやむごとなき歎をよめる事しるければ慨するに藤原の家のこひしくはなれがたく思ふ心を家人に推量せよといひやりたる歌なりされどもかゝるわびしさをいさゝかも詞にいづる時は迁都をうらむるにおつべきをはゞかりてすべて新京をほぎこの京の家を執したるやうにのみ詞をつけたる也公私いづれにもさはらずしかも公私をそなへたる詞づくりめでたしともなか〱也この人の心のうちかゝる詞をつけたるわびしさいかなりけむとおもひやられてあはれいふばかりなし

右歌作主未詳

和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮時山邊御井作歌

この山邊ノ御井とは山邊村といふ所にこの御井の跡ありと宣長いへりとぞその國人にしてものゝ穿鑿あつき人なりしかばしかなるべし此集卷十三の長歌に山邊乃。五十師乃原尓上下略とありてその反歌に山邊乃。五十師乃御井者。自然。成錦乎。張流山可母とよめるこれなり長田王は長皇子の御子なるよし三代實錄にみゆ續日本紀には和銅五年正五位下とみえたりこれはなにゝよりてつかはされけるにかしられず

山邊乃。御井乎見我氐利。神風乃。伊勢處女等。相見鶴鴨

〔言〕山邊乃御井端作の下にいへり乎もじよく心をとゞめておもふべしもとこの王齋宮に公用ありてくだり給へるなればみる事たやすからぬ御井をとの心なりこの乎もじにて公務のいとまをもとめたまひし事こもれり見我氐利がてりは後世がてらといふに同じされど良もじ里もじおのづから安綿以綿の義はたがふ也大かた良もじはかなふともおぼえずされば古はがてりとのみよめるにやがてりはもと加るといふ詞のなれるにて一事にまた一事のくはゝる心なりかつといふ挿頭同じ詞なり花みがてら人をとふなどはもとよりその心がまへしたる心ありこれは御井みる序

に思ひかずみたるにてもとよりの心がまへにあらず心がまへしたる心となるは歌がら事がらによるべし心がまへもなきが此詞の本義なりと心うべし御井をみる事主なるよしをさとしたまへるなり○神風乃云〻　神かぜは伊の冠なり伊は息の事にて神風は即息なれば冠らせたる也古事記燈に風神をとける所にくはしくいへるをみるべし伊勢處女等古点はいせのをとめらとあり諸先達もそれにしたがはれたりされは古点のまゝにもよむべけれど乃もじおもふ所あればいせをとめどもともよむべし因に云大かた詞の變化自在は脚結のつかさどる所なれば脚結に自在ならざれば所思も自在に變化しがたき物なりされば歌には必用の物なれどもあまり理をもらさず脚結をおく時はことわり過てなか／＼なる事いでくる物也こゝをもて上古にはおかれたる脚結みなその歌の眼にして大かた脚結すくなし脚結すくなければ事ひろくなるが故なり上古の人は心をこゝにあつく用ひたりとおぼえて目とまる所ども多し中昔より脚結多くおく事となれり近世今世はまたすくなくなれるは上古に似てしからず脚結にくらくなれるが故なりされば脚結はおかでかなはぬものゝおきて中〻なる事あるものなりと心うべしこの故にこゝの乃もじなからむぞこの作者の心なるべきとおほゆる也乃もじは常に瓦礫の如く用ふる脚結なれば乃もじの有無のけぢめを思ふ人なし脚結はこれにかぎらずその義その用ひざまをくはしくたづねて庶幾すべからざる事なり大方の脚結無用なるは必義にそむけば也無用也とてたのむべからず　○相見鶴鴨つるは現當なりし事を今よりおもひやらする詞也これは處女のあひみたるより後によみ給へれは也鴨はまへにくはしくいへるが如く大かたの理のあてられぬ事ある時の歎なりこゝはもと此御井をみむとて來たるに思はず伊勢処女どもをみたる事の歎なり

當二の歌表は此山邊の御井をみむとて來つるにおもはず伊勢処女どもさへあひみつるかなとこの山邊の御井のあたりのおもしろき所なるにうるはしき處女をさへみたるをふかくよろこびた

る也されど御井をみたるがうへに处女をみたるばかりのよろこびを古人こと〴〵しく歌とよむ物にあらず又さばかりの事に鴨(カモ)をおくべき事にあらねば必言外に情あるべき事明らかなりされば思ふに公命やむごとなくて伊勢に日をへて家の妹の戀しさにいかではやくあはまほしく思ふに心にもあらぬ处女をあひみつるよとひとへに妹のこひしさを家に告たまひし歌也これ處女をみたる事意外なるよし又鴨(カモ)といふ脚結もはら此歎息なる事しるきぞかしされど公にはゞかりたまひて一事ならぬよろこびの爲のやうに詞をつけ給へる也この次の二首左注にうたがひ置たれどそこに弁じたるがごとくなほ同じ客中の歌にて二首とも郷思を家に告たまへる歌なる事しるければこの歌の情予がおしはかりならざる事をあきらむべし或注にこの御井をみる時よきをとめらに行逢て興をましたる心のみにてふかき心なしと注したるいとも〳〵くちをし古人倒語のおのがめに及ばすはたゞ及ばぬにてやみぬべき事なるを深き心なしなど定められしは中〻その目の限もみゆることゝちしかつは初學をまどはすわざ也かしこれにかぎらず古注にかゝる尺おほし心してみるべし此歌の詞づくりことにめでたければ後世人の目及ばぬもことわりなる事也よく〳〵心をとゞめてこの詞づくりのめでたさをおもひしるべし

浦佐夫流(ウラサブル)。情(コヽロ)佐麻禰之(サマネシ)。久堅乃(ヒサカタノ)。天之四具禮能(アメノシクレノ)。流相見者(ナガラフミレバ)

〔同〕浦佐夫流まへにくはしくいへりこの詞情中心にある事をさとせる也されどなにの故とも何の歎ともいはずたゞ浦佐夫流情とのみよみたまへる妙なり〇情佐麻祢之今の本弥之とあれどさまみしといふ詞いまだきかねば弥は祢の誤なりと真淵がいへるに従ふべしこのぬしは間無の義なりといへるを宣長は數多き義なりといへり此兩説を思ふにいづれも得失ありその故は祢はもと奈のかよへるにて間無しといふ詞なれば真淵が説あたれりしかれども宣長が數多き義なりといへるもことすぢにはあらで畢竟この詞の心をえて尺したるなりこの詞本義は間無の義にてその間なきは即數多きかたちなれば間無をもて數多き事をさとす詞なりこの故に得失ありとはいふ也これ古言のいひざまなり後世は古言をみるべき法を失ひたるが故に此兩人さばかりの大家なりしかどその説かくひとしへにしてふたしへの如くきこゆる也わが御國のふる言はすべて直倒をもてはからざればその義尽ざる事このひとつにてもしれとてあげつらひおく也千蔭も宣長が説に同意して間無の心とする時は卷十七十八十九の歌どもにかなはずといはれしこれかなはぬにはあらず間無をもて數多きをさとしたる也その歌どもは此集卷十七に多麻保許乃。美知尓伊泥多知。和可礼奈婆。見奴日佐麻祢美。孤悲思家武可母また同卷に矢形尾能。多加乎手尓須恵。美之麻野尓。可良奴日麻祢久。都奇尓倍尓家流また卷十八に（長歌上下略）安良多末乃。等之由吉我敝理。月可

佐祢。美奴日佐末祢美。故敷流曾良。夜須久之安良祢波云〻　また卷十九に長歌上下畧香吉。於夜能御言。朝暮尒。不聞日麻禰久云〻　また同卷に都礼母奈久。可礼尒之毛能登。人者雖云。不相日麻祢美。念曾吾爲流などよめる歌の事之また續日本紀三十六宣命に氏人乎毛滅人等麻祢久在なとの類たゞ間なきをもて數多きをさとす詞なりとみばかなひかなはぬの論には及ぶまじき事をや佐はかく冠らせていふ事多ししたがふものゝとゞかぬかたちをしめす義也いはゆる狹莚小男鹿小夜佐衣の類これに同じこゝも猶しかり多くは言外にその循ふ所の物はあるなりこゝの言外のさまは下にいふをてらして心うべし○久堅乃云〻　天をはじめすべて天象の物に冠らする詞なり古來說〻あれどいづれもうけがたし眞淵はこの集中に瓠形とかける所あるによりて天は瓠の形なればなるべしといへりこれもいかゞあらむおのれおもひよれるすぢもあれど猶よくたゞしていふべし天之四具礼能しくれは暮秋より冬かけてふる雨の名なりとのみ後世はおもへりもとしくれは天のかきくらすより雨の名となれるなれば天のしくれとはよむ也としるべし此王を伊勢につかはされしは四月と端作にありしくれは長月のしくれの雨と此集中によめるが如く九月より冬かけてふる雨をいへばこの歌は四月より九月までも伊勢にありてよみたまへるにこそこれは時たがひ次の歌は立田山伊勢よりの路にあらねばもし此二首はこと人のにて端作の脫たるにやそれはし

らずされどこれは九月までも伊勢におはしてよみ給ひ立田山は其歸路に伊勢よりこの山をこゆべき公勢ありてしかよみたまひしにや實事をしらねばさだめがたけれど上の歌のつゞきなればそれにしたがはむが穩しかるべし○流相見者ながらふ前にいへりいにしへは雨雪の長〻しく降るを流るといへり水のながるといふも長〻しく水のゆくを云也良布は留を延云なりといふ説よにおこなはれたりげに音の合ふ所はことわりかなひたれどいにしへ留とも良布ともたがひによめるをやもし良布は即留ならばさらに良布とはいふまじきをやこの延約の說うけがたし句のもじの數のたらねば留を良布といひまた留も良布も同じ義なるを心のまゝにすゞろにいふ後世人の如き事は古人はさらにせざりしぞかし又良布は留と約まる也と思ふも亦僻なりもししからば上古に四言六言などはよむまじき理をもてその僻なるを思ふべし良布の事前にいへり見者の者はみてのちみぬまとことの外なるよしをいふ也

靈この歌の表はしくれの長〻しくふるをみればこれまでにたがひて中心の情數なくなりぬ心なきしくれやとしぐれをうらめる也されどもとより心なきしくれなればうらみたりとてその詮もあるべからぬをしりながら古人すゞろに歌とよむべきにあらねば必言外に情あるべき事明らかなりされば思ふに四月より九月にいたるまで客中におはして家人のこひしさしのびがたき事を

家にいひつかはし給へる歌也されど公にはゞかりたまひてかくしぐれの所爲をうらみたるに詞をつけさせたまへる也浦佐夫流情また佐麻祢之の佐もじなど詞づくりみやびめでたしともよの常ぞかし

海底(ワタノソコ)。奥津白浪(オキツシラナミ)。立田山(タツタヤマ)。何時越奈武(イツカコエナム)。妹之當見武(イモガアタリミム)

〔言〕海底わたは海をいふ事まへにいへるがごとし底はもと曾伎古(ソキコ)の伎のはぶかりたる也曾伎(ソキ)は放(ソキ)なり古(コ)は處(コ)なりこゝより遠き處を曾古(ソコ)とはいふなりされば澳の冠とせる也奥(オキ)とはとほくもあれ深くもあれ奥まりたる所をいふなりこの故に海底奥とはつゞけたるなり此集巻五に（長歌）和多能曾(ワタノソ)許意枳都布可延乃(コオキツフカエノ)云々とよめると此歌は冠詞なるなり（冠辭考にはこの巻五の歌一首のみこの集中には冠なるやうにかゝれたれど此歌も冠也序にいひおくなり）都(ツ)もじはすべてそこにつきて他にふれぬかたちを云天津風時津風澳津藻邊津藻などの津に同じ以上二句海底は奥の冠なり奥津白浪は立のよせなり卒竟は二句立のよせなれば冠ならずと眞淵はいへるなるべししかれどもよせの中の冠例少からず〇立田山大和國平群郡河内の堺にある山なりされば前にもいへるがごとく伊勢よりの歸路にあらねばこと人の歌にや又左注にいへるがごとく誦せられたる古歌にやともおもへどこれはなべてのめにもかゝる所なりいかなる公用ありて伊勢よりの歸路河内の方より大和にかへり給ふべき事ありてかくよませたまひしかまたは

ゞかりてわざと歸路にあらざる山をよませ給へる倒語ならむもはかりがたし古人の詞づくりは變化不測なればこの疑をのこしおくなり○何時越奈武なむの奈は去倫の奴のかよへるにていつか越卒る時にならむといふ程の心なりこれもはらその時の待どほなるを思はせむが爲なり○妹之當見武これは立田山を越はつる処よりは妹が家のあたりみやらるればなるべしこの二句うちつけにはをさなげなる詞づくりのやうにみるべけれどしからず大かたわが所思は何時越奈武とばかりにて尽ぬべけれどみむ人さは妹にあはむの心をやみとほされむとてさらに妹之當見武とは添たる也されぱいつか越なむと待遠なるは妹にあはむとにはあらず妹が家のあたりをみむとの心なりとの心に詞をつけ給へる也古人公理をおもくおもふ心の厚き事かつ詞をつくるに心を用ひたる事みつべし

靈此歌表はいつ立田山を越はつる時にかならむそのあたりよりは妹が家のあたりのみゆへければ待どほなりとたゞ妹が家のあたりのみまほしさの心をむねとよみ給へるなりされど妹が家のあたりのみまほしき斗の事に古人こと〳〵しく歌はよむものにあらぬがうへに長ゝしきよせを置たまへるひとへに情言外にあるしるし也されば思ふに客中に月を經て家のこひしく今はかた時もはやく妹にあはまほしき心を家に告たまひし歌なる事明らか也しかれども私ならぬ旅なれ

ば妹にあはまほしと人おもはむをさへはゞかりてかくは詞をつけたまひしもの也ことに長〻しきよせをおかれたる事客中に月ごろになりぬるしかく〳〵をはゞかりてかへ給へる事しるし後世あさましき言ざまに照らしてこの詞づくりのみやびよく〳〵こゝろをとゞむべし

右二首今案不似御井所作若疑當時誦之古歌歟

この左注ことわりなりされど古人の倒語凡眼の及びがたき所なれば是非しがたし前に予がおもふよしは論らひおけり

寧樂宮

こゝにかく標すべきにあらず錯乱したるなるべし

長皇子與志貴皇子於佐紀宮俱宴歌

この佐紀宮は大和國添下郡佐貴郷なるべし此皇子の宮にこそ此集巻十に春日在。三笠乃山尓。月母出奴可母。佐紀山尓。開有櫻之。花乃可見とよめる同處なるべし春日も同じ郡也

秋去者。今毛見如。妻戀尓。鹿將鳴山曽。高野原之宇倍

旧秋去者は秋にならばと云也去の事まへに論らへり此飲宴したまひしは春夏のほどなりけるな

るべし○今毛見如ある注に今みるごとくに行末もかはらじと云也といへるは毛もじの心をいかにみての説にや心ゆかずこの毛もじを思ふに古今集にあなこひし今もみてしが山がつのかきねにさけるやまとなでしことよめる詞と同じく今とは眼前をさす也毛は未然を主とたてゝそこに眼前をつけて毛とはいふ也かくいふ故は心にむねと思ふ事をさとさむがためにかへりて今を客としたるなり古人脚結を用ふる自在思ふべし大かた毛と如に未然をねがふこゝろがまへををさめたる詞なり此一句下の三句につゞけてみるべからず氏集巻十八に等許余物能。已能多知婆奈能。伊夜氐里尓。和期大皇波。伊麻毛見流其登また巻二十に波之伎餘之。家布能安路自波。伊蘇麻都能。都補尓伊麻佐祢伊麻母美流其等などよめりかゝるおきざまこの詞の常なればこゝも此句にて句とすべきなり此詞ひとりまた來むとおほせられたるにもあらず又來ませと賓におほせられたるにもあらざるこれ古言のたふとぶべき所なり○妻戀尓云々鹿を古点志加とよめれどさては八言となりてひきあひのさだめにかなはず（ひきあひとはよにいふもじあまりなり）加とのみいふ例多ければこれも鹿とよむべし秋は妻ごひすと鹿のなかむ山ぞやと賓志貴皇子にまをしたまへる也この妻戀をば志貴皇子をこふるにそへ給ふなるべしと或注にいへるは後世の歌のめうつし也これはたゞ妻こふるよと鳴む鹿の聲をきかむとの心なり曾は里言ジャヤゾといふ心にてその筋の自然を示す詞なり古

事記の長歌に上略阿治志貴多迦比古泥能迦微曾也とあるに同じ○高野原之宇倍この集巻九に黒玉。夜霧立。衣手。高屋於。霏霺麻天尓といふ歌あればこゝもたかやはらとよむべし續日本紀に添下郡佐貴郷高野山陵ともあれば此宮近き所なるべしこれ佐貴宮を弛してよませ給へるみやび言也宇倍はあたりといふ心なる事まへにいへるがごとし

靈この御歌表は秋ふかくならば此高野原のあたりは妻ごひに鹿なくべき山なればその聲きゝにこむとの心なりされどしかおぼしめさばたゞ御心のうちにてやみぬべく曾もじをおき給ふべき事ならぬを古人ことさらに歌とよむものにあらず必言外に御情あるべき事明らか也されば思ふにけふ賓の志貴皇子と遊びたまふがあかずおもしろさに再會をちぎり給へる御歌なりしかれども大かた人を來よといはむはしひ言なれば志貴皇子のその声きゝにこむとおぼしたち給はむやうにとの倒語也古人はかく興あるべき事に誘ふたに深くつゝしみて詞をつけたり返ゝ後世のいやしき心をかへりみて此御歌のめてたさを思ひしるべしよに十人がひとりだにとて我ながら狂へるがごとわが御國ぶりをいふなほしひ言の罪まぬかれがたくやあらむ

萬葉集燈巻之五 本集巻之一終

本集卷之二 其二

萬葉集燈 卷之七

本集卷之二 其二

萬葉集燈　卷七

萬葉集燈卷之七　文政二年冬

富士谷御杖　著

本集卷之二　其二

但馬皇女在高市皇子宮時思穗積皇子御歌一首

この皇女高市皇子の宮におはしゝは穗積皇子と奸通の事によりて高市皇子にあつけさせたまへるなるへし穗積皇子は志賀山寺につかはされしよし此次の歌の端作にあるを思ふへし此みたりの皇子皇女は異母兄弟にますなり庶兄弟にしてたわけたまへる罪によりてなり

秋田之穗向之所緣異所緣君尒因奈名事痛有登母

上二句は片よりによるといふ事の序なり〇秋田は稻のみのる時を思はせられたる之〇穗向之卷十七に〈秋田乃穗牟伎ともかゝれたれは保牟計とはよむへからすほむけの風なといふ時はその風の稻穗を片方にむくる義なれはしかいふへし穗向とは稻のみのりてかたむくをいふ之

氏之もしつねよせに用ふる之なれとかくおく時は穂向のよれる如くといふ心となる之所縁とはその稲穂の片方にかたむきよれるをいふなりよれるとよるはその義いたくたかへる事之よるといへは今稲穂の片方によるをさしていふ詞となりよれるといふ時は今より後の用を思はせむかためとなる之大かたしれるふれるとれるつめるなと衣縞にうつす詞はその詞より下の方に用ある所かならすあるもの也こゝも片よりをは用とせんか爲なりとしるへし古人はかゝる所の詞のもちひやういとくはしかりし事これにかきらす○異所縁をカタヨリニとよまむ事心よからねと巻十に同し本(モト)なる哥ありて片縁とかきたるに例すれは片を心得て異所とかけるにやあらんされと猶うしろめたけれはしひて思ふにもし所は片の誤にて異は累をあやまれるにやあらんしからは累は上に屬してヨレルのルもしにもやとおほゆるなり稲十分に実のれは片方にうちかたむけはなりこれをはひとへに皇子に身をよせ給ふにたとへさせ給へる之氏片縁にとしもよませたまへるは庶兄弟奸通し給へるを制し給はむかために皇子は志賀山寺につかはされ皇女は高市皇子の宮にあつけさせたまへれは今は御心こそかはらねやむことなく氏宮にとりこめられておはせは皇子との御あはひは絕はてたるにひとしくおはしますなりしかれともおほやけよりかくはからはせ給ひしなれはしひてこれをやふりたまはむこともかたき

今の御身のうへなりこの心をたておきて此片縁にの詞は心えされは大かた一首の心をも解しえましき之猶くはしくは氏次下にいふへし○君尓因奈名君とは穂積皇子をさし給へる也因とは上の片よりの下にいへるかことく公によらすして皇子に片よりによらむとの心なり元良皇子のへ身をつくしてもあはむとそ思ふとよませたまへる心に同し奈名は古言に尒といふへきを名といへる例多しとて奈名は奈尒の心なりと眞淵一流の學者みないへりけに也良尒を也良名由加尒を由可名なとよめる例はふるくはいと多かれとゆゑもなくて尒を名といはんやは古言の例なりといはゝ也良尒由加尒といふへき所をも皆也良名由加名とあらはこそあらめいとくはしからぬときさま也おほかた名は奈尒の尒のはふかりたる脚結（のやう）なり。（しかるに）奈尒は誂（屬）と去倫の二例なる事脚結抄にみえたるかことしかるに誂屬なるは多ゝ奈尒由加奈尒志良奈尒（以上阿綺をうけたる例なり）加敝奈尒止計奈尒加礼奈尒（以上衣綺をうけたる例なり）なと阿綺衣綺をうけたるは皆誂なり又多知奈尒由支奈尒志里奈尒（以上以綺をうけたる例なり）加敝奈尒止計奈尒加礼奈尒（これは上と同しく衣綺をうけたれと上の誂屬には奈尒を上声にいひ去倫には平声にいふかたかへり）かくうくる所はさま〳〵なれとおほかた阿綺をうくれは誂となり伊綺をうくれは去となるはつねなりふるくは奈もしを用ひたるおほくは阿綺をうけたれは後世の例をもてみれは誂屬の例なれともその意をおもふにいつれも去倫の心なり奈良前後にてうけさまのたかへる脚結

もあれはこれもさにやとおほゆれと詞のつねさるへきにあらねはよく〳〵思ふにこれは脚結抄詠属にある奈なり由加牟也良牟の牟を奈といへるにはあらて由加牟奈也良牟奈の牟をはふける也とはしりぬされはこの因奈名は因牟奈のうへにまた名をかさねたるなるへしとそおほゆるもと氐奈といふ脚結は抄には〳〵里ナアといふ人にいひかくる詞なからおもひあまりてはひとりことにもいふへしといへりすへて奈經は限にはとほかりし事のつひにその限になりぬる義あり奈は阿綿の義をもてれはその終に限になりぬへきことのはたしかたき心とはなる也氐故に。（今は）片縁に君によらむとおもへともよりはてかたき歎を奈とはいふにて奈名とかさねられたるはいくたひもよりはてむと思ひてはよりはてかたきをなけき給ふよしをさとし給へる之（かさぬる詞はその事一時ならさるをさとす心なる事つねなり）されはこれはヨラナ、とよむへし畧解に奈は牟の古言也といひなからヨリナ、とよめるは理なしかし。（片よりに）因といふ事所詮は公の御勘をやふり高市皇子の宮を出て志賀にます穂積皇子とひとつにおはさむとおほす心をいふなりされは奈となけかせ給ひしは公の御勘をやふりたまはむことの難けれはなりとしるへし〇事痛有登母とは事は言の假字にて公の御勘をやふり氐宮を出たまはゝ人いたくいひさわぐへしたとひいかはかりいひさわかれんとももとの心なりもと公の御勘なれはもし氐宮を出させたまはゝいかなる重科をかおほ

せられ給はむされは氏うへたとひいかなる重科をおふせらるゝともといふへきをたゝ世の人言のうへによみなしたまへるなりこれもと公の事のうへなれは因といふも公をはゝかりての詞にてこの一句もひとへに公のうへを詞にいてん事をはゝかられたるなりと知るへし（これ重きを輕くいふ倒法なり）

○此御哥上二句はよせなりかくよせとし給ひし故は公より勘られさせ給ひて氏宮にとりこめられ給ひ皇子にあひみたまはむ事も絶はてゝ戀しさくるしさ堪かたきよしをよめは公に憚あるか故なりさて表はかゝるくるしさを忍はむよりは氏上たとひ重科を蒙るとも氏宮を出て君か御もとにあらまほしく思へと御心にまかせかたきよしをよませ給ひし也心はひとへにかくとりこめられ給ひしくるしさを告たまひしなれとあらはにいへはわか罪は思はて公をうらむるわさとなりぬへきかゆゑにかくは詞をつけられたる也くるしさは堪かたきに公をはゝかり給ひし御詞つくりいとあはれにこそ氏御哥ようせすはたゝ詞のうへはかりにめとゝまりて無味にのみみゆへしかの元良のみこの〽わひぬれは今はた同し云〻の御哥も後世人はすへて古哥の詞つくりをみる事僻にして〽身をつくしてもあはむとそ思ふといふをやかてしか思ふ事をよませたまへる御哥そと思へりしからすこれは會もしをよく心えさるか故之勅勘の中なれ

は身をつくしてたに逢はむと思ふ心のつきてはいとあるましき事とおほせと猶そのすちなき心のつくよしをなけきて曾とはよませたまへるなるをやもしこれしかおほすをやかてしかよませたまへる之とせは所詮は哥よむにも及はすその心のまゝにこそ身をつくしても逢ひたまはめよく／＼思ふへき之されは此御哥もそれにおなしく此宮をもたち出んとおほす心のつくをみつからなけきたる心に奈名とはよませたまへる之と心うへし

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌

遺居(オクレ)而戀管不有者追及武(オヒシカシ)道之阿囬(クマワ)介標結(シメユヘ)吾勢

○遺居而はおくるとはもとともにゆくへき人の殘るをいふ詞なるにかたみに勘られ給ひて更に／＼ともにおはすへき御身ならさるをかくいふは身のうへこそしかれ情はともにゆくへきものゝおくれたまへるかことくなるか故におくるとはよませたまへる之古人の詞には事実とはたかへる事のおほかるは皆かくの如く情よりいふか故之たとはゝ我子ならぬ女男をさして子といひ妹ならぬ女を妹といひ兄ならぬをのこを世(セ)といひ伯父ならぬ人を烏膩といふ類みな情よりいふ詞之古言のもちひさまこれひとつにてもさとるへし。○戀管不有者は戀ひつゝあら

▽而もし例のことく此間にしかして／＼といふ事をふくめたる之

んよりはの心之と注し來れりけにさる義なれといかてこひつゝあらんよりはといふ事を戀つゝあらすはといふそともたつねす大かたにしか尺する事なりこれは戀つゝをられはさてありぬへしもしこひつゝをられさらはしひてそれに堪むよりはとの心に用ふる詞之集中此詞多しその哥ともに例してしるへし管はこひじ〳〵とすれと戀ひられ〳〵するさまを云なり○追及武は古事記上卷に神書千引石之件之＼以其追斯伎斯而号道敷大神とあるに同ししくはゆくもの丶あとよりさきのものにつくかたちをいふなり及重なとの字をあてられたり里言に追ひつかむといふ心なり此武もし下につゝけて心うへからすこゝにて句とすへし○道之阿回尓道の隈は上にも出て道のたをりてその道すちのみえぬ所をさす名之阿回とはその隈のあたりにといふほとの心なりこれ皇子のおはしゝ道のたかはむかとての詞之○標結とは後世にいふしをりの事之もとしめとは神書古事記上卷なる＼尻久米縄より出て志里久米の中二音を畧して志米縄ともいふなりもとは天照大御神を石屋戸にふたゝひいれたてまつるましき表物なるか故に神前には必これをひくもその敎旨を思はせむか爲なりそれよりうつりて地を界ひてひきわたす縄をもしめといふことゝなれりこゝもちまたなとのあらんに縄をひきてこなたの道そとしるからんやうにするをいふなり標の字はましるしとせんか爲のわさなれは心えてかられたる也ゆへとは

その繩をは木にもあれ何にもあれゆひつくへけれはなり吾勢とは即皇子をさし給へる也古哥にはかく吾勢吾妹君なとおけるか多しそのおけるにさま〳〵の心ありてひとつにはいひかたけれといつれもその心の落着を試みむためなりこゝもけに追來むに道まとふへけれはしめゆひおかんとおほすか又追來むもしかるへからねはしめはさしおかしとおほすかをこゝろみむとておかせ給へる也

○此一首表はおほやけの御勘なれはふかく愼をらむの心なれともし戀つゝをるに堪すなりなは御あとを追ひて參らむに女なれは道しらねは道の隈あらむ所にては必こと道にもまよふへけれはさやうならむ隈囬には標ゆひおかせ給へいかにおほしめすそとの心なりかく詞をつけられたるは公の御勘なれは深くつゝしみをるへき事なれともつゝしまるへき事ならねと表はひとへに公の御勘を守り給ふへき事をむねとし萬一の時のことをのたまふかほに詞をつけられたる之表は愼み給ふ事を主とし給へともまことは御勘をもやふりて追しき給はむ事御ほいなるをかく詞をつけさせ給ふかあはれなるなりこれ主を客とし客を主とする倒法そかし

▽此端作の意は上に此高市皇子宮にますとありて更にかくあるはかの宮にあつけられさせ給ひしほとにひそかに逢給ひしかあらはれて後の御哥なるよし也御哥に朝川わたるとよみたまひしを思ふにいつかたかはしらねとさらにとほき所に移されたまひしなるへし

但馬皇女在高市皇子宮時竊接穗積皇子事既形而後御作歌一首△

人事乎繁美許知痛美已母世尓未渡朝川渡

▽かくつよくよませ給ひしゆゑは端作の下にいへることく御勘の中をひそかにあひたまひて御勘をかさねられ給ひしか故なりこの人言といふもまことは公の御勘なるをかろく人言のうへにし給ひしは公をはゝかり給ふか故之としるへし

○人事は人言なり繁は人のいひさわく事のしけき之言痛とはいたくいひさわくを云ふにて重ねていふ之かさぬるは人言のしけきをつよくいはむ爲之。氏義もし亾父脚結抄にサニと訳せり（上のをもしをかとあてたり）けにいつかたもさる心にてよくかなへともまことはこの義は本のかよへるにてしけむこちたむといふを伊綿にかよはしたる也さてこの本はかなしむあはれむなとの本にて里言にガルといふほとの心之されはしけみはしげがりこちたみはこちたがりといふ義なり氏故に必上にをもしをおくなりこの心をえてサニとは訳したるもの之と知るへし○已母世尒　宣長は尒は川欤河欤の誤にていもせ川なるへしといへり畧解には母は我の誤にておのかよに欤といへりけにかくさま／＼にいへるもことわり心えかたき句なりされといもせ川としてみるに下句のつくりさまかくはつくるましき條理なりおのかよにもしひておのかといはすともありぬへきこの哥のさまなれはうけかたし已母（オノモ）といふ事いふましきにもあらねとかくやうにしひて事を尽さむとするかことき詞つかひは上古の人のかつてせぬ事なれはおほつかなくはあれととりたてゝおもひよれるすちもなけれは今また考へてんしひてこれにしたかはゝまへにいへるかことく皇子もともに公より勘へおかせたまひし中をしのひてあはせ給ひしによりてさらに御勘をかさねられ給ひて遠き所に移されたまひし事をはこれより下にはのたまふにて

已母とは穗積皇子も此時さらに外にうつされましゝゆゑかまたはさきに志賀山寺にうつされたまひしことをもちて母とはよませたまひしにもあるへしもと皇女をは高市皇子の宮にあつけさせ給ひしはさきにて皇子を志賀山寺にうつされしはこの時の事にやともおほゆれとそれはしらすいかにもあれ皇子もならはぬ道をおはしおのれも今ならはぬ道をゆくそとの心なるへし世尓は下の第四の句につゝきて今またわたらぬといふへきを世尓とはよませ給ひし之世尓とは一代に一生になといふほとの心にてたゝ今まてなといふへきをかくこと〳〵しくいふは倒語なり今遠き所にうつされ給ふかくるしさにかくいかめしけに仰らるゝ也されは世尓とある詞つかひにても御心はおもひしらるゝ倒語の妙用思ふへし〇未渡朝川渡今まて郊外なとにあそひなともし給ひつらんさるをりには早朝より出させ給ふへきにあらすよきほとの時をはかりて郊行をもせさせたまひしなるへしされは川をわたらせ給ひし事もなきにはあらねと此たひのことく早朝にわたらせ給ふことはいまたならひ給はねは之朝川をわたり給ふをいと希有の事もし給ふらんやうにかくこと〳〵しくのたまひしはけに公の御勘によりて遠き所にうつし給はむには早朝より宮をともなひ出へけれは朝川としも仰られたるにて公の御勘のやうもその時のさまもみるやうにあはれなりしかのみならす皇女の御身なれはこの朝川

まことに身にしみておほゆる之古人はいかてかゝる処に詞をつくる事をは得たりけんおのれ今哥よまむとするになにをかも詞とせは情は切にうつらむとよむたひ毎に沈思すれといまたかゝる所に詞をえつけぬいとあさましき事なりかし畧解には巻四へ世中（に）のをとめにしあらは吾わたるいもせの川をわたりかねめやなとありて男女相逢を川を渡る。たとへたる事外にもありされはあさは淺き心にて人言により中絶ゆくは淺き中なる哉となけき給へるか又は事あらはれしによりて実にあさけに道行給ふ事のありて皇女のなれぬわひしさをよみ（にあひ）給へるをよみたまへるかとありかの巻四の哥を引證とせられたれとそれも猶男の家にゆく道の川をよみたるにてたとへにはあらすたとへたるもなきにしもあらねと大かた予かつねにいふかことく歌は比喩はやすし比喩ならすしてその情の通する事神妙なる詞つかひそ倒語の中のすくれたるもの之されは古哥をみむに比喩におとさむはおそらくはその哥ぬしの搆思をむなしくするになりぬる事あるへしこれらはまへにとけるかことく比喩にはあらすまことに朝川をわたらせ給ふにみてこそあはれはかきりなかるへけれもとより上よりのよみさま比喩のよみさまにもあらぬをやされと後世人は倒語の道をえあきらめぬより此朝川なとの詞つくりの妙なる事をもえわきまへさるか故にかうやうの説をもいふそかしことにあさは淺き心なといふ事後世

人こそさやうの詞をもつくれかつて〳〵古人はさるいやしき詞つかひはせぬ之

○此御哥表は世人のいひさわく事しけくこちたくてたへかたさに君もならはぬ道にゆかせ給ひ（以上、消）今われも今まていまたわたらぬ朝川をわたり侍る君もならひ給はぬ道をそゆかせ給ふらんいかに侘しとおほすらんと皇子の御うへをおほしやりたるによみふせたまへる也（これ已母の母もしよりいふ之）しかれともまことは人言と仰られしもまへにいへるかことく公をはゝかり給へる倒語にて実は御勘のうちをしのひて逢たまひしよりふたゝひ勘られて遠き所にうつされ給ふをたゝみつからその人言のしけくこちたきかわひしさに出ゆかせ給ひしやうにいひなしたまへるにて皇子の御うへをしもおほしやり給ひしやうによませたまひしもまことは御互にかく遠き所にうつされたまへは高市皇子の宮におはしゝ時とたかひて今よりはしのひてあひ給はむ事もまことに叶はすなり給ふ事をふかくなけき給ひし也朝川渡の事まへに論らへるかことくあはれともなか〳〵なりしかるをたゝうはへは御心から朝川をわたりたまふやうにいひなし上より下まて事もなけにやすくよみくたし給へるまことにをよひかたきさかひなりよく〳〵思ひてこの御詞つくりの至妙をもしりおのか哥よまむ心えともすへき也

舎人（トチリノ）皇子御歌

畧解に此端詞贈與舍人娘子といふ事脫せるなるへしといへりさる所もあれと次の端作にて舍人娘子につかはされしはしるきをやこれは天武天皇の御子也この御名をイヘヒトなとよむ人もあれとしかるへからすトネリとよむへしいにしへより名はいやしからむを貴ふか故に舍人はいといやしき官なれは御名としたまへるなるへし鎌足公の御子を不比等（フヒト）と申しゝも史はいやしき官なれはなりこれにかきらす禽獸の名なとをつくるも同し例なり卑しき名をつくるは貴からむことをおもふか故なるへしこれも上古倒法のひとつそかし

丈夫哉片戀將爲跡嘆友鬼乃益卜雄尙戀二家里

○丈夫哉云々　大丈夫の身にして片戀すへしやはとゝいふ心なりこの哉は脚結抄にいはゆるやはのやなりもとかく用ふるは疑のやなるか上下の詞つかひにてやはのやとはなる之やはかはは北京になりて後いふ之奈良以前にはやもかもとよめりやはのやかはのかは上古も奈良以後ももちふる之學者の心えにこの序にいふ　女の思はぬにこなたのみこふるはいとぬゝしきわさなれはなり丈夫ならはかなたか思はすはこなたも思ひたゆへき事なりとの心より仰られし也このますらをとはもと御みつからをさしたまへるなれと世上大丈夫のうへにおしわたして仰られたる之とみるへし下の鬼の益卜雄は直に御みつからをさしたまへるなり○嘆友なけくとは丈夫にして片戀すへしやはとおほせと猶おもふにまかせす片戀のせられ給ふか故に

欺き給ふ之()鬼乃益卜雄　鬼は醜にかよはせて集中多くかけり〽鬼乃志許草〽鬼之四忌手(シキテ)なとのことし志許とは古事記上卷神書に〽伊那志許米志許米岐穢國云々とみえ神代卷には〽醜女をしこめとよめり猶集中しこといふ事多しなにゝもあれいま〳〵しく嫌はしきものを罵る詞なり丈夫なからしこなるますらを之と御みつから罵りて仰られしなり益卜雄とかけるは卜はウラの訓をかりたる之麻須の須もしの音便よりかりたる也○尚戀二家里尚はもと直(ナホキ)の義よりいふ詞にて(なり)亾父のいはゆるこれらは裝の挿頭となれる之されはゆがみもすへしとおもふにゆかまずしてあるをいふ心にてそれより形容してさま〳〵の事に用ふる之こゝはみつからその理を弁へて片戀すへき事にあらすとなけく事なれはその理のことくあるへき事なるに片戀のみせらるゝを尚とはよませたまひし之二家里は二は去倫の奴のかよへるにて家里はすへて思はぬ事のある時にそれをさとす脚結にて二もしはしかあらさりし事のつひにしかなれるさまをいふ之その。(つひに)しかなれる事のおもはぬ事なるよしをは家里とはいふ之後世人は二家里と家里のわいためもなく一もしたらねは家里といふへき所をも二家里とよむなりさるおほやうなる詞にあらすこれらもたゝ家里とのみありても聞ゆる哥のやうなれとしからす二もしをおかせたまひしは丈夫にして片戀せんやはとこれまてなけきわたりたまひし月日を思はせて今つひにその御なけきのまゝ

氏娘子にはしめて御志あるよしを告きせたまひし御哥なるへしこの次下娘子□かへしにてしるしはしめて御志を告給ふを片戀にしなし給ひしかも御みつからはつかしめ罵り給ふをむねとし給ふやらに御詞をつけられたるめてたしともよのつねなり

にはならすして片戀にこふるにをよひたるよしを思はせんかためにおかせたまへるなりこのけちめよくおもひわくへし

○氏御哥表は大かた丈夫にして片戀せんやはとわか片戀のせらるゝをみつから制していかて片戀はせしとなけきわたれりしにそのしるしなくこのますらを猶片こひにこふるにをよへりいとおもはすなる事やと上は御みつからおのれをはつかしめ下は御みつからおのれを罵りてすへて御みつからのうへのみの歎息によみふせたまへりされとまことは女のつらくてわかおもふかことはおもはぬをふかくうらみさせたまひし御哥なる也(以上、消)かゝるすちに詞をつくる事もとより難きからうへに倒語の戯にいたれるは倒語の極なる事[この上]巻一なるへ吾岡のおかみにいひてふらしめしの御哥の下に論らへるか如しこれらの御哥の詞のつけさま倒語をよくまねひえたる人そこの難き事はしるへき

舎人(トネリノ)娘子奉和歌一首

和とはもと人のするわさとともにする心にて報哥の義にはあらねと和する義より報哥をは皆和哥とかけり中にはまことに和したるもあれとこれらは報哥なりこの娘子たかむすめとも詳ならねと舎人皇子の思ひ人なりしにや猶贈答あり

歎管丈夫之戀乱許曾吾髪結乃漬而奴礼計禮

○歎管　歎はまへの御哥をうけていふ之管はすへてなに事にもあれむねとする筋あるに思はぬすちにつきてそのすちにつかじとすれとつくさまをさとす脚結之されはこゝもなけくはもとむねとする筋にあらぬにそのすちにつきてなけき〳〵せらるゝさまにていふ之後世は管をそのむねとする筋にもちふるは大かた管といふ詮もなきわさそかしこれはかの御哥にますらをにして片戀せんやはとなけくと仰られしその歎をうけたるにてますらをや片戀せんとゝいふ句意をもちていふなりさしもなけき給ひつゝ猶こひ給ふ故にこそとの心之○丈夫之云々　古（普通の本には）点マスラヲノコヒミタレコソとよめれと穏しからす聞ゆ古点マスラヲノコノコフレコソとあるに従ふへしされはもとは乱は礼なりしを誤りけむ事しるし丈夫はすなはち皇子をさしたるなからおほかたの丈夫になしていへる之とみるへし戀礼許曾はこふればこその心之婆をはふきていふ事古言のつねなり許曾は上の巻。にくはしくときたるかことしこゝもこの哥の詞より外のすちを思はせんかためなりもしさなくはかくもとゆひはぬれじとの心をもちて許曾とはいふ之としるへし○吾髪結乃。云々　髪結は髪をゆひたる緒の事なり漬（ヒチ）は涙にひつるをいふ之すへてひつといへるはものを水に漬たることくひたとぬるゝをいふ詞之此故に漬の字を用ひた

る之奴礼は此下の哥に〳〵多氣婆奴礼とよめるも髪の事にて髪のぬる〳〵ととくるかたちを云
これ即髪のうるほひあるかゆゑ之されは何にもあれぬるといふは潤ひをもちてぬる〳〵とな
りてしまらぬをいふなり集中〳〵ぬれひつとよめる哥もあるにてぬるとひつとの別をしるへし
さてこの髪結のひちてぬるゝといふ事鼻ひ紐解なといへる類にて人に戀らるれは髪のおのつ
から解るといふ諺のありてよめるならんと古來注し來れりしかれともこれさるはかなき事に
はあらし鼻ひ紐とけなとも諺にはあらすこの髪結のぬるといへるは身を悶へて髪のとけたる
かその髪のわかなく涙にぬるゝをいふにて畢竟こひしさに身を悶ふるさまを形容するなるへ
し紐解もこれに同しく身を悶ふるより紐のとくるをいふなり袖ふる比礼ふるといふ事集中あ
またよめるもともに身を悶ふるかたちなる之おのか思ひの足らぬまゝに諺なといひそらす事
古人の詞つくりの心つくしをは蔑にすといふへし

○此哥表は片戀はせじとなけく〳〵もますらをのわれをこふれはこそわれも髪結のひちてぬ
る〳〵としまらすなりけれもしますらをのしかわりなくも戀ひすはわかもとゆひもかくはぬ
れじとの心なりたゝ丈夫のこふるは格別なるものにてわかもとゆひに徹してぬるゝよとそこ
をのみ感したるやうによみなしたりしかれとも前に論らへるかことくもと髪結のとくるもぬ

るゝものおもひに身をもたへて涙にぬるゝをいふにて君片戀とのたまへとも片戀には侍らすわれもいたくこひて身を悶ふるはかりに侍りと皇子の御志をはしめて告させ給ふに同意したるよしをさとしたるなり古人はかくわか志ある事をもみつから罵るによみふせ同意したるよしをもたゝその通徹を感したるはかりのやうに詞をつくる事詞に公をやふらさりし事これらにもおもひしるへし

弓削皇子思紀皇女御歌四首

紀皇女は穗積皇子の御はらからなり

芳野河逝瀬之早見須臾毛不通事無有巨勢濃香毛

○芳野河ことに瀨はやき河なれはとり出たまへるなり上二句はよせなり逝瀬とは水のゆく瀨といふ之之は即下のしましくもよとむ事なくといふにうつさむかため之これらはゆくせをとよむへき所にあらす古人かゝる脚結の詞つぐりに切なる事よく〳〵まねひしるへし後世人はかうやうの所にみつからまとへはたゝ句調語路のよしあしをもて思ひさたむる事いふかひなきわさなり脚結はことにまねふに及はすおのつからえらるなといふ妄說さへよに聞ゆかうや

うの所いかてかまねはすしてしらるへき返ゝよの妄説邇辭にまとふましき之見はまへにくはしくいへり○須臾毛もはしはらくといへともといふ心之○不通事無は不通は水のよとむ義をもてかける之あふことのたえま多かるよりかくは仰らるゝ之されと此第四首めの御哥をもあはせておもへは（以上十八字、消シテ「コノ一行イクベシ」ト記セリ）本意は皇女のつらくますをうらみ給ふ之くはしくは下にいふへしこの哥なとたゝあふことのかたきをなけく心之とのみ見ては直言たるへしかし○有巨勢濃香毛ありはまへにもいへるかことく何事にもあれ事もなくてありふる事をいふ里言にスムスマスなといふ心なりしはらくもよとみなくて戀しさもうらめしさもなくありふるを云之巨勢は巨曾のうつれるにて巨曾は巻一にくはしくいへるか如くねかひの詞之巨勢濃はありこされぬといふほとの心にてありこそといふ心にかなはぬかもとの心之かもは疑之あらまほしむことを（ママ）あらぬかとよめる類之と畧解にいへるしかりありこそと反をいふにてねかひを直にいはぬ法にてねかふ心を活かしたる詞つかひなる之

の此御哥表はたゝ芳野川の水のよとむ事なきによせてしはらくもよとむ事なくあらまほしき心をよみて皇女との御中の疎きをなけきたるはかりのやうによみふせたまへれとまことはその疎きは皇女のつらくますか故なるをうらみたまへるの此第四首めの哥に物念痩奴人能見故

尓ともよみ給へるに思ふへし（以上二十九字、消シテ「此語削ルヘカラス」ト記セリ）大かたよせ哥は予か随筆にもくはしくいへるか如くいはまほしき事はあれともいひては害あるか故にわさと無用の物にかへたる之されはよせは必その心にてみるへき事之此故にこの御哥もいかて皇女のつらき心をおもひなほさせてかく（二字消）しはらくもよとむ事なくてありふるやうにはならぬ事かといふ心なるをその詞の條理にそむく分をはよせにかへたまへるなりとしるへし

吾妹兒尓戀乍不有者秋芽之咲而散去流花尓有猿尾

○吾妹兒尓　皇女をさしたまへる之からやうの所後世は乎とよむを古は必尓とよめり乎はもとより乎もしの義用なけれは用ひさるもことわりなるからへに世には女も多かれはたれかれなと思ふ心のつひにその女ならてはと心のさたまりはてたる心尓もしにあれはなり○戀乍不有者まへにもいふかことしこゝも戀つゝあり經られすはとの心なり○秋芽之云〻　秋はきの咲てちりぬる花ならましをといふ心は皇女にこひつゝあり經らるへけれは論なしもしあり經られすは一向死なむとおもへと死ても誰ありてをしともあはれともいふ人もあるましけれは秋はきの咲て散ぬる花はみな人をしみあはれむものなるか故にせめて萩か花にあらましと思ふにそれにたになられぬわか身まことに類なきものやとの心を上の不有者と下の猿尾のうちあ

ひにておもはせたるもの之此時秋たけて萩か花のちれる比なりけれはおもひよせ給へるなるへしはかなきはきか花なるにその花にたに及はぬ身之と仰られしいとあはれなり古注とも有者猿尾の義をふかくたとらさりしか故にその釋こゝにいたらす

○此御哥表は皇女にかくこひつゝ堪てありへられんほとは論なしもしあり經られすは死にもすへきをよく思へは皇女はいふに及はすよに誰かはをしとも哀とも思はんされは此頃さきてちりぬる秋萩は人〻をしみあはれむものなれはせめてその花にもあらましと思へとそれも叶はぬわか身まことにたくひなきわひしさやと死て後たにあはれむ人あるましきわか身をふかくなけき給へるによみふせたまへれと心はもはら皇（消）女のつらきをうらみたまへる之皇女つらからすはかゝる心も生すましきをもて思ふへしかく根のために枝葉を詞とする事倒語の常なり詞のつけさま倒をえたまへるはいふもさら也今表を釈するかことくなか〱しき心をたゝ脚結のうちあひはかりに思はせ給へる詞の力よく〱思ふへし

暮去者塩滿來奈武住吉乃淺香乃浦尓玉藻苅手名

○暮去者は夕かたにならはといふなりされは夕かたにならぬほとにといはん爲なり○塩滿來奈武は塩みつれは玉藻からむとすとも干潟もなくなりぬへけれは之奈武は今は潮も干たるか

終にみつるにいたらむとの心之○住吉乃云〻畧觧には譬喩の哥とし玉藻を女にたとへ事故なきうちに妹をわか得はやといふ心之といへり上下みな戀の哥なれはさもとくへけれとこの四首は同時か又同時ならてもともに紀皇女を思す哥なるか故にこそしか端作もかゝれけめとはみゆれと畧解の尺に從はゝ。皇女にはあらてこと女につかはされし哥と聞ゆ（いまたえぬ女のうへなれは）しからは此端作はいとまきらはしきそかしされは思ふに猶この四首はともに皇女につかはされし事うたかひなけれはこの尺うけかたしかれ思ふにこれは比喩の哥にはあらてなほまことに住吉の淺香の浦に玉藻かりにゆかむとよませたまへる之くはしくは下にいふへし○玉藻苅手名玉藻は食料にせんとの心にて仰られしなるへし卷一なる麻績王の哥に〽いらこか嶋に玉藻かりをすとあるなと思ふへし手名は氐牟の古語之と宣長いへれと古人氐牟ともよめるをいかてかさはいふへき氐名の事くはしく上の但馬皇女の御哥にいへるかことく手名は氐牟名の心なる之氐牟氐支氐米氐斯氐與なとの氐もしにつゝける經脚結はすへて氐と下の脚結の間に詞をはふける例なりこれもと氐もしをつかふ本意なる事卷一藤原宮役民か長哥の中にくはしくいへるかことしされはこゝも玉藻をかりて食料にせんといふ心を氐とはよませ給へるにて名はかの浦にゆきて玉藻をかりて食料にして生をへむとのたまふ事いと切なる心なれはそこをつよく皇女

に思はせんとておかれたる也

○此御哥表は夕かたになりなは潮みち來て玉藻かるへき潟もなくなりぬへけれははやく住吉の淺香の浦にいきて玉藻をかりて食料にあて生を終へむとおもふそとたゝ京にありわひ給ひて住吉にゆきてすまむとよみたまへるなり（くはしくいはゝ）その心は皇女より外に心とゝむへき女もなきにその皇女つらくませは京に居たまはむもなか〱（以上、消）同し處にすむかひもなき事なるからへになか〱思ひもまさるか故に今はかけはなれたる住吉の淺香の浦にいきてすまむと思へと食なくては住はてらるましけれは玉藻かりて食料にせむと思ふにゆふさらは潮みち來て玉藻からむによしなかるへけれは今たゝ今たちてゆかむとおもふそとの心なりしかれとも皇女つらきより京にありわひてのよしをいふ時は詞の道にそむくか故にたゝかくおほかたに住吉にいきて玉藻からむすちのみを詞としたまひしにて本意は皇女のつらきをいたくうらみたまひしなり此詞のつけさままことにあはれともめてたしともよのつねによく〱この詞のつけさまをまねふへし前後三首みな皇女のつらきをうらみ給へる哥なるからうへに畧解の尺端作にもそむけはかくはいふなり

大舩之泊流登麻里能絶多日二物念痩奴人能兒故尓

○大船之一二の句はよせなりよせの心えまへにもいへるかことしはつるとは舟のとまる事之舟つなく木をはつ木ともいふなりとまりはその舟とめたる所をいふこの故にはつるとまりとはいふ之○絶多日尓は集中〽ゆたのたゆたともよめりたは添たるにてゆたなりひはゆたふといふを伊綿にうつしたる之このふひなと下につくゐ詞はゆた〳〵とする形容をとらむかため之たもしは添たる詞多したもとほりたよりたつきなとの類なりいつれもそこにつくへきものゝつきかたき形容之されはたゆたひとはゆたやかなりといはむに宜し(二字、消)いひかたきほとの心之此故に大なる舟のはてゝとまりにつなけるか舟大なれは浪もいたくはゆらねとゆらさるにもあらぬさまをいふ之としるへし△これをはわか中のふつと絶たるにはあらて絶たるにひとしきさまを形容し給へる之二はにてといふ心之○物念痩奴すへて物何といふ詞多きいつれもおほかる事をとりかためていふ時の用之後世の物語ふみに〽ものし給ふなと多かるもさま〳〵の事あるをとりかためていふ之古今集に〽ものへまかりける云〻とかけるはそのそこへといふをあらはにいはすしていへることのやうなれとしからすかゝる例をもてみれはいく所にもゆきたるをとりかためていふなりとしるへしされは物念とはさま〳〵思ふことのあるをとりかためていふ詞之と心うへし痩奴の奴もしは例のことくさま〳〵思ひなからも痩るま

▼たもしをそへすしてゆたとのみいはゝ舟いさゝかもゆらすしてあるかたちなるを思ふへし

てはなかりしかつひにやするにいたれる心之○人能兒故尓とは人の兒は人妻といふに同し巻一天武天皇の〜人妻ゆゑにとよませ給ひし御哥の下にくはしくいへるかことく古來注者倒語の道をしらす。人の兒といへはまことにいまた得ぬ女また外に男ある女をいふと心うれとこれみな女のつらきより他に男あるになして（して）いふ倒語なる之されは女をふかくうらむるよりいふ詞之としるへし氏前の哥をもこれをもいまたえぬ女のうへにて尺するは端作に叶はすこれもとより倒語の道をしらすして詞にめを奪はるゝか故之故尓のつかひさまもかの御哥の下にいへるかことしこれらも人の兒ゆゑに思ひたゆへき理なれともさとはしる〱こひしゆゑに痩ぬとの心なり故尓のつかひさまよく心うへし故には人の子なるものをの心なりと畧解にいへりもとより故にはなるものをの心にはさらにあらさるかうへにものをといふ詞はたこれに叶ふへき義にあらすかうやうの事おのかめ及はすはさてありぬへしなましひに尺する時はかへりて學者をしてまとはすへきわさ也かし

○皇女つらきかと思へはふつと中絶たるにもあらす中絶さるかと思へはいとつらくます以上一二の句をよせとし給ひし心之これ直にはいふましき事なれは之そのたゆたひにさま〱思ふ事おほくてつひにわか身痩るにいたれりもとこれ他に男あるをしる〱こひしよりの事にてわかもの思ひやせぬるもともとわかわり

なき戀をしたる故そとみつからわか戀のわりなさを悔たるやうによみふせ給へるさされと心はふかく皇女のつらきをうらみ給へる御哥なる之詞のつけ所よく〳〵思ふへし以上四首ともに紀皇女のつれなくますをうらみたまへる御哥なる事倒語の規をもてしるへし

三方沙弥娶園臣生羽之女未經幾時臥病作歌三首

この三方は名にや持統紀六年十月山田史御形といふ人に務廣肆を授け給ふ事みえ前に沙門となりて新羅にものまねひにいきたるよしあるこの人ならは沙弥は実に沙弥なるかゆゑなるへしことと人ならは三方は氏にて沙弥は名なるへし臥病の下作の字あるは時の字の誤なるへし沙弥一人の哥にあらされは之と古注にいへりけに娘子と贈答の三首なれはしかもあるへしされと娘子か報哥はそれにつきての哥なれはさはなくともありぬへし大かたの哥の本意よみさま詞のつけかたにはふかく心をもいれすたゝかうやうのすちをのみいかめしくあけつらふ事古來注者のつねえよゝの大家たち注とたにいへはさる事のみいふか故に後生またそれに醉ひてそれをは國學なともの〳〵しく心えたりされとそれをあしといふにはあらす國學の一端なれはいとまあらはたつぬへしたゝ國學とはわか大御國ふりをしりそれを規として古哥古文の詞のつけさまを感得するをむねとは心うへきなりかし

多氣婆奴礼多香根著長寸妹之髪比來不見尓搔入津良武香　三方沙弥

○多氣婆奴礼たぐとは里言にタグルといふこれ之畧解たがぬればといふを約めたる之といへるは非之たがぬといふ詞この集中にもよめり巻五長哥上下畧〽たつか杖こしにたかねてかくゆきはひとにいとはえとあるこれ之これはたぐりわがねてといふ詞にてたぐよりなれる詞なるをたぐにあつるは本末混せり　杖をたぐといふ事あるまじき事に世人はきくへしくはしくは巻五その哥の下にいふをみるへし　巻九に〽をはなりに髪たくまでに巻十一に〽若草を髪にたくらんなとよめるかことく髪の長きをたぐるをいふ之そのたぐるはすなはちわかぬるなれはたゝたぐとのみいふこれ古人詞を用ふるつねなる之巻十四に〽さなつらの岡に粟まきかなしきか駒はたぐともわはそともはしとあるは駒の手綱をたぐる之これらはたがぬる義には叶はぬを思ふへし後世にも〽あまの縄たきいさりせんとはとよめるもこれ之猶くはしく予か土左日記燈に〽たけとも／＼とある下にいへるをみるへし奴礼は上にいへるかことくぬる／＼ととくるかたちを云○多香根著長寸云々　多香根著はたぐらねは之これ髪をゆはぬをいふ之髪をゆはんとすれはぬる／＼ととけゆはねは長過てさてもおかれぬかたちを云之されは奴礼は髪のいと多きを形容せるにて第一の句は髪の多きをいひ第二の句は髪の長きをいへるなる事明らかなり○比來不見尓とは沙弥病に臥たれはなり病に臥せり

ともいはてたゝこの比見ぬとのみいへる詞つかひ後世人の及はぬさかひなりかく詞をつくれはその病臥のさまも心のうちもふかく思ひやられてあはれなる事言靈の妙用そかし返ゝ後世の詞つかひのいやしさを思ひ明らむへき之○搔入津良武香とは卷十六に〈うなゐはなりは髮上つらんかともあれは宣長は入は上の誤にてかきあけつらんかなるへしといへりさもあるへし又予おもふにもし搔入とは髮のすその長きをうちきのうちにかき入るゝをいふにもやあるらん襟までにもいたらぬはかりの長さなれは即はなりなりふるき画卷物なとに袿のうちに髮をかき入れたるを見及へれはしるしおく之されと上古の女の髮のしさまをくはしくしらねはくはしからむ人にとふへし津良武は津留良武のつゝまれるにてしか搔入たるらんをわかみぬうちとしていふ詞之香は疑なり猶わか見たるまゝにてあるかとの心之

○此哥表はたくれはぬる〳〵と多くたくらねは長き妹か髮なりしか今（消）病にふしてその髮も久しくみぬほとに今は搔入つらんかまたは猶わかみしまゝにて搔入もせす居給ふかとその髮のさまをとひにつかはしゝ歌によみふせたりしかれとも妹か髮の搔いれかき入れさる事をしも心にかけてとはむやうやはあるこれ必倒語なるしるしそかしされは心は三方沙弥病にふして久しくあひみぬにもしかの生羽か女今は三方沙弥か病もたのもしからすと思ひて他に嫁

せむの心にもやなりぬらんとこゝろみにつかはしゝ歌なり病中の心のうちいとあはれなりしかるをいさゝかも妹か心中のことに詞をさへすかつわか病のたのみすくなきさまをも心にこめてたゝ髪のうへにのみ詞をつけたるいかにして古人はかゝるすちに詞をおもひよるそとあやしきまてそおほゆる

人皆者今波長跡多計登雖言(イヘド)君之見師髪乱有(ミダレタリ)等母　娘子

○これは娘子か返哥なり人皆者は皆人といふに同しけれと猶分別ある事くはしくは土左日記燈にいへれとその要をいはゝ皆人者はおほくの人を皆とつかね置てさてそのつかねたる人をさす詞之人皆者とはおほくの人をならへ置てそれを皆とさすにて人皆は一人〳〵にわたす心となり皆人はつかねていふ心となる之哥によりてはいつれにてもあるへきもあれとこれらは皆人者といひては切ならねは人皆必當とそおほゆることに此哥ハ長跡多計登と跡もしをふたつ置たる長けれはたけといふにてはあるへけれと長しといふ人もありたけといふ人もある心にて跡もしふたつおきたるへけれは人皆にあらては叶はさるを思ひて皆人人皆かならす別ある事を弁へみたりに混して用ふましきなり○今波長跡云〻今波とはそれより以前よりかけていふ詞にて里言に今デハモウハヤなといふ心之長跡多計登のふたつの跡もしの事まへにいふ

か如く。人皆の長しともいひたげともいひくち／＼にいふ心なりされはこのふたつの跡もしともに雖言といふ詞にかけたるにて長しといへとたけといへととの心之としるへしさらてはかくをさなけに跡もしふたつはおくましきを思ふへし人〻くち／＼にさま／＼いふよしをかく切にいひおかては下のみたれたりともさなからおかむと思ふ心はえなけれはなり後世の哥のことく詞を鹵暴におく事古人は更に／＼せさりし事これらにても眼をひらくへし此女この贈答に髪のさまをいひたるにてみれはいまた童なりとみゆるをこの返哥の詞のつけさまつけ處なま／＼なる歌よみの及ふへき事にあらぬいと心えかたしされと童とても才すくれたるはかくもあるへけれはしひてもいひかたけれと古人は詞といふ詞倒語ならぬはなきならひなれはかく童女のやうにいへるも猶倒語にて久しくみぬほとをさとさむとするあまりにかくいへるにやともおほし返〻此哥あまりに老たる口つきなれはうたかひおく之これにかきらす集中いと幼稚なる女をこひたる哥ともおほきそれらも皆この轍にこそされともしまことに童女ならはかゝる哥よみもいにしへにはありけんかとあさましきまておほゆかし○君之見師髪とは三方沙弥か病を得ぬほとにみし髪といふなりこれ又上の哥とひとしく三方沙弥か病の事いさゝかもいはすたゝ師もしにて思はせたるいとあはれにこそ○乱有等母とは髪みたれたりともそ

のまゝに置て(以上、消)手もふれしとおもふそ〔ひて〕のまゝになしおきはへりといへるゝ等毋とは
たとひみたれたりとももといふ心にていひのこせるゝみたれなは是非ともかくもせで叶はぬ事
なれとも猶手ふれしとの心ゝ等毋はすへて未來にかけて虛にいふ詞ゝ杼毋と濁るは既往にか
けていふ詞にて實なりこの別を混する人よに多けれはついてに弁しおくゝ
○此哥表はわか髮の事をとはせ給ふか人皆くち〳〵に今は長しともいひたげともいへとも昔
か見まし、髮なりとおもふにたぎなとせむもをしさにたとひみたれたりともさまはかへじと
おもひて猶みたまひしまゝにて侍るとこたへたるゝ古注には君かみまし、〔三方沙弥かみたる〕髮なれは私にさま
をかへむことをつゝしみたるやうに尺したれとつゝしむはもと心はしかはあらぬを勉强する
わさとなりて情におきて無味なれはさまをかへむことをしみての事とみむそめてたかるへ
しとていふゝされはうはへはたゝ三方沙弥か問ふにこたへて病前にみ給ひしまゝにありと髮
のうへをのみ答へたる哥〔ママ〕やうなれとこれまた髮のうへをいひしは倒語にてまことは君今病に
ふしておはせともいさゝかも心は變しはへらねはさる事に御心を勞し給はて御病をあつく療
養し給ひはやくおこたり給はむことをのみまつそと病中の心つかひをやすめ病狀をふかく心
にかけてなくさめたる哥ゝたゝ髮のうへはかりを詞としたる故にかはかりの哀はこもるゝこ

れ言靈のたすけそかし返ゝ身にしむまてめてたき詞のつけさまゝや

橘之陰履路乃八衢尓物乎曾念妹尓不相而　三方沙弥

○これはまた上の贈答のゝちおくれるなるへし橘之陰履とは巻十三にへ東の市の殖木のこたるまてなとよめるかことくいにしへは市にさま〳〵の木をうゑられしなるへしさる證紀なとにもみゆこの哥橘にかきれる用ありていへるにしもあらし思ふに三方沙弥の家より園臣生羽か家にゆく路に橘うゑたる路ありけれはいへるなるへし病前にはかよひし路の今は久しくかよはねはそこを思ひてよせにとり出たるなるへし上三句はよせなり乃もしはその橘の陰ふむ道にその八衢にとの心之かやうにおく乃もし皆かゝる例なり八衢とはそのもとは神書より出たり古事記上巻神書にへ尓日子番能迩ゝ藝命將天降之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中國之神於是有とあるこれ之もと八衢とはかならす八にもかきらねといくつもわかれ道あるをいふ之から國に八卦をはしめ八元八愷なと猶いと多く八をもてかそふる事あるか故に眞淵一流の學者八はすへて伊也の伊をはふける也といへり後生みなそれにまとひたれともと伊也といふ詞は里言にイヤガウヘニといふか如く事につけていふ詞にて物につくへき詞にあらすされは伊也といふ詞を用ひたる例とも皆しかり（例は予か随筆二篇に出せり）しかるに物につきたる八をも皆伊也

とするは非之いはゆるへ八尋殿へ八雲へ八門へ八佐受岐へ八塩折酒なとの類之おほかた八とは神書火神の御身になれる八の山祇伊邪那美命の御身になれる八雷神をかそへたるに頭胸腹陰左右の手足これをもとゝする事なりくはしくは古事記燈にいへれはこゝにはふきつこれより用ひなりて必八にかきらねとおほかる事に用ふる之尓もしはよせの尓にて八ちまたのことくにといふ心之物をおもふ事いくすちもありていつれを道とさたむる事なきさまを形容したる也()物乎曾念すなはち八ちまたの如くにものをそ思ふといふ之乎もしは例の義にてさま〳〵思ひても益もなきに猶さま〳〵おもふよしをいふ之思ふかひもなきを思ふ心なりと尺するは曾もしの勢によりていふなり曾もしすへて思ふ筋あるにおもはぬすちにのみしたかはるゝかたちをいふ脚結なれはなりされは思ふかひもなき事なれは一筋に心を決せむと思ふにまかせすさま〳〵と思はるゝ愚痴をみつからなけく心を乎曾とはいふ之としるへし八ちまた物思ふとは病に臥ていのちもたのみかたくおほゆるにつきては死後の事もさま〳〵思はれて妹はいかになるらんとねたくもかなしくもおほえ又はまへの返哥にては妹か心かはらす心やすくおもひてとくおこたれと妹か深切なるをきけはうれしくもおほえ病もいかておこたらんと心生もおこさるれとそれまことならんかまことならしかとおほめかれもし又かくなから死な

はふたゝひ妹かかほをも見しなとさま〳〵愚痴におもひまとひしをあまりにめゝしけれはは
ゝかりておしこめて八衢に物をそ思ふとはよまれたるなり○妹尓不相而とはまへに沙弥か心
中を察していへるかことく八ちまたにものおもふもせめて妹にあはれなは心もとけ（なくさみ）なむもの
をとおもへと病臥の身なれは心にまかせかたきなけきなり而もしかのさま〳〵に物思ふにて
らしておもふへし

○氏哥表は妹か眞実なる心をきゝ病臥の身なからもうれしさ限なくはあれとそれまことなら
んか僞ならむかもたしかにしりかたけれはうれしくもかなしくもさま〳〵心をいたむるわか
愚痴さよかく病してたのみすくなくなれる事やむことなき事なれとたゝ是非なしとみつから
決心すへきにとにかくに病臥して妹にあひみへきよしもなけれはおもひさためられぬことを
みつからなけきたる心によみふせたるなり（眞実に娘子かいふを猶うたかふ事詞にあらはにはいふへからさるか故に上をはよせとはしたるなり）されと心は
その眞實にきくもゆきてその髮のさまをも見まのあたりまめ〳〵しさをきかは心もおちゐぬ
へけれと病おもくてゆかむ事も叶はぬわか心のうちを推量せよとの心にかく詞をはつけたる
なりけに病中なれはさもおもひたるへしとおしはかられていとも〳〵あはれ也これ詞のうへ
よく倒をえたるいさをそかし

石川女郎贈大伴宿祢田主歌一首

元暦本にはこの下に小字して即佐保大納言大伴卿之第二子母曰巨勢朝臣とありと畧解にいへり

遊士跡吾者聞流乎屋戸不借吾乎還利於曾能風流士

○遊士跡云々　此下なる風流士ともに古訓はタワレヲとよめれと荷田御風ミヤビヲとよむへしと巻六なる端作に風流秀才之士云々とありてその哥に〽遊士の遊ふをみむとなつさひそこしとよめるによりての論らひくはしく畧解にのせたりそれをみるへしけにタワレヲはかなへりともおほえぬ訓なりされは御風か訓にしたかひおきたれと猶あけつらふへき事あるはもと家持の風流秀才之士風流士遊士なとからもしをつかはれたるはかちさまを學ひてのわさなれはそのもしによりて又(消)訓を施せは又そのもしにひかれてからさまになる事ありたとは丶マコトといふは古事記(ママ)巻景行天皇の條に〽真事登波受(事は言の假名之)とあるが本字にてもと言の事なるを(真言は真心といふにおなしくゆゑある事にて後世みな心えあやまれりその義大旨にいへれとくはしくは古事記燈中巻にいへるをみてしるへし)誠忠實なとの字をあてられこれらいもしをマコトとよみならふより言のうへの名なりとはわきまふる人なく心のうへの名之と思はぬ人なしこれからもしにひかれて御國ふりをうしなへる類之この遊士等をミヤヒヲと

よむ事かなはさるにはあらねとから國こそ人をうやまひたゝへなとするをはあらはに名とも詞ともすれわか御國ふりは人を卑しむ言はいふもさら也尊ひたゝへなとする言も諂らふにおつるをいやしみてあらはにいはさる事奈良以往の御てふりなり恭謙譲のたくひすへて言にあらはなるをいやしむこれらをまぬかれたる言をは真言とはいふなりけりされは人にさしつけてミヤビヲなといはむ事上古のてふりにあらねはよろしともおほえぬ之しかれとも予ことに思ひよれる訓もなきかうへにおほかた今述る所の御てふりもさすかに奈良の比まては傳はれりといへともやゝ他域の風にうつりゆきし世なれは猶ミヤビヲなといやしけにいひけむもはかりかたけれはまつこの訓にしたかへりされと心あらむ學者はこの御國ふりを古書にあきらめてこのミヤビヲなといふ名はかならす御國ふりすてにかくれんとしける世の詞なる事をわきまへよとて論らひおくなり遊士とゝさしたるは田主の事なり吾者とは人はいかに聞たるかしらすとの心をもちていふ也これ下に於會能風流士といはんか爲にてさはわかきけるはひかきゝにやとの心によめる之きけるとえ緯(消)にうつせるは例のその聞ての後の用を思はせんかため之乎は里言にノニといふ心之かく用ふるも猶乎もしの義はひとしくて。(まことの)みやひ男なるを於會のみやひをとおほゆるよしをさとせる之○屋戸不借はこの左注にみえたるかことく娘子姿

をかへて田主か家にゆきてけさうしけるを田主さとらすしてかへせるをいふ之くはしくは左注をみるへし○吾乎還利この乎もしはかはかり心をくたきてゆきける我なれはさとりあはれみてとゝめらるへきをかへせりとの心之かへせりこれまたえ緯にうつしていへるはかへしたるより後は於曾のみやひをといふへきに的當なるよしをいはむかため之○於曾能風流士この於曾は遲の心にて遲鈍なるをいふ詞之卷九浦島子をよめる長哥のかへし哥に〽常世へにすむへきものをつるきたちなか心から於曾や此君とよめるに同し卷十四に〽からすとふ於保乎曾杼里能まさてにもきまさぬ君をころくとそなくとあるは乎曾とあれはこれにはことと來ぬ人をころくとなくよしなれは今里言に宇曾といふはこの乎曾のうつれるにて虛言の事なるへし卷四に〽あひみては月もへなくにこふといはゝ乎曾呂と吾をおもほさむかもといふ哥もこふといふを虛言なりとおほさむかといふ心なるを思ふへし於乎の別にて義ことなりまかふへからす風流士なからまことの風流士にはあらて遲鈍なる風流士之と嘲りあはめていへる所詮は戲なりされと古注戲なりとは注していかなる故にてかく戲れたりけむともおもひいれさるは疏之これにかきらす古人の戲はといひてもかくいひてもその詞宜しきをえかたき時かならす戲に詞をつくりなす事まへにも返ゝいへるかことしこの於曾とはかの娘子姿を賤嫗につくり

なして心をつくしてゆきけるを田主かえさとらさりしか故にいふなり里にオソイといふも同
し心之

○此哥表はかねて田主はみやひを也とわれはきけるにきゝしにはたかひて昨夜心をつくし姿
をかへてゆきたるをえさとらすしてわれをかへせりさてはまことのみやひをにはあらて遅鈍
なるみやひをなりされはまことのみやひをとわかきゝしはひかきゝなりしにやとたわふれに
よみなしたるなりされともまことはこの娘子田主にふかくけさうして媒をかたらひ消息なと
もすへけれと迂遠(よきたよりもなく)にも思ひかつ田主か色このみなる事をもしれりけれはみつからいきてふか
き志を告むとおもふにさすかにはつかしさに姿を賤嫗とかへこゑをつくりぬき足して火をと
るにかこちたらはおのつからさとりてとゝめもすらんとおもひしに。(くらかりければ)田主心つかすまことの
賤嫗とおもひて火をとらせてかへせるかはかり心をつくして志を告むとせしそのかひもなか
りしかはなか〳〵媒をも(以上、消)ふかく田主か心なさをうらめる哥之もとみつからゆきて志
を告むをさすかにはちて姿をかへたるをさる好色人なれは必察しもすへしとおもへるをは遊(ミヤヒ)
士(ヲ)ときけるにいひなし悵を戯と詞をつけたる手段感するに堪たり

大伴田主字曰仲郎容姿佳(ママ)艷風流秀絶見人聞者靡不歎息也時石川女郎自成双栖之

感恒悲獨守之難意欲寄書未逢良信爰作方便而似賤嫗已提鍋子而到寢側哽音蹢足叩戸諮曰東隣貧女將取火來矣於是仲郎暗裏非識冒隱之形不堪拘接之計任念取火就跡歸去也明後女郎既耻自媒之可愧復恨心契之弗果因作斯歌以贈諺戲焉

右（まへに）。哥の本意をとける所にいへるかことし

大伴宿祢田主報贈歌一首

遊士尓（ミヤビノニ）吾者有家里屋戸不借令還（カヘセル）吾曾風流士（ミヤビヲ）者有（ニハアル）

○遊士尓云〻われをみやひをとはかつてしらさりしか今はしめてまことのみやひをそとはおもひしれりとの心に家里とはよめる之者もしはおほくの人の中に抜け出たるこゝろ之○屋戸不借云〻とは昨夜心つかすしてかへせる事之姿をかへたりとも心つかてかへせるはけに於曾しといはむに宜しかるへき事なれとも。宿（もし）かさは色このみにおつへけれは却てかへせるがまことのみやひをにてはありとおほゆるよしを曾とはよめる之上の吾者は他人とのむかへにて人おほきか中にわれひとりぬけ出たるかたちにいふ之さてふたゝひ吾曾とよめるはいかに思へとも於曾のみやひをと名つくへき事からなるにかへりてそれがまことのみやひをなるす

ちをつよくたてゝいふ之としるへし脚結の心をもわきまへぬ人はこの吾者吾曾かゝる別ありてよめるをたゝかさねてよめるやうにおもふへしよく〳〵このけちめをしるへき之もとこの哥上二句にて田主か意は盡たる事なれと心もつかてかへせるをはかへりてまことのみやひを之とさたむるなれはかくふたゝひそれをことわりて下の三句はよまれたる之娘子にかきらすたれとてもかく心つかてかへしたるは遲鈍なりとおもふへきをそれを眞のみやひをとするか故に曾とはおける之曾もしの用ひやうこれひとつにても思ふへし

○此哥表はわれをみやひを之とはかつてしらさりしか人おほきか中にも我はまことのみやひをそと今はしめておもひしりぬしかれとも昨夜そこの心をつくし姿をかへておはしゝを心つかてかへせるはけにそこの於曾のみやひをとのたまふか如く誰とても遲鈍之といはぬ人もあるましけれともし昨夜とゝめて宿をかしなともせは色このみのあた〳〵しき名もとるへけれはかへりてそこをかへしたるそまことのみやひをにてはあると娘子か於曾のみやひをと戲れたるを又たわむれかへしたる之われをはみつからみや。(ひ)をなりといひ猶昨夜心つかさりしを遲からすとみつからさたむるなと後世詞の道をしらぬ世となりての人こそあれ上古の人かゝるあさましき詞を直につかふ事かつてなき事之されともと戲なれはさるとがもなき事にはあ

れと戯なからも。をこかましき詞はつかふへきにあらねはこれ全く倒語なる事おもひしるへしされは表にかくいへるは倒語にてまことは娘子か志をよろこひてよくそ昨夜よひとめさりしもしとゝめなはあた〳〵しき心之とそみあさめられましさはかりの志ならはわれいかてかあた〳〵しき心あらんとの心を思はせんとての詞つくりなるへしこの贈答たかひに戯としたれともいつれも〳〵その意味森々たりよく〳〵この倒語のつかひさまを味はふへし

同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之耳尓好似葦若末乃足痛吾勢勤多扶倍思

○吾聞之云々　人のいふをわか聞たりし耳に君か病状のよく似てあらはとの心之この二句の詞つかひ後世人のえいはぬ事之耳によく似ばといふにてたしかに人にきゝたりなといかめしくもあらすいとみやひやかにしてさかしらなる事なし今の世には古言とたにいへは聞にくゝふるめきたりとのみふかくたつねもせすしてひたふるにとりさくる事心えかたしかはかりみやひにさかしらならぬ詞つかひの自由古言ならてはうへからさる事そかしくはしく大旨に論らへるを思ふへし○葦若末乃これを古訓にはアシカビノとよめれと葦かびは神代卷に〽葦牙とかきて葦のはしめてもえいつるをいふ名之しかるを若末とはいかゝはかくへき〔末とあるは末のあやまりこ〕卷

▽葦ぬうれはなよ〳〵とうちなへくものなるか故に足疾によせたる之

巻一〳〵此ぬしのみたまたはりてなともみゆ

十長哥に〳〵小松之若末尓(コマツガウレニ)とよめれはこゝもあしのうれのとよみ足痛はあなへくとよむへし一本に若生とあるによらはあしかびともよむへしと宣長いへりこの訓にしたかふへし若生とあるによりてあしかひとよまはたゝこれ足といふことのうちよせにおけるにこそ○(消)葦牙はなへくものにはあらされは之○足痛吾勢これをアシナヘとよめれとナヘとのみいふは体なり和名抄に蹇をは阿之奈閇とあるかことしこゝは用ならてはわかせといふにつゝくへからねはこれ父宣長かいへることくアナヘクとよむへし○勤多扶倍思とは紀に自愛をツトメヨとよめる心之よく養生をくはへられよとの心なり多扶はたまふなり集中たぶとよめる(ママ)多し後にも土左日記に〳〵御舟よりおほせたふなりとよめり倍思はすへて必當なるいきほひをいふ詞なりされはつとめたまふが必然のいきほひぞとすゝめたる心之

○此哥表はたゝ田主か足疾のよしを人のいふよりその足疾をはよくいたはりて自愛したまへと病をとひにつかはしゝ哥なりされは古來注者もたゝうはへはかりによりて足疾をとふらへる哥とてやみぬしかれとも古人しか直言しても害なからんことを歌によむ事なし大旨にくはしく述たるかことく私情公理のすてかたくやふりかたきより哥はよむものなれはこの哥なといかゝはさはみすくすへきされは此哥をつら〳〵思ふにこれは田主と事成りてのゝち贈れる

哥にてかく足疾をしもふかく心にかけてとひたるは田主足をやみて歩行せられぬ時ば石川女郎か家にかよふ事も比比たえはてたるか故にもはら逢見ん事のかれゆくをなけく心を思はせんかための詞つくりなりとはあきらかなりまことに古人の詞のつけ所變化自在なる事これにかきらねとこの哥の詞つくり神妙といふへし

右依中郎足疾贈此歌問訊也

大津皇子宮侍石川女郎贈大伴宿祢宿奈麻呂歌一首

侍の字諸本待とあるは誤なり一本によりて改む元暦本小注に〈女郎字曰山田郎女也宿奈麻呂宿祢者大納言兼大將軍卿之第三子也とありと畧解にいへりこの宮侍とあるをは眞淵はうたかひて此女郎この宮に侍りしは朱鳥元年の秋しはらくの間にて皇子罪せられたまひし後は他にこそあらめといへるを春海はいにしへ皇子の御もとにつかふる婦人を宮侍と唱へし名目ありしか宮にはへるといふ心ならはかくはかくましきにやさて皇子死をたまひし後ももとの名目をもてかけるにやといへり眞淵かうたかひさる事之春海か説名目ならんといへるは此人からまねひをもしたりし人なれは宮侍は顚倒なりとてかくはいふにこそしかれとも國書には顚倒はかそふるにいとまあらす古事記上卷神書に〈如葦牙因萌騰之物而云々なとの類ひくに及は

すからふみこゝちにてみたるからにさる事をもいへとわか御國ふみならむからには顚倒なにの失にかあらんこれはたゝもと大津皇子の宮にはへりし女なるか故にもとをもてかきたる事うたかひなきをやこの二子なとさるふしをのみたゝもとめにもとむるをいたりとしてこの端作にむねとうたかふへき事あるには心つかさりけりその故はこの石川女郞まへに田主との贈答にその名出たれはこの女郞かうへをかたらむとならはこのまへにこそしるすへけれまへに名ありなからこの哥の端作にしもかくかきたるは必故あるへき事ならすやされは思ふにこの哥に〽古之嫗とみつからいへるはこの哥よみける比は此女郞いとをとなしくなりての比なるか故なるへけれはその年齡のほとを思はせんとてさきに大津皇子宮にはへりし女なりと端作したるものなる事しるし今予かいふ論らひをもてみれは。兩説ともに無益なるをや

古之嫗尒爲而也如此許戀尒將沈如手童兒

○古之嫗尒爲而也これを古訓はイニシヘノとよめりいにしへの女といふ事ことわりなけなるか故にフリニシと眞淵はよめりけにしかよめは事もなくはあれと今思ふに猶これ古訓の如くイニシヘノオムナなるへくやとおほしその故はかくいへはいにしへありし女といふやうにて今はよにもあらぬ女をいふかことくおもふは後世直言にならへるか故之これわか事なからい

にしへありけん女のやうにいふにて即よはい老たるよしを思はせんかためにやと古訓の方に心ひかるゝ之しかれとも嫗はもとより年齢ふりし女の事なれはしかはいふへからすと思ふ人もあるへけれとこれはいたく老たる女といひふせんとてなるへしいにしへたに老女ならむには今はいかはかり老たる女ならんと思はせて之または古之とあるによりて家持かさかしらに嫗の字をかけるにもあるへしフリニシといふ訓こともなけにはみゆれとフリニシ嫗といはむはいと稚くもおほゆれはかた〳〵古訓をよしとはおほゆる之氏女郎まへの詞つかひともおしなへたる哥よみにはあらねは凡庸のつかふ詞のことくにはつかはじとおほしけれはかくはいふなり嫗は和名抄に於無奈とあり續紀にも老女を音那(オムナ)とかけり於もしをしも用ふるは於以乎無奈の畧之と契沖和字正濫抄にいへりさもあるへし尓爲而は里言にデといふ心之也はもとは疑のやなからかく用ふる時はやはのやとなる之これは下の將沈のむもしにうちあひたる之年ふりたる女にてやは戀にかくしつまんといふなりわれなからわれをもときて也とはいふ也○如此許とは今わか宿奈麻呂を戀ふる(ひて)ことひしつめるその分量を思はする也戀にしつむとても淺深ありて淺からはさてもありぬへきにとの心をもちていへる之○戀尓將沈戀にしつむとは水底に沈むをもて形容する之戀にしつまむやはの心なる事上にいへり○如手童兒たわらはとは

母の手さらぬほとの童をいふと古來いへりしかれとも母か手かれぬ童をは手童といはん事心よくもおほえすかれおもふに手弱女の手に同しくたわむ義にて童兒のむけに幼きほとは筋骨もいまたかたまらすしてたわ〳〵とする物なれはむけに幼きをはたわらはとはいふにこそとおほしされは多和和良波といはむを和の音のひゝきあふか故にはふきて手童兒とはいふなるへし如は許もしを清めは許登にて異なる義なるを濁りたる詞なるへし濁音はすへて物を合せ成す義なりたとはゝ也末（清）左久良といへは山と櫻こと物なるを左もしを濁れは山と櫻合成して山なる櫻といふ義となるか如しされは異物の同物のなるかたちを非登とはいふなるへしとおほしき也いまた手童なるほとはなにことにもあれ欲する事あれは理も斟酌もなくたゝひとへにしていかになためてもすかしても聞わけぬかことく戀にしつむを形容せる之上に古之嫗といひそれにむかへて手童兒とはよめるなり

○此哥表はわれ年いたくふりにし女にしてかはかり戀にしつむやは老女ならはものゝ理もよくわきまへられてたとひ君をこひしと思ふとも戀に沈むはかりわいためもなきわさはすましきにたゝ手童兒にことならぬわさかなとみつからわかわいためなさをもときたる哥とよみふせたる之石川女郎この比年ねひてのうへの事なるへけれと老女なといふはかりの齢にはあ

らねと戀にしつむ事手童兒のことくなるにむかへてみつから老女とはいひなしたる也後世の人はかゝる倒法をしらさるかゆゑに老女といへはまことの老女とおもふ事あさましき事なり手童兒にむかへて老女といへるもよく事理を思ひわきまふへきことゝせむかためなりされはまことは宿奈麻呂かねてあひしれる中ならはつらくてかれ／＼なるをうらめるなりはしめて贈れるならはふかき志あることを告たるなり

一云戀乎太尒忍金手武多和良波乃如

これ猶こゝろは同しけれと戀乎太尓といふは戀をたに忍ひかねば他の事はましてしのひかぬへからぬもとける心なりおほやけの事にむかふれは戀はいとはかなき事として太尓とはいふ之忍は堪る義なり慕ふやうなる義に忍ふといふも常なれとこれ兩義あるにはあらて猶なに事にもあれ堪しのひて外貌にあらはさぬが本義にてその心にこめたるさまをもて人を戀ひ慕ふ義を思はするなりすへてわか御國言はかうやうなるつかひさまなり手武の義まへにいへるかことししぬひかねてくるしまむやはとの心なり

長皇子與皇弟御歌一首

この皇弟とは弓削皇子なり

丹生乃河瀬者不渡而由久遊久登戀痛吾弟乞通來祢

○丹生は大和國吉野宇陀宇智三郡に同名ありいつれにかあらん御はらから氏川をへたてゝ住給ふ故にとり出たまへるなり瀬者不渡而とは瀬をわたりゆかてといふ心にて皇弟にあひみ給はぬを云而もしの心は瀬をわたりゆかぬはあひたくは思はぬやうなるにとの心を含めりからふみにシカモと訓するつかひさまに同しされとこれ別の義ありての事にはあらす前に返ゝ尺せるか如く而もしはその下にしかしてしかしてなといく事もつゝけるをはふく心之この故に瀬はわたらすて戀ひいたむとつゝくへき語勢にして意はつゝかさるこれ而もしのつかひさま也さる故にシカモといふ心にはなる之と心うへし瀬をわたらぬならは戀いたむ理はなき事なれは而もし下にはつゝかぬ之後世而もしをつかふには必下の詞につゝく事而もしの義はそむかねともつかひさまいと淺くなれる之これ而もしにかきらすすへての脚結みなかくのことし瀬者といふ者もし戀しくはまつなにわさよりも瀬はわたらて叶はぬものなるよしを思はせたる之これひとへに今いふかことく下の戀痛とその理のたかへるさまを思はせんかためにおき給へる之この御哥この者もし而もしのつかひさま明らかならされは大かた一首の意もしらるへからす氏故に古注とも皆その尺こゝに到らすかし○由久遊久登この遊もし諸本遡に作れる

▽登もし即今さく所の心を形容する之登もしはかくいかふ例ありよつい登といふ之

は誤なり一本遊とあるを正しとすへしゆく〳〵とゝはゆくらかにゆくら〳〵になといふ詞に同し里言にユツクリといふ詞これ也此詞の本はものゝゆくらかなる義なれとそのゆくらかなる義をもてなにゝもあれとくあれかしと思ふことの隙どりてはてなきやうなる事を形容するなりされはこの詞の意はいとゝくと思ふことの果なき歎之とするへしゆくりなくといふ詞のゆくりもこれにて紀に不意之間をよめりされは不意なる事をいふ詞なれとももとは心をゆくらかにもつ間のなき義にてものゝ不意なる事を形容する之これにても此詞のつかひさまをしるへし巻十二に〽あまのかちおとゆくらかに云々 巻十三に〽大舟のゆくら〳〵になとよめり中には本義もてよめるもありこれすへて詞のつねのたとへは乏(トモシ)といふ詞ものゝ乏しきをいふ事本義にてその本義のまゝにもつかひ又うらやましき義にもつかふか如し本義と形容づかひのふたやういつれの詞にもあるならひ之拾遺集に〽君かすむやとの梢をゆく〳〵とかくるゝまてにかへりみしはやとあるは里言にユキ〳〵ユキモツテなといふ心にてこれとはこと也(されは)ゆく〳〵と戀いたむとは戀いたむはかりにていつあふへしとも限のしられすてまちとほにわひしき心なり○戀痛吾弟この戀痛をコヒタキと訓したれとも上の瀬はわたらすての而もしいうちあはなれは々キとよみては語を成さすかれコヒタムとよまては而もしにうちあはぬ之タム

はいたむ之いたむとはいたかる心なる事まへにいへり（消）何を何みといふみもしの事を尺せる所をみるへし すへていたしとは里言にヒドイキツイキビシイなといふ心なりきびしく戀ふる心之と知るへしまへにもいふかことく戀いたくは瀬をわたりゆくへき事なるにさはせで戀いたむは畢竟わが心からなるよしを思はせ給へる之弟はもとせとは兄をも夫をも。弟をもしたしみあかめていふ称之弟とかきたるは皇弟なるか故之和名抄に備中國賀夜郡に弟翳勢庭妹尓比世といふ所あるを代匠記に引かれたり庭妹ともあるによらは女をも世と称すとおほしけれとふるきふみともにみえたるいつれも男をさせり和名抄はさはかりの博識なりしかともさすかにおほつかなき事ともゝうちましれりされはこの庭妹も妹もしもし誤にはあらしかとそおほゆる又は尓比世の世もし毋もしに似たれはもとは尓比毋なりしにやともおほゆしからは順ぬしか誤にはあらす傳寫の誤そかし○乞通來祢乞は義をもてかける字にて何ことにもあれ人に乞ふ事に用ひ來れゝは之允恭紀に〈歷乞の二字を注に〈歷乞此云異提ともみえたりされは人はさも思はす思ひも設さるへき事を乞ふ心なり又あらはに乞ふとはみえぬ事からに乞（イテ）といへるもありそれはことすちのやうなれとしからすとりたてゝ乞ふとにはあらねと人の思ひ設さる事をいひて人をしてしらせむとするにて義はひとつにおつる之これはまさしく乞ふ心なれとまへにいへるかことくたゝ乞ふはか

りの義にあらす人の思ひ設さるへき事からを乞ふ心之としるへしこゝは上に尺せるかことく
もと戀しくは丹生河をわたりゆくへきに瀨はわたらすてさて（しかも）あふことのいつともしられぬを
なけくはひとへにわかおこたりなるよしを仰られてさて皇弟に來ませと仰らるゝはわりなき
事なるかゆゑに乞とはおかせたまひし之乞のつかひさまこれにてしるへし補はまへに尺しお
けるか如くもと去倫のぬのかよへるにてこれ誂の詞なから通ひ來（キ）ぬといふにいたる事を誂ら
ふる脚結之と心うへし皇弟今はかよひも來たまはぬをつひに來ましぬといふに及ふへき事を
あつらへたまへる之されは亾父これをテシマへと譯せりこれまたまへに論らへるか如く御み
つからはゆかせ給はて來たまへと仰つかはされたる事なるか故にわさとつよく祢とはよませ
給へる之されは是又こひしさの甚しきを思はせたまへる之と知るへし
○此御哥表は大かた戀しく思はゝ丹生河瀨をわたりゆくへきにその瀨はわたらすしてさてい
つかあはましとあふへき期もしらねはいたくこひわたるはもとわかおこたりなれはいとも
〳〵いひ出かねたれとなにとそそこよりかよひ來てこの戀しさをなくさめたまへといふ心な
りされとこの御哥の御よみさま心えぬ事ありいかにといふに我よりゆかぬはわかあやまり也
とは弁へぬ人こそかよひこねともあつらふへけれわか非をしりなからかよひこねと仰られし

は御弟なからいとなめけに聞ゆる之上古の人さらに〳〵かゝる詞をつかふものにあらぬに上にはおのか非をみつから擧なから下にはかよひこねと仰られし事その理齟齬せりこれうたかはてはあるへからぬ事ならすや古來これを疑ふ人なかりしはひとへに者もし而もしのつかひさまよりして戀痛にうちあふよしをも思はす乞といふ詞もかろくみなかしたるか故之古人詞をつくるにわさと疑はしきやうに詞をつけてわか情に人情をみちひく法これにかきらすいと多き事なる之されは思ふにゆかさるは吾非之としろしめしなからかよひこと仰られしは長皇子公務に御いとまなかりし故欤又はさりかたき私用ありし故か又は御病なとにふし給ひし程かなにゝまれ御みつからはおはしましかたき事あるか故にかよひこねとは仰られしにてそこのしらるゝことく我は行かたけれはなとあらはにいへは人情にさはるへきか故にかくわか非におとして詞をつけ給へる手段なま〳〵の人の企及ふへきさかひにはあらすかし

柿本朝臣人麻呂從石見國別レテ妻ニ上リ來ル時歌二首并短歌

これは石見の任中にあからさまにのほれるなるへしこの妻といふは嫡妻にはあらさるへし。と眞淵か万葉考別記に人丸か妻の事くはしくいへるをみるへし此事此下依羅娘子か哥の下にいふへし

石見乃海角乃浦回乎浦無等人社見良目滷無等一云礒無登人社見良目能咲八師浦者無友縱畫屋師滷者一云礒者無鯨魚取海辺乎指而和多豆乃荒礒乃上尓香青生玉藻息津藻朝羽振風社依米夕羽振浪社來縁浪之共彼縁此依玉藻成依宿之妹乎一云波之伎余思妹之手本乎露霜乃置而之來者此道乃八十隈毎萬段顧爲騰弥遠尓里波放奴益高尓山毛越來奴夏草之念之奈要而志怒布良武妹之門将見靡此山

○石見乃海云々　角乃浦は和名抄に石見國那賀郡都農とあり（農濃はいにしへ皆奴の假名之後世乃とよむゆゑにこれも都乃と後世はいへり）浦回とは浦のめぐりをいふにて浦のあたりといふ之眞淵の門にはこれを廻とよめれと廻といふ義にはことなり乎もしは人は浦なし滷なしとみらめとも浦も滷もあるをとの心にておけるとしかるを角の浦にはいにしへよき湊なかりしなるへしと略解にかけるは此乎もしにくらきか故之しかのみならすもとより浦なく滷なきならはかく人こそみらめとはいはんやは予つねにいふかことく詞の道をしらされはかゝるをさなき事あり返ゝめを表に奪はるましき之（）浦無等云ゝ　浦あるをなしと人こそみらめといふ之等もしもともとよりなきならは等とはいふへからぬを思ふへし社はまへにも返ゝいへる義のことくもと人の心の及はぬすちをたてゝ人の心を求

たしそのすちにしたかはしめむとする歎をいふ之上古にねかふ事を許曾といふも猶この同し義よりいふにて同し心なり此社といふ字を用ふるは神社にはつねに人のねかひを申すか故に戯にかけるもしなり　されはこゝももとより浦あるをなしとみる人をはたてゝそれに人の心をきたししたかはしめむかためなりさてそのなしとみる人を多くの人の中よりとりたてたるそののこりの人を思はせむかための脚結なり良目は良牟の衣緯にうつれるなり必こそにうちあはするはえ緯にうつす事そののこりを思はせんか爲なる之もとこそといふもそののこりを思はせんとてわさとつよくあらぬ筋に人の心をよせしむるなりこれ皆そののこりを思はせんかためのかまへなる事おのつから義にあらはるゝそかし滷は干瀉之一本礒といふももと此浦滷礒ともに実物にかゝはりてのわさにあらねはいつれにもあるへし社良目の心上に同しかくふたついへるは浦滷のみならすなにも〳〵なしと人のみるへき心を思はせんとて之上古長哥にはかくふたつに聯句のやうによめるか多きを近來の學者はみな哥の文なりといふはからふみの四六文なといふものに混し思ふかゆゑなりしからす情を通せんことをむねとするものに文をつくりてなにゝかはせんこれは皆物事を盡さむ爲なる事毛もしふたつよむ例と同しとしるへしそののこりとは即人丸にて人丸ぬしは浦もあり滷もありと思ふよしを思はせたる之○能咲八師云々　よしは後世よしやとよむ詞に同しいかに

思へともすれともせんすへなさに思ひすてたる心之悪也志のみつはともに脚結之悪といふ脚結は後世につかひ絶たり氏集には〽我はさふしゑなとよめり和經の音はすへてたとはゝかなたにゆくものをこなたに引をるかことをかたちをいふ之されは浦なし滷なしとは吾は思はねと人なしと思へはわひしさにいかて人をしてありと思はせんとすれとせんかたなさにしひて思ひすつる心を云ふ脚結之也は人の浦滷なしと思ふか力及はぬを歎する之されは悪は人にもありと思はせんとすれと思はねはわか心を引をる歎なり也は人をしてありと思はせんことの叶はぬ歎之としるへし志はその浦なし滷なしと思はせかたきすちの今はそれになりかたまれる貞をいふ之神書に〽阿那迩夜志とあるに同し無友をなけどもとよめれ〔り〕とそれは下の風社依米浪社來緣にうちあふとみての訓なるへけれとよしゑやしに熟せる詞なれはともは清ますしては語を成さすまへにいへるかことく杼母は事実となり止毛は事靈なり集中〽ちりぬともよしなとよめるを思ふへしこれは上に人社見良目とはあれとも良目といへるは實としていへるにあらさるを思ふへし下の依米なとも実としていへる詞にあらねは無友は必ともをすむへき之人の浦滷なしといふともよしやといふ心之されは氏四句はこゝに挾める之と心うへし○鯨魚取云々　鯨は必海にとれは海の冠とはする之海辺は即浦滷礒なとをおしこめていふなり指と

は玉藻のさしてよるを云之而もしは澳より辺まてよりくるほとのさまを氐而もしにもたせていふ之○和多豆乃云〻　にきたつとよみ來れ〻と宣長はかの那賀郡の海辺に渡津（ワタツ）村といふ所ありそこなるへし或本の哥に〳柔田津とかけるはにきたつとよみ誤れるより後出來たる本なるへしといへりけににきたつは石見ならねはさもあるへしわたづのと四言によむへし上とは集中〳藤原かうへ〳高野原のうへなとよめるに同しく方といふ心之○香青生云〻　かもしはそへたる之かもしをそふるはその青さの目にあたりてあやしきまてあるさまをいふ之〳かくろきと集中によめるも同し生は那流といふ脚結の假名なり玉藻息津藻とは香青生玉藻とまついひてさてその玉藻は澳津藻なるよしにて二種にはあらすまつその物をいひてさらにその実をいふ例集中に多し潮もしは時津風天津風なといふに同しくその方につけるかたちをさとす之○朝羽振云〻　はふるとはその本は鳥の羽を振ふより形容する詞にて鳥のたゝにをる時は羽は身につきたるか身より外にいつるかたちを云溢（アフル）といふもこのかたち也古今集に〳身はすてつ心をさへにはふらさしとよめるは分限の外となして無用のものとするかたちを形容していふ之こゝは風のしつまりたるか吹いつるをいひ浪もたゝさりしかたちあるゝをいふ之鳥より起れる詞これならてもかたははぐくむとぶなといと多し社はふたつなから義上にいへり依米來縁

は人丸の心のうへにて祉といふにてかの浦なし潟なしとみるらん人の心をかへりみさせん爲之これかの澳津藻をよするを云之人は浦なし潟なしとみるらめと朝夕に澳津藻をよすへけれは浦潟なしとはいふへしやはとの心にいふ之○浪之共云〻　共は即字のことくともにといふ義なり彼縁此依は玉藻のさまを云之かにかくに玉藻のよるを云○玉藻成云〻　朝凪夕浪のむたかにかくによる藻ともいふへく妹のわれによりねし比喩なり成はまへにもいへりし如くさもあらぬものをしひてみなし思ひなす心にて如といふにはことなりこゝに論らふへき事あり此哥はしめよりこゝまてはよせにおけるにて畢竟そのかよりかくよる玉藻にひとしくよりぬる妹のうへをいはむかためなりとはみゆれとよせも長短は心にまかすへきわさなりとはいへともよせならはたゝ大かた事なしひにいふか常なるにこれははしめより議論ある詞のさまなれはうちまかせたるよせ哥にはあらさる事明らか也かれ思ふにすかたはよせ歌のすかたにつくりなされたれとも以上は比喩にて石見海とは人丸みつからに比し浦なし潟なしと人こそみらめといへるはわか身に人望なくより所とすへき所なきをいふよしゑやし浦潟はなくともとは人の浦潟なしといふ事せむかたなしといふにて人のわれをとり所なく思ふ事せんかたなしと思ひ捨たる心之海辺をさしてより以下香青生玉藻とは妻に比してかはかり人のより所なしと思

○かく妻か志のたくひなき事を返ゝいはれしは旅中わすれかたく戀しきゆゑを述られたる之

ふわれをはさも思はてよりぬる妹なれはその志のほと厚くうれしきよしを比喩したるなるへしけに人みなかへりみぬをひとへに心をよするはうれしさたとへむかたなかるへししかれとも人のわれをとり所なしとするよしあらはにいはむは謙遜の心となれはからさまにては言にもいつへけれと謙遜もあらはにいへは自負と聞なさるゝものなるか故にいはぬはわか御國ふり之まして人はみあさむれとも妹はひたふるにわれによるといふ事はまして自負なれは言擧すへきにあらす又以上あらはにいへは妹にむかひても語らふにおつへけれはかた〳〵あらはにはえいはてかく比喩とはせられたるにこそしかれとも比喩ももと倒語のひとつなからいと淺きわさなるか故に比喩とはみえじとてよせ哥の体によまれたるその心つかひよりはしめてすへての手段凡庸の及ふへきにあらさる事よく〳〵思ふへし　依宿之妹乎とは玉藻のへによりてなひけるかたちをもて妹のわれによりそひて寐たるに比したる之乎もしはさはかり人のめをもかけぬわれをうちたのむ妹なれはしはしもはなるへきこゝちはなきをとの心之一云のへはしきよし妹かたもとをは事こそたかへ心は猶同し乎もしも亦同し○露霜乃云〻　露霜はおくといはん爲之置とは石見にとゝめおきてなり而もしは別に臨みて互にをしみかなしみさま〳〵いひ契りなともしたる事を含めたる之之は今は妻を石見におきてわかれ來たるすちにな

りかたまれるを云ふにてすへてかく者にうちあはせたるはそのすちをつよくたてゝおもはせんかためなりされはこの下終までこの之もしのすちにてみるへき之〇此道乃云々 八十隈巻一にくはしくいへり所詮道のとほくなれるかたち之毎にとは跡の方のみえすなるたひことにの心之〇萬段云々 いかにもせはみえむかとていくたひもかへりみたるを云〇弥遠尓云々 弥遠益高は道次第にとほくなりていよ〱石見のかたのみえすなるを云奴もしはふたつなから上の鵬もしのうちあひ之かへりみすれとみえすとうちあはすへきを里者放奴さかるとははなるゝ之山毛越来奴毛は上の里にそへていふ之上は者といひこゝは毛といへるにて毛もしのつかひさま巻一にいひおけるを思ふへきなりとうちあはせられしはこれ即みえさる種なれは之すへてかうやうに詞をつかふ事上古のならひ後世のえしらぬさかひ之これひとへにそのみえすといふ事を我よりしひすして人の心より定めしむる之其みやひ思ふへし奴もしの心はこれまての道のほとなにとかみばもしみえむかとたのみつゝ来けるか今は終にみる事能はさるになりはてたるよしをいふ之〇夏草之云々 しなふる冠における也こゝより石見なる妻かうへをいふなり念之奈要とはさま〱思ひて今は心のはりもぬけたるさまを云里言にナエルといふはこれなり而もし例の思ひしなえてさま〱に悶へくるしみなとしてといふを含めたる之志怒布良武はさま〱思ふ事をも心にこめたるをいふにてその内に人丸をこふる心もこもれ

る之良武はこゝより妹かうへを察していふ之○妹之門將見とは本意は妹をみむといふを門にそらしたるこれ古人倒語のつね之ヘ妹か家もつきてみましをと氏卷首に近江天皇のよませたまへるに同し直言になつめる後世人これらをいかにか心うらんとあやし○靡此山とはなひけとはたてる山を横さまになひけとあつらふる心之たてる故に妹か門のみえぬ故之かはかり戀しけれと立かへらん事も叶はぬ心をたてゝそこよりなひけとはいへる之倒語といへとも古人のつかへるは及ひかたき事いふも更なれとこれらは実に生涯思ひうへしともおほえぬ詞之すへて倒語はおもひよるすちをえてつくるなれと大かたをいはゝ私情すてかたく公理やふりかたき間よりおのつから詞は妙處にいたるへきそかし人材によれる事のやうにおもふは中々なるへし

○此哥表は上はよせのやうによみなしてうるはしき妹を石見におきて來ぬれは戀しさにいかにもせはみえむかとゆく／＼かへりみすれとやう／＼道はるかに山かさなりてみえすなりぬれは今は妹か門のみむよしもなしこのみせぬ山よなひけしからは妹か門をみてなくさまむと妹か門をこふる哥とし山にいひかけたる哥とせられしなりされとこれは石見なる妻におくれる哥なりかく妹か門をこふとし山によみかけたる哥とせられしはひとへに公理をやふらむこ

ともはゝかられたる之されは心は上のよせも人みなはわれをいふかひなきものにするをさも思はてかくとり所なき我をひとへにたのむ妹か志たとへん方もなきうれしさなれはしはしも立はなれんこゝちはなけれと公命やむことをえすしてかく立はなれ來て戀しさたへかたけれとも戀しとてこゝより立かへりてあひみへき身ならねはその心中のくるしさを思ひやれと妻にいひやられたる之此事いさゝかにても詞にあらはせは公命をうらむるにおつへけれはさはかりくるしきおもひありなからかりにも公理をやふらすして詞をつけられしそのくるしさいかなりけむと今もくるしきまてあはれなるはひとへに詞に公理を重くせられしか故之かゝる詞つくりいかてか言靈いさきはひたまはさらんとそおほゆる　反哥等次の卷に載す

萬葉集燈卷之七　終

昭和十四年二月廿四日印刷
昭和十四年二月廿八日發行
昭和十六年四月二十五日再版

東京市品川區上大崎長者丸二八四
國民精神文化研究所
電話大崎(49)三一一七 三一一八 三一一九